

【書籍化】 とても都合のいいオナホ先輩 【発売中】

九龍城砦

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ウチの研究室の先輩はドスケベだ。

部屋の中では常に裸白衣という変態スタイルだし、起きている間は四六時中オナニーに励んでいる。

すると当然、同棲している後輩の僕は我慢なんて出来るはずもなく。合法ロリのぷにオナホ先輩を、いつも気絶するまで犯し倒してしまうのだ。

書籍化しました。

イラスト・コノシゲ様

フランス書院eブックスさん・アマゾンさん・ファンザさんから、先行配信中となっております。

他にもいろんなサイトで配信予定です。

<https://book.dmm.co.jp/product/4374894/bl26afnc01215/>

『ふたなり先輩にブチ犯されるLカップTS後輩ちゃん』も収録されています。

なんと、2巻も出ました。

好評発売中です。

<https://book.dmm.co.jp/product/4374894/bl26afnc01248/?dmmrefdetail=Series&i3refllist&i3ord=2>

『シスターのコスプレでブチ犯される清楚ビッチ金髪碧眼ぷにロリ爆乳オナホ先輩』も収録されています。

なんとなんと、3巻も出ました。

好評発売中です。

<https://book.dmm.co.jp/product/4374894/bl26afnc01329/?dmmref=detail|Series&i3|ref||list&i3|ord||3>

『黄衣の女王ちゃん編』完全版、および『邪神と眷属によるドロドロ4Pプレイ』も収録されています。

## 目次

裸白衣のメスガキロリ巨乳先輩	1
よわよわマンコのドスケベマゾ豚先輩	6
オナニー狂いのメスオナホ先輩	12
大学では理知的な爆乳オナホール先輩	18
生活能力皆無のぷにまん爆乳マゾペット先輩	24
密かに恋心を抱くムツツリマゾ巨乳後輩	30
常におまんこぐちよぐちよなマゾロリ先輩	36
淫らでかわいいぷにロリ爆乳オナホール先輩	42
お風呂に入ってもまた汚れるオナホール先輩	48
キスだけで発情しちゃうチョロマゾ先輩	54
くどある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねるく	60
先輩が大好きなクレイジーサイコレズ同期	70
おっぱい丸出しでもクールなおナホ先輩	76
薬を使って逆転を狙うマゾ豚オナホール先輩&後輩	83
先輩にブチ犯されたい銀髪巨乳オナホ後輩	89
前戯は念入りにするタイプの鬼畜ドS後輩くん	94
とても都合のいいオナホ後輩	99
いいとこ取りをしていく計算高いKカップロリ爆乳オナホ先輩	107
無様でうつかりなドスケベぷにロリオナホール先輩	113
先輩の事が好きなドスケベけだものマゾ巨乳後輩	118
先輩と後輩をまとめてブチ犯す鬼畜ドS後輩くん	125
チンポを丁寧にお掃除するロリ爆乳ぷにまんオナホ先輩	133

後輩くんにマウントを取りたいKカップ爆乳ぷにロリオナホ先輩

139

大好きな先輩といちゃいちゃする合法貧乳ぷにロリ同期

146

本当は後輩くんの事が好きだったツンデレロリ同期

152

大好きな先輩とぐちゃぐちゃ疑似セックスを楽しむ真正ぷにロリ

オナホ同期

159

仲直りはするけどそれはそれとして喉奥にチンポブチ込んで射精  
する鬼畜後輩くん

165

練習の成果を披露してチンポを骨抜きにするKカップ爆乳オナ  
ホール先輩

172

とても都合のいいオナホ同期

178

九条アリス先生編

どんな時でもムラついたら即座に又いてくれるドスケベマゾ巨乳

オナホ先輩

186

思わぬライバル

192

〜とある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねる3〜

198

陰キャで天才なムツツリデカ尻オナホール先生

209

オスを誘惑するアルビノデカ尻オナホール先生

215

メス犬露出に目覚めたド変態マゾ豚オナホール

223

教え子チンポにハメ潰される激よわ生オナホ先生

230

気絶しながらデカケツをぶっ叩かれてマゾイキするド変態ペット

先生

236

自分で自分を慰める金髪ぷにロリ爆乳オナホ先輩

242

とても都合のいいオナホ先生

247

即座に後輩くんの心を奪い返すぷにロリ爆乳マゾオナホ先輩

まるで初めてセックスする中学生みたいなケダモノ感溢れるセックスを堪能してしまうロリ爆乳先輩

259

いつも通りの日常を過ごそうとするけどやっぱり我慢できなくなる鬼畜ドS後輩くん

265

禁欲してたせいで無限に性欲が昂ぶっているオスに種付けされる排卵ザコまんこ後輩

272

ちよつとイキっただけでその数十倍は激しくハメ潰されるクソザコイキりおまんこ同期

278

ケダモノセックスですぐに排卵しちゃうクソザコおまんこ逆バニー後輩

285

ドスケベがに股騎乗位でウサギのように腰を振りまくってケダモノセックスを味わい尽くす逆バニーオナホ後輩

290

女の子同士でイチヤイチャして興奮を高めあうおまんこぐちよぐちよマゾロリオナホ同期&先輩

298

アツアツロリまんこで子種を搾り取って確実に妊娠するガチペドロリ同期

304

形の良い桃尻をブツ叩かれてマゾイキするド変態メスガキ先輩

311

情欲を極限まで滾らせたクソ強マジカルチンポに確実に孕まされる(?)イキり爆乳マゾ豚どっちゆん受精オナホール先輩

317

黄衣の女王ちゃん編

名取先輩からの頼み事

324

くとある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねる2く

330

彼氏のために自ら寝取られる健気で美人なむつつりスケベオナホ

先輩

337

手入れを怠っていたボサボサおまんこを見られて赤面するクール

オナホ先輩

344

背徳の味を存分に堪能して夢中で亀頭フェラするド変態クール剛

毛デカクリオナホール先輩

350

究極のチャラ男を演じ切る為に先輩から演技指導を受ける絶倫チ  
ンポ後輩くん&理系大学生彼女とイチヤイチャするドマゾ少年

357

NTR動画に興奮しながら彼女に奉仕されて身体が半分メスに変  
化しちやうふたなりメスオナホ少女

364

絶対に手が届かない画面の中でブチ犯されるクールビューティ年

上彼女先輩

371

出来たてホカホカおまんこを引っさげて寝取り男に犯されに来る  
ハイブリッドふたなりマゾ男の娘オナホール彼氏ちゃん

377

肉体は堕ちても心までは堕ちない初心者ふたなりマゾオナホ彼氏

ちゃん

383

後輩くんを遊園地デートに誘う金髪碧眼Kカップ爆乳オナホ先輩

389

普通に遊園地を楽しむオナホ先輩&鬼畜後輩くん

395

実は尾行に気づいていた察しが良い後輩くん

401

結局家まで我慢できなくなってラブホに転がり込むドスケベ先輩

&後輩

408

身体を洗われただけでマジイキする敏感Kカップ爆乳マゾオナ

ホール先輩の逆襲

415

心が繋がったので思いつきり孕ませセックスをするぷにロリ爆乳

オナホ先輩

422

受精したばかりなのに先走って乳首から母乳を垂れ流すド変態マ  
ゾ豚お母さんオナホール先輩

428

本懐を遂げて妊娠したけどまだまだ厄介事が続きそうだと懸念す  
るぷにロリ爆乳オナホ先輩

434

子供時代でも性が目覚めたらオナサポしてくれる金髪ぷにロリオ  
ナホ先輩

440

おしっこする様子を見せてとせがまれたのでノリノリで見せつけ  
る金髪ぷにロリオナホール先輩

447

自分の身体を使って保健体育の授業を行うドスケベ淫乱マゾ豚オ  
ナホールお姉ちゃん先輩

454

気に入った人間を自分の住処に誘拐していくピンク髪Nカップ爆  
乳淫乱人外ちゃん

459

くところある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねる4く  
春、出会いの季節

476

大いなる邪神編

生徒同士のイチヤイチャションを見て羨ましくなるデカケツマゾ  
豚オナホ先生

479

生徒たちのイチヤイチャに混ざって遠慮なく種付けしてもらおう  
とするアルビノ陰キャマゾ豚オナホール先生

485

完膚無きまでにブチ犯されてオスのチンポに完全屈服するドスケ  
ベデカ尻マゾ豚オナホ先生

491

めちやくちやに犯されている先生の痴態を見て自らを鑑みるドス  
ケベオナホ後輩&同期

498

気の強いメスはアナルが弱いという通説を証明してしまうクソザ



コマゾ豚ガチペドオナホール同期 | 504

海に來てもやることは変わらない色狂いアへ顔マゾまんこオナホ先輩 | 510

妊娠中だけど神様なので普通におまんこ使っても問題ないドスケベ淫乱マゾ豚オナホ先輩 | 516

海に來たのにやるのがいつもと変わらない淫乱Nカップ生オナホ先輩 | 521

妊婦のくせに繁殖本能に負けてチンポをおねだりする母親失格ガチロリ変態ボテ腹オナホ同期 | 526

不思議パワーでビーチの真ん中にも関わらず激しくドスケベラブセックスをかます鬼畜後輩くん | 532

水着のままラブラブお嫁さんボテ腹セックスを堪能するド淫乱巨乳マゾ豚オナホ後輩 | 538

仇敵 | 544

海の神だろうと濃厚ディープキスでメロメロにしてハメ潰す色欲後輩くん | 550

初対面セックスで処女をブチ破ってもきっちり気持ちよくさせる絶倫デカチンポ後輩くん | 556

邪神の逆襲 | 562

触手パラダイスで恥を捨ててイキまくる金髪Nカップ爆乳ド淫乱邪神オナホ先輩 | 568

敵の根城に乗り込んだからとりあえず邪神後輩の母乳で腹ごしらえする鬼畜後輩くん | 574

主人と同じ姿に女体化させられて犯される憐れな爆乳マゾ豚お魚オナホちゃん達 | 581

最愛の彼女を取り返しに来た色欲魔神にバチボコに犯し尽くされる大なる邪神オナホ	588
くとある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねる5く	594
人気ユーチューバー編	
ワーカーホリックな冥界蜘蛛と怠惰なもふもふひきがえる	605
最近流行りのYouTuber	610
後輩くんの性欲を試そうとして陥落寸前まで墮ちちやう大和撫子	
セーラー服オナホ美少女	616
面倒くさがりなダウナー系Oカップ爆乳ムツツリ無知無知オナホ	
ユーチューバー	622
とんでもない秘密を無自覚に隠していたドスケベOカップ爆乳ダウナー食いしん坊オナホ系ユーチューバー	629
オナホと化したおっぱいで極太チンポを受け入れるアブノーマル	
配信系ユーチューバー	634

## 裸白衣のメスガキロリ巨乳先輩

先輩の部屋に入る時には、ルールがある。

何の変哲もないマンションの、何の変哲もない一部屋。

僕と先輩が共同で借りているこの一室には、所々に変なルールが付随している。

そのルールに従い、僕は着ている衣服をすべて脱ぎ捨て、全裸になつてから先輩の部屋のドアを開けた。

「先輩、もうお昼ですよ……うわ、メスくっさ」

その瞬間、中から濃厚なメスの匂いがムワツと漂ってきた。

その上、ういんういん、ぐちゅぐちゅと、何かが潤った肉穴をほじくる音まで聞こえてくる。どうやら先輩は今日も絶好調のようだ。

「おー、もうそんな時間かい？」

そのメス臭を振り撒いている原因たる人間は、正面のデスクトップパソコンから視線を外し、優雅に椅子に腰掛けながら、くるりと回つてこちらを見た。

裸に白衣しか着用していないという、とてもマニアックな格好で。

「論文を書くのに夢中になつててね。ついこんな時間まで部屋に籠もってしまった」

腰まで伸ばした、鮮やかな金髪。とろんと快樂にとろける碧色の瞳。小学生並の背丈に似合わない、たっぷりと実ったKカップの爆乳。そして、いっぱい子供を産めそうな安産型のお尻。

それらすべてを惜しげもなくさらけ出し、先輩は笑みを浮かべながらこちらを見た。

「それで、何の用事かな？」

おまけに股の間に埋まったパイプは、結構な速さで自動的に先輩の膣肉をほじくり回している。太くて長い、エグいタイプのやつだ。

「今日の料理当番は先輩です。簡単なものでいいから練習しましょうよ」

「この飽食の時代にわざわざ料理をするなんて、非効率的にもほどが……ほどが……んっ、ちよつと、待って、くれ……イグツ？」

足をピンと伸ばし、先輩は無様に絶頂した。ぐっぽりとバイブを啜えたメス穴から、ドロリと白濁本気汁が溢れ出して来る。

可愛らしい顔が快樂に歪み、下品なアへ顔を晒していた。

「イグイグッ?んお、お、お、っ?このバイブしゅっご?わたしの弱いところ的確に突いてくりゆううう??」

「はあ……」

相変わらず、先輩はどうしようもない色狂いだ。

起きている間は常にオナニーが研究にいそしみ、それ以外のことは全くの無関心。その可憐で美しい容姿からは、とても想像できないことだろう。

事実、大学の中で先輩の秘密を知っているのは僕一人しかない。

「ふうう……で、何の話だったかな?」

「料理当番の話です」

「ああ、そうだったね」

イキ散らかして満足したのか、先輩は少しだけ余裕を取り戻して椅子から立ち上がった。

そうしてKカップ爆乳をぶるんぶるんと揺らしながら、こちらに歩み寄ってくる。

「いいかい、料理は科学だ。レシピ通りに材料を揃え、レシピ通りに調味料をイグ?揃えれば誰にだって作れイッグ?るものなんだよ。だからイッギユ?このわたしがわざわざ作る必要なんてないンツギユ?だよ。わかったかい、後輩くん……ンホオオオオオツ??イグイグウウツ?!?」

ぶぱっ、と先輩の股間から大量の白濁本気汁が噴き出し、ゴトンとバイブが地面に落ちる。

真っ白い本気汁で床をビチャビチャにしながら、先輩は僕の目の前で無様なガチイキを披露した。

脚はガクガクと痙攣し、立っているのがやつとといった様子だ。先程よりも一層濃いメス臭が、むわりと僕の鼻をつく。

流石にここまでのド変態っぷりを見せつけられれば、嫌でもムスコは反応してしまう。

というか、ぶっちゃけ我慢の限界だった。

天を突くほどにそそり勃った僕の肉棒は、目の前の極上ぷにロリメスを犯し尽くせと唸っている。

キンタマではグツグツと精子が量産され、この合法ぷにロリマゾメスの子宮に流し込まれるのを、今か今かと待ち望んでいる。

「このクソエロメスが……」

「ふーっ……ふーっ……いやあ、今回のバイブも最高だねえ。もしかして、後輩さんのチンポより良いんじゃないかな?」

「は?」

それは聞き捨てならねえな。

「お、なんだい後輩くん。もしかしてバイブに負けたのがそんなにショック……んぶう!?!」

僕は先輩の唇を奪って、口内を蹂躪し始めた。

唐突すぎるその行為に、先輩は目を白黒させてされるがままにされている。

「ちゅっ?んちゅー?ちゅばっ?ちゅばっ?ベロベロベロオ?ん、むぐうう??ぷはっ?」

「ぷはっ……このロリオナホが……黙って話聞いてりゃ好き勝手言いやがって」

「な、何怒ってるんだい後輩くん?わたしは事実を述べたまで……ツホオオオオ!?!」

先輩のKカップ爆乳の先端についている、ビンビンに勃起した乳首を、両方とも思いつきりつねり上げる。

すると先輩は舌を飛び出させ、白目を向いてマゾイキした。

「相変わらず、乳首よわよわですね」

ドロリと濃い白濁本気汁が、先輩のぷにロリマンコからゆっくりと垂れて、どちゃりと床に落下する。

まるでヨーグルトみたいな粘度だ。

「お、おおお?ひ、酷いじゃないか後輩くん?わたしのマゾ乳首をいきなり引っ張るなんて?」

「うるせえ、このロリ乳オナホが!」

バッチイイイン!!!

「ひゅっ」

先輩のバカみためにデカ過ぎる乳を、横から思いつきり引っぱたく。

すると先輩は、口から間抜けな声を出して速攻アクメをキメた。どぷっ、と。おまんこから粘ついた本気汁が更に溢れ出す。

「お、おおおおお……?!?!?!」

何をされたかよく分かっていない先輩のおっぱいを、更にバチンと引っぱたく。

それだけで、目の前のぷにあなオナホールは、その奥から白く粘っていたローションを大量に吐き出した。

「いぎっ?やめ?やめてえええ?!」

「いつもいつも理屈つけては動こうとしねえでよお! たまには自分から外出て動いてみるや、この乳デカオナホが!!」

「ひぎいいいん?!?!」

立派に実った先輩のKカップ爆乳を、これでもかと引っぱたく。今までのストレスやその他諸々を込めて、ストレス解消のおもちやにする。

叩いてよし、握ってよし、挟んでよし。やっぱり先輩のおっぱいは最高のおもちやだな。

「ふうー……スツキリした」

「はっ、はっ、はっ?ちよ、ちよっと乱暴じゃないか後輩くん?」

「何言ってるんですか、喜んでるくせに」

「よ、喜んでなんかっ……?」

じゃあ股間から垂れてる本気汁止めろよ。更に床がビチャビチャになって、掃除が大変になるだろうが。

まあ先輩はいじめられて気持ちよくなる変態だし、仕方ないか。

「さて、じゃあセックスしますか」

「んひっ?」

ベッドの方に歩いていき、端の方に深く腰掛ける。その光景を見て、先輩は口の端を釣り上げる。

期待しすぎだろ、このぷにロリオナホールがよ。ハメ倒してやる。「しょ、しょうがないなあ〜?後輩くんのグツグツに煮えたぎったオス欲、先輩のわたしが思いつきり吐き出させてあげようじゃないか?」

「どの口が言ってますか」

毎回毎回ハメ潰されて終わるくせに、よくそんなことが言えたもんだな。このデカ乳オナホールがよ。

「じゃあ、おねだりしてください」

「ひゃ、ひゃい?」

先輩はベッドの上に立って、僕の目の前にドロドロのおまんこをさらけ出す。

先輩チビだから、ベッドの上に立つとちようど僕の目の前におまんこが来るんだよな。ベストポジションだ。

「わ、わたし……三峰ミントはあ?いじめられておまんこどろどろに濡らすド変態ですか?北条佑樹さまのでつかあいおちんぽでえ?先輩おまんこじーつくり味わつちやってくださいあい?」

両手でおまんこをくぱあ、と割り開き、女のいちばん大切な部分を丸見えにさせる、これ以上ない無様な敗北宣言。

こんなおねだりをされたら、こちらも犯してやらねば無作法というもの。

「合格です」

「あ……あああああああ?!?!?!おちんぽ来たあああああ?!?!?!」

先輩の腰を掴み、思いつきり下げる。それだけで、僕のデカチンポは先輩のおまんこにすべて飲みこまれてしまった。!!?!?!」

温かく柔らかい肉が、全方位からぎゅうぎゅうとチンポを締めつける。

「ひいひいひい?おちんぽしやまああああ??!?!」

本番は、ここからだ。





先輩の腰をガツチリと掴み、思いつきり上下にピストンさせる。一往復ごとに、先輩はその可憐な唇から汚いオホ声を上げて悶絶する。まるでラブドールみたいな扱いをしてしまっているが、まったく問題は無い。

「えへへえ???」

「女の子がしちゃいけない顔してますよ!」

先輩の頬がだらしなく釣り上がっているのが、その証拠だ。

「んひひひひひひ??きもちいいよお?おちんぽきもちいい??」

「つたく! 救いようのない変態ですね、先輩つて!」

大学で研究をしている時に見せる、理知的なそれとは全く違う下品な姿。

舌が飛び出し、半分白目を向き、快樂によってオホ声をまき散らす、ただのマゾ豚オナホ。それが今の先輩の姿だ。

「おぎよおおお???おぐつ、お腹のおぐう??ごりごりつて削られりゆうう??」

「どうですか! 生チンポの味は! バイブとどつちが好きですか!

言ってくださいよ! 言え、このぷにロリマゾオナホ!」

「な、ナマチンポ???ナマチンポでしゆうう???バイブなんてゴミで

しゆうう???!!あんなニセモノより、ナマチンポがいいのおほおおお!!?!!」

ぐちやぐちや、どちゆどちゆ、と僕は容赦なく先輩のおまんこを犯し尽くしていく。

ひと突きする度に奥から白濁本気汁が溢れ出し、まるでもう射精したみたいになっている。相変わらず先輩はエロくて最高の先輩だ。

「ほらほらっ、だらしない顔してないで自分でも動いてください!」

「むりっ?むりいいい?おなかの奥、どちゆどちゆつてされると?頭まっしろになりゆうう??」

体格差なんて関係なく、先輩は僕のチンポを根本まで飲み込んでい

る。腹部にぽっこりと浮き出たチンポの輪郭を親指で軽くなぞつてやると、それだけで先輩はビクンと体をのけ反らせた。

「ちんぽお？おちんぽ？デカマラ？ペニス様あ？なんて呼べばいいのお？」

「好きに呼んでくださいー！」

「んへへえ、やったあ??だいしゆきですうおちんぽ様あ??？」

まったく。こんな激しいセックスの最中でも、先輩の頭はしつかり回っているらしい。

これはもつと激しくして、豚みたいな鳴き声しか上げられないようにしてあげないと。

「ふんっ!!」

「おっ……!!??」

先輩の腰を持ち上げ、落とす。その瞬間に、僕も同時に腰を突き上げる。

そうするとどうなるか。答えは火を見るよりも明らかだ。

「しきゆう、ちゅぶされ………あっ」

あまりの衝撃と快楽に、先輩の意識がぶっ飛ぶ。

白目を剥き、カクンと全身から力が抜ける。

「まったく……先輩つてば、もうちよつと我慢してくださいよ」

せめて僕が射精するまでは起きていてほしかった。まあでも、これはこれで好都合だろうか。

「起きてください、先、輩っ！」

「んごっ、ほおおおおおっつっ!!??」

なにせ、こうして先輩の起床ガチガチクメを見ることができただから。

「はっ、はえっ？わたし、なにしてっ」

無様なオホ声を上げ、何が起こったか分からずに目を白黒させる先輩。

これはチャンスだ。呆然としてる所に、一気に畳み掛けてやろう。

「おんっ??」

それに、僕もそろそろ射精を我慢できなくなってきた。

まったく、どれもこれも先輩がエロ過ぎるのが悪いんだ。反省しろ、マジで。

「出しますよ、先輩っ!!」

「だひゅって?なにをうおおお、お、お、おおお!?!?!?!」  
「そんなの決まってるじゃないか。!?!?!?!」

ピストンの速度を早め、射精の態勢に入る。

ドロドロに煮詰まった欲望の塊を、このぷにロリオナホールに全部ぶちまけてやる。

「ああ、今の先輩サイツコーにカワイイですよ!!」

「ほ、ほんとおお??えへへえ?こうはいくんにかわいいっていわれちやっただー?!」

ああくそっ!この先輩はチンポイライラさせる天才だなマジで!

「あー……出る出るっ! お腹の奥で全部出しますよ、先輩!」

「うんっ?せんぱいおまんこでいっっぱいせいえきだしてね??」  
チュツ、と。

その瞬間、唇に優しく触れるようなキスが飛んできた。

まるで射精を応援するような、健気な生娘の如きキス。

ああもう、そんなことされたら。

「でるっ!」

「あっ……??」

我慢なんてできるはずないじゃないか??

「んぎやおおおおほおおー!?!?!」

キンタマからおびただしい量の精液が撃ち出され、チンポの先端から勢いよく飛び出す。!

先輩の子宮口に密着してのゼロ距離射精。もはや処刑と変わりないだろう。女としての尊厳を殺す、エロ処刑だ。

「お、ーっ……??お、っ?お、お、おーっ……??」

先輩は脚をピンと伸ばし、背筋を弓なりにのけ反らせて、膨大な快楽をなんとか体の外に逃がそうと頑張っている。

もはや女ではなくただのメスと化しているが、そんな先輩も可愛らしくて最高だ。

「んんっ、はあ……いやー出した出した。全部搾り取られちゃいましたよ、先輩」

「あひ……っんひひえ……っ？」

小さな子宮を満タンにした精液は、収まりきらなかった分が逆流して結合部から溢れ出てくる。

やっぱり先輩ちっちゃいな。出した分のほとんどが逆流してしまっている。後輩の精液を無駄にするなんて、ひどい先輩もいたものだな。

「よつと」

「おっおっおっおっ??」

射精し終わって少しだけ柔らかくなったチンポを、先輩のおまんこから引き抜く。

すると抜く際にブルブルと痙攣して、精液の残りを搾り取ってくれた。サービス精神旺盛なおまんこだ。

「ほら先輩、起きてください。セックス終わりましたよ」

「あ……っおっっおっんっっ？」

駄目だこりや。精液が逆流する刺激だけで軽イキしてるもん。

もう全身が超絶敏感になっているのだろう。絶頂直後ゆえ、仕方ないことではあるが。

「しょうがないですね」

先輩起きそうにないし、勝手に使わせてもらおう。

どうせ先輩は僕専用のぷにロリマゾ豚オナホールなわけだし、僕が勝手に使ったところで誰も文句なんて言わない。

一発射精して少しは満足したが、あくまで少しだ。一度火がついてしまったら、最低5発は出さないと収まらない。

「先輩が悪いんですからね」

「んっぎゅおっ。」

真っ昼間からオナってる先輩が悪い。ものぐさで、研究とオナニー以外にも興味のない先輩が悪い。子供みたいな背のくせに、こんなバカみたいにデカイ乳してる先輩が悪い。

「このまま夜までハメ潰しますから。覚悟してくださいね」

「……えへっ？」

先輩のふわとろぷにマンに再びチンポを突き入れながら、僕は。

「ま、せいぜい私をまんどくさせてくれよ？後輩くん??」

「イキってんじやねえ、このぷにロリ爆乳オナホールが」

「おっへん??」

まだ生意気な口をきく余裕のあった先輩に、ピストンと共にそう告げたのだった。

## オナニー狂いのメスオナホ先輩

「先輩。起きてください、先輩」

「ん〜……」

次の日の朝。

結局あの後、夜になるまでセックスに興じ、そのまま先輩のベッドで寝落ちしてしまった僕たち。

カーテンが掛かっている窓の外からは、眩しい朝日が射し込んできている。今日もいい天気だ。

「ふあ……ああ、おはよう後輩くん」

「身体、大丈夫ですか？」

「ん、おお。別に何ともないよ。君こそ筋肉痛になったりしてないかい？」

ベッドから起き上がった先輩は、その豊満なKカップ爆乳を惜しげもなく揺らしながら伸びをしている。

朝っぱらからクソエロいな、このぷにロリメスが。襲うぞ、今すぐに。

「先輩が起きる前に、一応は掃除しておきましたよ。なのでシーツくらいは自分で洗ってください」

「えー。後輩くんが出した精液の方が多く染み付いてるんだから、後輩くんが洗うべきじゃないのかなー」

「それを言うなら、床に垂れてた先輩のネバトロ本気汁を全部掃除したのは僕なんですけどね」

相変わらず先輩は汗気が多くて困る。

エッチなことしてる間は興奮が増長されるので、むしろウエルカムなのだが。でも賢者タイムになってから掃除する手間を考えると……うーん、どっこいどっこいって感じかな。

「これも練習です。僕が居なくなつた時に先輩一人で生きてけるよう、家事も少しずつ練習していきましょう」

「いや、そんな必要は無いね」

ベッドから立ち上がり、先輩は上目遣いでこちらを見上げながら二

ヤリと笑った。

蠱惑的なその微笑みに、不覚にもドキツとしてしまう。ドスケベでド変態な先輩ではあるが、顔はめちやくちやかわいいのが悩みの種である。

「なんたつて、後輩くんは一生わたしの側でお世話をするつて決まってるのだからね」

「いや一生つて……結婚でもする気ですか？」

まあ、僕は別に先輩となら結婚するのも全然アリだが。

というか、こんな日常生活全部ピンク色のドスケベ先輩の相手をできるのなんて、僕くらいのもだろう。そういう意味では、ある意味お似合いかもしれない。

「結婚？ はっ、そんな無駄な儀式になんの意味があるんだい？」

おいおい、無駄つて言い切っちゃったよこの人。結婚式のこと無駄な儀式つて言っちゃったよ。勇者かよ。

「そんなことしなくとも、わたしと後輩くんはずっと一緒に居られるだろう？ なにせ後輩くんは、わたしを心の底から崇拜しているのだからな♪」

「先輩……」

まったく、この先輩は。

「めちやくちや生意気ですね、先輩」

「んひよっ!?!」

まったくよお、誰が誰を崇拜してるだつて？ ああん？

「乳首つねられただけでアへ顔になっちゃやう、クソザコマゾメス先輩を、崇拜なんかしてるわけじゃないでしょう？ 僕が先輩の面倒見てるのは、幼馴染の腐れ縁つてだけですよ」

「ほおおおおおおっ!?!ちっ、ちくびい？ぐりぐりやめっ？んのおおおお!!?!」

両乳首をつまんで、ギリギリとひねり上げる。常人なら痛みを感じるかもしれないレベルだが、そこは心配ご無用。このドスケベクソマゾ先輩は、痛いのが大好きな生粋のド変態だから。

だからこうして乳首をおもちやにしても、よだれ垂らして喜ぶだけ

で済むのである。まったく、このマゾ豚先輩はどうしようもないな。

「今日は一日オフですし、気の済むまでハメ倒してあげますよ」

「はあっ？はあっ？ふ、ふふん……毎回そう上手くいくとは思わないことだな？」

「どの口が言ってるんですか」

乳首から手を離すと、先輩は少しだけ距離を取って机の方へと向かっていく。既に股間からは愛液が溢れ、歩いた跡にポタポタと淫らかな水たまりを作っている。

そうしてフラフラながらも、何とか机に辿り着いて引き出しを開ける。そして中から、何かの試験管を取り出して見せた。

「こ、これを見たまえ！ わたしが新しく開発した、フェロモンを50倍に増幅させる薬だ！」

「また変な薬開発したんですね……」

先輩の専攻は薬物学だ。

しかも、ウチの研究室は材料費さえ出せば割と好き勝手に薬を作れるという最高の環境なので、先輩はもう歯止めが効かないレベルで変な薬を量産している。

その情熱をもうちよい生活方面に活かしてくれればなあ、と思わなくもない。

「これを飲めば、わたしのメス臭は留まるところを知らなくなる！」

果たして後輩さんの理性は無事でいられるかな!？」

「いや、先輩それは……」

なんだかとおも嫌な予感がする——というか、確定で墓穴掘ってるだけだと思うので、飲まないほうがいいと思うのだが。

「はっはっは—— もう遅いわ——」

高笑いしながら、先輩は試験管の中身を飲み干した。

あーあ、どうなっても知らないぞ。

「ぶはあっ—— につがあー！ なんだこれ苦すぎだろ！」

「そりゃ薬ですからね」

良薬口に苦し。甘い薬なんて存在しないのだ。

「ジュース取って来ますよ。オレンジジュースでいいですか？」





「たしゆけて後輩くんっ? 子宮キュンキュンしすぎて痛いのか? ど  
びゅーって精液流し込んでもらわないと収まらないのおっ?」

「分かってますよ」

僕はせっかく着てきた服をすべてその場で脱ぎ捨て、全裸になる。  
そうしてそそり勃つチンポを、先輩の顔に向けて近づけた。

「ほら先輩、大好きな後輩のチンポですよ」

「あっ……? あっ、あああっ?」

濃厚すぎるメス臭の中にあっても、なおオスの匂いを放つチンポ。  
そのチンポに釣られて、先輩の視線が固定される。少しだけ腰を動  
かしてチンポを揺らしてみると、その方向に視線が向く。面白いなこ  
れ。

「チンポっ?! チンポチンポチンポおおっ?!?!」

「まだですよ、まだ」

今にもチンポにむしゃぶりつきそうな先輩の頭を掴んで、強制的に  
我慢させる。ペロペロと必死に舌を伸ばしてチンポを舐めようとす  
るその様は、普段の理知的な要素など欠片も残っていない。

ここにいるのは、ただのチンポ大好きなオナニー狂いのメスオナホ  
先輩だ。

「まだ、もう少し待ってください……」

「フーツ!? フーツ!? フウーツ?!」

先輩の理性が完全に決壊するまで、お預けを続ける。眼前に晒され  
たチンポの臭いによって、先輩の理性はゴリゴリと削られている最中  
だ。

「お? ん? っ? お? っ?」

その証拠に、先輩の目から徐々にハイライトが喪失していつてい  
る。もう完全に理性がぶっ飛んだようだ。頃合いだな。

「よっ」

僕は手を離して、チンポをしゃぶってもいいと許可を出す。

その瞬間、先輩はまるで飢えた獣のように僕のチンポにむしゃぶり  
ついた。

「んぶちゅうつ? めぼっ? めぼっ? ずろろろろっ? めちゅ? めちゅ?

んぼおおおおつ??んむぐうううつ???ベロベロ??ちゅばあつ???  
「うおつ、チンポ引っこ抜かれるっ……!」

どうやら、本当に先輩に必要なだったのはジュースじゃなくて精液  
だったらしい。

だったら、その望みに応えてたらふく飲ませてやろう。一番搾り  
だ。感謝して飲めよ、このぷにロリ爆乳メスオナホが。

「まずは一発……イキますよわー!」

「んむうっ?!?んぶううううっ?!?」

先輩の激しすぎる口淫に、たまらず精液を発射する。ゴキユゴキユ  
と生々しい音を出しながら、僕の出した精液を残さず飲み込んでいく  
先輩。

エロ過ぎだろ、このマゾメスオナホがよ。

「ぶあつ?ガラガラ?ごつくん?あー?」

「ふう……よくできました、先輩」

「えへへえ?」

出した精液を残さず飲み尽くしましたと、口を開けて見せびらかし  
てくる先輩。なんて健気なんだろう。

飲み込みきれなかった精液が鼻から逆流して、白い鼻ちようちんを  
作っている姿がこの上なく無様だ。

「さて、じゃあ本番やりますか」

「はあい?」

これは今日も夜までコースだな。

## 大学では理知的な爆乳オナホール先輩

「んおおおっ?!?!?!」

「あく、相変わらず最高の締めり具合ですね、先輩」

床にうつ伏せになって尻を付き出す先輩。そこに覆い被さり、バツクの体勢でおまんこにチンポを突き入れる。

流石は性欲50倍。おまんこの奥から本気汁が溢れて溢れて止まらなくなっているみたいだ。結合部から垂れてる液の量がすごい。

「もう少し汗気抑えてくださいよ、先輩」

「しよ、しよんなこと?言っただってええ?お、っほお?」

言い訳をする先輩のおまんこを蹂躪し、チンポでほじくり回している。初っ端から豚みたいなオホ声とは……飛ばしてるな、先輩。

「んっぎゅ?おっきいよお?チンポおっきい?」

「先輩のおまんこが小さすぎるんですよ」

とはいえ、それがいいのだ。

小さいからこそおまんこの締めつけ具合は最高だし、先輩の体と床の間に挟まれて、柔らかかそうに形を歪ませるKカップ爆乳クツションがとてつもなくエロい。エロくない部分が無い。

「あひやああああっ?!?お、おまんこ乳首、同時にいじっちゃだめえええ?!?!」

「だめって言ってる割には、乳首つねるときゆうきゆう締め付けてきますけど?」

「しよ、しよれは生理反応?生理反応だからあっ?!?!」

柔らかかそうに形を歪める爆乳の先端にある突起を、ギリギリとつねってあげる。

するとおまんこの締めつけが強くなり、膣肉が媚びるようにチンポに纏わりついてきた。

「やっぱり先輩はコレ好きなんですわね」

「やああああ?ちがつ?違うのおお?」

両乳首とおまんこの三点責め。先輩はこれが大のお気に入りだ。快感を強く感じる器官を、全部まとめて刺激するという変態マゾ豚専



「しきゅー?しきゅー?おまんこで搾り取って?しきゅーでごくごくせいえき飲むのー?えへへえ?」

ついに快楽で頭がぶっ壊れたのか、先輩は子供みたいに無邪気な声で話し始める。

大丈夫かこの人。なんか変な歌まで歌い始めたけど。

「せ、先輩? 大丈夫ですか?」

「せいえきっ?せいえきっ?せいえきちょうだうだうい??」

「うおっ、なんかチンポのさきっぽに吸い付いて——やばっ、中身吸われるっ……!」

おまんこの奥。子宮口が、チンポの先端にかぶかぶと吸い付いてくる。

鈴口からこぼれるカウパーを貪欲に飲み干し、その奥にある精液も引きずり出そうと吸い付きを強めてくる。

「くっ……!」

初めての感覚だ。これも薬の副作用なんだろうか。まったく、先輩はどこまでド変態になれば気が済むのだろうか。

「おまんこでもぐもぐ??しきゅーでかぶかぶ??」

「うおっ、その二段攻めやばっ……!!」

おまんこ全体でチンポを優しく包み込み、膣肉でご奉仕する甘々な部分。

そして奥にある子宮口で、中の精液を引きずり出そうと吸い付く強烈な部分。

静と動の二段攻めはチンポに未知の刺激を与えて、これでもかと射精欲を煽ってくる。

「こんなの我慢できるわけ無いって……! あー、イクツ! イキますよ先輩!」

「うんっ?きてえ?せーえきびゅっっってしてえ??」

射精に向けて、ラストスパートをかける。

腰の動きを速くして、先輩のおまんこを容赦なくほじくり回している。

先輩のデカ尻に腰を打ち付ける度に、ばっちゅばっちゅと淫靡な水



と、その瞬間机の上にあつた先輩のスマホが、けたたましい着信音を鳴らし出した。

何のカスタマイズもしていない、デフォルトの着信音だった。女子力のかけらもないな。

「先輩、電話来ましたけど」

「は、ひうつ……ここ、後輩くん、取って……う、動けにやい……」

「また腰抜けたんですか」

まったくこの先輩は。

しょうがないので、立ち上がって机の上に置いてあるスマホを手にとって電話に出る。良いのかなあ、異性にスマホ預けちゃって。

「はい、もしもし」

『あ、やっと出た』

電話先の相手は、先輩の同期で同じ研究室に所属している、名取京香先輩だ。

先輩とは違って、至極真つ当な人である。ウチの研究室の貴重な常識人粋だ。

「名取先輩、おはようございます」

『おはよう北条くん。さっそくで悪いけど、ミント起きてる?』

「いや、まだ寝てますね」

『やっぱりか……あの寝坊助め』

まあ嘘ですが。本当はセックスして動けなくなってるだけです。でも動けなくなって床に寝そべってるから、あながち嘘でもないのかもしれない。

『10時からグループミーティングだから、それまでに起きてカメラ繋いどけって言っついて』

「わかりました。伝えておきます」

『頼んだよ、じゃあね』

そう言っつて、名取先輩は電話を切った。

僕は時計を見る。九時三十分だった。

「流石は名取先輩。先輩とは違ってデキる女ですね」

「き、聞き捨てならないね……」



いや、事実ですし。

「つていうか、先輩大学の用事あったんなら言つてくださいよ。危うく夜までハメ倒しちゃう所でした」

「あー………忘れたよ、てへ」

てへじゃないんですよ、てへじゃ。

「んじやまあ準備するかあ………うわ、足がめっちゃガクガクする！  
なんだこれ面白いな！」

立ち上がって、足を子鹿みたいにふるふるさせる先輩。その振動でKカップ爆乳もプルプル揺れてるのは、控えめに言つて目に毒だ。

「まったくもう………そんなんじや満足に動けないでしょう。手伝ってあげますよ」

「うむ、頼んだぞ後輩くん」

ニヒツと無邪気に笑つた先輩を、お姫様抱っこして部屋を出る。

お風呂と、着替えと、あと食事もだな。まったくやる事が多くて困ってしまう。

「先輩」

「なんだい？」

「終わったらまたハメ倒しますからね」

「んひっ？」

でもまあ、終わった後にご褒美が待ってると思えば、案外苦にならないものだ。

## 生活能力皆無のぷにまん爆乳マゾペット先輩

外とコミュニケーションを取るにあたって、まずは全裸であった先輩に服を着させてあげる必要がある。

「はい、先輩ばんざーい」

「んー」

特注サイズの黒色のブラジャーに、お揃いのショーツを用意する。次に、その巨大すぎるKカップ爆乳を包み込み、ホックを掛ける。そして、その安産型のお尻にぴったりフィットするように、黒のショーツも穿かせてあげる。

「また胸おつきくなりました？」

「どうだろうねー。測ってないから分からん」

下着姿だけでもクソエロ過ぎるだろ、このぷにロリ爆乳オナホ先輩がよ。

でも駄目だ。エロいが我慢だ……襲うなよ、僕。今襲ったら、確実に歯止めが効かなくなる。

「今日は暖かくなりそうですし、軽い服のほうがいいですよね？」

「あー、なんでもいいよ。後輩さんに任せる」

先輩が外に出るとき、服をコーディネートするのは僕の役目だ。先輩はものぐさ過ぎるので、下手すれば全身ジャージで外に繰り出しかねない。

おかげで、男なのに女物のコーディネートに詳しくなっちゃった。まったく。そういうとこだぞ、ほんと。

「んー、でもどうせグループミーティングするだけですよね？」

「ああ。リモートだし、他に外出の予定は無いよ」

「じゃあコレとコレですかね。先輩のイメージにピッタリです」  
余所行きだが、あくまで部屋着。という事ならこの服装でいいだろう。

黒のノースリーブに、紺色のスカート。その上から白衣を羽織らせ、完成だ。

めちやくちやシンプルだが、それがいいのだ。素材の味を存分に活

かしたファッションと言えるだろう。

「後輩く〜ん、お腹すいた〜」

「はいはい。今用意しますからね」

リビングへと移動している間に、ぐう〜、と先輩のお腹が鳴る。

昨日から何も食べずにセックスしてたのだから、当然の現象だろう。まあ度々セックスにうつつを抜かして食事を忘れるので、もうお互いに慣れてしまったが。

「昨日の余り物で悪いんですけど」

キッチンに立ち寄って、昨日作っておいたホワイトシチューと、市販のパンを持ってくる。

着替える前に弱火で温め直しておいたので、口当たりもバツチリだろう。コトコト煮込みは最強だ。

「いやいや。食事なんて身体と脳を動かすだけの栄養が取れれば、それでいいのさ」

「その割には、いつも僕の料理美味しいって食べてくれますよね？」

「当たり前だろう。美味しいものに美味しいと言って何が悪い」

シチューを口に運びながら、先輩はそんなことをのたまってみせる。

ああもう、そういうとこだぞ。自然に頬がニヤけてしまうじゃないか、この天然人たらし先輩め。

「うん。今日も後輩くんの料理は美味しいな」

「それは何よりですね」

「これからも私の側で一生、この料理を作って欲しいと思っているんだが」

「もちろんです」

もう何回も言ってる。

僕が料理を覚えたのは、先輩に美味しい料理を食べさせてあげたいからだ。

僕がコーデイネートに詳しくなったのは、色々な先輩を間近で見たいからだ。

僕がこの大学に入ったのは、先輩と一緒に居られるようにするため

だ。

「おかわり」

「もうすぐ時間ですから、終わってからにしましょうね」

「えー、ケチだな後輩くん」

念願叶って、僕はこうして先輩と一緒に生活を送れている。

ああ、幸せだ。これ以上ないくらいに幸せだ。

「あ、じゃあ別のホワイトシチューを貰おうかな」

「別の？」

「フェラチオ、してあげるよっ！」

でもまあ、チンポが休まる時が無いのが悩みのタネではあるが。

指で輪っかを作り、口の前で前後させる先輩の姿に、僕のチンポは節操もなく勃起してしまうのだった。

「……じゃあ、手早く済ませてくださいね」

「もちろんだともっ！」

色々と準備に時間をかけたので、もう時間が無い。先輩の熟練したテクニクで以て、サクツと抜いてもらおうとしよう。

ズボンのファスナーを開け、先輩の眼前にチンポだけを露出させる。

「うわ？さっきヤツたばかりなのに、もうこんなになって……まったく？後輩くんはしようがないなあ？」

「先輩にだけは言われたくないですね」

椅子に座ったままの先輩の顔に、ガチガチに勃起したチンポを押し付ける。すべすべでぷにぷになほっぺたの感触が、えも言われぬ快感をもたらしてくれる。

ああだめだ。このシチュエーション、なんか先輩の顔を小便器にしているみたいで、背徳感がヤバい。

「あむっ？」

「くうっ！」

先端を優しく包み込むように、先輩がチンポを啜えた。先程した獣のように貪るフェラではなく、チンポに優しく奉仕するような、緩やかな刺激が先端から伝わってくる。

毎回お掃除フェラさせてるから、もうチンポ啜えてる姿が堂に入ってきてるもんな。めっちゃ慣れきっている感がすごい。

「じゅるうっ？んっぷ？んっ？んっ？じゅるるるっ？ぬろろろおおっ??」

「うおっ……ねっとりフェラやばっ……!!」

先端だけをすっぽりと口に収め、舌で亀頭を舐めしゃぶる。

温かな口内に包まれ、ゆったりと刺激されるのはとても心地良い。

「んーっ？ぷあっ？んちゅっ？じゅるるるるっ？ぐぽっ？ぐぽっ？ずちゅうううっ?」

「いきなり激しくっ……!! 先輩のくせに生意気なっ……!!」

優しく舐めていたかと思えば、次の瞬間には口全体と食道を使って、チンポ全体をすっぽりと呑み込んでしまった。

柔らかな刺激だけではなく、食道全体で締め付けるようにぎゅうぎゅうと絞り上げてくる。こんなの、我慢できるはずがない。

「全身性器なんですかっ、このエロマゾぶにオナホ先輩はっ……!!」  
「んふー？」

チンポを啜えながら、満足そうに目を細める先輩。その碧色の瞳には、隠しきれない喜色と情欲が浮かび上がっていた。

ああもう、マジでチンポをイライラさせるのが上手だな、このぷにまん爆乳マゾペット先輩め。

「そろそろ、出しますよっ!」

「ちゅぽぽぽっ？んぶううううっ?」

「一番、奥でっ……イクッ!」

頭を掴んで、思いつきり腰を打ちつける。そうしてそのまま、熱い昂りを思うまま吐き出してゆく。

キンタマから発射された精液が、尿道を通過して先輩の胃袋に直接流し込まれていく。

すごく気持ちいい。おまんことはずいぶん違う、ぐにゅぐにゅと柔軟に動く食道の締め付け。これは癖になってしまっそうだ。

「ずろろろろっ？ぷはあっ？はー、はー？げほっ、げほっ？い、いっばい出したね、後輩くん?」

「……最高でした」

「そうだろうか？そうだろうか？後輩くんのホワイトシチューも美味しかったぞ？けほっ？」

口からチンポを抜く時に口周りに付いた精液を拭いながら、先輩は得意げな笑みを浮かべる。

とはいえやはり、食道まで突っ込むのは苦しかったようだ。時折咳き込んでしまっている。

「先輩、ジュースで口直ししてください」

「ああ、ありがとう……ぷはっ」

テーブルの上に出してあったリンゴジュースを、コップに注いで手渡す。

それを飲み干して、ようやく一息つけたようだ。

「さて、じゃあ面倒な用事を済ませてくるとしようかな」

「今日の議題は何なんですか？」

「あー……なんだったかな」

「おい」

そんなんでいいのか先輩。研究とオナニー以外に興味がないからって、大学の授業を蔑ろにするのはいかんでしよう。

まあ大方、倫理とか文学とか、単位のために名取先輩が無理やり取らせた授業なのだろう。やる気が出てないのはそういう理由だ、たぶん。

「たしか、名取がなんか言ってたような……んー、ダメだ。思い出せん」

「しっかりしてくださいよ、先輩」

こんなんでも薬の研究するときにはキリツとして、理知的に見えるんですよ。嘘じゃないんですよ。

「しようがないだろう。わたしは研究とオナニーと君のこと以外、心底どうでもいいんだ」

「先輩……」

何気ない先輩の言葉に、不覚にも少しだけキュンとしてしまう。

こういうことを素面で言ってくるから先輩はズルいんだよなあ。

飾らないというか、直接的というか。

でもオナニーと同列にされるのはちよつと複雑な心境だ。嬉しいんだけど、やっぱり複雑な心境だ。

「というわけで。わたしが戻るまでしっかりキンタマに精液ためておくんだぞ、後輩くん？」

面倒事が終わったらご褒美が待ってるのは、先輩も同じということだろう。

蠱惑的な笑みを浮かべて、先輩は席を立つ。

「……………」

そうして安産型なデカ尻を意図的に大袈裟に振りながら、先輩は自分の部屋へと戻っていった。

床に透明な淫汗を、ポタポタと滴らせながら。

「……………終わったら絶対夜までハメ倒す」

絶対容赦しねえわ、あのぷに口り爆乳オナホめ。

## 密かに恋心を抱くムツツリマゾ巨乳後輩

「さてと」

先輩が授業を受けてる間に、家のことをやってしまおう。掃除、洗濯、料理の仕込み。こう見えてやる事が色々あるのだ。

先輩が生活能力ゼロなので、必然的にこういった家事はすべて僕の担当となる。

「今日のお昼は何にしようか……」

軽く掃除機をかけ、全体を濡れ布巾で拭いて掃除は完了。普段から掃除してれば、これだけでも十分に綺麗になる。

洗濯だつて、今は洗濯機単体で乾燥まで済ませられるから、楽なことの上ない。

「えーと……お、魚安いな」

財布とエコバッグを持って、買い出しに繰り出す。

朝はシチューだったから、お昼は軽いものが良いだろう。夜は魚だ。サケが安かったのだから、バターホイル焼きにでもしようか。

先輩は基本的に好き嫌いが無い。肉でも野菜でも魚でも何でも食べる。

ただ、貝だけは苦手だ。なんでも昔カキにあたつてから、貝類全般に拒絶反応を起こすようになったのだとか。

「あと減つてたのはトイレトペーパーと……」

「あーっ！先輩じゃないツスカー!!」

「……………」

スーパーの店内でそんな大声を出さないでくださいませ、お客様。他の人の迷惑でしょうが。

「……………奇遇だな、二宮」

「いやーホント奇遇ツスね!」

母方からの遺伝である銀髪ショートヘアを揺らし、こちらに駆け寄ってくる人影が一つ。

たわわに実つた双丘を揺らし、薄手のニットワンピースを着たその女は、めちやくちや嬉しそうに笑いながらこちらへ向かってくる。



ワンピースの丈が短めなので、裾から伸びる生脚が妙に艶めかしい。こう言っちゃ何だが、眼福です。

「お前も買いい物か？」

「はい！ 一人暮らしスから！」

目は切れ長で、背も高くスタイルもいい美人。周囲に威圧感を与える造形をしているというのに、こちらに向ける表情はその真逆。まるで人懐っこい大型犬のような印象を受ける。

彼女の名前は二宮凜花<sup>にのみやりんか</sup>。

見た目は北欧系の血が多く混じっているが、生まれも育ちも生粋の日本人だ。

「なるほど、夕飯はカレーと見た」

「ちよつ、先輩セクハラッスよ！」

買い物カゴの中覗き込んでセクハラになるなら、世の中の主婦はみんなセクハラしてることになるが。

「そういう先輩こそ、夕飯はお魚ッスね？」

「お前もセクハラしてるじゃないか」

「アタシはいーんスよ！ なんとたつて後輩なので！」

どういう理屈だそれは。独裁国家にも程があるだろうに。

「つていうか二切れ買つてるところを見るに、まだ三峰さんと同棲続けてるんスねー。ヒューヒュー、お熱いッスねー」

「やめろつて。先輩とは別にそういう関係じゃない」

はい、思いつきり嘘ついてます。思いつきり爛れた関係です。

だが待つてほしい。おおつぴらに自身の性事情を語る人間が居るだろうか。いや居ない。

だから、僕のこれは正当性がある嘘なのだ。優しい嘘つてやつなのだ。

「僕一人じゃ生活費が工面できないから、先輩のところに転がり込んでるだけだつて何度も言ってるだろ？」

「そんなこと言つてー。夜はしつぽりお愉しみなんスよねー？」

「ふん」

「あいたあー!？」

はいそうです。なんてバカ正直に言えるはずもないので、手刀でズビシと二宮の頭を叩く。

このウザ絡み系後輩相手なら、これぐらいがちょうどいいだろう。「馬鹿なこと言っていないでさっさと帰れ。あと、来月頭に提出の論文、今のうちにやっつけよ」

「うぐ……ぜ、善処するツス……」

これは期日前になって泣きついてくるパターンだな。間違いない。まったく、手間のかかる後輩だ。

「今月末までなら助けてやる。明日研究室に出るんだろ。ノーパソごと持ってこい」

「せんばあい……!!」

先程までしょんぼりしていたかと思えば、今度は顔を上げて目を輝かせる二宮。

まったく、現金なやつだ。

「んじゃ、また明日」

「はい！ また明日ツス！」

ブンブンと元気よく手を振る二宮を背に、会計をしてスーパーを出る。最近はずも無人化されているので、手間が省けていい。

帰り道でおやつみたい焼きを買って、僕は帰路につくのだった。



「……………」

ボタン、と鉄製の扉が閉じる音がする。

玄関で靴を脱ぎ、買ってきた食材を持ってキッチンへ。

その際、歩いた後にポタポタと淫汗が垂れていたが、どうやら本人は気づいていないようだ。

「……はあ、あ」

吐き出す息が熱い。

淫らな熱が込められた呼吸は、少女の発情具合をこれでもかど物語っていた。

「先輩……せんぱあい？」

ニットワンピースの裾をまくり上げ、愛液でぐしょぐしょに濡れた水色のショーツを露出させる。

そしてそのまま、右手をショーツの中に勢いよく突っ込んだ。ぐちゅり、と淫らな音がキツチンに木霊する。

「はふ？あ、ああん？先輩今日もカッコよかったよおお？」

自らのおまんこに指を突っ込んで、激しいオナニーを開始する。

オカズは今さつき出会ったばかりの先輩。その顔、その表情、その仕草。

先輩の一挙手一投足を思い出すだけで、おまんこをほじる指が止まらなくなる。まるで劇薬だ。

「それに優しいし？頼りになるしい？んああああつ？」

二宮凜花は、とある先輩のことが大好きだ。

彼のことを思うだけで、おまんこの奥から愛液がどぶどぶ溢れ出してきたしまう。

それほどまでに大好きだった。まるで恋する乙女のように。

「んっ？ふ……先輩ってば、嘘ばっかり……？」

バッグの中からスマホを取り出し、とある映像フォルダを開く。

つい最近新しく撮れた、そこらのAVなんか目じやない衝撃映像。

『おぎよおおおおお？おぐっ、お腹のおぐうう？？ごりごりって削られりゅううう？！』

『どうですか！生チンポの味は！バイブとどっちが好きですか！』

言ってくださいよ！言え、このぷにロリマゾオナホ！』

『な、ナマチンポっ？？ナマチンポでしゅううう？！！バイブなんてゴミでしゅううう？！！あんなニセモノより、ナマチンポがいいのおほおおお！！！！』

画面の中で乱れ狂う、一組の男女。

金髪碧眼のぷにロリ爆乳マゾオナホと、細身だがしつかりと全身に筋肉が付いた裸体を晒す黒髪の青年。

「いいなあ……う？」

そんな男女の獣のような交わりを、二宮はうらやましそうに見つめ

ている。

「はっ? あ、んっ? 先輩、チンポおつきい? アレでアタシのおまんこ突かれたらあ? どうなっちゃうんだろお?」

画面の中で爆乳マゾ豚オナホールを犯している青年のチンポを、穴が空くほど見つめ続ける。羨望と期待の眼差しが、留まることを知らない。

『ほらほらっ、だらしない顔してないで自分でも動いてください!』  
『むりっ? むりいいい? おなかの奥、どちゅどちゅってされると? 頭まつしろになりゆうう?』

おまんこをほじくる右手がどんどん加速していく。

かき混ぜすぎた愛液は泡立ち、奥から新しく溢れてきた本気汁と混ぜり、真つ白な液体となってショーツの隙間からポトポトと落ちていく。

「お、っ? イツグ? 隠し撮りした映像っ? 見ながらあっ? イツぢやう? 犯罪っ? これ犯罪いいっ?」

イケナイことをしているとは分かっている。

だが、そのイケナイことをしているという自覚が、余計に背徳感を増幅させてしまう。

はつきり言っただけかなりヤバい。ヤバいが止められない。まるで麻薬だ。

『出しますよ、先輩っ!!』

『だひゅって? なにをうおお、お、お、おおお?!!??』

画面の中の二人も、そろそろ達するようだ。!!?!?!!

フィンニッシュに合わせて、今まで触れていなかった敏感なクリトリスに指を添わせる。

『でるっ!』

「だしてくださああい?!?せんぱつ、はああああん?!?!!」

青年の射精と同時に、クリトリスを思いっきりひねり上げる。

バチバチと視界に火花が散り、ショーツを貫通して勢いよくイキ潮が噴射された。

「はーっ? はーっ? はーっ?」

キッチンのシンクに大量のイキ潮がぶち撒けられ、それらがすべて排水口に流れていく。

なんと惨め。なんと無様。きつと先輩がこの事実を知ったら、蔑みの視線と共に絶交されるだろう。

「あは？アハハあ？」

いや、絶交ならばまだマシだ。盗撮はれっきとした犯罪なのだから、下手すれば警察に突き出される。

しかし。

「それ……う……いいかも……う？」

そんな身の破滅さえも、彼女にとっては背徳感を刺激するスパイスになる。

端的に言つて、二宮凜花という少女は、マゾという言葉が可愛く思えるほどのド変態だった。

「しえんぱあい？」

美しい顔が、快樂にとろけて歪む。

だから気付かない。

『ふふっ？』

画面の中の碧眼が、チラリとカメラを見たことに。

常におまんこぐちよぐちよなマゾロリ先輩

「さて、セックスしようか後輩くん！」

自室の扉を勢いよく開けて、裸白衣というドスケベコーディネートの先輩が飛び出してくる。出てくる時に全部脱いだなこいつ。

大事なところが乳首だけしか隠れてないんだが。ド変態かよ。

「はあ」

どうやら授業がすべて終わって上機嫌のようだ。無駄にテンションが高い。

差し入れのたい焼きを持っていったときは、パソコンの前でキリツとした賢そうな顔をしていたはずなのに。どうしてこうなった。

「また急ですね」

「急じゃないさ。約束していただろう」

だとしても、まずは夕食を食べてからだろう。ちようど今出来たばかりなのだから、無駄にしないでほしい。

「くんくん……おお、いい匂いがする」

「でしよう？」

ホイルの隙間から漏れ出る香りに、先輩は表情を明るくさせる。

食事に興味ないとか言つときながら、こんな嬉しそうな顔するんだもんなあ。反則だろ。

「じゃあご飯を食べてからセックスしよう！」

「こっちは元からそのつもりだったんですけど」

腹が減っては戦はできぬ。あの有名なことわざ通りだと思う。昔の人の考えに共感しながら、キッチンからテーブルに料理を運ぶ。

お腹すいたままセックス始めるとぶっ倒れる可能性があるからなというか、実際に一回ぶっ倒れたしな。

「熱いですから気をつけてくださいね」

「失礼な。子供扱いしないでくれ」

「してませんよ。ごく普通の注意です」

先輩を子供扱いなんて出来るはずがない。なにしろ、子供にはこんなKカップ爆乳おっぱいは付いてないのだから。

最後の料理をテーブルに置いた際に上からチラツと覗き込んだが、やはり大きい。絶対肩凝るだろ、あれ。

「あ、今わたしの胸を見たな。スケベめ」

「……見てません」

「嘘をつくなよ後輩くん。女つてのはね、そういう視線には割と敏感なんだ」

ほう。

「女子力皆無なのにな？」

「どういう意味だい、それは」

「いえ別に」

「わたしは生物学的に立派なメスだよ。何度も確認してるだろうに」

そりやそうだが。何回も何回も先輩のおまんこにチンポを突き立ててはいるが。

だからといって、先輩の女子力が皆無なのは純然たる事実が変わりない。

「なんなら、今すぐ確認するかい？」

ニヤリと蠱惑的に笑いながら、先輩は白衣の胸元を少しはだけさせた。

白い布地の隙間から、淡いピンク色の突起が覗いた。

「……………変なこと言ってないで、食事しますよ」

「今すつこい間があったね」

条件反射で飛びつきそうになる衝動を、理性で必死に押し止める。

鋼の意志で視線を外し、先輩の対面にある自分の席に座った。よし、勝った。

「ほーれ」

かと思ったら、先輩は両手で白衣の胸元を大きく開け広げていた。柔らかかそうなKカップ爆乳が、惜しげもなくさらけ出されている。

もちろん、先程チラ見えた乳首もバツチリだ。今すぐ床に押し倒したくなる衝動を必死にこらえ、呆れ顔を作って先輩に向ける。

「……先輩。そういうところが女子力の無さに直結してるんですよ」

「でも好きだろう？　こういうの」

大好きですが。

「ふうー……平常心、平常心」

「いやあ、後輩くんをからかうのは面白いなあ」

この悪魔め。こっちがどれ程の思いで襲いたい衝動を我慢してるか知らないから、そんな残酷なことができるんだ。

極上のエサを前にお預けされるオオカミの気持ちを考えてことがあるのか。無いだろう。

「ほら、もういい加減食べますよ。そういう諸々は食べ終わってからにしましょう」

「むう、しょうがないな。分かったよ」

口を尖らせながらも、先輩は両手を合わせてから食事を開始した。僕もそれに続く。

「おお、これは美味しいな」

「それは何よりです」

先輩は夢中になってサケのバターホイル焼きをつついてる。

やっぱり美味しいって言ってもらえるのが一番だな、うん。言葉にしないと伝わらないことだって、いっぱいあるんだから。

「あつ、箸が」

と、そんな食事の最中、先輩がテーブルの下に箸を落としてしまった。

カラカラと、質のいい木の音が鳴り響く。

「新しいの取ってきます」

「ああいいよ。洗って拭けばもう一度使えるさ。洗い物を増やすこともないだろう」

そう言い残して、先輩はテーブルの下に潜り込んでしまった。

まったく先輩は。こういうところで変な優しさ発揮しなくてもいいのに。気の使い方が下手なのは昔から全く変わっていない。

まあ、そんなところが全力で愛おしいので、何も問題は無いのだが。「んっ？」

と、そんなことを考えていたら、股間に何か違和感を感じ始めた。ジジジ、とゆつくりジツパーが下ろされている。こんなことするの



は一人しかいない。

「……何してるんですか、先輩」

「んー?」

「んーじゃなくて」

何してんだ、このぷにロリマゾ爆乳オナホは。

「いや、テーブルの下に潜ったら、妙にもっこりしてる股間があったのでね。これは何が入ってるのか確かめねばと思って」

「確かめなくても分かるでしょうが、そんなの」

というか、もっこりしてた原因は先輩なんだが。先輩が食事前に、たわわなKカップ爆乳おっぱいを見せつけてくるから、こんなことになっただが。

責任取れマジで。このぷにロリマゾ豚爆乳オナホール先輩がよ。犯すぞ。

「いやいや、科学者の本分は研究と解明だろう? だからこれは科学者のサガなのだよ」

「全世界の科学者に謝ってください」

「チンポ? チンポ? 後輩くんのデカチンポ?」

「話聞いてください」

僕のツツコミをすべて受け流しながら、先輩はその小さな手でチンポを引っ張り出す。

まだ完全には勃起していない、半勃ちのチンポが先輩の目の前にさらけ出された。

「あは? すっごいオスの匂いだね? ちゃんと洗ってるのかい?」

「先輩がこれから洗ってくれるんですよね? そのおまんこで」

「よく分かってるじゃないか?」

そんなの誰だつて分かる。今の時点で先輩のおまんこから愛液がダラダラと溢れているのだから、分からないほうがおかしい。

天然のローション付きオナホールだ。便利なことこの上ない。

ああもう、たまらない。ブチ犯したい。そんな気持ちに呼応して、チンポがたちまち勃起する。

「わ、バッキバキ? それじゃ、まずは濡らすよ?」

先輩は自分のおまんこに両手を当て、たつぷりと愛液を掬い上げる。そしてそれをゆつくりとチンポの先端に垂らしていく。

この光景だけでもうヤバい。先輩のおまんこから出た液体がチンポに振りかけられるという、エロ漫画でも見ないような光景に脳が痺れる。

「ぬちゅぬちゅだ？メス汁出し過ぎだな、わたし？」

掬った愛液を全部チンポにまぶし終わり、空っぽになった手でチンポを握り込んだ。

ぬちゅぬちゅと、ねばっこい淫らな音がする。

「どうだい？ぬるぬるで気持ちいいだろう？」

「くっ……は、はい……！」

「あはは？後輩くんは本当にかわいいなあ？」

「先輩のほうが可愛いですよ……んぐっ！」

先輩が手を動かすたび、ぐちゅぐちゅと淫らな音がリビングに響き渡る。

右手で亀頭を撫で回され、左手で竿をしごかれる。ぷにぷにの小さな手が、チンポの表面を縦横無尽に動き回っている。

「う、あつ……！」

マジで気持ちいい。

先輩にいいようにされているのは癪だが、これはかなり極楽だ。

温かな天然愛液ローションと、熟練した手コキのコラボレーション。こんなの興奮しない訳がない。気持ちよすぎる。

「ほくら？しゅっしゅ？しゅっしゅ？」

「っ、は、あ」

一定のリズムでチンポをしごかれる。

自分のゴツゴツした手と違い、先輩の手はすべてでぷにぷにだ。もうその時点で、オナニーより何十倍も気持ちいい。

「んぐ？」

「ちよっ、先輩それ反則っ……！」

おまけに、舌先で鈴口をチロチロと舐められるオマケ付き。

背筋が震えるほどの快感が走るのが分かる。ヤバい。もう、耐えら

れない。

「イクっ……イキます、先輩っ!」

「わひゃあっ!?!」

少しだけ腰を突き出し、先輩の顔に向けて思いつき射精する。

真つ白な欲望の塊が、放物線を描いてビチャビチャと先輩の顔に降りそそぐ。

あまりの勢いに、顔どころか髪にまで掛かってしまった。

「ん、ぶあっ?まったくもう?顔中ベツトベツトじゃないか??」

「ふう……先輩の手コキ、最高ですね」

「そうだろう?なんたつてわたしは天才だからな?」

オナホの天才なんですよ、知ってます。

「んっ?後輩くんの精液?んつく?くつさあ?嗅いでるだけで?おっほ?奥からどどんエツチな汁出てくるう?」

顔にへばりついた精液の匂いを堪能しながら、先輩は床に座り込んで両手でおまんこをほじくっている。

ぐつちよぐつちよ、と淫らな音を股間から響かせ、恍惚の表情を浮かべる先輩は実にエロい。ちよつと我慢できそうにない。

「……犯しますよ、先輩」

「うん?来て、後輩くん?」

食事の途中だが予定変更だ。このTPOを弁えないクソエロい先輩を、完膚なきまでに犯し倒す。

覚悟しろ、このクソマゾド変態オナホールが。

淫らでかわいいぷに口り爆乳オナホール先輩

「早くきてえ？はやくはやくう？」

「そんなに急かさなだけでくださいよ」

リビングのソファーに寝っ転がり、お腹を見せる犬のような体勢で息を荒くする先輩。

そんな光景を見ながら、なるべく急いで服を脱ぐ。口では余裕あるように振る舞っているが、内心ではもう我慢の限界だ。

「ほらほくら？美味しいおまんこ逃げちやうぞ？」

仰向けになりながら、自分の両手でぷに口りおまんこをくぱあ、と割り開く先輩。

既にとろとろになっているおまんこは、真っ白な本気汁を垂れ流しながら貪欲に蠢いている。まるでチンポを捕食するエロ植物だ。凄まじく興奮する。

「先輩唯一の得意料理、味見させてもらいましょうか」

「いいとも？たつぷりお食べ？」

服をすべて脱ぎ終わり、ソファーの方へと移動する。そしてそのまま、先輩のいやらしいおまんこに顔を近づけた。

鼻先が触れるほど近づいて、思いつきり息を吸う。濃密なメス臭で肺が満たされ、チンポが更に勃起する。エロ過ぎるだろ、このぷに口りオナホールが。

「すうー……はあー……めちゃくちゃメスくさいですね、先輩」

「そ、そんな真剣に嗅がれると、いくらわたしでも恥ずかしいぞ」

「恥じらいなんて感情があったんですか」

「そりゃあ……腐っても女なわけだし……」

おまんこを開いていた両手を外し、ほっぺたに当てる先輩。どうやら柄にもなく照れているらしい。珍しいな、明日はヒョウでも降るんじゃないのか。

「恥ずかしがることないですよ。僕は先輩のおまんこ、大好きなので」

「い、いくら後輩くんでも面と向かってそういうこと——っおとおおっ!?!?!」







めでも感じるとか、筋金入りのドマゾだな、この先輩は。

「さてと。いい加減こつちも限界なんで、挿れますよ」

「まつ?まつてえ?ちよつと休ませてえ?」

ぶにロリまんこの入り口に、ピツタリとチンポの先端をくつつける。奥から溢れ出る本気汁によって、既に先端はヌルヌルだ。

ドクドクと激しく脈打つチンポが、早くこのおまんこ味わいたいと急かしてくる。分かるぞ、その気持ち。絶対気持ちいいだろ、こんな汁だくぶにロリまんこ。

「イキすぎておまんこヤバいの?入れないで?本当に入れなくてえっ?」

「先輩、知ってますか?人間って——」

先輩の言葉を遮るように、腰を思いつき突き出す。

「やつちやダメって言われると、余計にやりたくなる生き物なんですよっ!」

「あっ——んぎやひいいい!?!?!」

チンポはあつさりとおまんこの奥まで入り込み、内部を蹂躪しながら先輩の子宮口を叩き潰した。

それと同時に、密着したチンポの先端から勢いよく精液が飛び出して子宮に注ぎ込まれる。

初撃ピストンと同時に注がれた精液の熱さに、先輩の子宮は即座に屈服したようだった。

「あ、へええ?しえいえき?しえいえきあちゅいよお?」

「ふんっ!」

「おぎよおおおっ?」

そんな屈服した子宮を、更に追い詰めてやる。

おまんこに腰を打ちつけて、どちゅどちゅと執拗なまでに奥を攻撃する。

「しゃ、しゃせいしながらっ?うごぐにやあ、あ、あ、あああっ?!?!」

まだまだ、こんなの序の口だ。先輩のためなら、僕はなんだつて出来るのだから。

目にハートマークを浮かべて叫ぶ先輩。そのかわいすぎるアへ顔



を見下ろしながら、僕は再び先輩の子宮をチンポで叩き潰した。

お風呂に入ってもまた汚れるオナホール先輩

「ふうー……」

「あつ？あつ……？」

先輩のぷにロリ爆乳ボディを貪り尽くし、覆いかぶさっていた身体を上げる。それだけで、下敷きにしていた先輩からムワツと濃いメスの匂いが立ち上った。

精液でお腹をぽっこりさせて、アへ顔を晒しながら気絶している先輩の姿は実にエロい。10発以上中出した後だというのに、チンポが少し反応してしまった。

「……流石にやめとこう」

あの後セックスしまくって、今の時間は朝の6時。結局夜通しやりまくってしまった事になる。

これ以上はオーバーワークならぬ、オーバーセックスだ。何事も節度が大事なのである、うむ。

「それじゃお風呂入りましょうか、先輩」

「あへへえ？ちんぽお？ちんぽお？」

「おーい。戻ってきてください、先輩」

未だに快樂でトリップしたままの先輩。そのほつぺたをぺちぺちと叩いて、正気に戻す。

おれは正気に戻った！というやつだな。あれ実は戻ってないらしい。よく知らないけど。

「はっ……」

「おはようございます」

「あ、うん。おはよう後輩くん」

だらしなく緩んでいた顔が、段々と元の自信満々な表情に戻っている。切り替えが早いのも先輩の長所だ。

全身いろんな液体でベトベトだけど、特に気にした様子もない。相変わらず先輩は変なところで男らしいというか、なんとというか。

「お風呂入って、さっさと着替えて、研究室に行きますよ。流石に二日以上空けるのはダメでしょ」

「そうだねえ。そろそろアレの蒸留も終わっただろうし、見に行かないきゃだね」

アレってなんだ。またさっきのフェロモン50倍の薬みたいに変なやつ作ってんのか、この先輩は。

「僕も後輩の論文見てやるって約束しちゃいましたし」

「おや、優しいじゃないか」

「出来上がった後に読んで品評するだけですよ。サボってないかぐらいいは見ますけど」

「本当かー？ 凜花ちゃんには甘いからなー、後輩くんは」

そんなことはない。

むしろ先輩にこそ甘いのだが、気づいてないのだろうか。エッチする時はだいぶ雑な扱いをしまつていいるから、そのせいかもしれない。

でもわかって欲しい。僕が先輩をエログッズみたいに扱うのは、先輩を愛しているからだ。先輩の身体を余すことなく味わいたいからこそ、あんな風にいじわるしてしまつていいるに過ぎないのだ。

「……まあ、日頃の鬱憤を晴らす意味合いも無くはないけど」

「おん？ 何か言つたかい後輩くん」

「いえ別に」

とにかく、今日は研究室に顔を出す日である。

さっさと支度を済ませて、早めに出発するとしよう。

「おああ……脚のガクガクが止まらん……」

「先輩、体力無さすぎでは」

「後輩くんが体力オバケ過ぎるんだよ……」

そうだろうか。僕はそこらの一般人と変わらない身体能力してると思うが。

あ、もしかしてアレかな。一つだけ心当たりがある。

「事あるごとに、先輩の変な薬の実験台になつてるからでしょうかね。そのうち生物兵器とかにされそうで怖いんですけど」

「失礼な。わたしの薬は安心安全をモットーに作つていいるんだ。間違つても危険は無いさ」

本当かなあ。

「な、なんだい！ その疑いの眼差しは！」

「いえ別に」

でもまあ、安心かはともかく、安全っていうのは本当だろう。じやなきや、僕はとつくの昔に死んでるだろう。だから安全管理に関しては特に心配はしていない。

それに、先輩は薬学に関してはガチの天才だからな。それ以外はポソコツ以下だけど。主に生活能力。

「歩けますか？」

「なんとかね……うわ、お腹おつも。出し過ぎだよ後輩くん」

「すみません。先輩が可愛すぎたもので」

「また調子のいいことを……」

産まれたての子鹿のようにプルプルと脚を震わせる先輩を連れて、無事にお風呂場へ辿り着く。

精液でお腹をぽっこりと膨らませ、時折おまんこから精液をこぼす先輩は実に愛らしい。

ちよつとエロ過ぎるので、写真を撮っておいた。後でオカズにしよう。

「んっ……いっぱい出てくるな」

「——」  
ぽっこり膨らんだお腹がギュツと押されると、おまんこからゴボゴボと下品な音を立てて精液が噴き出してくる。

ちよつとエロ過ぎるので、動画を撮っておいた。後でオカズにしよう。

「ふうー……はい、シャワーかけますよ」

「おー」

湯船にお湯が溜まるまでの間に、全身についた粘液を落としていく。汗と精液と愛液とその他諸々が混ざって、えげつない匂いを放っていた。

いや、でもこの匂い、ぶつちやけ興奮するな。

「おいおい、元氣すぎだろ後輩くん。わたしの身体を洗ってるだけな

のに、なんでそんなにギンギンにしてるんだい」

「気にしないでください。生理現象です」

柔らかめのスポンジにボディソープをつけ、先輩の身体をゴシゴシと擦っていく。

小さな背中、大きなお尻、短い手足、柔らかいお腹。そして本命のバカでかすぎるおっぱい——その先端にある乳首に、軽くスポンジを当てる。

「ひゃあうっ?お、おい後輩くん!今わざとやっただろう!」

「何のことでしょうか」

柔らかいスポンジなので、乳首に多少当たっても問題はない。むしろ、マゾである先輩には刺激が足りなくらいだろう。

「んひゃあっ?い、いい加減にしないか!」

「そんなこと言いながら、ちよつと濡れてきてますよ。相変わらず先輩は汗が多いですね」

既におまんこからは、お湯とは違うヌルヌルとした液体が溢れている。

まったく、先輩はしようがないなあ。

「おまんこの中もキレイにしましょうね」

「ちよつ?まつ?それ、手マンしてるだけだろう?」

指で先輩のおまんこをほじくって洗うたび、奥から新しくヌルヌルが溢れ出してくる。これは専用のチンポで、中まで根こそぎ洗うしかないな。

「やつ?めえ?ろおっほおおおおっ?!?」

「うわ、引くほどザコまんこですね、先輩」

この先輩、快樂に弱すぎる。

常日頃から快樂に浸かって生きてるから、快樂に耐えるという発想自体が無くなっているのだ。

なんて都合のいいぷにロリ爆乳メスオナホなのだろうか。もう徹底的にいじめるしかないな、これは。

「挿入れますよ、先輩」

「ちよつ?まつ?」

待たない。待つわけない。

壁に手を当てさせ、腰を突き上げる体勢を取らせる。泡まみれでテクテカ光るでかいケツが、言葉では形容できないくらいにエッチだ。腰を落とし、チンポの先端をおまんこに当て、そのまま一気に腰を突き出す。

「ほおおおおおっ?!?!」

すると、チンポは驚くほどあっさり先輩のおまんこに沈み込んだ。流石は先輩だ。奥まで天然ローションたっぷりだな。

「こ、こによっ?さつきまであれだけしてたのに、まだやる気なのかい?底なしの性欲だなっ?」

「先輩がエロすぎるのが悪いんです」

「責任転嫁するんじゃない?このド変態めっ?」

先輩にだけは言われたくない。

「へえー……自分はド変態じゃないとでも?」

「あ、当たり前だろう?わたしは清楚で可憐な白百合のような女で――ひゅっ?!」

ちよつと聴くに耐えなかったので、思いつきりピストンして子宮を押しつぶしてやった。

この先輩、いじめられるためにわざと生意気な口きいてんじゃないのか。ドマゾかよ。

「ああおおおーっ?!?!」

「犬の鳴き真似ですか?!」

ヘツタクソだなおい。犬に謝れ、このマゾ豚がよ。

「あー気持ちいいですよ、先輩のおまんこ。あつたかくて、まるでお風呂入ってるみたいです」

「んっ?ぐっ?おっ?おっ?」

あつ、みてみて。なけなしの理性で、快楽に耐えようと必死に頑張ってるよ。かわいいね、死ねよ。

「イキ死ねっ!このぶに口マゾ爆乳オナホールが!!」

「ほぎよおおおおーっ?!?!」

突いて突いて突いて突いて突いて。先輩のおまんこを突き

まくって、最後に子宮口へ注射でフィニッシュ。

これにてザコまんこ退治完了だ。あースッキリした。

「ふう……気持ちよかったですね、先輩」

「お、お、へ……??」

おまんこからチンポを抜くと、奥から濃い精液が大量に溢れ出してくる。既に10発以上出しているはずなのだが、まだまだイケそう  
だ。

これも全部、先輩がエロ過ぎるのが悪い。そんな泡まみれの小さい  
ぷにロリボディで誘惑してきやがって。

「先輩、まだいけますよね？」

「ま、まつひえ……！ さすがにつ、もうむりっ……！」

「大丈夫ですつて。先輩ならきつとイけますよ」

「あ、ー！？」

興奮も冷めやらぬまま、再び先輩のおまんこにチンポを突っ込む。

延長戦スタートだ。

キスだけで発情しちゃうチヨロマゾ先輩

「……やりすぎたね」

「……やりすぎましたね」

あの後抜かずに5発くらい出してようやく治まった僕と先輩は、結局湯船に浸ることなくお風呂場を出た。

時間がヤバくなってきたので、シャワーだけで済ませたのだ。しようがない犠牲だった。

「まったく、後輩くんは本当にドスケベだな」

「先輩こそ、無理とか言つてたくせに最後の方はノリノリでしたよね」  
脱衣所で体を拭いて、あらかじめ備え付けておいた服を着る。お風呂呂に入る頻度が多いので、こういう着替え類は常に多数準備してある。

先輩のバカでかいブラジャーがカゴの中にいくつも並んでる光景は、いつ見ても壮観だ。

「後輩くんの方がノリノリだった気がするが？」

「先輩の方がノリノリでしたよ」

「いや、後輩くんだね」

「いいえ、先輩です」

服を着させてあげる最中、先輩と子供じみた口論を開始してしまう。いやまあ、その実態は口論なんて呼べない責任のなすりつけ合いなんだけど。

というか、体を動かさなideくれますかね。ブラジャーに包まれたKカップ爆乳が柔らかかそうにプルプル揺れて、また襲いたくなってくるでしょうが。

「もー！ 後輩くんの発情サル！ ドスケベ！ くそでかおちんぽ様！！」

「それ悪口なんですか？」

最後のは、なんか褒め言葉に聞こえたけどな。様って付いてたし。

しかし、それにしたって語彙力無さすぎる先輩だな。悪口を言い慣れてないのが丸わかりだ。



「えつとえつと、それから……んっむ!!」

だから、そんな口は塞いでしまおう。

先輩のぷにロリボディを抱き寄せて、そのまま唇を奪う。

「んーっ? むーっ? ぷあっ? い、いきなり何するんだい後輩くん!!」

「ぷはっ……いえ。仲直りの印に、と思って」

欧米では、仲直りのキスとか普通にやってるらしいからな。日本ではやっちゃいけない、なんて決まりは無いだろう。むしろ積極的にやっっていくべきだ。

「そ、そんなキス一つで機嫌良くなったりするものか! そんな安い女じゃないのだよ、わたしは!」

「それじゃあもう一回しましようか」

「んあむぶっ!?!」

一回で足りないというのなら、二回キスするだけだ。それでも足りないのなら三回、四回、五回——何回でも。

先輩が満足するまでしてあげよう。何度でも、何度でも。ああ、先輩——好きだ。大好きだ。

「ちゅぶっ? ずろろっ? んちゅっ? んあー? はぶっ? ちゅぼぼっ? べろおっ? んぷはあっ?」

「ぷはっ……これで機嫌良くなりましたか、先輩」

なんて、聞くまでもなさそうだが。

「えへ? えへへえ?」

長く濃厚なキスの後、お互いの唾液でベトベトになった唇を離す。

目の前にある先輩の顔は快楽に染まり、だらしない笑顔を浮かべている。とても幸せそうだ。目の奥にハートマークまで浮かべている。

「セックスしますか?」

「うん? せつくしゅするー?」

ああもう、先輩マジでかわいいな。

キス一つで即落ちする所とか、全身性器な所とか、セックス大好きすぎる所とか。もうかわいくない部分が無いレベルでかわいい。

「えへ……はっ!」

「ん」

あ、正気に戻った。

「あつ……いい、いやいや今のは無し！ やっぱり無しだ！ さつさと着替えて研究室に行こう！」

「今さら真面目ぶっても遅いですよ」

「う、うるさいな！ いいから行くよ、後輩くん！」

淫らな空気を振り払い、先輩は下着姿のまま脱衣所から出ていってしまった。

まあ、元々時間もなかったしな。しようがないか。

「先輩、そのまま大学行くつもりですか」

「……ん」

着替えを持って追いかけると、先輩は廊下でピタリと立ち止まって両手を広げ、そのままこちらを向いた。着替えさせろというサインである。

まったく。着替えすら一人でできないのに、どうしていきなり飛び出したりしたのか。これがわからない。

「シヨーツも変えましょうね。びつちやびちやですし」  
「む」

股間部分がぐっしよりと濡れたシヨーツも脱がせ、新しいものを穿かせてあげる。おまんことクロツチの間に糸を引く愛液が、これまたエッチだ。

「はい、ばんざーい」

「んー」

今日のコーデイナーは、カーキ色の縦セタに黒のスカート。その上に白衣を着せて完成だ。

うん、縦セタ白衣はやっぱり破壊力が凄いな。特に、おっぱいが強調されてヤバイ。毎日でもこれを拝みたくなくなる。

「ん……胸がキツイぞ、後輩くん」

「今度、一回り大きいの買ってきてきましょうか」

やっぱり大きくなってたみたいだ。この分だと、ブラジャーもワンサイズ大きいやつを買う必要があるかもしれない。

っていうか、まだ成長していることにビックリする。背の方はまっ

たく成長してないのに。

「今なんか失礼なこと考えなかったかい？」

「いえ別に」

顔に出てたか。反省反省。

「そんなことより、本格的に時間ヤバイですよ。早く準備して行きましょう」

「後輩くんが襲ってこなければ、もっと余裕があっただがね……」

それは仕方ない。あんなドスケベぶにエロボディが目の前にあって襲わないなど、男の名折れだ。

だからあれは仕方ないことだったのだ。据え膳食わぬは男の恥とも言うしな。うん。

「準備できましたか？」

「ああ。バッチリさ」

お互いに必要な書類やノートパソコン、タブレット類を持って準備は万端。これでやっと出発できる。長かった。

「久しぶりのシャバの空気だ……」

「刑務所から出た囚人のセリフですよね、それ」

玄関のドアを開けて、外に出る。たったそれだけのことなのだが、先輩にとっては感動モノの大事業らしい。

この人、丸三日くらい引きこもって生活してたからな。講義がりモートで受けられるようになったのが、全ての元凶ではないかと、僕は睨んでいる。

「さて、じゃあ行こうか後輩くん。エスコートは頼んだよ」

少しだけ口角を上げ、いたずらっ子みたいに微笑んで、先輩は左手を差し出してくる。

「もちろんですよ、先輩」

その左手を掴み、半歩だけ前を歩く。先輩を守るのは僕の役目だ。それは昔から——幼い頃から——ずっと変わることのない、たったひとつの事実なのだから。



「ん……ふあ」

とある大学の研究室。その片隅に設置されている、一つのソファア。

そこに横たわっていた一人の少女が、ゆつくりと気だるげそうに起き上がる。

「んー……あ、もう朝かー……」

眠気を払うように頭を振れば、黒くウェーブのかかった髪が艶やかに揺れた。

凹凸のない体、子供と見間違う身長、幼く見える顔。少女の外見的特徴およそ全てが、この場に不釣り合いな要素ばかりを持っていた。

「うわー、通知多すぎー……なにになに？」

手元に落ちていたスマホを拾って画面を見れば、そこには通知を知らせるログがこれでもかと連なっていた。軽く二十個くらいはありそうだ。

「おー、今日ミント先輩来るんだー」

その通知のほとんどが、自身が敬愛する先輩からのものだと知り、少女は一気に表情を明るくした。

そのままご機嫌な顔でソファアから降りて、モーニングコーヒーでも淹れようと給湯室の方へ歩みを進める。

「ふぎゃっ」

移動している最中、着ていたぶかぶかの白衣の裾を踏んづけ、思いつきり床に顔面を強打していた。

気の毒だとは思いますが、いい眠気覚ましになったんじゃないかなろうか。

「いってー……んおっ？」

拾い上げたスマホに、見慣れた写真が映っていた。どうやら拾い上げた時に変な場所を弄って、画面が変わってしまったらしい。

「……あはー？」

その写真を見て、少女は——いちのせひまり一之瀬陽毬という少女は、淫らに口角を吊り上げた。

「おはようございまーすっ。せーんぱい？」

そこに映っていたのは、手脚を拘束され、目隠しとギャグボールをされ、その淫らなKカップ爆乳おっぱいと無毛のツルツルおまんこをさらけ出しながら、快樂によがる金髪の少女——三峰ミントのあられもない姿だった。

「んふふー？今日は生の先輩に会えるー？楽しみだなあー？」

床に座り込んだまま、穿いているショーツの中に手を突っ込んで、中身をぐちゅぐちゅとほじくり始める。

何を隠そう、一之瀬陽毬は三峰ミントのことが大好きだ。写真を加工して、こんないやらしい画像を作ってしまうくらいには大好きなのだ。

「ああん？せんぱあーい？」

もつとはつきり、オブラートに包まず表現するのなら——一之瀬陽毬は、レズでありド変態であった。

くとある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねるく

1：無貌の神

さて、経過報告でもしようかな。気が向いたゴミクス暇ヤロウがいたならば是非見てつてくれ。

2：名無しの邪神

殺すぞ

3：名無しの邪神

テメエ、人間の恋人ができたからって調子に乗ってんな？燃やすぞ、お？

4：無貌の神

あはは、負け犬がなにか言ってるね。

5：名無しの邪神

やめなさい、不毛ですよ。

6：名無しの邪神

黙れ年増。

7：名無しの邪神

創世神に向かって不敬すぎて草。

8：名無しの邪神

何にでも噛みつきたい年頃なんだよな？

9：名無しの邪神

黙れ。俺はもう大人だ。

10：名無しの邪神

乙、自分で大人つて言う大人はいねーんだわ。生まれて五千年のひよっこがよ。

11 無貌の神

はいはい、喧嘩しないの。とりあえず経過報告していいかな？

12：名無しの邪神

オケ

13：名無しの邪神

ついに妊娠したのか？

14：無貌の神

それはまだだね。やっぱり神と人じゃあ、妊娠確率は限りなく低いみたいだ。

15：名無しの邪神

だろうな

16：名無しの邪神

人間のオスなんて年中発情してる猿だろ？妊娠なんて簡単だと思うが。

17：無貌の神

キミと一緒にしないでくれ。母とか子沢山とか、そういう概念が無いわたしは非常に孕みづらいんだから。

18：名無しの邪神

あー、概念ブースト無いとキツイよな。

19：名無しの邪神

そもそも神と人の子だと、人が孕むのが通例だろ？なんで神のほう  
が孕もうとしてんのよ。

20：無貌の神

そのほうが面白いだろう？

21：名無しの邪神

あー、うん。

22：名無しの邪神

お前はそういう奴だったよ。

23：名無しの邪神

面白ければ何でもするからな、コイツ。

24：無貌の神

今のマイブームはケダモノセックスだよ。

25：名無しの邪神

草。

26：名無しの邪神

w w w。

27：名無しの邪神

神なのに獣とか、これもうわかんねえな？

28：名無しの邪神

神になった獣とかザラでしょ。例えばアイツとか、アイツとか。



29：名無しの邪神

で、どんなセックスしてんの？k w s k。

30：名無しの邪神

私は相手の精神を溶かすようなイチャラブセックスのほうが好きです。

30：無貌の神

そうだねえ……わたしもイチャラブは好きだよ。今でもたまにやってるし。

でも、今はケダモノセックスについて話そうかな。後輩さんの絶倫さを皆にも知ってもらおう。

31：名無しの邪神

w k w k。

32：名無しの邪神

はよはよ。

33：無貌の神

はいはい。

じゃあまずは、この前ヤツた媚薬セックスについて話そうかな。

成り行きでフェロモンが50倍になる薬を飲んだんだけど、その時の後輩さんの興奮っぷりはもの凄かったね。チンポに殺されるかと思っただよ。

34：名無しの邪神

フェロモン50倍は草。

35：名無しの邪神

邪神をチンポ堕ちさせるとか、その後輩くん凄すぎない？普通の人

間なんだよね？

36：無貌の神

ああ。後輩くんは正真正銘、普通の人間だとも。

ただ、幼い頃からわたし特製の薬物（魔術）でいろいろブーストしてるけどね。

37：名無しの邪神

ヤク漬けしとるやん。

38：無貌の神

でも、マジカルチンポなのは本当だよ。わたしの薬（魔術）で強化されるのは、スタミナとか精液量とかだからね。

チンポの大きさとか、硬さとか、長さなんかは後輩くんの自前さ。

39：名無しの邪神

ほー。

40：名無しの邪神

お前にそこまで言わせる人間がいるってだけでも凄いわ。相当お気に入りなんだな、その後輩とやら。

41：名無しの邪神

もう結婚しろと。

42：無貌の神

神が人間の儀式ごときに拘ってどうするんだい。まあ、子供ができればら考えてもいいかな。

43：名無しの邪神

後輩くんに堕ちてて草。

44：名無しの邪神  
ズブズブじゃねーか。

45：名無しの邪神  
後輩くんがんばえー。このクソナマ神さまを孕ませて、思いっきり  
ボテ腹にしてやれー。

46：名無しの邪神  
将来的には何人ぐらい欲しいんだ？

47：無貌の神  
んー、そうだねえ。少なくとも1000人は欲しいかな。

48：名無しの邪神  
え、たったそれだけでいいの？

49：名無しの邪神  
謙虚だなあ。

50：名無しの邪神  
おい、神のスケールでものを考えるなお前ら。普通の人間は1000  
人も子供作る前に死ぬんだわ。

51：無貌の神  
あ、その点は大丈夫だよ。

今まで無駄撃ちした後輩くんの精液は、すべて新鮮な状態で保存し  
てあるからね。一度孕んでコツさえ掴めば、1000人産むのも不可能  
じゃないさ。

52：名無しの邪神

草。

53：名無しの邪神

マジで100人産む気じゃん。

54：名無しの邪神

父親似の優しい子に育ちますよーに。

55：名無しの邪神

間違っても母親には似ないでくれ、頼む。

56：無貌の神

失礼だな君たち。わたし似でも、きつと珠のように可愛い赤ん坊に間違いないさ。

57：名無しの邪神

嘘をつくなああああ!!!

58：名無しの邪神

こないだオレの貢物（プリン）横取りしたの忘れてねえからな。

59：名無しの邪神

性悪く。

60：名無しの邪神

害悪く。

61：名無しの邪神

存在そのものが混沌く。

62：無貌の神

ものすごい好き勝手言うじゃないか、君たち。まあ否定しないけども。

63：名無しの邪神

つか暇人多すぎな件について。お前らもこのクソ混沌を見習って恋人でも作れよ。

64：名無しの邪神

泥でいいなら。

65：名無しの邪神

テケリ・リ。

66：名無しの邪神

自分の一部を擬態させて恋人にするのはアリか、と訊いています  
が。

67：名無しの邪神

ちゃんと人間の恋人を作ろうな。

で、話は戻るが、他にはどんなシチュでセックスしてんだよ。

68：無貌の神

そうだねえ。スタンダードに正常位でセックスしたり、バックから  
思いつきり突かれたり、お風呂であわあわセックスしたりかな。

69：名無しの邪神

楽しそうで草。

70：名無しの邪神

エンジョイしてんなー。

71：無貌の神

セックス以外だどご飯作ってくれたり、外行きの服をコーディネートしてくれたりするよ。

ご飯は美味しいし、服のセンスも最高だし、後輩くんったらもう完璧で究極の後輩って感じなんだよね。

72：名無しの邪神

もう結婚しろお前ら。

73：名無しの邪神

うーん、この熟年夫婦感。

74：名無しの邪神

なんでこれで結婚してないんだ……？

75：名無しの邪神

まあ幸せそうなのは伝わってきた。

76：無貌の神

つと、そろそろ後輩くんとセックスの時間か。それじゃあまたね、クソ暇人ども。

77：名無しの邪神

燃やすぞ。

78：名無しの邪神

バイバイ、二度と顔みせんじゃねーよ。

79：名無しの邪神

またな、クソ野郎。

『無貌の神』さんが退出しました。

## 先輩が大好きなクレイジーサイコレズ同期

マンションから徒歩5分。

僕と先輩が通っている大学の門を潜り、校内へ。落ち着いた雰囲気  
の学内は、いつも通り程々の学生たちで賑わっている。

今日の講義は午後からだし、先輩は予定無いらしいし。午前中は研  
究室でゆっくりできそうだ。

「なんだか久しぶりな感じがするねえ」

「そりやそうでしょう」

三日も来てなければ、そんな感覚にもなるだろう。この先輩は、  
もつとアウトドアな趣味を持ったほうがいいと思う。

いや、でもそれで怪我とかしたら余計にお世話する手間が増えるだ  
けか。やっぱり却下で。

「そもそも、激しい運動はいつもしてるか……」

「ん？　なんか言ったかい、後輩くん」

「いえ別に」

先輩と一緒に住むようになってから、セックスしてばっかりだった  
しな。一日の運動量自体は、割と足りてるんじゃないだろうか。

と、そんな益体もないことを考えていたら、いつの間にか研究室は  
目の前だった。どうやら、思った以上に移動経路が体に染み付いてい  
るらしかった。

「さーて、今回の実験は成功するかなー？」

「成功する前提で実験してくださいよ、先輩」

「いやいや、そんな分かりきった実験をしてもつまらないだろう？」

分からないからこそ実験するのだよ、後輩くん」

なんか唐突に正論ぶつけられたんだが。

「……急に先輩は物事の核心を突いてきますよね」

「ふふん。なんとたってわたしは天才だからね」

そうだったな。先輩は天才だった。

「天才なら、自分の身の回りのことにもその才能を發揮してほしいん  
ですけどね」



「お邪魔しまーす！」

僕のお小言を右から左へ受け流して、先輩は研究室の扉を勢いよく開けた。

いや聞けよ。せめて聞いてるぶりぐらいしろ、このぶにロリオナホールが。

「いらつしやーいですー、せーんぱーい」

中に入った先輩を出迎えたのは、僕の同期である一之瀬陽毬だった。

子供みtainな体型と、妙に間延びした話し方をする、この研究室のマスコツト的存在だ。

そして、先輩と対を成す存在でもある。主にその胸部装甲——おっぱいにおいて。

「陽毬ちゃん、頼んでいたものは出来てるかい？」

「もちろんですよー。先輩のためならー、あたしはなんだって出来ちゃうんですからー」

ニコニコと笑いながら、一之瀬は机の上に置いてあった試験管を先輩に手渡す。

出かける前に言ってた、蒸留がなんとかってやつか。また変な効能の薬じゃなきゃいいけど。

「相変わらずの手際だな、一之瀬」

「あ、北条ちーつす。ぶぶ漬けでも食うか？」

「お前さあ……」

なんかこいつ、僕にだけは異様に当たりが強いなあ……なんか嫌われるような事したっけ。心当たりが無いんだが。

というかお前、僕に対してだけキャラが違い過ぎなんだよ。なんだそのチャラ男みたいな喋り方は。

「こらこら陽毬ちゃん。女の子がそんな言葉遣いしちゃいけないぞ」

「きゃー、先輩におこられちゃったー？すみませーん、はんせいしてまーす？」

「この腹黒ロリめ……」

メスの顔しよってからに。

「ところでせんぱーい、今回はどんな薬を作るつもりなんですかー?」「ふっふっふ……今回作る薬はね、ズバリ『感度3000倍になる薬』だよー!」

「うわぁ」

想像以上に頭悪い薬だった。

っていうか、そんな薬作って何するつもりだ? 対魔忍ごっこでもするつもりなのか?

「いいですねー。あたしにもお手伝いさせてくださいー!」

「勿論だとも! さあ、さっそく実験開始だ!」

がんばれー。草葉の陰から応援してるー。

「どこ行くつもりだい、後輩くん」

「ちよつと隅っこで暮らしてみようかなと」

研究室のすみっこで論文でも書こうとしたら、先輩に服の裾を掴まれて引き止められた。

なんですかその目は。僕にも手伝えて言いたいんですか。普通に嫌なんですけど。

「人手はいくらあっても困らないからね。さあ、こっちへ来てもらおうか」

「えー」

「先輩からのお誘いを断るのか……? 北条……?」

なんか背後からドスの効いた声が聞こえるんですけど。しかもなんか、視界の端に謎の液体が入った注射器が見えるんだけど。

あれ、もしかしてこれ詰んでる? 分かりやすく詰んでないか、この状況?

「覚えておけ、先輩のお言葉は神の言葉。先輩のお誘いは天国への道しるべ。それを断るといふことは、地獄に落とされても文句は言えないということだ。この背信者め」

「怖い怖い怖い。耳元で囁くな」

いつの間にか背中に張り付いていた一之瀬が、小声でめちやくちや濃密な呪詛を放ってくる。

先輩には見えない位置に音もなく移動してくるあたり、こいつ実は

忍者なのかもしれない。

しかもコイツ、目がやばい。ガチだ。これはガチで異教徒を狩る信徒の目だ。

「……その注射器の中身は何だよ。何が入ってるんだよ」

「大したものじゃない。ごく普通の塩酸だ」

バカかよ。

何考えてんだこいつ。全然大したものじゃねえか。なんだごく普通の塩酸って。それはもうただの塩酸だろうが(?)。

「それより、早く返答しろ。先輩のお誘いを受けるのか、快諾するか」

「……………」

実質一択なんですそれがそれは。

「えっと、あの……」

視線を落として、先輩の顔を見下ろす。期待に満ちた目で僕を見上げてくるその姿は、とてつもなく可愛らしく、それでいて庇護欲をそそるものであった。

ああもう分かったよ。手伝えばいいんだろ、手伝えば。

「……二宮が来るまでなら、手伝っても良いですよ」

「本当かい!? よし、じゃあさっそく実験を始めよう!!」

顔をぱあつと明るく輝かせ、先輩は一目散に部屋の奥にある研究台へと走って行ってしまった。そんなに急いだら転んじやうだろうが。

まったく、しょうがない先輩だな——なんて思っていたら、背後からものすごい怨嗟の籠った呼吸音が聞こえてきた。怖い。

「命拾いしたな、北条。先輩のあの笑顔に免じて、命だけは助けてやる」

「お前はどこから目線なわけ?」

背中から手を離し、僕の隣にストツと着地する一之瀬。なんか妙に身のこなしが軽いんだよな、こいつ。

しかもなんか今、すっげえ物騒なこと言ってなかったか、この腹黒ロリ。こいつ実は暗殺者か何かじゃないのか。

「だったらその物騒なもの早く仕舞えよ」

「ああ、これはただのビタミン剤だ」

「おい」

「打ってみるか？ 疲れが取れるぞ」

「お前ほんとさあ……」

呆れて言葉が出てこない。

なんだってコイツは、僕にばかりこういう態度なのだろうか。他の人に見せてる可愛らしさはどこへ行ったんだ。

「ほれ、さっさと行け。先輩を待たせるんじゃない」

「わかった。わかったからケツを蹴るな」

ゲシゲシと乱暴にケツを蹴ってくる一之瀬から逃げるように、僕は先輩の元へと向かう。

その瞬間。

「……まったく、北条くんは果報者ですね……」

そんな声が、背後から聞こえた気がした。

???

「よし。ではまずコレとコレを混ぜ合わせて、と」

「先輩、こっちの薬品はどうしますか？」

「ああ、それはこっちのコレと纏めて——」

「あのー……なんか試験管が光ってるように見えるんですがー」  
「んっ!？」

「あ、マズいね。分量ミスったみたいだ」

???

「ふうー……よしっ」

二宮凜花は、研究室の扉の前で息を整え、気合を入れた。

ノートパソコンも、研究資料も準備オーケー。これで完璧に先輩との時間を謳歌できる。

「ふ、ふふ……んっ」

ニヤけそうになる頬を無理やり引き締め、頭を振る。いつも通り演じなければいけない。ウザ可愛くて手の掛かる後輩の姿を、完璧に。それが先輩との繋がりを、より強固にしてくれているから。

「お、お邪魔しまーッスー!」

意を決して、扉を開けた——その瞬間。

「……やあ」

「……けほっ」

「……ああ、来たのか二宮」

二宮の目に飛び込んだできたのは、まっくら焦げになった三峰、一之瀬、北条の姿であった。

「な、何があつたんスカ!?!」

「ああ、ちよつと実験に失敗してね」

「それでこの有様というわけだ」

「けほっ、けほけほっ……けむいですー」

どうやら、実験に失敗して思いつきり爆発したらしかつた。まあこの三人にとつては、こんなものいつもの事である。

しかし、今年入学してきたばかりの二宮にとつては、初めて見る光景であるわけで。

「ええ……」

まっくら焦げになつても平気そうな顔をしている先輩たちの姿を見て、二宮凜花はその場で少し後ずさるのだった。

おっぱい丸出しでもクールなオナホ先輩

「まあ、全員怪我がなくて良かったよ！」

「ホントですよ……」

「けほっ、まだ喉がけむいですー」

「換気しような、換気」

あれから汚れた部屋の掃除をして、なんとか一息ついていたところ。

部屋の隅で二宮の論文を読みつつ、未だに実験を続けようとしている先輩と同期に苦言を呈す。

「よーし、実験再開だー！」

「おー」

「いや少しは懲りてください」

さっき爆発したのに、即座に同じ実験を始めるな。せめて別の実験をしてくれ。

「まったく……」

まあご存知の通り、僕の苦言は一ミリも聞き入れられることはなく、二人は意気揚々と奥の実験台の方へ走って行ってしまった。

あの様子だと、感度3000倍薬を完成させるまで終わらなさそうだな。講義終わったら夜食でも作って差し入れるとしよう。

「元氣ツスねー」

「二宮も混ざるか？」

「いやいや、遠慮しとくツスよー」

賢明な判断だ。今のレベルで実験に加わったら、間違いなく怪我するだろうからな。今は下積みとして、地道に論文を作成する時期だ。僕も一年前はそうだった。

先輩はこの研究室に来た翌日からもう実験してたらしいけど。やっぱ天才だよな、あの人。

「それでそれで、論文どうツスカ!?」

「あー……テーマは悪くない」

「そうツスよね、そうツスよね！」

論文を作成する際には、そのテーマがどう社会に役立つか考えて作成しろと言っている。

研究者といっても、結局は人間である。人間である以上、人間社会に多少なりとも貢献して、対価を貰わなければならない。

故に、革新的とまでは行かずとも、少しぐらい人間社会の役に立てるようなテーマを設定すべきなのだ。

『経口する粉末型麻酔薬とその有効利用について』か……これ、睡眠薬とは違うんだよな？』

「もちろんツス！」

上体を反らし、そのデカイおっぱいを突き出しながら、二宮は得意げに鼻を鳴らした。

先輩よりは小さいが、男目線から見れば十分にデカイその爆乳が、だぶんだぶんと元気に跳ね回っている。

「従来の睡眠薬は、飲んでから効能が発揮されるのに時間がかかっていたツス！ ですがこの経口麻酔薬は、飲んだら即座に昏倒！ しかも針を使わないので、注射が嫌いな人にもオススメできる薬品ツスよ！」

それは安全な薬品なんだろうな？

絶対良くない副作用あるだろ、そんなの。

「……確かに、注射が嫌いな人間は一定数存在する。中には注射針を見ただけで泣き叫んだり、暴れ狂ったりするような人も居る……そういう人に時間と人員を掛けず、安全に麻酔を投与できるというのは……まあ役に立つか」

「そうツスよねー！」

とまあ、頭ごなしに否定するのも良くないので、とりあえずメリットだけは拾っておく。

さて、では核心に触れようか。

「それでこれ、人体に対する副作用とかは無いらっやうな？」

「……………」

おいおい、黙るな黙るな。そんなの、副作用ありますって認めちゃってるようなもんだぞ。

「い、一応……安全ツスよ?」

「一応ってなんだ、一応って」

へったくそな口笛を吹きながら、二宮は思いっきり明後日の方向へ目を逸らした。

はい、えげつない副作用があるの確定です。ありがとうございます。ありがとうございました。

「ボツ」

「ちよつ! ちよつと待ってくださいツス、先輩!!」

縫り付くどさくさに紛れて胸を押し付けるな。興奮するだろうが。こちらら出かける前のキスで、まだムラムラが残ってるんだぞコノヤロウ。

「ち、治験は済ませてあるツス! アタシで!」

「……誰に作ってもらったんだ」

「一之瀬先輩ツス!」

あのヤロウ……僕以外への対応が神すぎるだろ。流石はウチのマスコットキャラクターだな。滅びよ。

「その結果、えつと……」

「なんだ」

「服薬したら、次の日の同じ時間まで起きないことが判明したツス!」  
「……………」

なるほど。つまりこの経口麻酔薬を服薬したら、丸一日眠り続けるってことか。

「致命的じゃねえか……」

「そ、そこはこれから改良していく予定ツス!」

本当か? なんか改良しても、副作用が追加されるだけで終わりのような気がするんだが。改良って言わなくないか、それは。

「あのなあ——」

「後輩くーん! 助けてくれー!」

二宮に苦言を呈しようとしたところ、実験台の方から助けを求める声が聞こえてきた。今度はなにやらかしたんですかね、あの二人。

「……………どうしたんですか、せんぱ——い?」



実験台の方へ振り向いた瞬間、目に入ってきたのは見慣れたまんまの肌色。そして見慣れた桃色の突起が二つ。

端的に言うならば、先輩のKカップ爆乳が惜しげもなくドーンとさらけ出されていたのだ。もちろん、乳輪と乳首までバッチリと。

「な、なななな——！」

「服が溶けたんだ！ 胸のとこだけ！」

おそらく薬品が掛かったのであろう胸元の布地だけが、綺麗サツパリ無くなっていた。そのせいで開放されたKカップ爆乳が、たぶんたぷんと柔らかそうに揺れている。

ああもう、なんだつてもう。なぜこの先輩はこういういやらしいハプニングを起こすのか。興奮してしまっただろうが。

「あ、あわわわわわあ!!」

「お、落ち着け二宮！ とりあえず目を塞げ！」

「は、はいッス!!」

赤面しながら震える二宮に指示を出して目を塞がせたのだが……こいつ、指の隙間からガッツリ見てやがるな。このムツツリめ。

「一之瀬、とりあえずタオルを——って、一之瀬?」

「我が生涯に……一片の悔い無し……!」

「一之瀬えええー!?!」

実験台の横で、一之瀬は血の海に沈んでいた。自分が出した鼻血の海に。

ああもうコイツ、肝心なところで役に立たねえ。

「普通にミスったなー、はっはっは！」

「はっはっは、じゃないんですよ！」

いつも見慣れた裸とはいえ、こんな公衆の面前で堂々とさらけ出されるのはマズすぎる。特に今は、二宮が見ている前だ。非常にマズい。

(襲うなよ……絶対に襲うなよ、僕)

極めて冷静に——僕が先輩を襲う前に——このハプニングを收拾させる必要がある。

それはつまり、先輩のおっぱいの誘惑に負けず、このピンチを乗り

切る必要があるという訳で。

(それなんて無理ゲーですか?)

今でさえ、もう襲いそうになってるのに。神様はちよつと鬼畜が過ぎるんじゃないかな。

「とつ、とりあえずタオル取ってきます!」

「頼んだよー」

応急処置として、給湯室に置いてあるタオルでおっぱいを隠してしまおう。僕の服を貸すというのも考えたが、それだと絶対に胸の部分が張り裂けるので却下だ。

爆速で研究室を出て、爆速でタオルを手に先輩の所まで戻る。過去最高のタイムが出た気がするな。

「はやっ。後輩くん、頑張り過ぎじゃないかい?」

「はあ、はあ……そ、そりゃあ頑張るでしょう……」

なんたつてここは大学だ。先輩のあられもない姿を、誰かに見られるわけにはいかない。先輩の裸は僕だけのものだ。

「と、とりあえず、タオルで前を隠してください……」

「ふむ。こうかい?」

先輩はタオルを胸の前に垂らし、おっぱいを隠す。しかし、明らかにサイズが足りていない。

乳首がまったく隠れていないし、なんなら谷間の一部しか隠せていない。もう全然ダメだ。一番大きいサイズのやつを持ってきたはずなんだがな。

「おやおやあー??これじゃあ余計エッチになってしまったねえー??」

「ぐっ……」

なんか先輩の顔がだんだん色っぽくなっていく。このままじゃマズい。先輩までスイッチが入ってしまったら、もう本格的に止められなくなる。

ああもう、体を左右に揺らすんじゃない。二つのおっぱいが柔らかそうにたぶんだぶん揺れて、思わず襲ってしまいそうになる。

「二宮、なにか上に羽織るもの——つて」

「きゅうううう……」

「あららう？凜花ちゃんには刺激が強すぎたみたいだねえ？」

ああもう、どいつもこいつも気絶しおつてからに！　そんだけ先輩のおっぱいは凶器ってことかよ！

「後輩くん？後輩くん？」

「なんですか!？」

先輩の声に呼ばれて、振り向いたその瞬間。両手にむにゅんと柔らかな感触が広がった。

感触だけで即座に何が触れたか理解できる。いつも散々揉み尽くしている、先輩のおっぱいの感触だった。

「後輩くんがこうして両手で隠してくれれば、万事解決じゃないかな？」

「ちよっ」

「ここには人の目は無いよ？」

言われて気づく。

一之瀬も二宮も気絶してしまった今、この場には僕と先輩の二人だけ。

「せ、先輩……」

「ふふ？大学でするのは初めてだけど、スリルがあつて良いんじゃないかな？」

そつと、先輩の手が僕の股間に触れる。

ああヤバイ。先輩はやる気だ。やる気マンマンだ。

(どうする、どうすればいい)

流石に研究室でセックスするわけにはいかないだろう。そんな所を誰かに見られたりしたら、先輩のイメージに傷がつく。

何かないか。この状況を打破する、画期的なアイディアは。

「あ」

あつた。先輩のKカップ爆乳を隠す方法が、一つだけ。

「どうしたんだい、後輩くん？」

「いや、こうして白衣を後ろ前逆に被せれば良いんじゃないかなーつて」

「……ふえっ？」

先輩の着ていた白衣を脱がせ、前後ろ逆に着せる。それだけで淫らだった筈の空気はピタリと鎮まった。

やっぱり先輩のおっぱいが原因だったか。魔性の女だな先輩は。まったく。

「ふう……これで一件落着ですね」

「……………」

焦ったが、最終的には何とかなつてよかった。研究室で本気セツクスとかいう大惨事にもならないで済んだし、これが最良の選択だったことだろう。

それなのに、なんで先輩はプルプル震えてるんですかね。なんか黒いオーラも纏ってるし、怖いんですけど。

「……………」

「あ、あのー……先輩？」

「後輩くん」

「は、はい」

なんか、先輩に似合わない低い声が聞こえたぞ。誰の声かな。

「帰ったら、覚悟しておくんだね」

「あ、はい」

そんな先輩の言葉に、なんとなく逆襲の気配を感じたのは気のせいだろうか。

## 薬を使って逆転を狙うマゾ豚オナホール先輩&後輩

そんなこんなで、午後の講義の時間がやって来てしまった。

僕は不安げな表情を隠すこともなく、壇上の教授が話す内容を断片的にメモする。

「はあ……」

講義が始まる前に一旦部屋まで戻って、新しい着替えと下着を持ってきたのだが、それでも先輩の機嫌は一向に良くならなかつた。

膨れっ面のまま、そっぽを向いて会話すらしてくれない。意外と意地っ張りなのだ、先輩は。

「心配だ……」

よくわからない怒りに任せて実験を続ける先輩を放置して、こうして講義を受けていることに果てしない不安を覚える。

一応、一之瀬と二宮を叩き起こして先輩に付けさせたが、それが却って不安を増幅させている。

「……早く終わらないかな」

決して講義が退屈だとかそういう話ではなく、純粹に心配だからだ。

カリカリとペンをノートに走らせ、いつ使うかも分からないアナログな記録を残しながら、僕は何度目になるか分からないため息をついた。

???

「ふ、ふふふ……できた、できたぞー！」

「やりましたねー、せんぱーい」

「この短時間で……やっぱり天才なんツスねえ」

一本の試験管を掲げ、ミントは渾身のドヤ顔を浮かべる。この短時間で感度3000倍薬を完成させたゆえの、実績にもとづいたドヤ顔であつた。

周りに立つ一之瀬と二宮からも、パチパチとまばらな拍手が上が

る。

「それで、これどう使うんすか？」

「決まっているだろう！ 後輩くんを使うんだよ！」

「男の感度3000倍とか誰得なんすか？」

熱の籠もった目で復讐に燃えるミント。それを眺めながら、二宮は冷静なツツコミを披露していた。

ツツコミ役の北条が居ない今、一番の常識人は自分だと自負しているのだ。そして、その認識は概ね正しい。

「あたしにもー、後で分けてくださいー」

「いいとも！ この薬は一滴でも垂らしたら、垂らした場所が感度3000倍になるという最高の薬だからね！」

「劇薬の間違いッスよね？」

先輩だったら、どこらへんが最高なのか小一時間問い詰めてるところだろうなあ、なんて遠い目をする二宮なのであった。

「これで後輩くんのチンポをめちゃくちゃ敏感にして、たつぷりと搾り取ってやるのさ……クツクツク、愉しみだなあ」

「うわー、北条くんご愁傷さまー」

「ち、チンポ……」

唐突に出てきたその生々しい単語に、二宮はゴクリと生唾を飲み込んだ。

感度3000倍、なんていうエロ漫画でしか使わないような薬を開発している時点でこうなることは半ば予想できていたが——それでもやはり、生で聞かされると如実に反応してしまう。変態の悲しきサガだった。

「凜花ちゃんも一緒にやるかい？」

「ふえっ!？」

そんな中、ミントから突然名指しされ、二宮はすつとんきような声を上げてしまった。

なぜ自分に話を振るのかと、二宮は驚愕の表情でミントを見る。

「な、ななな何言ってるんすか!？」

「なについて、ナニの話だが？」

そんな視線を受けた当人は、指で輪つかを作って、その中に人差し指を出し入れさせていた。非常に有名な、セックスを暗喩するジェスチャーだ。

「君もしたいんだらう？ 後輩くんと——セ・ツ・ク・ス？」

「んなっ……!!」

見透かされている。

二宮は背筋が冷える感覚と、お腹が熱くなる感覚を同時に味わっていた。

「キミがわたしの部屋に隠しカメラを仕掛けていたのは分かっているよ。そして、それをオカズにオナニーをしていたこともね」

「あっ、あああああ……!!」

背筋が冷える感覚が強くなる。確かに先輩にバレたら興奮するかもとは言ったが、こっちの先輩にバレても嬉しくない。ただ絶望感が積み上がるだけだ。

「えー、凜花ちゃんも隠しカメラ仕掛けてたんですかー？ お揃いですねー、奇遇ですー」

「……へ？」

ここまで無言を貫いていた一之瀬が、ぴよこんと二宮の前に躍り出る。そのままスマホを操作し、画面がよく見えるような角度で二宮の眼前に突き出した。

「ほらほらー、これ見てくださいー」

『こ、こによっ？ さっきまであれだけしてたのに、まだやる気なのかい？ 底なしの性欲だなっ？』

『先輩がエロすぎるのが悪いんです』

『責任転嫁するんじゃない？ このド変態めっ？』

「あっ……あっ、あっ」

画面の中には、お風呂場で激しく交わるミントと北条の姿があった。

壁に手を付けて腰を突き出す体勢になったミントのトロトロおまんこに、思いつきり北条のデカチンポが突き刺さっている。今朝のお風呂場での一幕だ。

『あおおおおーっ?!?!?』  
『犬の鳴き真似ですか?!?!?』

「わ、あ……! お、お風呂場でこんな……!」

「おやおやー? その様子を見るにー、お風呂場には仕掛けてないんだー? まだまだ甘いねー」

一之瀬のスマホから、獣のようなミントの喘ぎ声が聞こえてくる。お風呂場ということもあり、よく響くその声はとても卑猥に聞こえてしまう。

二宮は無意識に、自身の股間に手を当てていた。

『イキ死ねっ! このぷにロリマゾ爆乳オナホールが!!』

『ほぎよおおおおーっ?!?!?』

「あわわ、すっごい出てる……!先輩すご……?」

「狙い目は先輩の部屋とー、お風呂場、トイレ、リビングかなー。そこを抑えておけば大丈夫だと思うよー」

何が大丈夫なのかはさっぱり分からなかったが、二宮はその映像を見て、はしたなく股間を濡らしていた。

ダイレクトすぎる痴態に、二宮の女の部分が強く反応してしまう。

指でシヨーツの上から割れ目をなぞれば、くちゅりと淫らな水音がした。

「一之瀬くんは盗撮の常習犯だね。高校の頃から、よくわたしの着替えとかお風呂とかを盗撮していたんだ」

「えへへー、照れますー」

「……アタシが言うのも変だと思うツスが、照れる場面じゃないと思うツス……」

ミントと一之瀬から次々と飛び出す爆弾発言に、二宮はもうノックアウト寸前だ。控えめに言って、心臓が持ちそうにない。気を抜いたら気絶してしまいそうだ。

「おかげでカメラの気配には敏感になってしまっただね。ゆえに、凛花ちゃんのカメラにも気づけたというわけさ」

「な、なるほど……」

なるほどじゃないが。



「盗撮した画像を加工してー、こんな卑猥な写真まで作っちゃいましたー♪」

「おお！ 我が体ながら、これは実にエロいな！ ぜひ後でオカズにしようー！」

「是非ー♪」

「……………」

目の前で繰り広げられる、性に奔放すぎる会話の嵐。みんな表面には出さないだけで、頭の中ではエロいこと考えたりしてるんだなあ、と一つ勉強になった二宮なのであった。

「それで、どうするのかな凛花ちゃん」

「はひっ!？」

ずいっと距離を詰めてきたミントに、下から顔を覗き込まれる。キラキラと光る碧色の瞳に、二宮の困惑した顔がくつきりと映し出されていた。

「セックスするのか、しないのか。決断しておくれ」

「……………」

「あたしもー、せんぱいとラブラブチュッチュしたいですー？」

「うん。後で相手してあげるから待っててね、陽毬ちゃん」

指先が震える。口の中が渴く。

いきなり降って湧いた空前のチャンスに、二宮は言いようのない興奮と恐怖を感じていた。

「……………」

無理だと思っていた。

だって先輩には、もう相応しい相手が居たから。金髪碧眼のぷに口り爆乳オナホールという、自分がどう頑張っても勝てないような最高のお相手がいたから。

「え、えっと……………」

だから、半ば諦めていた。イチヤイチャも、ラブラブも、セックスも。

全部諦めて、先輩の隣で一人の後輩として笑っていられば、それでいいと思っていた。

「よろしく……お願いします……？」

「ただ、その関係を少しでも前に進められるなら。」

「にひっ？…いとともっ？」

「この小さくて大きな先輩の思惑に、乗ってみるのも悪くない——そう思った。」

## 先輩にブチ犯されたい銀髪巨乳オナホ後輩

「ん、先輩からか……はいはい、了解ですよっと」

講義も終わって講堂から出た直後、見計らったようにスマホが鳴る。

画面を見ると、そこには珍しく先輩からのメッセージが表示されていた。

『実験は終わったから、講義が終わったら部屋に帰ってきてくれ。あ、ついでに飲み物を大量に買ってきてくれると助かる』

だそうだ。

まったく。先輩は気まぐれというか、人使いが荒いというか、何と  
いうか。

「飲み物ね……まあ果物のジュースと、スポーツドリンクでいいかな」  
そんな経緯で、僕はスーパーでジュースとスポーツドリンクを買い  
込み——それに紛れてコンドームを購入する。

先輩がわざわざ買い物を頼む時は、避妊具コンドームを買ってこいという合図  
でもある。

(謎だ……)

なぜこんなルールを追加したのか、不思議でならない。

僕と先輩はいつだって、コンドーム無しで生ハメセックスをしてい  
る。そして先輩は自作の特製ピルを飲んでるので、妊娠はしない。

だというのに、たまにこうしてコンドームを買わせる理由が分から  
ない。

(精液を採取するため……とか言ってたけど、どこまで本当なのやら)  
確かに、コンドームを使えば精液を効率よく採取できるだろうが  
……そんなことをして、なんの意味があるというのだろうか。

「まあいいか」

考えても無駄なことは一旦棚上げしておこう。そうしたほうが、よ  
り効率的に思考を回せる。

僕は飲み物とコンドームが入った袋を手に帰路についた。ぶつ  
ちやけかなり重い。

「帰りましたよ、先輩」

「おかえりー、後輩くん」

玄関のドアを開けると、リビングの方から先輩の声が聞こえてきた。ぺたぺたと、裸足でフローリングの床を歩く音も聞こえる。玄関に向かってきているようだ。

「買ってきましたよ。まったく、いきなり飲み物買ってこいなんてどういう——」

風の吹き回しだ、と。

そう言いかけたところで。

「お、おかえりなさいツス……せ、先輩？」

「なっ……!?!」

靴を脱いで、中に入って、正面に視線を向けた瞬間、僕は啞然とした。

何故なら、そこに居たのは先輩ではなく、後輩である二宮だったからだ。

しかも、普段の二宮とはまるで違う装いだった。デカイ胸とツルツルのアソコを丸出しにした、紅いレースの下着。それのみを着用して、頬を下着に負けないくらい真っ赤に染めながら、僕の目の前に立っていたのだ。

「お、お前……なんでそんな格好して……」

「ふふふ、ビックリしたかい後輩くん」

二宮の後ろから、先輩がピョコツと顔を出す。そのまま得意げな顔で前に歩み出ると、二宮のたわわな胸に遠慮なく触れた。

何してるんですか、と言う暇もなく、二宮のおっぱいがむにゆりと形を変える。

「あっ?..ん?..やあっ?..」

「おお、これは凄いな。想像以上の大きさだよ……うむ、Hカップくらいはあるんじゃないかな?..」

先輩の手が触れると、二宮は体をくねらせて淫らかな声を上げる。

初めて見る光景だ。あの二宮が、こんなエロい格好で気持ちよさそうな声を上げているなんて。

「……可愛い後輩に何させてるんですか、先輩」

これは先輩主導のイタズラだと理解したところで、僕の口からは呆れたようなため息が出ていた。

というか、何いきなり乳繰り合ってるんだこの二人は。男の目の前でそんなことしたら襲われちゃうぞ。というか襲うぞ、今すぐに。

「ふふふ、見てわからないかい？ 凜花ちゃんは後輩くんとセックスするために、こんないやらしい格好をしているんだよ。ね、凜花ちゃん」

「は、はいい……うきやうんっ??」

先輩が問い掛けと同時に乳首をつねれば、二宮は艶やかな声を上げて体を震わせる。

慌てて口を塞ぐが、もう手遅れだ。その可愛いあえぎ声は、しつかりと脳内メモリに保存させてもらった。

「え、えっと……うきやうんっ??」

「エロいな」

「ひうっ!??」

おっと、思わず声が漏れてしまった。

いやでも仕方ないだろう。スラッとした生足、引き締まったお腹、真っ赤に染まった羞恥の表情。

どれもが普段の二宮とはまったく違う印象を与えてくる。まるで子犬みたいな頼り無さだ。

「特にこのおっぱいだな」

「ひぎゆうんっ!??」

そしてそれ以上に、本来隠すべき場所である胸と、お尻と、おまんこを、すべて無防備にさらけ出しているその姿が、とてつもなくエロくて最高なのである。

「しえ、しえんぱいつて、手がっ?アタシのおっぱいにいいい?」

「すまん。手が勝手に」

気づけば、僕は二宮の前まで移動し、その豊満なHカップ爆乳を鷺掴みにしていた。

すげえなこれ。指が沈み込む。



「うわあ」

「ひぎゆうううっ?!おっぱいいい?おっぱいい気持ちいいのおおおっ?!」  
おっぱい全体がクリトリス並みの感度になったら、そりゃこんな乱れ方になるか。

とうかこいつ、既に何回かイッてないか。腰が滅茶苦茶ガクガクしてるし、溢れ出る白濁本気汁の量もだいたい増えてるんだけど。

「おっぱいだけでこんなにより狂うなんて。凜花ちゃんはド変態だなあ」

いや、それはあなたの薬のせいでは。

「は、はいいいっ?!アタシはあ?先輩におっぱい触られてイッっちゃう?ド変態マゾ豚オナホールでしゅうううっ?!」

そこでこっちはド変態だって認めちゃうし。

「はあ……まったくこいつらは……」

人がどれだけ我慢してるかも知らないで、メスの匂いプンプンさせながら乱れやがって。

もう我慢できそうにないぞ。襲うからな、今すぐに。

「しえんぱあい……はぶっ?!」

おっぱいを揉み込んだまま、二宮の唇を奪う。ぷにぷにの唇をかき分け、舌で口内を蹂躪していく。

最初から全力でいこう。こんなド変態相手に、遠慮は無用だ。

「じゅるるるるうっ?んばっ?んむうううっ?ちゅばっ?ちゅばっ?  
んおとおおっ?はぶっ?ちゅうううっ?れろれろおっ?ぶじゅるるるるっ?ぷあっ?」

「ぷはっ……犯すぞ、二宮」

「え、えへ……?!」

淫らなキスを終えて、唇を離す。

だらしなく笑う二宮は、とても淫靡だ。

「よ、よろしくお願いますッス……?せんぱい?」

一瞬だけいつもの口調に戻って、二宮はにっこりと笑ってみせた。  
これ以上ない、幸福といやらしさを孕んだ笑顔だった。

## 前戯は念入りにするタイプの鬼畜ドS後輩くん

「はい、こっちこっち」

「あ、あうう……?」

先輩が二宮の手を引いて、自分の部屋へと引き入れる。

なされるがままになって二宮は、先輩に優しく押されて、ダブルベッドの上にぼすんと座り込んだ。

その光景を見ながら、遅れて部屋に入る。ふわりと甘い匂いが漂ってきた。

「さあ、準備万端だね」

余談だが、先輩の部屋のベッドはすごく大きい。大の男が二人は寝れるくらいのダブルベッドになっている。

なので、セックスをするときにも大きさを気にせずハマることができるといわけである。

「さ、凛花ちゃん。教えたとおりにやっごらん」

「は、はいい?」

余談の余談だが、僕の部屋にはベッドがない。寝るときは先輩の部屋で繋がって寝るし、そもそも寝ずに夜通しセックスしていることもままある。

故に、先輩の部屋のベッドは実質、二人共同のベッドでもあるといわけだ。

「まずは寝転がって、脚を開いて」

「こ、こうですかあ?」

さて、なんで僕がこんなどうでもいい余談ばかりを垂れ流しているのかというと。

「そして両手の指でおまんこを開いて——くぱあ?」

「く、くぱあ……?」

目の前の光景がエロすぎて、関係ないことでも考えてないと、すぐに襲ってしまいそうだからだ。

「……………」

「ひっ?せ、先輩、すごいしかめっ面してるツスけど……?」



「大丈夫だよ。これは本能を理性で必死に抑えてる顔だから」

ああもう、ムードもクソもない。

確かに犯すとは言ったが、それでももつとこう……仮にも先輩なんだから、もうちよつと理性的に襲いたいと思うのが人情だろう。

おまけに、今開いている二宮のおまんこから見える、薄い肉の膜。あれはどう見ても処女膜だ。

（処女膜見せつけプレイとか……初めてなのにド変態すぎるだろ、この後輩っ！）

十中八九、先輩の指導のせいだと思うが、それにしたってエロすぎる。

処女膜の隙間からこぶこぶと真っ白な白濁本気汁をこぼしながら、チンポ突っ込まれるのを今か今かと待ち望んでいる。

ああもう、マジで我慢できなくなるだろうが。

「わ、わぁ……？生で見る先輩のおちんぽ、想像以上にでっかいッス……？」

「そうだろう。自慢の後輩チンポだからね」

「なんで先輩が得意げなんですか……」

たまらず服をすべて脱いで、ベッドに膝をついて乗り上げる。

ぎしり、とスプリングが軋む音がした。

「おやおや、後輩くんも限界かな？」

「ふうー……そりゃあ、こんなの見せられたらそうもなりますよ」

「あっ？」

広げられた脚を左手で支え、右手で二宮のおまんこに触れる。

処女膜を破らないよう、ゆつくりと指を膣内に挿入していく。

ぐちゅり、と淫らかな水音が鼓膜を揺らした。

「あっ？あっ？あーっ?!」

一本、二本、三本。

初めてだというのに、一気に三本も指を咥えこんでしまった。これは相当なポテンシャルを秘めたドスケベおまんこだ。将来が楽しみだな。

「ゆびっ？おまんこにつ？先輩のゆびがああっ??」

「おやおや。おっぱいといい、おまんこもいい……凜花ちゃんはどこ触られても感じる変態マゾ豚だねえ」

「それは先輩もでしょう」

何自分を棚に上げてるんだ。先輩だって、どこ触ってもイクぷに口り爆乳オナホルのくせに。

「わたしはいいんだよ。それよりほら、凜花ちゃんのおまんこは早くいじめてって言うてるよ」

「いつ?いつてな、ひいいいつ!??」

なんか釈然としないが、今は先輩に反論するよりも目の前のおまんこに集中しよう。

指でアツアツのおまんこを優しくほじくってやると、二宮は腰をガクガクさせて白濁本気汁を撒き散らし始めた。

先輩よりも汁気は少ないが、その分粘度が高い。まるで濃いヨーグルトみたいになっている。

「うわ、凄いなこれ。どんだけ期待してるんだ、このデカ乳オナホが」

「お、おなつ?おなほおつ!?!」

「なんだ、不服か?」

「ひ、ひどいツス?アタシは先輩のおよめさんになりた——んおとおおつ!?!」

数分間!ずつと膣内を探索して、ひときわ弱い場所を見つけた。入口近くの天井と、中腹の横壁、そして子宮付近の下面だ。

三本の指で、それぞれ一気に押し潰す。すると二宮は、それだけで全身を震わせて絶頂した。

「はっぎう?おっ、おうっ?」

「なんだ、ちよつとナカ弄っただけでイッたのか? 堪え性のないおまんこだな」

「うわ、後輩くんDSS」

なんか無性にチンポがイライラする声でヤジが飛んでくるけど、気にしない。

目の前のトロトロおまんこをいじめることに集中する。なんか楽しくなってきた所だし。

「わたしも遊ぼうつと」

「んにいいいっ?!?ちくびっ?ちくびごりごりっ、やつめええええ?!?」

先輩が二宮の頭側に回り込み、そのビンビンに勃起した乳首をつまみ上げた。

感度3000倍薬で敏感になっていることもあり、二宮はまた腰をガクガクと震わせて、激しい本気イキをキメている。

「あははっ、よわよわ乳首だね」

「先輩、さつきからめちやくちやブーメラン刺さってますけど、自覚はあります?」

「あー、聞こえない聞こえない」

「んほおおおっ?!?」

この先輩、都合の悪い発言は全部スルーしやがる。これが馬の耳に念仏ってやつか。

「だいたい、後輩くんの指使いが上手いのが悪いんじゃないか。わたしは100%悪くないよ」

「責任転嫁しないでください。僕の愛撫が上手いんじゃないか、先輩がよわよわのクソザコおまんこなだけです」

「んっ?んっ?んっ?んっ?」

まったくこの先輩は。すぐに問題の矛先をすり替えて有耶無耶にしようとするんだから。付き合い長いんだから、そんな手には引っかけられないぞ。

「じゃあ言わせてもらおうけどね、後輩くんの指使いはかなり卓越してるよ。それこそ、どんな女の子でもオトせるようなテクだと思うが」  
「いいえ、先輩が全身性感帯なのがいけないんです。そんなクソチヨ口おまんこじゃ、いつか誰かに寝取られちゃわないか心配になりますよ」

「ほわあああああああつ?!?」

僕と先輩の口論が激しくなるにつれて、下から響く淫らかな声が大きくなってくる。

うるせえな、と思つて視線を下げると——そこにはショートカットにした銀髪を振り乱し、顔を涙とよだれでグシャグシャにし、全身を

ピンツと引き絞りながら、全力で絶頂する二宮の姿があった。

エロい。エロすぎる。もうそれ以外の言葉が似合わないレベルでエロい。

「や、やめっ?もうやめへえっ?おっぱいも?おまんこも?いつしよに責められるの、もうやらああああっ?」

「しまった。つい弱いとこばっかりいじめてしまっていたな」

「あらら……いやーごめんね凜花ちゃん。このぶつくり乳首、スクイズみたいでクセになっちゃって」

「ひやあああああっ??」

先程よりも濃いメス臭が、二宮の体から立ち昇る。むわり、とまるで湯気のように広がり、鼻を突いて性欲を加速させてくる。

先輩も大概だが、こいつも極上すぎるメスだな。食べがいがあ。

「もっ?がまんむりっ?むりれしゅうっ?おちんぽっ?おちんぽさまあっ?欲しいれしゅうっ?」

「だってさ、どうする後輩くん?」

「それはもちろん」

犯してやるしかないだろう。

「だけど、その前に」

「あ……?」

「舐めろ」

顔の横まで移動し、腰を突き出す。

バキバキに勃起したチンポが、二宮の鼻先に突きつけられる。

「い、いいんすか!?!こんな立派な先輩おちんぽ、アタシなんか舐めても——」

「さっさとやれ、メス豚」

「はぶっ?んぶうううっ?じゅるるうううっ?」

よしよし、それでいい。

いつも元気でウザかわいい後輩の口にチンポを突っ込みながら、僕は静かに笑った。

「鬼畜だねえ、後輩くん」

そして先輩も、釣られるように笑っていた。

## とても都合のいいオナホ後輩

「ってというか……いつまで服着たままなんですか、先輩」

「おや、今日は凜花ちゃんが主演の日だろう？　可愛い後輩のために自粛してあげてるんだよ」

「じゅぽっ？・じゅっ？・じゅっ？・じゅぶぶっ？」

二宮にチンポをしゃぶらせている最中、先輩と何気なくそんな会話を  
をする。

いつも通りの会話をしている下から、じゅぽじゅぽと下品なフェラの音が聞こえてくる。日常的な一幕の中に混じる、非日常的な淫音と快感。

慣れていないためか、その動きは少々ぎこちない。しかし、それを補って余りある背徳感が、ぞくりと背筋を震わせる。

「それとも何かい？　凜花ちゃんだけじゃなくて、わたしも一緒に食べたいとか言い出すんじゃないだろうね」

「駄目ですか？」

僕はずっとそのつもりだったんだけどな。先輩のことだから、嬉々として混ぜてくるとばかり思っていたのに。

「駄目じゃないが……いや、やっぱり駄目だな。今日は凜花ちゃんの日だ。二人同時にしたいなら、また今度にしよう」

「……先輩がそう言うなら」

残念だ。先輩と二宮のデカイケツを並べて、同時に犯してみたかったのだが……まあそれは今度ということにしよう。

「今日はじっくりと、凜花ちゃんの処女まんこを味わってくれたまえ」

「処女……あつ」

言われてハツとする。

二宮は初めてなのだ。

セックスどころか、こういった行為そのものが初めてなのだ。

「……しまった」

最初の、それこそ処女膜を見せつけられた時点で気づくべきだった。

興奮で頭が回っていないかったなど、言い訳にもならない。

「すまん、二宮」

「ずろろろっ??んぱあっ??」

慌てて腰を引いて、口内からチンポを引き抜く。ぬらぬらと唾液でコーティングされたチンポが、唇との間にいやらしい糸を引いていた。

「初めてだったのに乱暴に扱ってしまった。すまない、二宮」

「あはははあ?らあいじょうぶツスよお?アタシはオナホなんスカらあ?」

「お嫁さんに……とかなんとか言っただけじゃなかったか?」

「えー??そんなあこといったツスカあー??」

まるで酔っ払ったかのような、とろんとした顔で二宮は笑う。

先走り液と、自分の唾液でべとべとになった口まわりをそのままに、見たことないような淫らな顔で笑っていた。

「……大丈夫なのか?」

「もちろんツスよお?」

いつもの天真爛漫なものとは全く違う、淫靡な笑顔を浮かべる二宮。その表情は、言葉では言い表せない程の淫靡さを放っていた。

唾液まみれのチンポが更に固くなっていく感覚。ビキビキと張り詰めていて、もうコイツの中で射精しないと小さくならないだろうと確信できた。

「アタシは先輩のオナホなんスカらあ?遠慮せずに、おもいつきりせーえきぶっこ抜いてくださいツス?」

処女のくせに、トロ顔でオナホ宣言。

情けない話だが、めちやくちや興奮した。

「……………」

二宮は——二宮凜花はかなりの美人だ。大学内でもそこそこ有名な、声をかけられることや、合コンに誘われる事も多いらしい。本人が得意げに話していた。

そんな自他ともに認める、整った容姿の後輩が——おそらく初めての——極上にして淫らな表情を、こちらに向けている。興奮しない訳

がなかった。

「だってさ。どうする後輩くん？」

「……そりゃもちろん」

体勢を変え、脚の隙間に体を入れる。本気セックスの気配を感じ取ったのか、二宮の体がびくりと震える。

「犯すに決まってるでしょう」

「あ……う？」

そそり勃つチンポの先端を、おまんこの入り口にあてがう。

未だにとぶとぶと白い液体を吐き出し続けているそこは、入れたら絶対に気持ちいいと確信できるほどに蠢いていた。

既に入り口がチンポの先端に吸い付いているのだ。これが気持ちよくない筈がない。

「きて……くださいッス？せんぱい？」

「ああ。いくぞ二宮——」

「ストープ」

あと少し腰を突き出せばぶち込める、という段階に来たところで、横から待ったがかかる。

その声の方に視線を向けてみれば、そこには笑顔を浮かべてコンドームを持った先輩がいた。

「セックスする前にコレを着けようか。もし中に出して、妊娠でもしちゃったら大変だからね」

「え」

「遠慮しないでいいとも。あ、わたしが着けてあげようか。特別サービスだよ」

先輩はコンドームの封を破いて口に咥える。そしてそのまま、チンポを思いつきり喉奥まで呑み込んでしまった。

「じゅぼぼぼぼおっ??？」

「うおっ……!」

薄いゴムの膜が、チンポを包んでいく感覚。

先輩の口で、直接コンドームを着けてもらっている。その事実には、かなりの興奮を覚えてしまう。

「んっ?」

ビキリ、と口内で一回りチンポが大きくなった。

「ずろろろろっ?ふはあっ?」

「……ありがとうございます、先輩」

「どういたしまして?」

二宮の不慣れだったフェラとは違い、熟練したそれは思わずお礼を言ってしまう程には気持ちよかった。

気持ちや気分など関係なく、ただ肉体的に快楽を感じてしまう。先輩のテクニクは、もはや魔性の域を超えていた。

(やっぱ天才だよな、先輩って)

薬学の面ではもちろん、エロいことでもその才能は存分に発揮されている。フェラや手コキも瞬く間に上手くなったし、おまんこの締めつけをコントロールしたりもできるのだ。

その才能の一分でも日常生活に活かしてくれれば、僕から言うことは何もないのだが。

「邪魔してすまなかつたね。さあどうぞ」

「……いいか、二宮?」

「はいッス?」

少しだけ集中が途切れたが、それでも二宮は変わらずおまんこを濡らして待つてくれていた。

くぱくぱとひとりでに開閉するおまんこが、早く貫いてほしいと喋っているみたいだ。

「あ?」

薄いゴムの膜に覆われた先端を、ゆつくりと二宮の中に沈めていく。

初めてだから、慎重に、ゆつくりと。間違っても先輩にいつもして見たいな、ガチハメピストンをかましてはダメだ。

「あっ?あっ?あゝゝゝっ???」

亀頭が、おまんこの内部にすっぽりと呑み込まれた。熟れていないせいか、締め付けはかなり強い。やはりゆつくり入れて正解だった。「ん」



もう少し腰を押し出すと、軽い弾力をもつ膜に行く手を阻まれた。処女膜だ。

少しもつたいない気もするが、これをぶち破らないとセックスはできない。意を決して、腰を前に突き出す。

「あつ——ああああああ〜〜〜つ!?!?!」

「うおっ……!!」

ぶちぶち、と薄い膜を破り、チンポがおまんこの奥へ侵入していく。入り口もキツかったが、奥の方は更にキツイ。まるで両手でチンポを握り込まれているみたいな感覚だ。

「きつつ……お前、ほんとに処女だったんだな……!!」

「あ〜っ?おにやか?おにやかあちゅい?!!」

腰を押し出しながら、半ば無意識で二宮に声をかける。

しかし、当の本人は快感を貪ることに必死で、まったく聞こえていないようだった。

「おつき?おちんぽっ?アタシの?おにやかのなかがいい?」

「苦しくないか?」

「きもちいいっ?おなかいつぱいで?しゅごくきもちいでしゅう?」

どうやら痛みは感じていないらしい。念入りにした前戯のおかげだろう。

これで遠慮なく、二宮の処女まんこを味わうことができる。

「動くぞ」

短く告げて、ゆつくりと腰を引く。

ゴム越しでも無数の肉ヒダがチンポに纏わりついて、出ていかないでと懇願してるのが分かる。

どうも二宮のおまんこは寂しがり屋らしい。このあとすぐに突っ込まれるというのに、一瞬離れることすら寂しいと感じているのだ。(いじらしいな、まったく)

本人の深層心理が反映されているのだろうか。普段は明るく人懐っこい二宮とは、真逆の印象を受ける。

しかし、それがとても興奮を誘ってくる。ギャップ萌え、というや

つだらうか。

「ふんっ！」

「——かひゅっ」

入口近くまで引き抜いたチンポを、一気に最奥まで突き入れる。ぴつちりと閉じていた肉を掻き分け、子宮口まで一直線に突き貫いた。

二宮の口からは短い息が漏れ、視線が不規則に揺れている。どうやら、今の一突きで絶頂したらしい。?!??!?  
「あ……あおおおおおおおおおおっ?!?」

一泊遅れて、部屋の中に獣の雄叫びが響き渡った。

「わ。凜花ちゃんってば、犬の鳴き真似上手だねえ」

「ぐっ、ナカ肉がめちやくちや動いて……気持ち良すぎるだろ、このおまんこっ……!」

その雄叫びに呼応して、おまんこの中身がぐにゅぐにゅと蠢き始める。

肉の壁が全方位からチンポを優しく締め付け、肉ヒダの一つ一つが丁寧チンポを舐めしゃぶる。奉仕の精神に溢れたおまんこだった。

「くっ……おおおおっ!!」

「あおっ?・おおっ?・んおおおおおお?・あおおおおおおおおおんっ??」

はつきり言って、極上の快感だった。

獣のように貪りながらも、相手に気持ち良くなってもらうために奉仕するという、二律背反おまんこ。

こんなの、喰らうのを我慢しろという方が無理な話だ。

「はあっ、はあっ!!」

「んほほおおおおっ?!?!ほおっ?・おうっ?・あおおおんっ?!?!」

無我夢中で腰を打ち付ける。

杭打ち機のように、上から下へおまんこをプレスするようにチンポを挿し入れる。

情けない話だが、もうこのおまんこで射精することしか考えられそうになかった。それほどの名器だったのだ。二宮のケダモノおまんこは。

「出すぞっ!! 二宮!!」

思いつきり腰を打ち付け、チンポを子宮口に密着させる。その瞬間、ちゅぱつ、と子宮口が一瞬チンポの先端にキスをした。

「ほおおおおおおっ?!?!」

「ぐうっ……めっちゃぐちゃ出る……!」

そしてそのまま、溢れ出す欲望を思いのままに解き放った。凄まじい量の精液が、尿道を通って先端から吐き出される。

おまんこの中で、コンドームがパンパンに膨れていくのが分かった。

「うわあ、これはまた獣みたいなセックスだったねえ」

「はあっ、はあっ……」

「あへえ? えへへえ? 気持ちよかったツス?」

射精が終わり、少し柔らかくなったチンポを引き抜く。引き抜く時でさえ、二宮のおまんこは名残惜しそうに肉ヒダを絡ませてきていた。

射精した直後は敏感なので、できれば少しだけ待ってもらえると嬉しいのだが。

「あ」

その際に、入り口の締め付けが強すぎて、コンドームが外れてしまった。

ちゅぽん、という間抜けな音と共に、精液を溜め込んだコンドームだけがおまんこに置き去りにされてしまった。

「おやおや。このケダモノおまんこ、よっぽど後輩くんの精液が欲しかったみたいだねえ」

「う、うううう?」

「でもだーめ。後輩くんの精液は、ゼーんぶわたしの物だからね」

「ひっ? あっ? な、なにするんすか——んひいひいっ?!?!」

先輩はおまんこからびよっこりと顔を出すコンドームを掴み上げ、ゆっくりと引き抜いていく。

かなりの大きさになっているようで、引き抜くだけでもおまんこがぐぱつと大きく割り開かれてしまっていた。

「あつ？おつご!?!」

「ふう、やつと取れた。すつごい量だね。それほど気持ちよかつたつてことかな、後輩くん？」

「……ノーコメントで」

本音を言えば、めちやくちや気持ちよかつた。しかし、それを正直に伝えたらなにか恐ろしいことが起こりそうだったので、感想はノーコメントとさせてもらった。

「さて、これからどうするのか？ 後輩くんのチンポは、まだまだ元気そうだけど？」

先輩はコンドームの入った箱を振り、微笑む。

このコンドームが無くなるまでなら、二宮とセックスしてもいい、と言っているのだろう。

だったら、答えは決まり切っている。

「先輩、お願いします」

「にひっ？いいとも？凛花ちゃんも準備はいいかい？」

「は、はいッス？」

先輩はコンドームの封を開け、口に咥えてにつこりと淫らに笑った。

いいところ取りをしていく計算高いKカッププロり爆乳  
オナホ先輩

「はあ、はあ……!」

「あおつ、おおおんっ???」

おまんこからコンドームごとチンポを抜き、体を離す。

ねっとりとした愛液が、お互いの股間に何本もの淫らな橋を作っていた。

「おおー、凄いね。あの量のコンドームを全部使い切るとは」

空っぽになった箱を振り、感心したように先輩は告げる。先輩が持っているのは、買ってきた分の最後の一箱だ。

買い置きを含めて、都合三箱ほど買っていたのだが、全部使い切ってしまった。それほど二宮のおまんこが極上すぎたのだ。

「で、それなのにまだギンギンだし」

「ふうー……無限に出せそうです」

「大量に飲み物買ってきてもらって正解だったね。じゃなきや今頃、脱水症状で倒れてるところだよ」

「なるほど。先輩はこうなる事を予測して、飲み物いっぱい買ってこいって言ってたんですね」

「そうとも。はい、二人で飲みたまえ」

「ありがとうございます」

先輩の机に置いておいたスポーツドリンクを、先輩自身が手渡してくれた。

キヤップを開け、中身を口に含む。

「んっ」

「むぶうっ???!」

そしてそのまま、二宮にキスをする。

目を白黒させているが、構わず口の中身を二宮の口内に注ぎ込む。

困惑しながらも、口に入ってきた液体をこくこくと嚥下する。一回飲み込むたびに、とろん、と淫らに瞳がとろけていく。

「ぷはあつ？な、なんしゆかこれえ？めちやくちや美味しいツスう？」  
「ぷはっ……ただのスポーツドリンクだ」

「うそお？スポーツドリンクがこんなに甘いわけないツスう？」  
「どうやら味覚までバグったらしい。」

まあ、確かに甘めのは買ってきたが。アク〇リアスじゃなくてポカ  
〇スエツトだったが。

でもそんな、わざわざ言うほど甘くないだろう。至って普通の甘さ  
である。

「もつとお？もつと欲しいツスう？」

「わかったわかった……んむっ」

「はぶっ？んくっ？んくっ？」

またもスポーツドリンクを口に含んで口移ししてやると、二宮は嬉  
しそうに喉を鳴らしてそれを飲み込む。

「ぷはあ？む、無限に飲めそうツス……？」

「無限は言いすぎだろ」

本当に無限に飲めたらヤバい。逆に死ぬぞ、それは。

「さてさて、買ってきたコンドームが全部なくなってしまった訳だけ  
ど」

何回かに分けて、ペットボトルの中身を全部口移しで飲ませた直  
後。背後から、そんな言葉が聞こえてきた。

「続きは、わたしの身体でやらないかい？」

ゆっくりと振り向いてみると、そこには全裸になった先輩の姿が  
あった。

ぶるぶる揺れるKカップ爆乳と、ぬちゆぬちゆに愛液を垂らすおま  
んこが丸見えだ。というか、いつの間に脱いだんだ。

「コンドームが無いままセックスしたら妊娠してしまうかもしれない  
だろう??しかしその点、特製ピルを飲んでいるわたしは、絶対に妊娠  
しない？凛花ちゃんより犯し放題だと思わないかい？」

「……さつき、今日は二宮の日だとか言ってますでしたか」

さつきまでもつともらしい事言ってたのに、もう我慢できなくなっ  
たのか。このぷにロリマゾ爆乳オナホは。

「ああその点は大丈夫だよ？もう日付変わってるから？」

「えっ」

言われて壁に掛かっている時計を見てみれば、確かに夜中の十二時を回っていた。

気づけば外も真つ暗だし、部屋の中も薄いライトが点いているだけだった。おそらく先輩が気を利かせてくれたのだろう……いや普通に教えろよ。

相変わらず、気遣いの方向性が明後日に向いているのは、なんかアレだ。

「いつの間に……」

「それほど凜花ちゃんの手体に熱中していた、ということだよ？ふふ？少し妬けちやうなあ？」

確かに熱中してはいたが、日付を跨ぐ程だとは思っていなかった。

先輩とは別ベクトルで魔性のメスだな、二宮は。

「まだ出来るだろう??」

「それはもちろん」

何発出したかは覚えてないが、未だにチンポはギンギンの臨戦態勢だ。まだまだヤれる。

「それに、凜花ちゃんも限界だったみたいだしね？」

「ん」

「すうー……すびー……うへへえ？」

少し目を離れた隙に、二宮は寝落ちをかましていた。全身を様々な汁で汚しながらも、幸せそうな顔で呑気に眠りにについている。

よだれ垂れてるぞ。はしたない……ふきふき。

「まったく……」

「さあ？これで憂いは無いだろう??」

呆れてため息をつく横で、先輩は淫らに笑っていた。その顔がいつもより淫らに見えるのは、やはり僕の気分が昂ぶっているからだろうか。

「二人の獣のようなセックスを見ていたら、いい加減に我慢が効かなくなってきたってしまっただろ？」

「そんなにエロかったですか？」

「もちろんだとも？二人の熱に当てられて、わたしのおまんこ……もうぐじゅぐじゅになってるんだよ?！」

ベッドの上に寝転がり、はしたなく大股を開いて、そのぷにロリおまんこを見せつけてくる先輩。

指で割り開いたそこからは、既に本気汁がコポコポと溢れ出していた。おかげで内部の様子が見えない。焦らすのが上手いな、先輩のおまんこは。

「あん？」

気づけば身体が勝手に動いていて、先輩のおまんこに口づけをしていた。

溢れ出る先輩の淫汁を、じゆるじゆると下品な音を立てて残さず飲み干していく。

「ふっ?くっ?はああ?！」

舌をおまんこに突き入れ、膣ヒダを丁寧に舐めしゃぶっていく。上下左右、舐め残しが無いように、丁寧に。

「ひっ?きっ?ああああっ?！」

ビクビクと震える先輩の腰を両手で掴み、ガツチリと固定して更に奥まで舌を入れる。

「ほひっ?ひっ?んひいひいっ?!!??」

不意に、舌全体がギュウツと締め付けられる。それと同時に、先輩の両足が思いつきりピンと伸びた。

「ぶはっ……イきましたね」

「はあっ、はあっ……相変わらず、後輩くんのテクは凄いねえ?秒でイカされてしまったよ?！」

脱力する先輩のおまんこから口を離し、口元を拭う。

一拍遅れて、おまんこの奥から先輩が深く絶頂した証が、ドロリと垂れてきた。

ああ、とてつもなくエロい。チンポが痛いほど勃起し、生殖しろと本能が訴えかけてくる。もう、止まれそうになかった。

「それじゃあ……」



「あ、待ってくれ後輩くん」

本能に任せて先輩を襲おうとしたら、その先輩がストップをかけてきた。そうして背を向けると、ベッドに脱ぎ散らかされていた白衣のポケットから、一つのビンを取り出す。

「なんですか、それ？」

「ふっふっふ……使ってみてのお楽しみさっ」

中身は粘性のあるピンク色の液体。先輩はビンの蓋を開け、その中身をトロリと掌に垂らした。

なんとなく嫌な予感がするが……まさか。

「えいつ？」

「んっ」

そんな予感を吹っ飛ばすように、先輩は勢いよくチンポに掴みかかってきた。両手で液体を伸ばすようにして、チンポ全体をにゆるにゆるとマッサージしていく。

「ほくら？ぬるぬる？」

「うおっ……！」

亀頭はもちろん、カリ首、幹、そしてキンタママまでも、しっかりと液体を塗りたくられる。

先輩の手つきは慣れたもので、チンポが射精しないよう加減しながらも、ヌルヌルの感触をこれでもかと堪能させてくる。悔しいが、めちやくちや気持ちいい。

「んぐっ!？」

かと思えば、いきなりチンポに鋭すぎる快感が走った。

今まで感じたことの無いような、圧倒的な快樂。言葉になんて出来ないような、異次元の快感の奔流。

気づけば——いつの間にか——チンポの先端から勢いよく精液が吐き出されていた。半固形じみた、生殖本能丸出しな精液が、ボタバタと先輩のかわいい顔に降り掛かる。

「あはあ？すっつ（お）？」

「せ、んぱい……っ！この液体、もしかし、てっ……！」

「そうとも？わたしが作っていた、感度3000倍薬だよ？」

やっぱりか。そりや嫌な予感がするわけだ——なんて納得していた僕を余所に、先輩がチンポに優しく息を吹き掛ける。

「ふう〜っ?」

「ぐうっ!」

まるでそよ風のような、柔らかい吐息。しかし、今のチンポにはそんな刺激ですら致命傷になる。

結果。感度3000倍になったチンポは、またも大量の精液を吐き出しながら絶頂することになった。

「あははっ?これは楽しいねえ?何してもいく敏感チンポの出来上がりだ?」

「くっ……!」

得意満面といった笑みを浮かべて、先輩はこちらに身体を寄せてくる。

くそ、いつもと形成が逆転してしまった。これでは枯れ果てるまで先輩にイカされ——

「それじゃあ?わたしの最強おまんこで、たくっぷり搾り取ってあげようね?」

と思っていたら、先輩自身が最速で墓穴を掘ったので、どうやら大丈夫っぽい。

いや、考えても見てくれ。今チンポには、先輩が塗った感度3000倍薬がベツタリと残っているのだ。

そんなものをおまんこに挿入すれば、どうなるか。子供でもわかる簡単な問題だろう。

「さあ?いくぞ後輩くん?」

「わ、わーやめてくださいせんばいー(棒)」

「ふふ?もう遅いよ?」

僕の静止(棒読み)も聞かず、先輩は勢いよく腰を落として、僕のデカチンポ(感度3000倍薬付き)をおまんこでぐっぽりと啜え込んでしまったのだった。















「えへへ、こう見えても健康優良児ツスから！ 元気な子供も沢山産める自信があるツスよ！」

「なんの自慢なんだ、それは……」

よくわからない自慢をしながら、二宮は得意げに胸を張る。そのせいで、薄い布地一枚に隔てられた巨乳が、たわわに揺れた。

そう。なんと今の二宮がしている格好は、俗に言う裸エプロンと呼ばれるものだった。

「もうすこし待っててくださいツス？あとちよつとでお魚が焼けるので？」

「おう」

体の前面にエプロンを一枚着ただけの、ハレンチ極まりない格好。

うなじ、背中、尻、ふともも、脚、そしておまんこ。大事な部分が胸と乳首しか隠せていないという、ド変態スタイルだ。

「ふん、ふん、ふふん？」

二宮は実にゴキゲンといった様子で、尻を左右に振りながらキツチンの中を移動している。

あつちへパタパタ、こつちへパタパタ。動き回るたびに、立派に実ったデカ乳とデカ尻が、オスを誘うようにぶるんぶるんと揺れ弾む。

「あ、先輩はご飯どのくらいがいいツスか？ やっぱり大盛りがいいツスカね？」

「いや、普通でいいぞ。普通で」

大盛りなのはお前の乳と尻だろ、という言葉は呑み込んだ。言ったら絶対に、ご飯より先にセックスする流れになると判断したからだ。

流石に今の状態でセックスはしたくない。感度3000倍の余韻がまだ残ってるし、何より単純に体力がもたない気がする。

「……………」

「……………」

だというのに、この後輩はこつちに尻を突き出して猛烈なセックスアピールをしてくる。

見事に育った桃尻と、健康的にキュツと閉じたアナル。その下に鎮

座するトロトロおまんこ。

既に愛液で濡れそぼっているそこは、くぱくぱと蠢いてチンポの到来を待ち望んでいる。突っ込んだらめちやくちや気持ちよさそうだ。

「……せ、せんばあい？」

「やらんぞ」

メスの顔で誘惑してくる後輩に、きっぱりとNOを突きつける。

今は何よりもエネルギー補給が大事なのだ。怠ったらマジで死にかねない。

「まずは飯食って、それからだ。お前も腹減ってるんだろ？」

「そ、そりゃあ減ってるツスけど……そこは愛の力でカバーする、みたいな？」

「愛は食えないぞ」

「むく！」

愛情や友情で腹が膨れることはない。人間は定期的に食べ物を摂取しなければ死んでしまう、悲しき生き物なのだ。

まあ、二宮はそんな理知的な反論が聞きたかった訳では無いらしく、頬を膨らませて、じつとりとこつちを睨みつけていたが。

いやあの、そのツリ目で睨まれるとちよつと怖いんですけど。こつちが悪いみたいな気分になるじゃん。

「しかし、愛か……」

思えば——二宮が抱いてほしいと言ってきたから、情欲にまかせて抱いてしまったが、二宮がどうして僕に好意を寄せているかは聞いていなかった。

彼女は、どうして身体を許すまで好意的なのか。

僕と二宮はただ単純に、一介の大学の、ただの先輩と後輩という関係だったはずだ。

知らなければならぬだろう。二宮が、僕のことをなぜ好きなのか

——その理由を。

「なあ、二宮」

「なんスか？」

「なんで、僕とセックスしようと思ったんだ？」

「ほへ？」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔で、二宮はこちらを見る。そうして徐々に頬を赤く染めていき、視線を逸らしながらゆっくりと口を開いた。

「それは……まあ、先輩が好き……だからツスけど」

「僕も二宮のことは好きだ」

「ホントツスか!？」

「ああ。だが、二宮が僕を好きになった理由が思い当たらなくてな……失礼じゃなければ聞いてもいいか？」

「へ？」

「またも鳩が豆鉄砲を食らったような顔で、二宮は逸していた視線をこちらに向けた。」

「お、覚えてないんすか!? 子供の頃、お嫁さんにしてやるって言ってくれたじゃないツスか!？」

「子供の頃……」

非常に申し訳ないのだが、まったく覚えていない。というか、子供時代の記憶が曖昧で何も思い出せない。

「そ、そうか……そうなのか……」

「ひ、ひどいツス先輩〜! 大学生になってようやく会えたと思ったのに、忘れてるなんて〜!」

「いやすまん。これはマジですまん」

普通に土下座案件だな、これ。

「ま、いいツスけど」

「いいのかよ」

先程の動揺がウソのように、二宮はカラツとした笑顔を浮かべた。

「覚えてないなら、今度はこっちから告白するまでツス! というわけで、アタシのお嬢さんになってください、先輩!」

「二宮……」

やだこの後輩、イケメンすぎる。下手な男より男らしいんですけど。

「ダメならセフレでもいいツスよ!」

「急にランクダウンしたな、おい」

「だってー……先輩はミント先輩のこと大好きじゃないツスカー」

「そりゃ大好きだが」

「僕のすべては先輩のものだからな。当然だ。」

「だから一番は無理でも、二番くらいにはなればなーって思ったん  
ス」

「二宮はそれで良いのか？」

「もちろんよくないツスよ。あわよくば先輩の一番になりたいツス」

「じゃあ、と声に出す前に、二宮は再び口を開いた。」

「だから、チャンスを待ってるツス」

笑顔だった。

「ミント先輩から、先輩を奪うチャンスを、二番手に甘んじて待ってる  
んスよ」

とても綺麗で、とても寧猛な笑顔だった。

「アタシ、こうみえて欲張りツスから」

まるで肉食獣のような、そんな美しい笑みを、二宮は浮かべていた  
のだった。



「はーい、朝ごはんできたツスよー」

「おお、うまそうだな」

先程の奪い取る宣言からしばらくして、二宮お手製の朝ごはんが出  
来上がった。

焼き鮭、漬物、海苔——そしてご飯と味噌汁という、古き良き和食  
がテーブルの上に三人分乗せられていた。控えめに言って、めっちゃく  
ちやうまそうだ。

「ふっふーん！　こう見えて炊事・洗濯・掃除は一通りこなせるツスカ  
らねー！」

「流石だな」

「ふっふふーん!!」

めっちゃドヤ顔してる。あと、その胸を張るポーズやめなさい。ムラムラしてくるから。前言撤回して襲い掛かりたくなっちゃうから。「乳首立ってるぞ」

「立たせてるんスよ?」

エプロンを押し上げ、その存在を主張する二つの突起。それは二宮が絶賛発情中という事実を、実にシンプルに伝えてくれていた。

いやどんだけセックスしたいんだよ、このドスケベメス豚オナホが。

「そうか……じゃあイタズラされても文句は言えないな」

「んほおっ?!?!」

両手で乳首に狙いをつけ、人差し指と親指で思いっきり摘み上げ、捻り上げる。

それだけで二宮はアへ顔を晒し、股間から潮を噴き出した。先輩に負けず劣らずのクソザコ乳首だな、コイツは。

「んにいいいっ?い、いきなり乳首つねっちゃだめツスう?乳首、弱いからあつ?」

クソザコ乳首にお仕置きするため、ぷつくりと膨らんだ先端を捻り上げる。それだけでこのマゾオナホは白目を剥き、白く粘ついた本気汁を漏らす。

無様なアへ顔だ。ぶっちゃけ興奮する。空っぽだった身体の奥から、ムクムクと性欲が顔を出す。

「はい、おしまい」

「ふえ?」

とはいえ、流石にここまでだ。いい加減に朝ごはんとしよう。ねぼすけなお姫様も起きてきたみたいだしな。

「ふあ、むにゅむにゅ……おはよう、二人とも」

「おはようございます」

「お、おはようございますツス?」

寝ぼけ眼をゴシゴシ擦りながら、先輩が部屋から出てきた。ご飯と味噌汁のいい匂いに釣られたのだろう。

「んお? これは……凜花ちゃんが作ったものだね?」

「よく分かりましたね」

「そりゃあ分かるさ。なんたって凜花ちゃんはエプロンをして……つて、後輩くん」

なんでしようか、先輩。

「凜花ちゃんの太ももから、何らかの液体が垂れているんだが？」

「んっ？」

「あー……ははは」

どうやら先輩の目は誤魔化せなかったらしい。

僕たちは二人揃って愛想笑いを浮かべながら、そそくさと席につくのだった。

## 先輩と後輩をまとめてブチ犯す鬼畜ドS後輩くん

「なんだ、凜花ちゃんのスケベ汁だったのか。てっきり後輩くんの精液だと思ってしまったよ」

先輩も席について、三人で朝食を摂っている最中。弁明を聞いて、先輩は納得したように深くうなずいた。

食べながら喋るのは行儀が悪いが、たまには良いだろう。こうしてワイワイしていると、まるで家族が増えたみたいで嬉しくなるし。

「いや、最初から分かつてはいたけどね。感度3000倍薬を使ってあれだけ搾り取ったのだから、流石の後輩くんと言えど少しは落ち着くだろうってね」

「じゃあ、なんであんな真に迫った顔してたんですか」

割りとガチで精液だって疑ってなかったか。その証拠に、席につく前に二宮の太ももに垂れていた液体を指で掬って匂い嗅いでたし。やめて差し上げろ。

「そ、それはその……」

「うんうん分かるツスよく？先輩の性欲は底無しツスからね？たった一回エッチしたアタシでも分かるツス？」

「えっ、そんなにか？」

初セックスしたばかりの二宮にも分かるくらい性欲つよ……いな、僕。自覚あったわ。

「だとしても、流石に生でセックスはしませんよ。朝っぱらですし」

「わたしとは朝から激しいセックスしていたじゃないか」

「それはあれです。先輩がスケベでエロすぎる身体してるから、つい我慢できなくなっただけです」

見目麗しい金色の髪に、鮮やかな碧色の瞳。更に子供みたいな背丈に似合わない、たつぷりと実ったKカップ爆乳と安産型桃尻。興奮するなという方が無理だろう。

「後輩くん……？」

「あー！ なんスかそれ！ アタシの身体は我慢できるレベルのエロさでしかないって言うんスか！」

「いや、二宮も充分エロいぞ」

ただ、先輩の場合は身長と体型のギャップがさらなる興奮をそそるというか。

まるで爆乳小学生を犯しているみたいなの背徳感がスパイスとなつて、食べる手が止まらなくなるといふか。

なんというか、うん。そんな感じだ。

「あつたま来たツス！ ミント先輩、どっちがエロい身体してるか勝負するツス！」

「お、いいねえ——受けて立とう」

「やめなさい二人とも。食事中ですよ」

だから、いきなり立ち上がって服を脱ぎ始めないでいただきたい。せめて食べ終わるまで待ってくれ、マジで。もうすぐ終わるからさ。

「アタシのプロポーションに恐れ慄くといひツス！」

「ふふ、甘いね凛花ちゃん。男はわたしみたいな、バカでかい乳と尻が大好物な生き物なのさ」

「もぐもぐ」

先輩は珍しくちゃんと着ていた服を脱ぎ始め、二宮はエプロンを勢いよく脱ぎ捨てた。

そうして目の前には、大小二つの魅惑的な肌色が並んだのだった。いや躊躇が無さすぎるだろ、おい。

「ふふん？ やっぱアタシの健康的な肉体美の方がエロいツス？」

「いいや？ わたしのデカパイとデカ尻の方がエロいぞ？」

「……もぐもぐ」

両手で乳を持ち上げるな、目に毒だ。

「さあ、先輩？」

「さあ、後輩くん？」

最後の一口を、食べ終わる。その瞬間、二人は揃ってこちらにお尻を向けてきた。

健康的で魅惑的な、女の子の生尻。それが二つ並んで、生殖本能を激しく揺さぶってくる。

「……………」



咀嚼、飲み込む。よし、全部食べ終わった。エネルギー充電完了だ。

「あんっ?」

「あーっ!!」

ガシツ、と両手で先輩のお尻を鷲掴む。そしてそのまま、デカ桃尻に顔を埋めておまんこに舌を這わせる。

うん。やっぱり食後のデザートにはピッタリだな、先輩のおまんこは。

「なんでツスカ先輩〜!」

「ふ、ふふん?これで、あんっ?はつきりしたようだね?わたしの方が、おうっ?魅力的な身体だということが?」

横から二宮の嘆く声が聞こえてくるが、こればかりは仕方ない。やはりというか、今の一番はやっぱり先輩だ。そこだけは譲れない一線なのだ。

「じゅるるっ、じゅぷっ、ずろろろっ」

「ひいつ?後輩くんの舌?おまんこの中に入って、ナカ全部舐められてえええっ?」

「むく……!」

快感に身体をくねらせる先輩と、それを羨ましそうに見つめる二宮。

そんな目で見るなよ……なんだか謎に申し訳なくなってくるだろ。

「ふ、ふふっ?悪いね凜花ちゃん?まだまだ後輩くんの一番は譲れない——おっほお?!」

なんかペラペラ喋ってうるさかったので、クリトリスを甘噛みしてやった。

たったそれだけで、先輩はオホ声を上げて尿道から軽く潮を噴き出す。例に漏れず先輩のクリトリスは敏感が過ぎるので、こうして少しじめるだけで簡単に絶頂するのだ。

「ほっ?ほおおおおっ?うにいいっ?イグツ、イツでるう?」

「ぶはっ……さて、しっかりほぐれましたよね?」

「んひっ?」

満を持して立ち上がり、チンポの先端をピタリとおまんこの入り口



恥ずかしくないのか、このクソよわ爆乳マゾ豚先輩がよ。

「あひつ? ひいいいいつ? 後輩くんのチンポっ? みつちり奥まで? ハマってるうううっ?」

「はああ……やっぱ先輩のおまんこ犯してると、安心しますね」

まるで実家のような安心感がある——いや、違うな。僕の実家は結構アレなので、安心は出来ない。むしろ勘当されてせいせいしているレベルだ。

「むっ……後輩くん、いま余計なこと考えてなかったかい」

「エスパーですか?」

凄いな、なんで分かったんだらうか。まあ、ト口顔のまま言っても凄味は全く無いのだが。

「そんなくだらないこと考えてないで、わたしとのセックスに集中したまえよ? 今日こそわたしが勝つのだからね?」

「感度3000倍薬を使って勝てなかった人が……なに生意気なこと、言ってるんですかっ!」

「はえ——ほつきよおおおっ!?!?!」

最奥まで突き入れたチンポ<sup>ポ?</sup>を入り口まで引き抜き、また突き入れる。何の捻りもない、ただ愚直で一途なピストン。

しかし、先輩にはそれが一番効く。

「ほへええええっ?!」

シンプルに真正面から特大の快楽をぶつける。たったそれだけで、先輩は無様なアへ顔を晒してメス堕ちをキめた。

ああ、今日も先輩は可愛いな。

「やっぱ先輩は、チンポ突っ込まれてアへ顔してる時が一番可愛いですね」

「な?っ?なんで?そんな最低なこと?言うんっ?ほおおおっ?」

パンパンパンパン。

ドチユドチユドチユ。

肉同士が打ち付けられる音と、潤った肉穴をほじくり回す音がリビングに響き渡る。

それと同時に、先輩の身体からムワツとメスの匂いが立ち上り、そ

れが余計に射精欲を煽ってくる。

「くっ……いー 出しますよっ、先輩！」

「うんっ?きてえっ、後輩くんっ?」

キンタマから精液が上ってくる感覚を感じ取り、それに合わせて勢いよくチンポをおまんこの奥に突っ込んだ。

射精の予兆を感じ取ったのか、子宮口がさきつぽにチュウつと吸い付く。そんな射精おねだりされたら、応えてあげるしか選択肢は無い。

「出るっ!!」

「んほおおおおおっ?!?!?!?!」

チンポを子宮口に密着させたまま、精液を思いつきり吐き出す。

先輩の子宮に特濃精液をありつたけ注ぎ込んでいく。このぷに口リボデイを孕ませると、本能が叫んでいる。

「ふううう……」

「あへえ……う?」

精液を全部注ぎ終わり、ピッタリとくっつけていた腰を離していく。

先輩の狭い子宮に収まりきらなかった精液が、割れ目からポトポトとこぼれ落ちていく。

「……クソエロいな」

「ひっ?」

まったく、この金髪ぶにロリ爆乳オナホールはどこまでエロくなれば気が済むんだ。こんなんじや一生この身体から離れられないだろうが、どうしてくれんだ。

「ひうっ?も、もう一回するのかい?」

「ダメですか?」

「い、いいよ?後輩くんの好きなように、わたしのドスケベボディを貪っておくれ?」

ムラムラする衝動のまま、先輩の桃尻をガシツと鷲掴みにする。

そうして、再びチンポを突き入れようとして——した所で。

「ちよーっと待ったッスー!」

「へ?」

「あん?」

隣に立っていた二宮から待ったが掛かる。

自らの細い指でおまんこをぐちゅぐちゅといじり倒し、全身からメスの匂いを漂わせながら、二宮は情欲にまみれた瞳でこちらを見ていた。

ぶっちやけかなりエロい光景だった。先輩の中でぶっこ抜いて無かったらヤバかったな。

「どうした、二宮」

「どうしたもこうしたもないツスよ! 一回中出ししたんスから、今度はアタシの番じゃないんスか!」

「そうなんですか?」

「いやいや、言い掛かりだね。だってそんなルール、どこにも存在してないだろう?」

先輩が得意顔で、ふふんと鼻を鳴らす。そんなドヤ顔すらエッチに見えるのなんなんですかね。ブチ犯すぞ。

「ま、というわけで——大人しくそこで指をくわえて見ていることだね?」

「うう……!!」

二宮の目がうるうると滲む。いやまあ、さつきからずっとお預けしてるし、流石に可哀想になってきたな。

「せんぱあい?せんぱあああい?」

「……………」

涙目のまま、本気汁でトロトロになったおまんこを割り広げる。

ねつとりと糸を引く液体がおまんこから一筋流れ落ち、ポタリとフローリングの床を濡らした。

「……………すみません、先輩」

「えっ、ちよっ」

先輩のおまんこに狙いを定めていたチンポを引き下げ、そのまま二宮の方へと歩いていく。

「え——んっほおおおおっ  
!?!?!?!??」

「あーっ!？」

正常位の体勢のまま、下から一気にチンポを突き入れる。その瞬間、二宮はアへ顔を晒して絶頂した。

先輩に負けず劣らずのクソザコまんこだな。犯しがいがある。

「しえんぱいっ? しえんぱいっ?」

「こ、後輩くん、どうして……」

すみません、先輩。でも、さっきの二宮言葉にも一理あるなっと思っちやっただです。

「同じ数だけ犯してやらないと、平等じゃないですから」

一番も二番も関係ない。みんな平等に、壊れるまで犯し尽くしてやる。

「なので——もう一回犯しますからね、先輩」

「は……そ、そうこなくちやね——後輩くん?」

「んひいっ?」

二宮のアへ声が響き渡る中、僕と先輩はお互いに笑って、淫らな愛を確かめ合うのだった。

チンポを丁寧にお掃除するロリ爆乳ぶにまんオナホ先輩

結局、二人にそれぞれ五発ほど射精した所で、ようやくチンポの猛りが収まった。

白濁に塗れてフローリングの床に転がる二つのマゾオナホを見下ろして、なんとも言えない征服感に浸る。マズいな、癖になりそうだ。「しえ、しえんぱい？凄すぎッス〜？」

「先輩くんっ？朝から元気過ぎだよっ？っほお？」

昨日あれだけ出したのに、出した精液の量は微塵も衰えていない。我ながら、エロ同人みたいな性欲してるなと呆れるほどだ。

「汚れちやっつたんで、綺麗にお掃除してくださいね」

「いいとも？はぷっ？ちゆるっ？れろれろっ？じゆるるるるうっ？」

「あっ、ズルいッスう？アタシも先輩のチンポお掃除するッスう？」

先輩が先端を咥え、二宮が幹と根本を舐めしゃぶる。熟練したテクニクと、不慣れだが献身的という、異なる舌の動き。それらに強烈な快感を感じ、思わず背筋が震える。

「んもっ？」

「はむうっ？」

「うおっ……!!」

挙句の果てには、二人揃ってキンタマにしゃぶりつく始末。女としてのプライドを投げ捨て、完全にチンポに奉仕するだけの淫らなメスと化している。

暖かい口の中でキンタマを頬張り、舌で転がしながらしゃぶる姿は最高にエロい。緩やかだが鋭い刺激を受けて、急速に精液が作られているのが分かる。

「はあー………つたく、どんだけチンポをイライラさせれば気が済むんですかね——このオナホ共は」

「ちゅぱっ？えへへえ？」

「ちゅぽっ？あははあ？」





顔を歪ませ、オスとメスの淫らな匂いをたっぷり含んだ、特大のザーメンゲップをかましてしまった。

「あはは？凜花ちゃんエツ口？そんな派手にザーメンゲップできるなんて、才能あるね？」

「う、ううう？は、恥ずかしいツス〜……？」

何を今更恥ずかしがることがあるのだろうか。恥ずかしいところも全部見られ、思いつく限りの醜態を晒してアへっていただろうに。

「大丈夫だ。二宮の恥ずかしい映像はちゃんと脳内メモリに記録してあるからな」

「ぜんぜん安心できないツスよ!？」

「ふふ？凜花ちゃんはまだまだまだウブだねえ？でも、流石のわたしでもザーメンゲップはちよつと恥ずかしいかな？」

「へえ」

それは良いことを聞いた。

「んっ？後輩くん、どうしてまたチンポをビキビキに勃起させているのかな？」

そんなの決まっている。

「えっ？ちよつ？まさか？こ、後輩くん、やめっ——おっぽお<sup>!???</sup>」

先輩の頭を掴み、チンポを啜えさせて一気に喉奥まで突っ込む。

「おごっ？んごおっ？ごおえっ？じゅごっ？むぶっ？ぼえっ？ずろろろろおっ？」

「うわあ？先輩、相変わらず容赦ないツスねえ？」

先程と同様に、先輩の口オナホでチンポ全体をしごいていく。

先輩は二宮よりも体温が高く、唾液の粘度も高い。なので、まるで熱めのお風呂に浸かっているような心地よい感覚を感じることができきる。

「あー……最高ですね、先輩」

「おぶうえっ？しよっ、しよれは？よかつ？んぼおおっ？」

「鬼畜ツスねー。ミント先輩、窒息しちやいますよー？」

先輩はこの程度でへばったりしない——むしろ乱暴にされて興奮

している。

その証拠に、先輩のおまんこからはぷしゅぷしゅと潮が噴き出している。あれは喉奥を突かれて喜んでいいる反応なのだ。とんだマゾメスだな。

「そう言うお前も、喉奥突かれて興奮しただろ？」

「……な、なんのことやらツス？」

誤魔化そうとしても無駄だぞ。未だにおまんこからポタポタと垂れている本気汁が、その証拠だ。

マゾの才能ありすぎなんだよなあ、この二人。

「安心しろ。先輩の口で精子ぶっこ抜いたら、また犯してやるからな」  
「ひっ？せ、先輩マゾで底なしっすね？エロ漫画でもそんなに出さな  
いツスよ？」

それは作者によるだろ。

というか、それだけ二人がエロ過ぎるのが悪い。無限に精液作られるんだが。ちよつとはそのメスフェロモン抑えろや、発情メスオナホが。

「あー出る出る……出しますよ、先輩っ！」

「んんっ？じゅるるっ？じゅぼぼっ？ぐぼっ？ぐぼっ？ずろろろ  
ろおっ？」

そろそろ限界が近くなってきたので、先輩の喉まんこでおもいつき  
りチンポをしごいていく。これだけ乱暴にされているというのに、先  
輩の碧眼にはハートマークが浮かび上がっていた。

まったく、どうしようもないマゾだな、このKカップ爆乳金髪ロリ  
ぷにオナホ先輩は。

「イクっ……!!」

「んぼおおおおおおっ?!?!??」

先輩の口におもいつき!腰を打ち付け、ありつたけの精液を解き放  
つ。

先端が食道を突き抜けて、胃にそのまま精液が落ちていく光景を幻  
視した。気持ちいい。

「ふうー……!!」

「ん？ふ？ー？ん？ふ？ー？」

先輩の口を蹂躪したまま、果てしない快感に背筋を震わせる。女の証であるおまんこをめちやくちやにするのも気持ちいいが、こっちはこっちで先輩という人間そのものを犯してる感があつて、大変興奮する。

「ずろろろお——つぶはあ？はーっ？はーっ？死ぬかと思つたよ、後輩くん？」

「その割には余裕そうですけど？」

口からチンポを引き抜き、ようやく長いお掃除が終わつた。

先輩は呼吸こそ乱れているが、口調もしっかりしているし、まだまだ余裕そうだ。

「あのねえ、人間は呼吸しないと死ぬんだよ？ そこのところ分かつてるかい？」

「呼吸に、食事に、睡眠に……人間は摂らないといけないものが多すぎますよね」

「そういう話をしてるんじゃないん——つぶ？おげええええつぶ??？」

一呼吸遅れて、先輩がその可憐な口から下品なザーメンゲップを披露してくれた。

流星は先輩だ。ゲップをする姿すら可愛いとか、反則がすぎる。

「けぷ？そ、想像以上に恥ずかしいな、これは」

「これでザーメンゲップ仲間ツスね？」

「かなり不名誉な仲間だね、それは……」

口を押さえて赤面する先輩は実に可愛らしい。先輩が照れてる所とか、何年ぶりに見ただろうか。かなりレアな光景だった。

「さて、後輩くんのムラムラも収まったことだし、出掛ける支度をしてくれたまえ」

「え、どこか出掛けるんですか？」

「ああ、ちよつとね」

先輩が出掛ける際、諸々の準備をするのは僕の役目だ。とはいえ、流星にコーディネートくらいは自分一人ですてほしいものだが。

「ああ。実は陽毬ちゃん少し約束を置いてね」

「約束ツスか？」

「後でちゃんと相手するって言ってただろう」

「ああ……ミント先輩、律儀ツスねー」

やれやれといった様子で、二宮が肩をすくめる。それにしても一之瀬絡みか。なんの約束をしたんだろうか。

「後輩くんも準備したまえよ。一緒に行くんだからね」

「え、僕も行くんですか？」

「当たり前だろう？ わたしが一人で目的地に辿り着けると思ってたのかい？」

先輩がニヤリと笑った。何やら面倒くさそうな予感がしてきたな。

これは先輩の準備だけして逃げるが吉だな、うん。付き添いは二宮にやってもらおう、そうしよう。

「さあ、準備をしようか後輩くん」

そんな僕の内心を察知したのか、先輩は不意に右腕へと絡みつくように身体を密着させてくる。おまけにその豊満なKカップ爆乳で、むにゅんと腕を挟み込んでくるオマケ付きだ。

ズルい。そんなことされたら、世の男はみんな言いなりになるしか選択肢が無くなってしまっじやないか。

「……はあ、分かりましたよ先輩」

ため息をつき、覚悟を決める。

結局のところ男というのは、おっぱいには絶対に勝てない生き物なのかかもしれない。

後輩くんにマウントを取りたいKカップ爆乳ぷに口  
リオナホ先輩

「さて、待ち合わせ場所はここだよ」

「ここだ、つて……」

出かける支度を済ませ、街に繰り出してから数分後。僕たち二人は、とあるラブホテルの前にいた。

普通のホテルを模した、どこにでもあるような見慣れた建物。もちろん先輩と一緒に何回か入ったこともある。

「ラブホじゃないですか」

「そうだよ?」

いや、そうだよじゃないが。

「なんでラブホなんです?」

「そんなの、エッチなことをするからに決まっているじゃないか。後輩くんはそんな簡単なこともわからなくなったのかい?」

バカでかいKカップ爆乳をブルンと突き出し、先輩はドヤ顔で胸を張った。

生意気な口のききかたしやがって。ブチ犯すぞ、このドスケベロリ爆乳先輩がよ。

「さ、入るよ後輩くん。中で陽毬ちゃんが待っているはずさ」

「はあ……はいはい」

なんかもう、抵抗する気力もないわ。大人しく見届人に徹しますよ、今回は。

「たしか、302号室って言ってた筈だよ」

「……………」

受付のいないフロント。甘ったるい香り。エレベーター前に置かれた、サービスらしき数種類の入浴剤。

せっかくなので薔薇の香りとか言うやつを選んで、紙コップに入れて持っていく。安物を使っているとはいえ、入れれば少しはリラック  
ス出来るだろう。

「おーい、何やってるんだーい？ 行くよー」

「こういう時だけ行動早いのに、なんとかありません？」

一人だけさっさとエレベーターに乗り込んでる先輩の元へ、駆け足で追いつく。

そのまま扉が閉まり、先輩がボタンを押せば、エレベーターは一直線に上の階へと上がっていく。

(甘い匂い……)

隣に立つ先輩から、甘ったるいメスの匂いがする。

もう飽きるほど嗅いでいるはずなのに、未だにその匂いを嗅ぐだけで心臓の鼓動が早くなる。

「……………」

「おっ！」

気づけば、横から先輩の身体に手を回して、その豊満なKカップ爆乳を鷲掴みにしていた。

ブラジャーの上からだが、やはりえも言われぬ柔らかさを感じる。

「なんだい後輩くん、我慢できなくなったのかい」

「いや、その……はい」

「ふふ？ 正直でよろしい」

ラブホに來ると、否応無しにこれからエロい事をするという気分になつて、気持ちの昂りが抑えられなくなる。

先輩のおっぱいの感触、先輩のおまんこの感触、先輩の快樂にとろけた顔——それらすべてを鮮明に思い出して、心臓の鼓動が高まっていく。

「仕方ないなあ」

先輩が背中に手を回し、ブラジャーのホックに手を掛けた。

パチン、と軽い音がした直後。パサリ、という音と共に、バカみたいな大きさのブラジャーが、先輩の小さな手の中に収まっていた。

「ひとまずこれで我慢したまえ」

たった今まで、先輩のKカップ爆乳を包んで支えていた上質な布切れ。まだ先輩の香りと体温が残った生温いそれは、まるでオスを誘う食

虫植物に似ていた。

「せ、先輩……」

「後でちゃんと返してくれよ。じゃないとノーブラで帰ることになってしまうからね」

たぶん、と胸を張って——胸を震わせて——先輩は意地悪そうに笑った。

ゆっくりと、差し出されたそれを受け取る。手に伝わる重みと温み。それらが更に鼓動を加速させる。

「お、着いたね」

それと同時に、エレベーターのドアが開いた。もう目的の階へ着いてしまったらしい。

意気揚々と飛び出す先輩に続いて、同じく薄暗い通路へ踏み出す。

「さ、行くよ後輩くん」

「すー……はー……あだっ」

「何やってるんだいキミは？」

せつかなので先輩のブラジャーの匂いを堪能しながら歩いていたら、壁に顔をぶつけてしまった。

おのれ……ブラジャーで前が見えなくなるとか、どんだけおっぱいデカいんだよ。この金髪ぶにロリ爆乳オナホがよ。

「まったく。わたしも大概だが、後輩くんも相当変態だよね」

「それは、まあ……そうですね」

否定はしない。僕と先輩は、お互いに気持ちいいことが大好きな変態同士だ。

だからこそこうして一緒にいるし、何度も身体を重ねている。まあ一言で言うならば、めっちゃくちや体の相性が良いということ。

「あ、そういえば」

ブラジャーを吸っていて思い出したのだが、そういえば先輩とはやってないプレイがあったな。

「先輩、パイズリだけはしてくれないですよね」

「え？ あ、あー、そうだったかな……？」

「ずっと疑問に思ってたんですよ。なんでですか？」

自慢じゃないが、チンポのサイズはかなり大きいと自負している。それこそ、先輩の爆乳に挟まれても問題ないサイズであるはずだ。

だというのに、先輩はこれまで一度もパイズリをしてくれたことがない。不思議だ。

「……………」

「先輩？」

先輩は歩みを止めて、その場で立ち止まる。

「……………てたんだよ」

「え？」

そうして少し俯きながら、何か言葉を発した。

「れんしゅう……………してたんだ」

「練習？」

なんの練習だろうか。なんて、話の流れを汲めば考えなくても分かる。

「パイズリの……………練習、してたんだ……………デイルドで」

「ああ。だから最近、デイルドが出しっぱなしになってることが多かったんですね」

愛液じゃなくて、唾液でドロドロになったデイルドが頻繁に部屋に放置されてる謎が、ようやく解けた。

あれは先輩の練習跡だったわけか。そういえばサイズもかなりデカめのヤツだったし、それなら納得だ。

「でも、練習するくらいなら本番で慣れればいいじゃないですか」

「簡単に言うなあー！」

だぶん、とおっぱいを派手に揺らしながら、先輩が振り向いた。

ノーブラなせいで、服の上からでもおっぱいの輪郭が丸わかりだ。実にエロい。

「ここはこう、ビシッとパイズリをキメて、後輩くんを腰砕けにさせて、イニシアチブを取るために決まってるじゃないか！」

「あ、まだ自分がエッチで優位に立つこと諦めてなかったんですね」

つい昨日、感度3000倍薬を使って敗北したというのに、懲りない人だな。



でもまあ、そんな所が可愛らしいのだが。

「そ、そうとも！　パイズリは手コキ、フェラチオに続く女性有利シチュエーションだからな！　これで後輩くんを骨抜きにしてやるつもりだったのだよ！」

「パイズリに夢を見過ぎでは」

そもそも、そんな気持ちよくないって聞くけどなあ、パイズリ。

確かに経験則から言っても、あの愛液と本気汁でふわとろになった先輩の極上おまんこには、絶対敵わないだろうという確信がある。

それこそ何らかの薬でも使わないと、先輩の極上おまんこを超えるのは不可能なんじゃないかと。

「そ、そんなこと言ってられるのも今のうちだよ！　見てるといいさ——いずれわたしのおっぱいの中で、枯れ果てるまで射精させてあげるからね！」

「わー、それは楽しみですねー」

いつもの自信満々な様子とは違う、少しだけ不安が見え隠れする声と表情。そんな精一杯背伸びしたドヤ顔をする先輩が可愛すぎて、つい頭を撫でてしまった。

うん、マジで可愛いなこの人。

「あ、頭を撫でるんじゃない！」

「すみません。先輩が可愛くて、つい」

「か、かわっ!？」

可愛いという素直な気持ちを告げただけで、一気に顔を赤くする先輩なのだった。

いやマジで可愛すぎか？

「よしよし」

「う、ううう……!？」

ちよつとこれは癖になりそうだな。顔真っ赤にしてる先輩尊すぎる。無限に見てられそうだ。

「せ、せめてそういうのは、セックスしてる時にやってくれないか……」

「分かりました。じゃあ今度は、目一杯イチャラブセックスしましょ

うね」

「~~~~つ??」

いつもしてるハードなものいいけど、ひたすら甘く、とろけるようなセックスも実にいいものだ。

最近は全然してなかったし、今度やるときには先輩の耳元でひたすら愛の言葉を囁いてやろう。先輩への果てしない思いを、全部ぶつけてやる。

「さ、さあ！　そうと決まれば、早く陽毬ちゃんの元へ向かおうじゃないか！」

「そうですね」

そういえばここラブホの廊下だったな。いつまでもこんなところで話し込んでたら、流石に他のお客に迷惑だ。

「えつと……あ、あつたあつた」

先輩と二人、足早に歩いて、すぐさま目的地の前まで辿り着く。

そのまま先輩が指でインターホンを押せば、ピンポンという音と共に中で何やらバタバタと激しく暴れる音が聞こえてきた。

防音大丈夫なのか、この部屋。

「いらつしやいませ！　せんぱあ〜い!!」

「おつと」

ガチャリ、と勢いよくドアが開いて、中から小さな人影が飛び出してくる。

黒いウェーブの髪に、ヒラヒラとしたフリルがあしらわれた白いベビードールという、いやらしさ全開の格好。

まるでお伽噺に出てくる妖精みたいな格好をしたそいつは、勢いよく先輩のおっぱいにダイブをかました。

「会いたかったですよお、せんぱあ〜い？」

「よしよし、陽毬ちゃんは今日も元気だね」

甘い声を出しながら先輩にじやれつく姿は、まさしく猫と呼ぶに相応しい。

うん……まあ……こうして外から見てる分には可愛いと思えるのも、猫と同じというか。

「で、なんで北条までここに居るわけ？」

ギリリ、とその瞳が僕を射貫く。

出会って早々、僕はいつものように眼光という鋭い爪で、一之瀬に勢いよく引っ搔かれるのであった。

大好きな先輩といちやいちやする合法貧乳ぷにロリ同期

「なるほどー、じゃあ北条は先輩の付き添いで来ただけなんだー？」

先輩と一之瀬と共にラブホの一室に入った僕は、ベッドに腰掛ける二人を見上げながら、ベッド脇の床に正座をさせられていた。

なんでこんな事になってるんだろう。せめて椅子に座らせてくれませんかね。

「ああ。先輩一人だと電車も乗れないからな」

せめて公共交通機関くらいは一人で利用できるようになってほしいんだが。いや割とマジで。

「そういった事はすべて後輩くんに任せているからね。そこは勘弁してほしいな、陽毬ちゃん」

「いえいえー？むしろ欠点がある先輩も素敵っていうかー？もう私がお世話したいっていうかー？」

いや変わらないが。というか、先輩のお世話をできるのは僕だけだからな。素人のお前には無理だ。

「得意顔で言う事じゃないと思うんですが……」

「なに、それだけ後輩くんを信頼しているという事さ」

だから、そういう心が踊るようなセリフを真正面からぶつけないでほしい。つい襲ってしまいたくなるだろう、このぷにロリKカップ爆乳オナホが。

「まあ、陽毬ちゃんには実験で色々なことをお願いしているし、役割分担ということでは我慢してほしいな」

「はいー？先輩のためならどんな材料でも揃えて見せますのでー？」

大丈夫か一之瀬。それは破滅まっしぐらの道だと思うんだが。主にお財布事情が。

「というわけで、陽毬ちゃんには普段からのお礼も兼ねて、ご褒美をあげようと思うのだが」

「こ、光荣ですー？」

「ふふ、さあ力を抜いて」

「あつ……っ?」

するり、と先輩がベビードールの中に手を滑り込ませ、一之瀬のちっばいに手を触れる。

元々感度が高いのか、憧れの先輩に触られることに興奮しているのか。一之瀬はそのぷっくりと艶やかな唇から、淫靡な熱を孕んだ吐息を上げた。

「おや、感度がいいんだねえ陽毬ちゃん」

「あつ? ひいうつ? しえ、しえんぱあくい?」

人差し指で乳輪をなぞり、焦らしながら準備を整えていく。

くるくると何度も指を回し、乳首に触れず乳輪だけを愛撫していく。

「ふふっ。陽毬ちゃん、おっぱいは小さいのに乳輪は大きいんだね」

「ひやあああ? あ、あんまり見ないでください? 恥ずかしいですから?」

「恥ずかしがることなんてないさ。とても可愛いよ」

「んひやうううっ!?!」

そのテクニクは正に魔性というに相応しい。指先一つで相手の身体を支配し、自分の望むままに快楽を与える。この場で一之瀬の身体をコントロールしているのは、間違いなく一之瀬本人ではなく先輩だった。

「これは魔性だわ……」

謂わず呟いてしまうくらいには今の先輩は場の空気を支配していた。思えば昨日も、二宮の身体をコントロールしてセックスしやすいように誘導していたのを思い出す。

なんとというか、先輩はチンポが絡まなければ強いのだと、再確認させられてる気分だ。

「ほーら、乳首がぷっくりしてきたよ。物欲しそうにぴくぴく震えちゃって……お望み通り、つまんであげようか?」

「ど、どうぞ? ひまりの身体は、ぜんぶミント先輩のもですから?」



ビードールにいやらしいシミを作る。

「さて、では期待しているおまんこの方も触ってあげるとしよう」

「あ、ありがとうございます。ごいませいませいゆ〜?」

ゆっくりと、先輩の手が一之瀬の股間に伸びていく。

「んっきゅ?!」

先輩の指が紐パン越しにおまんこへ触れた瞬間、ぶちゆりと粘ついた水音がして、割れ目から一気にシミが広がっていった。

割れ目の中に溜め込んでいた愛液と本気汁が、一気に溢れ出したのだろう。紐パンでは吸いきれなくなった量の液体が、ドロリと隙間から漏れてベッドに落ちる。

「ふふ、すごい敏感だね」

「あ、ああ〜っつ??」

「いつもこういうのかい? それとも、わたしに触られて興奮しちゃうのかな?」

「ん〜っつ??」

目を細めて、おまんこから送られてくる快楽を堪能する一之瀬。

パンツの上から割れ目を開かれ、ぷっくりと膨らんだクリトリスをくりくりと弄られている。とても気持ちよさそうなトロ顔だ。

「ほら、わたしの触ってくれるかい?」

「ひゃい……?ミントしやまのおっぱい、ふわふわでしゅ〜?」

朦朧とする意識の中、一之瀬は先輩のKカップ爆乳に手を当て、欲望のままに揉み込んでいく。

柔らかい二つの双丘が、もにゅん、ぐにゅん、と自由自在に形を変えていく。エロすぎんだろ。

「あつ?ん?ふふ、えっちな触り方だね、陽毬ちゃん?」

「ほわあ?あー、はむっ?」

「んっ?!」

熱に浮かされた表情のまま、一之瀬は偶然目の前にやって来た先輩の乳首にむしゃぶりついた。

突然の刺激に、ビクン、と先輩の身体が跳ねる。ああもう、エロすぎるといふ感想しか出てこない。語彙が死んでる。

(生殺しだな……)

さつきからずつと、オスの本能が目の前のメスを犯せと訴えかけてくる。二つの幼肉が絡み合っている淫らな光景に、チンポがビキビキとえげつない程に勃起している。

しかし、立ち上がろうとする度に先輩がそれを視線だけで制してくる。まだ早い、と目で語っているようだ。

「んっ、ふふっ…いい感じに身体も温まってきたね?」

「あっ?」

紐パンの結び目をしゅるりと解き、無毛の割れ目が曝け出される。体型相応にツルツルで毛の一本も生えていないそこは、先輩のぷにロリおまんこと比肩するほどの淫らさを孕んでいた。

二宮は流石に生えてたので、無毛のぷにマンを見るのは二人目だ。くぱくぱと物欲しそうに口を開け、本気汁を垂れ流す様子はエロいの一言に尽きる。

「今度はクリトリスも直接……ああ、一緒にナカも弄ってあげようか」  
「お、おねがいしまひゅ?」

ゆっくりとゆっくりと、乳首と同じく焦らすように手を伸ばす。

紐パンの上からでも身体がビクビク痙攣するほど感じていたのだ。直接触ればどうなるのか<sup>なん?</sup>なんて、想像するより容易いことだった。

「んっひいおおおおおっ?!?!」

親指でクリを潰し、人差<sup>し</sup>指と中指をトロトロのおまんこへ挿入する。

先輩が大好きな責め方だ。覚えてたんだな。

「んやああああっ?!?!」

「あはは、すごいイッてるね」

先輩のテクニクが凄いのか、一之瀬がクソザコおまんこなのか。どちらにしても、一之瀬の乱れっぷりは凄まじい。

身体をくねらせ、いろんな汁をまき散らし、全身から淫らなメスの匂いを振りまいている。

「さて、下準備はこれくらいでいいかな」

「はーっ?はーっ?」



チラリと、先輩がこちらを向いた。

その顔はまるで悪戯っ子のような笑みを浮かべていて、何を求めているのか何となくわかった。

「さあ出番だよ、おちんぽ様？」

まったくもう、先輩は果てしなく鬼畜だなあ。

本当は後輩くんの事が好きだったツンデレロリ同期

「それで、陽毬ちゃんは後輩くんの事をどう思ってるんだい？」  
『ふえ？』

時間は巻き戻り、昨日の深夜。つまるところ、北条と二宮がセックスを終えて寝静まった後。

未だに意識を覚醒させていたミントは、パソコンを使って後輩である一之瀬にリモートで通話をしている最中だった。

「だから、陽毬ちゃんは後輩くんの事が好きか嫌いかという話だよ」

『そ、そんなの……嫌いに決まっていますー。なんたってあいつは、愛しのミント先輩を奪った奴ですからー』

画面に映る顔はこれ見よがしに不機嫌だ。しかし、目ざといミントは見逃さない。一之瀬の呼吸が若干荒くなっている事を。

「じゃあ質問を変えよう。後輩くんのチンポに興味は無いかい？」  
『……………』

無言。しかし会話の流れから、この無言はどんな言葉よりも雄弁に答えを語っていた。

何より、頬が少しでも赤く染まっている。これではどう思っているのかなど丸わかりだ。

『……す、少しだけ、興味はありますー』  
「だよねえ？」

女であるミントだからこそ理解できる。アレを前にすれば——どんな女であれ——たちまちメスとして陥落してしまうだろう、と。

「あのチンポは凄いや。長さは一級品で、硬さも最高峰。何発出しても萎えないし、女をメスにする匂いまで放っている」

『……ゴクリ』  
「カリ首は的確にGスポットをえぐり回し、赤黒い亀頭は果てしなく子宮口をどちゅどちゅ突き上げてくる」

『はぁ……………？』

うつとりと目を細め、チンポの良いところを語っていくミント。

そんなミントの様子に惹かれ、一之瀬もまた悩ましげに熱い吐息を

つく。

「そして何と言ってもその射精量！ お腹の奥が熱い精液でたつたぷに満たされるのは、女として最高の快感を感じられるからねえ」

「んう……!?!」

ついにもじもじと肩を揺らし始めた一之瀬。

それを待っていたように——見計らったように——ミントは笑みを深めて、言葉を発した。

「本物を見たくないかい？」

『ほん、もの……』

一之瀬の視線が、悩ましげに揺れる。その瞳の奥に好奇心と劣情の光が宿るのを、ミントは見逃さなかった。

「見せてあげるよ、本物のおちゃんぽ様をね？」

三個目のオナホを作る準備は、こうして呆気なく整ったのだった。

☆☆☆

「……いいんですか？」

「いいも何も、私は持ってきた特製の肉おちゃんぽ様バイブを使うだけだよ。これを使えば、擬似的にセックスしてる気分になれるからね」

言ってることがめっちゃくちゃなんですすがそれは。

「それにこうして、陽毬ちゃんの上に乗っちゃって……と」

「むぎゅう?」

先輩がベッドの上でぐったりしている一之瀬の上に覆い被さり、バックの体勢をとる。

おっぱいで一之瀬の顔が埋まってるんだが。大丈夫か、あれ。窒息死しないだろうな。

「おまんこどうしをくつつけて……はい、出来上がりだよ？」

そしてそのまま、身体を落として無毛のぷにロリおまんこ同士を密着させた。

これは俗に言う、貝あわせというやつだろうか。毛が生えていないせいで、余計にその言葉がしつくり来てる気がする。

「これで陽毬ちゃんのおまんこにチンポをぶち込めば、陽毬ちゃんからはわたしとセックスしてるようにしか見えないうつて寸法さ」

「詐欺では？」

「本人が幸せならそれは真実さ。それに、後輩くんのチンポを挿れられて堕ちない女の子なんていないからね？」

ニヤリ、と先輩が不敵に笑う。

なるほど……そっちがその気なら、敢えてその誘いに乗ってあげよう。

「遠慮はしませんよ」

「もちろんだとも？」

服をすべて脱ぎ、全裸になる。

チンポは痛いほどに勃起しており、今すぐ射精しなければ収まりそうもない。

「まずは、前菜をいただくとしましようか」

「んひっ？」

最初からおまんこに挿入なんて、そんなもつたいたいなことはしない。まずは貝あわせをしている二つの割れ目の間に、チンポを滑り込ませる。

割れ目から溢れる二人分の愛液と本気汁が、チンポをぬちゆぬちゆといやらしくコーティングしていく。

「おお……これは凄いですね」

「ほおっ?!?!、こりえっ?!クリトリスこしゅれるっ?!?!」

割れ目の肉がチンポに絡みつき、極上の快感を提供してくれる。

時折感じるクリトリスのコリツとした感触も、柔らかいまん肉の中でアクセントになっていて非常に最高だ。

「こ、媚びるっ? 勝手に腰がおちんぼ様に媚びるうっ?」

チンポを間に挟んで貝合わせした状態から、へこへことはしたなく腰を振って淫肉を擦り合わせる。

無意識なのか、それとも理性が本能を押しさえられなくなったのか。どちらにしる、だらしない顔で快楽を享受する先輩は非常に可愛らしい。

「ん、ーっ??！」

先輩の動きに釣られるように、一之瀬も拙く腰を動かし始めた。上下に重なったまん肉が、不規則な動きで前後に刺激を与えてくる。

「これ、案外ヤバっ……!」

幹をなぞっていたかと思えば、不意にカリを擦られ。丁寧に根本を啜っていたと思えば、裏スジをたっぷりの蜜で塗りたくられる。

おまんこと違って、刺激される部分とそうでない部分が出てくるせいで、意識が刺激されてる部分に向きやすいのが、これまたいやらしい。

「ほおおおお?」

「んぶうううっ?」

「くうっ……!」

もう出そうだ。

腰の動きを早めながら、キンタマから精液が登ってくるのを実感する。

「っ……!」

「ふわあ?あはっ、出てる出てる?」

最後に一際大きく腰を突き出し、二つの淫肉を思いつきり擦り上げて射精した。

びゆるびゆる、と二人のお腹の間に、濃い精液を思うままに打ち出す。

「ふふ?気持ちよかったかい、後輩くん?」

「……そりやもう、気持ちいいに決まっています」

先輩のおまんこには劣るが、それでも十分気持ちよかった。新鮮な刺激を味わえたので、かなりの満足感だ。

「さて、では本番だよ?」

「んむっ、むぐぐ……ふはあっ!」

Kカップ爆乳に埋まっていた一之瀬が、乳肉をかき分けて間から顔を出す。

なんかすごい間抜けな絵面だな。顔真っ赤だし。

「はあー？はあー？し、死ぬかと思いましたー？」

「おや、すまないね。ちよつと夢中になりすぎていたようだ」

「いえいえー？あたしは先輩に殺されるなら本望と言いますかー？」

「それでいいのかお前……」

なんか同期の倫理観ぶつ壊れてないか？ いや、今更だったか。

「それじゃあセックスするよ、陽毬ちゃん？」

「は、はいー？」

うつとりとした顔で、一之瀬は覆いかぶさる先輩を見つめている。それはまるで恋する乙女のように。

というか、ここまでやっておいて今更なんだが……本当にいいのか、これは。

「なあ、一之瀬」

「はっ？はっ？なーにー??」

「僕はこれからお前にチンポ突っ込もうとしてるわけだが、拒否したりしなくていいのか？」

「きよひー??なんでえー??」

なんでって、それはお前。

「好きじゃない人とセックスするのは、やっぱりイヤなものだろ」

二宮は、こちらを好いていてくれたからセックスをした。

先輩は言わずもがな。

じゃあ一之瀬は？

一之瀬は僕のことを嫌いなんだろう。そんな相手のチンポを騙して突っ込むとか、一番やつちやダメな事じゃないのか。

「だいじょーぶだよー？」

そんなふうにならなうに悩んでいたら、一之瀬がにへら、と笑いかけてきた。

トロトロにとろけた、メスの笑顔だった。

「あたし？ほうじょうのことすきだからー？」

「な……」

なん、だと……!?

「はっはっは、所謂ツンデレというヤツだね。気づいていなかったのかな、後輩くん？」

「いや気づくわけ無いでしょう……」

そんな兆候、微塵も見せてなかっただろうが。ツン百パーセントだったぞ、あの塩対応は。

「考えてもみたまえ。アニメや漫画でよく見る『べ、別にあなたのことなんて好きじゃないんだからねっ!』なんて分かりやすい態度を取る人間が、本当にいると思うのかい?」

「……………」

「本当の人間とは、心の奥に隠した本音を分厚い理性で覆い隠しているものだよ。だからこそ、こうして理性を取り払ってあげれば、その人物の本音が聞けるということでもあるのさ」

「先輩……………」

なるほどな。先輩が執拗な責めで一之瀬をトロトロにしたのは、こういう理由があつての事だったのか。

いやしかし、それにしたって。

「ちよつと……………回りくどすぎませんかね」

「なーに、人間とは大抵回りくどくて面倒くさい生き物なのさ。少しは慣れたまえ」

うーん、たぶん一生慣れないと思う。今後も絶賛振り回される未来が透けて見えるようだ。

「あと先輩、キメ顔してるとこ悪いんですが——その体勢で言っても説得力ないですよ」

「仕方ないだろう! 不可抗力というやつさ!」

デカ桃尻を突き出して、おまんことアナルを堂々と晒しながら言ってもまるで威厳が無い。むしろ無様だ。

「こほん……………さあ後輩くん、不安の種は無くなったかい?」

「ええ、まあ」

一之瀬がいいと言うのなら、それを拒否するつもりもない。遠慮なく、ブチ犯してあげるとしよう。

「一之瀬」

「あ……………」

くちゆり、とチンポの先端とおまんこの入り口が触れ合う。

既にとほとほと本気汁を吐き出しているおまんこは、完璧にセックスの準備が整っているようだった。

「挿入れるぞ」

「うんっ？」

その言葉を合図に、僕は腰を思いっきり突き出したのだった。



大好きな先輩とぐちやぐちや疑似セックスを楽しむ  
真正ぷにロリオナホ同期

その膣内は、火傷しそうなほど熱かった。

「んっほおおおおおっ!??!」

「んぐっ、あっっ……!?!?!」

興奮で体温が上がっているのか、一之瀬のおまんこは先輩や二宮のものより、かなり熱かった。

けれど、不快な熱さではない。まるでチンポだけが熱めのお湯に浸かったような、心地のいい熱さだ。

「どうだい、陽毬ちゃんわたしのチンポは」

「ひやいいいい?しやいこうでしゅううう??」

「誰が先輩の所有物ですか」

「違うのかい?」

「……まあ、半分くらいは違わないですけど」

チンポを突っ込んだ時に膜を破った感触があったから、一之瀬は間違いない。処女だった筈。なのだが、そんなの関係ないとばかりに喘いでいる。

「んふふっ?陽毬ちゃんはかわいいなあ?」

「んむぶうっ??」

そんな状況の中で、先輩は更に一之瀬に追い打ちをかけた。

アへ声をまき散らす口をキスで塞ぎ、口内を蹂躪していく。先輩のテクニックであんな事されたら、十中八九墮ちるに決まってる。

「ちゅぶっ、べろべろっ、ちゅううううっ?」

「おんおおおおおおっ?!?!」

一之瀬の舌を咥え、ちゅうちゅうと吸い上げる。未知の刺激に情けなくアへ顔を晒し、一之瀬は絶頂した。

上の口と下の口。どっちも同時にめちやくちやにされて、もはや何がなんだか分からないといった様子だ。

「ちゅーっ?」

「んんんんんんっ?!?!?!」

「うお、締まるっ!!…!!?!」

先輩が口を吸い上げれば、おまんこが収縮する。

「くっ……負けるかっ!」

「おゝっほあゝあゝあゝ ああああっ?!?!?!?!」

「わ、すごい声だね」

?!?!?!?!?!

勢いよくおまんこを突けば、一之瀬は悲鳴に近いオホ声を上げて絶頂する。

どうしようもなく無様で、エロくて、生殖本能を刺激する声。

普段のおっとりとした雰囲気など欠片もない。ただ繁殖交尾するための肉袋と化した一之瀬は、一途にその快楽を全身で味わい続けている。

「なんだか楽しくなってきたよ」

「奇遇ですね、僕もです」

「ほっ?ほおおおっ?」

上を攻めれば下が反応し、下を攻めれば上が反応する。終わらないループの中で、一之瀬の小さなロリボディには、確実に鋭い快感が刻まれ続けていく。

「ちんぽお?しえんぱいのちんぽお?うえひひひ?」

「おやおや……女のわたしにチンポは付いてないよ。そんなことまで分からなくなる程、頭が茹で上がっちゃったのかな?」

「いつもの先輩と似たようなもんじゃないですか」

「えっ、わたしいつもこんな感じなのかい?」

自覚なかったんかい。

「ほおおおおおっ?!?!おゝ うっ?おゝ うっ?おゝ うっ?」

「うーむ……ここまで無様ではないと思うが……」

「いや、かなり似てると断言できますよ」

白目を剥いて、舌を伸ばして、だらしないアへ顔を浮かべているのは、もはや姉妹かっつくくらいにそっくりすぎる。

チンポを奥まで突っ込む度に、喉の奥から汚いオホ声を出すのまでそっくりなのだから、これはもう奇跡の一致としか言いようがないだ

ろう。

「はっぎゅ?・ふっぎゅ?・おっぎゅ?・ちゅよっ?・チンポちゅよいよおおおおっ!???」

「じゃあ、これからはもつと気をしっかり持たないとだね」

「出来もしないことを宣言すると後が大変ですよ」

アツアツおまんこを一定のリズムで犯しながら、先輩との会話に興じる。

というか、一之瀬の喘ぎ声デカすぎだろ。ラブホじゃなかったら近所迷惑になってるレベルだぞ。

「おい、一之瀬。もうちよつと声抑えろ」

「むりっ?・むりいいい?・おにやかっ?・どちゅどちゅってしやれりゅとお?・めのまえ?・まっしろになりゅううう??」

お仕置きの意味も込めてチンポで子宮口を叩き潰せば、一之瀬はよりデカイ声を上げて絶頂する。

うーむ、逆効果だったか。なら今度は優しくしてみよう。

「んおおおおおおっ!??お、おにやかなか?・ひきずりだしやれりゅうううう!??」

「どうやってもイクんだな、お前」

「それほど後輩くんのチンポが凄いつてことさ」

そうなんだろうか。ただ単に一之瀬がクソザコおまんここというだけな気がするが。

「ほあああああつ?・おにやかのおくっ?・しあわせええ?」

「うお熱っ……!」

ピストンするたびに、どんどん一之瀬のおまんこが熱くなっている。なんか身体から湯気とか出てるけど、大丈夫なのかコレ。

「うわあ……陽毬ちゃん、すっごいメスの顔になってるね……これはとても人には見せられないレベルだよ」

それもブーメランだぞ。

「ほうじょううう?・しゅきっ?・しゅきっ?・おちんぽしゅきいいい??」

「お前はチンポが好きただけだろ、このマゾメスロリオナホが!」

「ほっぎゅおおおおお?!????」

一之瀬の熱に当てられて、こちらも加減が出来なくなってくる。朦朧とした意識のまま、ただ肉欲の本能に任せて腰を突き出す。

おまんこの奥をチンポで抉ると、極上の快感が脊髄を犯して全身に広がっていく。先輩とはまた違う、本物の極上ロリおまんこ——これは癖になりそうだ。

「はあ、あつつ……もうこの場所サウナみたいになってないかい？」

「一之瀬っ、犯すっ、ブチ犯すっ！」

「こわしてええ!?わたしのみせいじゅくおまんこ?めちやくちやにおかしてえええっ?!」

「聞こえてないし」

先輩には申し訳ないが、悠長に会話をしている余裕は無い。キンタマが収縮して、精液を吐き出そうと躍起になっている。ラストスパートだ。

「そろそろかな……ふふっ？」

そんな調子だったから、先輩が妖しく微笑んだことに気づかなかつた。気づけなかった。

「陽球ちゃんには悪いけど、後輩くんの精液は全部わたしの物なんだよねえ」

グイツと、先輩がその見事なデカ桃尻を突き上げる。

視界いっぱい、しゃぶりつきたくなるほどの極上の桃尻が晒された。

「さあ、わたしのおまんこでコキ捨て射精したまえ」

鼻の奥まで犯すような、濃厚な甘ったるいメスの匂い。本能で動いていた僕はその誘惑に抗えず——抗う必要も感じず——一之瀬のおまんこからチンポを引き抜き、先輩のおまんこに挿入した。

どっぢゅん???

「ほっお、っ??」

既に限界を迎えていたチンポは、先輩のおまんこの奥で精を解き放つ。

「あ、っ?あ、っ?あ、っ?あ、っ?」

まるで住み慣れた我が家に帰ってきたような安心感を与えてくれる、先輩のぷにロリ生オナホール。その奥で、勢いよくオスの欲望が全て吐き出された。

「うう……くあっ……せん、ぱいつ……!」

「そう? そうだよ? わたし以外のおまんこに種付けしてはダメだよ後輩くん?」

一之瀬のおまんこと比べるとぬるく感じる先輩のおまんこ。しかし、射精したばかりの敏感チンポには、ちょうどいい温度であった。

これが俗に言う『ととのう』というやつなのだろうか。

「何度でも言うよ——後輩くんの精液は? ゼーんぶ? わたしの物なんだからね?」

一之瀬のおまんこでチンポを扱き上げ、射精する瞬間だけ先輩のおまんこを使う。なんて贅沢なのだろう。こんな贅沢をしてもいいのだろうか。

「はふう? お腹に精液溜まってくるう……? ほらほら? わたしのおまんこをティッシュ代わりにして、一滴残らず吐き出したまえ?」

「うおっ、締まるっ……!」　せ、先輩、射精したばかりで敏感なんですから、手加減してくださいよ!」

「いつものお返しさ? ほれほれっ?」

おまんこ全体を収縮させ、精液を搾り取る動きを見せてくる先輩。ふるふると揺れる安産型のデカ桃尻が、よりエロさを際立たせてくれる。

「くうっ……はあ……全部搾り取られましたよ、先輩」

「本当かい? わたしから見れば、まだまだ余裕そうに見えるけどね」  
いや本当だって。今日作られた精液は一滴残らず先輩に注ぎ込んだから、もう出せないって。

「ふうん……じゃあこれはどうだい?」

ゆっくりと、妖しく微笑んで、先輩はその場から立ち退いた。  
すると、そこには。

「おっ? おっ? おっ? おっ? おっ?」

絶頂の余韻で身体を仰け反らせながら、汗やら精液やらでぐっちよ



仲直りはするけどそれはそれとして喉奥にチンポブチ込んで射精する鬼畜後輩くん

一之瀬と本気のセックスを始めてからは、それはもうヤバかった。いや、あれはセックスというより交尾だったな、交尾。しかも人間じゃなくて動物のやるやつ。

『いやー、こうなるだろうと思ってコンドーム持ってきてよかったよ。これで思う存分ナカで出せるね』

とは先輩の言葉である。

もちろん、コンドームに出した精子はすべて先輩が飲み干した。どんだけ精子好きなんだよ、あの金髪Kカップぶにロリ爆乳はよ。

「……………」

「……………」

と、そんな感じで動物みたいに一之瀬の未成熟な身体を犯した後で、今は二人一緒にラブホのお風呂に浸かっている最中だ。

お互いの体液でべつとべつになったので、二人で入ってこいと先輩に背中を押されたのだ。

「……………」

「……………」

で、汚れを落として湯船に浸かり、五分が経過した。その間はもちろん二人とも無言だ。

座っている僕の上に、同じ向きで一之瀬が座る体位になっている。さつき一回やった体位だ。

入り口から持ってきた入浴剤もちゃんと入れたので、薔薇のいい香りがふわりと鼻腔をくすぐってくる。

「…………ごめん」

沈黙を破り、一之瀬が口を開く。

その第一声は、主語のない謝罪だった。

「何がだ？」

「…………察してよ」

少しだけ姿勢を低くし、口元を湯船に付ける一之瀬。ぶくぶくと控えめな泡が立つ。

「そう言われてもな。男つてのは察しが悪いものだから、何に對してのごめんなのか分からん」

「……その発言自体が、既におおかた察してらるってバラしてるようなもんだけど」

鋭いな。流星は一之瀬だ。

「まあ別に気にしてないぞ。一之瀬とのアレは、半分漫才みたいなものなんだと思ってたし」

「漫才って」

ぶつちやけ、ちよつと楽しかったしな。

「ところで、どつちが素なんだ？」

「こつち」

どつちだよ。

「ウソ。どつちも素のあたし」

「そうなのか」

「楽なのはコツちだけど」

「じゃあ、僕の前ではそのままでもいい」

「んっ……！」

あのおつとり&のほんとした一之瀬も魅力的だが、このぶつきらぼうな一之瀬もこれはこれでいい。

まあ最終的にはセックスしてあのアへ顔になると考えれば、どつちの一之瀬も大差ないだろ、うん。

「なーんでそういうことサラツと言えるかなあ……」

「なにか言ったか？」

「べつっにー！」

頬を膨らませてぷりぷり怒ってる一之瀬には悪いけど、この距離で聞こえてないわけ無いんだよな。

だから、今のはわざと難聴系主人公を真似してみました。まるでラブコメみたいだあ。

「二重人格ってやつなのか？」



「そこまでじゃないけどね……ちよつと不安定なんだ、あたし」

それは、病院とか行つたほうがいいやつなんだろうか。

「みんなからよく見られたいって思う『わたし』と、それを冷めた目で  
見てる『あたし』が居るの」

「大丈夫なのか、それ」

もはや立派な二重人格じゃないのか。いや、外から見てるだけの輩  
がどうこう言えることじゃ無いんだけど。

「大丈夫だよ、どっちもあたしだって認識できてる。記憶もちやんと  
連続してるし」

「んー……そう、か」

正直、納得はできてない。けど、本人が大丈夫だと言うなら、それ  
以上踏み込まないほうが良いだろう。

他人の心に深入りしすぎても、何も良いことはない。過去の経験か  
ら、そう学んでいる。

「それに……さ」

「ん」

「心配なら……また、セ……セックス、してよね。そうすれば……なん  
か、一つになれる気がするから……」

「……………」

あの一、なんですかこのカワイイ生き物は。

これがホントにあの一之瀬なんですかね。

「……………」

「な、何か言いなさいよ」

「ムラムラしてきた」

「ごめん、やっぱ黙って」

どっちだよ。

「つていうか、さつきあれだけヤツたばかりでしょ!? もう回復し  
たの!?!」

したよ。なんなら、さつきの一之瀬の可愛さでフルチャージされた  
よ。

「見るか?」

「はわ……」

一之瀬を上からどかし、湯船から立ち上がる。

ザバツ、とお湯をかき分け、天高くそそり勃ったチンポが一之瀬の目の前に姿を現す。

「で、でつかあ……?」

「これがお前のナカに入ってたんだぞ」

「想像できないんだけど……うあつ?」

腰を動かし、チンポの先端を一之瀬のほつぺたに押し付ける。

ぷにぷにと柔らかい感触と、湯船で温められたぬくもりが、緩やかな刺激を亀頭に与えてくれる。

「こ、これなら……?ち、チンポピンタとか、できちやいそう……?」

「やってほしいのか?」

「……うん?」

まったく、一之瀬はドスケベだなあ。

さつきまで処女だった筈なのに、改めてチンポを目の前にしてやってもらいたいことがチンポピンタって、これもう真正のマゾだろ。

「じゃあお望み通り——ふんっ」

「はぎゅっ?」

バチン、とチンポの幹が一之瀬のほつぺたをピンタする。

分かりきってたことだけど、これ刺激が強いな。普通に射精できそうだ。

「ほ、ほへえっ?こりえっ?こりえしゅほいつ?」

「まだまだいくぞっ」

「ふぎゅうつ?」

右と左から、交互にチンポがピンタをお見舞いする。自分でやっておきながらアレだが、このシチュエーションエロ過ぎるだろ。

本物の子供のように可愛らしいといった印象を受ける一之瀬の童顔を、雄々しいオスの象徴で蹂躪する。

チンポに伝わる刺激と合わさって、その光景だけで精液がみるみるうちにチンポを上ってくる。

「くっ、限界だなっ……出すぞっ!」

「あああつ!?!しえいえきいい!?!どびゅどびゅっていっぱいできりゅうううつ!?!?」

十回程、往復ビンタをしたところで限界が訪れた。背徳感と快感に腰を震わせ、一之瀬の顔の前で思いつきりオスの欲望を吐き出している。

真っ白いそれは遠慮なく降り注ぎ、カワイイ顔をべちやべちやと満遍なく汚し尽くした。

「ひゃううううつ?あたしのかおつ?チンポ汁でぬりゆぬりゆになつてりゅううつ?」

「うあつ……はぁー、エロ過ぎだろ」

たつぷりと精液でコーティングされた一之瀬の顔は、それはもういやらしいことこの上なかった。

両手で自分の顔を撫でながら、しっかりと精液を顔に塗り込んでいく童顔ロリ。

その変態すぎる光景を見ると、体の奥からふつつつと本能が湧き上がってくるのを感じ取れる。

「一之瀬」

「なあにい?!あんむぶつ?」

酸素を取り込むため無防備に開かれた口に、無遠慮にチンポをねじ込む。

突然のことだったが、一之瀬は嬉々としてチンポを喉奥まで迎え入れた。

「んふー?んふー?」

「あつつ……セックスしてるときも思ったけど、体温高いよな、お前」  
おまんこと同等か、それ以上の温度を持つ一之瀬の喉奥で、チンポ全体がギュウギュウと締め付けられる。

「んー?ずろろろろつ?」

「おうっ……い!」

ゆつくりと、ねっとりとした、口から食道全部を使ったストローク。この小さな喉にぽっこりとチンポの形が浮き出ているのを見るだけで、背徳感で頭がおかしくなりそうだ。

「一之瀬、お前……練習とかしてたのか？」

フェラが上手すぎる。完璧な締め付けに、完璧な速度。およそ非の打ち所が無い、芸術的とすら呼べるフェラチオ。

二宮はおろか、先輩すらも凌駕するテクニク。いったいどこで身に付けてきたのだろうか。

「んー？ぱっ？えへへ、ナイシヨー？」

「んっ」

チンポを口から抜き、顔の横で手コキを始める。その際にウイंकして小悪魔な雰囲気演出することも忘れていない。

あー、ダメだ。チンポがイライラする。

「およう？」

ガシツ、と一之瀬の頭を両手で掴む。

「んっぎゅむぼおおおっ?!?!」

そしてそのまま、再びチンポを喉奥までブチ込んだ。

「ぎゅぶっっぶうおっっおぶっっぶふおっっむぶっっあぶっっぼおっっ？」

もはや喘ぎ声か悲鳴か分からない声を上げながら、喉奥でチンポをしごき上げる専用の口オナホと化した一之瀬。

そんな痴態にますます本能が滾り、腰をぶつける動きが止まらな  
い。

「もぼお、お、お、おおおっ?!?!?!」

最後の瞬間、腰を一番奥まで押し付けて射精する。

ドボドボと胃の中に直接精液を注ぎ込む感覚。やっぱり癖になるな、これ。

「あ、っ……う、あ、っ……う、あ、っ……う、っ……う？」

ぢよろろろろっ？ぽちやぽちやぽちや？

一之瀬の口から射精を終えたチンポを引き抜くと、ちやぽちやぽと何かの液体が湯船に落ちる音が聞こえてきた。

その音は一之瀬の真下から聞こえてきている。音の発生源に目を向けてみれば、股の間からこぼれ落ちる黄金の液体が見えた。どうやら失禁してしまったようだ。

「流石に激しくし過ぎたか……ごめんな、一之瀬」

「お、あ、っ……っ？」

かなり溜め込んでいたのか、とめどなく垂れ流しにされる美少女のおしっこ。

その淫靡な光景をしつかりと目に焼き付けながら、未だに意識が朦朧としている一之瀬を優しく抱きしめるのだった。

練習の成果を披露してチンポを骨抜きにするKカツ  
プ爆乳オナホール先輩

「ふうん。出てくるのが遅いと思ったら、案の定だったね」

再び精液でべとべとになった身体を綺麗に洗い、二人揃って風呂から出る。

するとそこには、ベッドの上で大股開きになり、オナニーに興じている先輩が居た。何してんだ。

「何してるんですか、先輩」

「何って、見ての通りオナニーだが？」

手慣れた様子でおまんこに人差し指と中指を突っ込み、親指でクリトリスを撫でている。

部屋の掃除をしている時によく目にする、先輩のスタンダードなオナニースタイルだ。

「は、はわわわっ……！」

「お前は何いまさら顔赤らめてんだ。さつきこれ以上に恥ずかしい事してただろうが」

まるで初心な生娘のように、一之瀬は両手で目を塞いでいた。何やってんだ、白々しいわ。

「そ、それはそうだけど……エッチするのと、ミント先輩の神聖な自慰行為を見るのは、また別っていうか!」

「お前には先輩が神様にでも見えてんの？」

まあ確かに先輩は女神かって思うくらい可愛くて、綺麗な顔立ちしてるけど。

でもその本性は、快楽と研究にしか興味のないぐーたらなマッドサイエンティストだぞ。コイツも十分よく知ってる筈なんだがな。

「そういえば、一之瀬は先輩のどこが好きなんだ？」

「存在」

「……さいですか」

本格的に神様扱いしてないか、これ。







「……ホント底なしね、あんた」

「エロいお前と先輩が悪い」

「責任転嫁しないでよね……はぶっ?」  
「うおっ」

渋い顔をしながらも、なんだかんだ啜えてくれる一之瀬。セックスしてから、だいぶん分かりやすいツンデレ具合になっている。やっぱりセックスって偉大だな。

「じゅるっ、じゅぱっ?ぐぶぶっ、ぬぼっ?」

「くっ……相変わらず、ヤバいな……!」

縦横無尽に動く舌が、亀頭に絡みついて精液をねだってくる。やっぱり精液好きすぎるだろ、こいつ。

「だへっ?なしやへなふ、しえーへひだひひやへ?」

「な、何言ってるか分からんのだが……くおっ!」

精液を絞りつくそうとする、見事なバキュームフェラ。根こそぎ狩り尽くしてやるという加虐心が、透けて見えるような吸い付きだ。

「ん——にひひ?ぷあっ?」

「っあ!」

「じゅぼぼぼおおっ??」

急に先端が空気に触れたと思えば、また温かい口内に突っ込まれた。

あれ、でも、さっきまでと刺激がだいぶ違う。それにこの温度は、もしかして。

「うぐっ……先輩、何してんですか」

「じゅぶっ?じゅぶっ?」

チカチカする視界の中。視線を落とせば、そこには美味しそうにチンポにしゃぶりつく、金髪ぶにロリオナホが居た。いや、何してんだ。

「やあーん?先輩、フェラチオ上手ですうー?」

そんでこいつは猫かぶりモードに戻ってるし。忙しいな。

「じゅるっ、ちゅぼっ?」

「んぐっ!」

と、別のことに気を取られていたら、急に口が離れた。その刺激で

少しだけカウパーが飛び散り、先輩の頬を汚す。

しかしそんなことは気にもせず、当の本人は得意げな顔で、Kカッ  
プ爆乳を持ち上げていた。

「ふふ？ずつとフェラチオばかりじゃ飽きるだろう？」

「なっ……………」

「練習の成果、今こそ見せようじゃないか!？」

「うおっ!？」

唾液でテカテカと光るチンポを、先輩のおっぱいが一息に呑み込  
んだ。

「こ、これっ、先輩っ!」

「どうだい？パイズリのお味は？」

チンポを挟み込まれた谷間が、汗と唾液とカウパーでヌルヌルに  
なっている。

果てしなく柔らかい物体でチンポを挟まれるというのは、かなり心  
地いい。これは認識を改めなければならない。パイズリは気持ち  
いいものだ、と。

「あっつ？後輩くんのチンポ熱すぎだよっ？」

「ヤツベ、これヤベえ……………」

「あは？聞こえてないようだね？そんなに気持ちいいのかい??」

先輩がなにか言っているが、全く聞き取れない。おまんこも、口  
の中とも違う未知の刺激を感じ、ただうめき声を出すことしかできな  
い。

パイズリ……………なんという奥義なんだ。選ばれた者にしか使えない  
技なだけある。

「ほれほれー?」

「あっぐ、先輩、それヤバっ……………!？」

左右からチンポを挟み込み、その上でグニュグニュと揉みくちやに  
していく。柔らかいものに包まれているのに、圧力が掛かってしっか  
りと快感を感じられる。

「っぐ……………もう、限界っ……………!」

「出そうなのかい??いいとも?わたしのおっぱいで、思いつき射精

したまえ?」

その言葉を合図に、ずりゆんつ?とおっぱいがチンポを扱き上げた。

その瞬間、目の前の視界が真っ白になって、膨大な快感が身体の中を駆け巡っていく。

「おおおおおっ!!!」

「わわっ?すっごい勢いだね?」

チンポを挟んでいたおっぱいの谷間から、凄まじい勢いで精液が飛び出してくる。

それはまるで噴水のように噴き上がり、べちゃべちゃと先輩の上半身を余すことなく汚していく。

「はあっ……はあっ……!」

「お疲れ様?うわベットベト?いつもよりいっぱい出たんじやないかな?後輩くん?」

先輩がなにか話しかけてきているが、よく聞こえない。瞼が重い……眠い。

「わわわっ、後輩くん!」

どうやら、自分でも気づかないうちに結構疲労していたようだ。前のめりに倒れ、先輩を下敷きにしてベッドに倒れ込んでしまう。

「お、重い……」

「わわわー! 大丈夫ですか、先輩ー!」

「ああ、うん……これくらいなら平気さ」

身体が動かない。まだまだ出せると思っていたが、流石に打ち止めらしい。

「それに、こうして上に乗られていると……後輩くんを全身に感じられて、むしろ気持ちいいというか……?」

「流石です?先輩っ?」

やっぱドマゾだな——なんてツツコミを心の中でしながら、僕の意識は闇に落ちていくのだった。

## とても都合のいいオナホ同期

「んあ……?」

「お、やっと起きたね後輩くん」

目を開けて真正面を見る。

非常に整った、金髪碧眼の可愛い顔が、こちらを覗いていた。  
「あー……もしかして寝ちゃってました?」

「そりやもう、ぐっすりとね」

寝起きでブーツとする頭を持ち上げ、身体を起こす。周囲は寝る前と変わらず、ラブホテルの一室だった。

無駄にデカイベッドの上で、三人一緒に寝ていたらしい。

「まったく。先輩の前で呑気にヨダレ垂らして寝るなんて、不敬もいいところね」

「一之瀬……まだ居たのか」

「はあ?」

瞬間、一之瀬の顔が般若のように歪む。

いや待って、マジ怖い。

「まだ居たのか、とは随分な言い草ね! 先輩とイチャラブエッチしたいから、あたしだけサツサと帰れって、そう言いたいわけ!」

「いや違う。違うって。違うから」

断じてそんな意図で発した言葉ではない。一之瀬も自分の用事があるだろうから、先輩とのご褒美時間が終わったらすぐに帰るだろうと思つての発言だった訳で。

決して、悪気があつて言ったものではない。そこだけは信じてほしい。

「まったく、この(ピー)で(ピー)な(ピー)は!」

「ひでえ言われようだ」

そんな底辺の匿名掲示板で飛び交うような暴言を連発すんなよ。普段のぼわぼわボイスはどうしたんだよ。温度差で風邪引くわ。

「ふふ、まあまあ陽毬ちゃん。後輩くんも悪気があつて言ったわけではないと思うよ?」

「むう……先輩がそう言うなら」

「よしよし、いい子だね」

全裸の金髪爆乳ロリが、全裸の黒髪ガチロリの頭を撫でている。うん——性癖歪むわ、こんなん。絶対に健全な青少年とかに見せちゃだめな絵面だわ。

「ところで。陽毬ちゃんは後輩くんのどのへんが、好きになったポイントなのかな？」

「いきなり何聞いてるんですか、先輩」

「なあに、所謂恋バナというヤツだよ。後輩くんも気になるだろう？」  
そりやまあ、少しは気になるけども。

「むー……言わなきゃだめですかー？」

「もうセックスした仲じゃないか。これ以上恥ずかしい事があるのかい？」

「それもそうですねー」

「納得するんかい」

そりやまあ、セックス以上に恥ずかしい事なんてそうそう無いだろうけど。

「二度は言わないからよく聞きなさい、北条。あたしがあんたを好きになったのは、あたしの研究を笑わなかったからよ」

しつかりと。僕の目を正面から見つめて、一之瀬は言い放つ。

ああ……一之瀬の研究って、確か。

「性別反転薬のことか」

「そうよ」

一之瀬が研究している題材は、飲むと性別が反転する飲み薬だ。

通常、人間の性別を変えるならば外科手術しか方法は無い。しかし一之瀬の薬が完成すれば、そういった手術を一切行わずに、投薬だけで性別を反転させることができるのだ。

まあ、そんな夢みたいないな代物なので、やはり一筋縄ではいかならない。今現在でも、作成にはかなり苦戦しているようだ。

「おや。そんな薬を作っていたなんて、初耳だね」

「……偶然、知られちゃったんですー」

あれは大学に入ってから、2ヶ月経ったぐらいだったか。偶然——ホントに偶然、一之瀬の研究資料を見てしまったのが原因だった。

「先輩にも言っただけじゃなかったのか」

「……言えるわけじゃない……『この薬で男になって、先輩とエッチしたい』だなんて」

お前、そんなこと考えてたのかよ。薬を作る目的だけは頑なに話さなかったから、どんな目的なのかと思えば——まさかライバルになるつもりだったとはな。

「おやおや。陽毬ちゃんはスケベだねえ」

たぶり、と先輩が自身のKカップ爆乳を持ち上げる。

「そんなに——わたしとセックスがしたかったのかい？」

妖艶に、蠱惑的に、先輩が微笑む。

「も、もちろんです！　だって、画面の向こうで北条とミント先輩は、あんなに気持ちよさそうにセックスしてたじゃないですか！」

心の内を吐露するように、一之瀬は叫ぶ。

「あ、あたしだって！　あんな気持ちいいセックスしてみたかった！　だからずっと、今までこの薬を研究してきたんです！」

それが一之瀬の本心なのか。男になって、先輩とセックスしたいという夢が。

「一之瀬……」

いい夢だと思う。セックスは気持ちいいものだからな。僕も可能なら、女になって女性の快樂というものを体験してみたいと思う。

だけど、こいつは一つだけ、致命的に勘違いしてる。

「それは違うぞ、一之瀬。僕があれだけ気持ちよくなってたのは、相手が先輩だからだ」

「……どういうこと？」

「まあ、つまりだな——好きな人同士でするセックスだからこそ、あそこまで気持ちよかったって事なんだ」

「っ……………」

一之瀬が目を見開く。いつもは決して見せないであろう表情だ。

「人間は精神に重点を置いてる生き物だ。思考に身体が引つ張られ

る、なんてことはよくある」

「プラセボ効果、だね」

説明を補足してくれた先輩に、視線だけで感謝を伝える。そう——世間ではプラシーボ効果とも呼ばれる、思い込みの力で病気を治したりするアレだ。

その効果は凄まじいもので、薬じゃないただのデンプンを薬だと偽って飲ませ、本当に回復したという例もある。

「だからまあ……なんだ。さっきのセックスは気持ち良かったら？」

「……………！」

顔を赤くして、そっぽを向く一之瀬。その反応だけで答えがわかるようだ。

「んふふ。好きな人とするセックスは、とても気持ちのいいものだからね」

「好きな人って……あたしの好きな人はミント先輩で——」

「その『好き』は『憧れ』だろう？ 対して、陽毬ちゃんが後輩くんに向ける感情は『親愛』だ。もう自分の気持ちを偽るのは止めましょう」  
「あっ……………」

とん、と先輩が一之瀬の背中を押す。

そのまま、バランスを崩した一之瀬は僕の腕の中に納まった。

「中出し、一回だけ許可してあげよう。今日だけは特別だよ」

ふわり、と聖母のように微笑んで、先輩はベッドから降りた。

「愛情たっぷりなの、最高に気持ちいいセックス——期待しているよ」

そして全裸のまま、近くにあった椅子に腰掛けて、こっちを見つめてくる。

高みの見物ってやつか。いいだろう。

「一之瀬」

「うあつ……………ほ、北条……………」

腕の中の女体を抱きしめながら、その全体像を把握していく。小さくて、薄い身体。しかし女としての機能はしっかり育っている、なんとも背徳的な身体。

ぷくつと膨れた乳房と、膨らんだイカ腹。そして子供のような顔立ちに、熟れていない尻。すべてが未成熟なのに、生きてきた年数だけは大人を名乗れるという、この背徳的な身体。

「中出ししても良いらしいが」

「っ……っ！」

そんな背徳的な身体が目の前にある、という事実には、思わず背筋が震える。

先輩は巨乳巨尻のドスケベぷにロリオナホールだが、一之瀬は正真正銘ぷにロリオナホールだ。本来なら、絶対手を出しては行けないタイプの身体。それを自由にしていいという背徳感。

「濡れてるな」

「~~~~っ!?!」

湧き上がってくる背徳感そのままに一之瀬のおまんこに手を触れれば、そこはもう大洪水の有り様だった。

愛液は垂れ流され、本気汁が奥から次々と顔を出す。

「熱っ」

「んひゃあっ!?!」

ぷにぷにのマン肉をかき分けて膣内に人差し指を突っ込めば、火傷しそうなほどの熱さを感じることができた。

やっぱり体温高いな、こいつ。これが子供体温ってやつなのか。

「もしかして、最初から期待してたか?」

「しっ……知らない?」

そんなこと言っつて、顔が真っ赤だぞ。

「これならすぐ入れられそうだが」

「あ……っ?」

うつむいた顔を覗き込んで見れば、なんとも物欲しそうな表情で見上げてくる。どんだけチンポが好きなんだよ、こいつ。

まあでも、今回はイチャラブエッチだからな。いきなりブチ込むのもムードに欠ける。

「ごっち向け」

「んむっ!?!」







おまんこからチンポを抜き、改めてぶにロリオナホールを見下ろす。

膨れていたお腹が徐々に戻り、その過程で子宮に収まりきらなかった精液が、勢いよく噴き出してベッドを汚す。

「ふふ。これで陽毬ちゃんもオナホ確定だね」

「先輩」

事の成り行きを見守っていた先輩が、意味深に笑いながらこちらを見つめてくる。

まるで神様のように、邪神のように。

「さあ、次は誰をオナホにしようか？」

無邪気な様子で言葉を紡ぎながら、先輩は心底愉快そうに笑うのだった。

## 九条アリス先生編

どんな時でもムラついたら即座に又いてくれるドス  
ケベマゾ巨乳オナホ先輩

次の日。

というか、既に日付が変わっていて、区分的には今日なのだが。

「さて、今日も元気に研究室へ行くかうか！」

「ふぁ……はい」

「あふ……はあい」

元気いっぱいな先輩とは裏腹に、あくびをしながらその後を付いていく僕と一之瀬なのだった。

ラブホから直接研究室に直行とか、不健全にもほどがあるな。昨日の二宮とのセックスも含めて、今日でほぼ二徹だからかなりヤバい。ぶっっちゃけ眠い。

「今日はクーちゃん先生が講義する日だからね！ 張り切って手伝いに行くよ、二人共！」

「あれ、今日は名取先輩が手伝う当番では？」

「代わってくれて連絡が来たのさ。どうやら外せない用事が出来たらしい」

「なるほど……」

名取先輩にも色々事情があるんだろう。とはいえ、ついさっきまでセックスしてた疲労困憊の身体に、この仕打ちはキツイものがある。

「いやまあ。全部自業自得なので、文句を言ってもしょうがないのだが。」

「でも先輩。先輩が手伝ったら、先輩がメインで九条先生が手伝い……みたいな感じになっちゃいますよね」

「今回は大丈夫さ。ちゃんと自制するとも」

そう言っつて、自制できた前例が一回たりとも無いんですがね。

そもそも九条先生がああの性格だから、先輩と組ませたら確実に日陰

へ引きこもっちゃうんだよなあ。

「つていうか、一之瀬は午前中に講義取ってただろ」

「んー……そうだったっけ?」

ダメだコイツ。疲れすぎてポンコツになってやがる。

「講義中に寝るなよ?」

「そんなことするわけ無いでしょ……北条じゃないんだから……ふあ」

不安しかない。あと、呆れ顔であくびをするな。無駄に器用なヤツだな。

「じゃあ、わたしと後輩くんでクーちゃん先生をサポートしよう!」

「その呼び方やめませんか?」

大学の教授に対して、ちゃん付けは相当に不敬な気がする。

「えー、可愛いじゃないか。それにあの人、本名言うと落ち込んでめんどくさいし」

「それはまあ……そうですね」

九条先生、下の名前にかなりコンプレックス持つてるからなあ。間違つて口にした日には、拗ねまくつて大変なことになる。

具体的に言えば、次の日までありつただけの陰気オーラを撒き散らして、研究室の隅っこが直視できない有り様になってしまう。

「さあ、いくよ! なあに。わたしに任せておけば、すべてが上手いくくさー!」

「先輩って楽観的ですよね」

「天才だからね!」

いや、それは関係無いんじゃないかな。

???

「んじや、またね」

「おう」

研究室に置いてあるノートパソコンを手に、一之瀬は講義に向かっていく。僕と先輩の前では、すっかりあのぼわぼわ声は聴かせてくれ

なくなつてしまつた。

まあ、良いことなのだろうけれど。本来の性格を出せるようになったのなら、それは喜ばしい事だ。

「さて、クーちゃん先生は起きてるかな」

「寝てるんじゃないですかね」

研究室の隣には教職員用の仮眠室がある。九条先生はよくそこで寝ており、もはや半ば私室のようになっていたのだ。

(そういえば……家に帰つてる姿とか見たことないな)

研究熱心な反面、ものぐさな悪癖を持つ、という天才にはよくあるアレだ。あの人も本質的には、先輩と同じく天才マッドサイエンティスト気質なのだろう。

「お邪魔します」

「クーちゃん先生居るかーい?」

仮眠室の扉を開けて、中に入る僕たち。

その瞬間、目に入ってきたのは。

「んう……むにやむにや」

部屋の中央に敷かれた布団の上で寝ている、全裸の九条先生の姿だつた。

畳が張られた和室テイストの仮眠室に、香ばしい女性の匂いが充満している。

「ちよっ……!」

「おやおや」

形のいい巨乳に、少し黒ずんだ大きめの乳輪と、小さな乳首。そしておつぴろげられた股の間に鎮座する、大量の陰毛に隠された女陰。

いかにも大人の女性といった、恥ずかしい部分を堂々と晒し——当の本人は恥ずかしげの欠片もなく——九条先生は布団の上で爆睡していた。

「はあ……女子力皆無ですね」

「まるでわたしを見ているようだね」

「自覚してるんなら改善してください」

「それは断る」

断るなよ。努力してくれよ。

「取り敢えず起こしますか」

「そうだね……ん？」

靴を脱いで、畳の上が上が——ろうとしたら、何やら先輩が僕の腰を正面から鷲掴みにした。何してんだ、このぷにロリ先輩は。

「あの、何してるんですか先輩」

「それはコツチのセリフだよ後輩くん。君、なに興奮してるのかな」

ジイイイ、とズボンのジッパーを下ろす先輩。そうして中に手を突っ込み、中に入っていた半勃ちのそれを慣れた手付きで引つ張り出して見せた。

「やっぱりね」

チンポの先端から香る饅えた匂いを嗅ぎながら、先輩はニヤリと笑う。

いや、何で分かったんだよ。まだ勃起してすらいなかったんだが。

「なんで分かったんだ、という顔をしているね」

「エスパーですか？」

「ふふん。そんなもの、顔を見ればすぐに分かるのだよ、後輩くん」

チンポを手でシコシコと扱きながら、先輩は得意げな顔をする。

いやあの、そんなふうに弄られたら、普通に勃起しちゃうんですけど。

「どんな女性の裸でも興奮してしまう節操なしには、わたしが直々に指導してあげないとね」

「いや別に九条先生の裸を見て興奮した訳じゃ……んつく!？」

ギユウツ、とチンポを握られる。

いきなりの強い刺激に、背筋がビクリと跳ねる。

「言い訳無用だよ。凜花ちゃんと陽毬ちゃんはまだ良いよ、可愛い後輩だしね」

「くっ、うあつ……!」

「だが、クーちゃん先生にまで欲情するのは看過できないね」

チンポを扱く動きが速くなる。そのまま大きく口を開き、ここに出せと言わんばかりにチンポの先端を口の前に移動させた。

「先輩っ、ちよつと速……っ！」

「ほらほら、出していいんだよ」

しまったな、と内心で頭を抱える。

最近分かってきた事だが、どうやら先輩は九条先生に対抗心を持っているらしいのだ。それも無意識に。

その証拠に先輩はいつも研究成果や論文で九条先生と対決したがるのだが……まさか、こんな所でも対抗心が発揮されているとは思わなかった。

(似た者同士なんだよな……先輩と先生)

九条先生も私生活がだらしく、研究方面において才能を発揮する天才タイプだ。おそらく、同族嫌悪というやつじゃないかと、僕は睨んでいる。

「ほらっ？ほらっ？出したまえ？」

「んっぐ……出ますっ！」

事務的な、ただ精液を絞るだけの手コキも久しぶりで、つい我慢が効かなくなってしまった。

チンポから噴き出した白濁は、計算された軌道を描いて宙を飛び、すべてが先輩の口の中に収まった。

「んふー？いつはいはひはへ？」

口に精液を溜めているせいで、何を言っているのか微塵も聞き取れないが、今の絵面は相当にエロい。

金髪碧眼ぶにロリ美少女の先輩が、間抜けに口を開けて精液便所に成り下がっているという、このシチュエーションだけで抜けそうだ。

「んむ？もぎゅ？むぐ？んっ？んんっ？」

口を閉じ、精液をゆっくりと味わうように口内で咀嚼する先輩。

飲み込みきれなかった少量の白い液体が、口の端から一筋垂れているのがアクセントになって、とてつもなくエッチに感じる。

「ぐくっ……う？ふはっ？今日も濃厚だねえ、後輩くん？」

頬を赤らめ、息を荒らげ、こちらを上目遣いで見つめてくる先輩は実に愛らしい。

すぐにでも襲ってしまいたくなる。率直に言つてその表情は最高



だ。

「先輩……」

自分の中の獣欲が、どんどん膨れ上がってくるのが分かる。

一発出したくらいじゃ収まらない。収まるはずがない。それを分かっている、目の前の金髪爆乳ぷにロリオナホは手コキ射精をさせた訳で。

「……………」

でも、今はそれよりも優先すべきことがある。

それに、こんな場所で襲うのは普通にまずい。人間社会で暮らす人類人以上、TPOを弁えなければならぬのだ。

まあ、既にだいたい手遅れだと思わなくもないが。

「ふうー……早く九条先生起こしますよ」

「はい」

理性と根性で獣欲を封じ込め、チンポを仕舞う。ちよつと苦しいが、なんとか我慢はできる範囲だ。

「じゃあ夜を楽しみにしているよ、後輩くん？」

甘ったるい声で囁やきながら、先輩は右手で輪っかをつくり、シコシコと扱いてみせた。

ビキリ、とズボンの中でチンポが一回り大きくなる。

「……覚悟してくださいね」

「にひっ？もちろんだとも？」

今日は寝かさねえからな、このKカップ爆乳ドスケベマゾ豚ぷにオナホールがよ。

## 思わぬライバル

「起きてください、九条先生」

「ん、んうお〜……？」

九条先生の肩を揺すれば、女子力の欠片もない声で呻きながら身体を起こす。

ちなみに、ちゃんと下着と服は着せた後だ。先輩の為に習得したお着替えスキルが、こんなところで役に立つとは思わなかったが。

ちなみに。先輩は隣の研究室で、講義に持っていく資料の準備中である。

「お〜……おお、おはようございます……北条くん」

「おはようございます」

色素の抜け落ちた白い髪を掻きながら、九条先生は大きなあくびをした。

初めて会ったときから思ってたけど、この人は本当に色素が薄い。だというのに虹彩だけが真っ赤で、まるでウサギみたいな印象を受ける。

「ああ……また寝ちゃってましたか……反省ですね」

「いや、寝るのは別に悪いことじゃないですよ」

むしろもつと寝てくれ。睡眠時間、絶対に足りてないから。

「目の下、くま凄いですよ」

「ああ……くま、染み付いちちゃってるんですよ……気にしないでください……ふへ」

ふにやりと笑って、九条先生は照れるように頭をかいた。覇気もない、血色も悪い、生命力が感じられない。

結論から言って、この人はヤバイ。

先輩とは別ベクトルでヤバイ人だ。研究という篝火に、己の命を焚べて走っているような人なのだ。

「そんなくまが染み付くような生活してたら、早死に待ったなしですよ。もっと健康的な生活をしましょう」

「ふへ……北条くんは、優しいですね……」

いや、優しい優しくないとかそういう話ではない。こんな生活を続けてたら、マジで死んじゃうから。

個人的に知り合いが死ぬのとか絶対見たくないから、こうして忠告してるだけで。

「大丈夫ですよ……研究成果を出せない私に……生きてる価値とか、無いですから……ふへ」

「……………」

そしてこのように、この人は闇が深い。強いて言うならブラックホールレベルに深い。並の人間なら、吸い込まれて出てこれなくなる。

「ふへへ……ジョークですよ、ジョーク……」

「で、ですよね」

「研究成果を出しても……私に価値が付くわけ、無いじゃないですか……………」

「いやジョークってそっちな？」

「ただ自己評価が低いんだろう、この人は。一応、特許を取った薬を何個も開発してるという、めちやくちや凄い人なんだが。」

「ああ……そういえば今日は、講義がありましたね……名取さんは、どこですか……………」

「名取先輩は急用が入って来れなくなったそうです。代わりに、僕と先輩が来ました」

と、事実をありのまま報告したところ。

「え……………」

ピシッ、と九条先生の身体が固まった。

「……………ミントちゃん……来てるんですか……………」

「え、ええ。まあ、はい」

いや、そんなこの世の終わりみたいな顔しないでくださいよ。見てるこっちがしんどくなる。

「……………」

「あの」

「……………」

「もしもし」

「……………」  
「九条せんせい」

フリーズしてしまった。肩を揺すっても、目の前で手を振っても反応が無くなってしまった。そんなに先輩が苦手なのか、九条先生。

「はうっ……ATGCCATCGATTACG、TACGGTAGC  
TAATGC……ふう」

「なぜ急に塩基配列を羅列したんです？」

「あの並びを想像すると……落ち着くんです……」

「そうですか」

なんかの漫画にそんなキャラ居たな。たしか、数字を数えて落ち着くやつだった気がする。

っていうか、かなり特殊な心の落ち着け方するんだな。普通にビツクリするわ。

「それでは……講義に、行きましようか……」

「大丈夫なんですか？」

「ええ……常に、覚悟は……しています……」

先輩と講義に行くの、九条先生にとっては覚悟が必要なイベントなのか。いったい何したんだ、あのぶにロリKカップ爆乳オナホールは。

「準備できたよ、後輩くん」

「びいっ」

「おや。起きたんだね、クーちゃん先生」

準備を終えたのであろう先輩が、意気揚々と部屋に入ってくる。その姿を見て、九条先生は僕の後ろに隠れてしまった。

身長的にも年齢的にも大人のはずなのだが……こうして見ると、この場では一番子供みたいに思えてきてしまうな。守護まもらねば、って気持ちになってくる。

「では早速講義に行こう。時間も迫っている事だしね」

「分かりました」

「は、はひい……」

一応すでに——寝てる間に——身支度は整えてあるので、後は直接講堂に向かうだけだ。今日も九条研特製の白衣が、清く輝いている。

「あの、九条先生……自分で歩きましょう?」

「うううう……」

「あつ、いいな—— クーちゃん先生ばかり! 後輩くん、私は抱っこを所望する!」

「流石に潰れますって」

背中にも大学教授を背負い、両手に講義の資料を持ちながら、ほつぺたを膨らませた先輩を連れて、講堂までの道を歩く僕なのであった。

???

「この化学式は——で、こっちの——と組み合わせると大きな効能が得られる。分かったかな?」

「すみません、質問なのですが——を作る際にはどうすれば良いでしょうか?」

「ああ、そこは——を代用すればいい。こっちの——でも同様の効果は得られるだろうね」

「……………」

「やっぱりワンマンになりましたね……」

教壇に立ち、何故か教鞭を取っている先輩なのであった。何故かめっちゃサマになっている。

そして、それを隅っこで見つめる人物が二人。言わずもがな、九条先生と僕である。

「う、ううう……! やっぱりミントちゃん、キライですう……!」

「あ、あはは……」

流石に弁護できないかな、これは。教授の面目を丸潰れにするのは、些かやりすぎだと思う。いつものことだとしても、だ。

「むう……!」

当然のごとく怨めしそうに、ほつぺたを膨らませて怒り顔をする九条先生なのであった。もうすぐ三十路の筈なのに、カワイイが過ぎる

な、この人。

???

「いやー、今日も有意義な講義ができたね！」

「ふう〜……！」

「あの、先輩。後ろ見てください、後ろ」

めっちゃふくれっ面で先輩を睨む先生がいた。普通逆じゃないか、こういうのって。

「あー……すまないね、クーちゃん先生。知識を教えられるとなると、つい自制が効かなくなるんだ」

「むう〜……！」

両手を合わせて謝罪する先輩と、未だにそっぽを向いたままの先生。こういうのも逆なんじゃないかねえ、普通は。

「許してほしいな。この通りだよ」

「……………」

「むう……わかった。わたしに出来ることなら何でもしてあげるよ。だから、機嫌直してくれないかい？」

「……なんでも、ですか……？」

あ、バカ。なんでもするはマズいだろ、先輩。それは悪魔の言葉だぞ。

「そうとも。女に二言はないさ」

「……そう、ですか……」

先輩の言葉を聞いて、九条先生はニヤリと不気味に微笑んだ。そして、一瞬だけ視線をこっちに向ける。

「……………」

「ん？」

なんでこっち見たんだろうか。なんか、とてつもなく嫌な予感がするんだが。

「じゃあ……一つだけ……」

「なんでも言ってくれて構わないよ」

ゆつくりと、焦らすように九条先生が口を動かす。言いづらい事なのか、少しだけ躊躇っているようにも感じられる。

しかし、それでもハッキリと、僕たちに聞き取れるように、先生は声を上げた。

「今夜、一晩だけ……北条くんを、貸してもらえませんか……？」

「——ほへ？」

あまりにもあんまりな——予想の斜め上すぎるお願いに、先輩は素っ頓狂な声を上げてフリーズするのであった。

〜とある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねる3  
)

1：無貌の神

トラレタ……コウハイクン、トラレタ……。

2：名無しの邪神

どした。

3：名無しの邪神

なんか邪神になってる。

4：名無しの邪神

元から邪神だろ定期。

5：名無しの邪神

ご主人様のご乱心だぞ、鎮めてこいよシヤン。

6：名無しの邪神

【休暇中】

7：名無しの邪神

使えねえな。

8：名無しの邪神

俺はパーを出したぞ。

9：名無しの邪神

左腕を返せ。



10：名無しの邪神  
サタン・ボミット！

11：名無しの邪神  
混ぜつてる混ぜつてる。

12：名無しの邪神  
草。

13：名無しの邪神  
お前ら地球の文化に汚染されすぎだろ。邪神としての誇りは何処  
に行つたんだよ。

14：名無しの邪神  
誇りは星で死にました。

15：名無しの邪神  
ねえ知ってる？チェストって叫び声は『知恵捨て』が訛って生まれ  
た言葉らしいよ。

16：名無しの邪神  
へえ。

17：名無しの邪神  
豆柴いたね？

18：無貌の神  
あくあくうるさいうるさい。頭の中で喋るんじゃないよクス共。

19：名無しの邪神  
繋いできてんのはお前だろ。

20：名無しの邪神

集まってきたるのはオレたちだけだ。

21：時間都市の住人

なあ、ウチの猟犬ちゃん知らへん？

22：名無しの邪神

どうせまた時間旅行者の体液啜りに行ってるんだろ。心配しなくて大丈夫だって。

23：黄衣の女王

ねえ、ボクの蜂くん知らない？

24：名無しの邪神

どうせまた人間乗せて星間旅行にでも行ってるんだろ。心配しなくて大丈夫だって。

25：無貌の神

ここは井戸端会議の会場じゃないんだけどナー。

26：黄衣の女王

あつ、やつほくニヤルく！今度遊びに行つていい!?

27：無貌の神

うるさいからダメ。

28：黄衣の女王

ええく、ボクもニヤルの伴侶見たいく。

29：無貌の神

伴侶じゃないよ。ただ一緒に暮らして、一緒のごはん食べて、一緒の布団で寝て、一緒に腰振って赤ちゃん作ろうとしてるだけの間柄だよ。

30：名無しの邪神

人間に言わせてみれば、その関係は熟年夫婦のソレなんよ。

31：名無しの邪神

なんで結婚してないのって、助走つけて殴りに行くレベル。

32：名無しの邪神

最近ずっと大人しいと思ったら、そういう事だったのかよ。この色ボケ邪神がよ。

33：無貌の神

なんか負け犬の遠吠えが聞こえるね。

34：名無しの邪神

人間にうつつを抜かしてるお前の方が負け犬だろうが。

35：無貌の神

恋とか愛とか、そういう複雑な心の動きを理解できない脳筋のほう  
がよっぽど負け犬だと思っけどね。あ、そもそも君には頭がなかった  
か。ゴメンゴメン。

36：名無しの邪神

ああん？

37：無貌の神

おおん？

38：名無しの邪神

はいはい、ケンカしないの。

39：名無しの邪神

話は戻るけど、なんか取られたって言ったなかつた？何を取られたのよ。

40：無貌の神

あゝ……うん、まあ、こつちにも色々あるのさ。

41：名無しの邪神

怪しい。

42：名無しの邪神

歯切れ悪いな、珍しく。

43：名無しの邪神

わかった！その伴侶を人間に取られたんだろ！

44：名無しの邪神

ほーん。

45：名無しの邪神

ほお〜〜ん。

46：名無しの邪神

ダイナミック☆

47：名無しの邪神

伝説の作画崩壊アニメの話はやめるんだ。

48：名無しの邪神  
見る抗鬱剤の事か〜〜!!!

49：名無しの邪神  
なんでキレてんのコイツ。

50：名無しの邪神  
さあ？

51：名無しの邪神  
で、誰に取られたの？

52：無貌の神  
……………

53：名無しの邪神  
ほれほれ、早く吐いちゃったほうが楽になるゾ。

54：名無しの邪神  
少なくとも、人間に化けたアレでは無いんだよな？

55：名無しの邪神  
もしそうだったら今ごろ嬉々として叫んでるだろ。

56：名無しの邪神  
トリックスターを出し抜いたとか、それこそめっちゃいい気分だろうからな。

57：無貌の神  
ぐむう。

58：名無しの邪神  
観念しなつて。

59：名無しの邪神  
盛大に笑つてやるよ。

60：無貌の神  
あくもう、分かつたよ。後輩くんがね、ウチの研究室の先生に一日  
独占されちゃつたんだ。それがもう悔しくて悔しくてさあ。

61：名無しの邪神  
は？一日？

62：名無しの邪神  
なんだ、結局ただのノロケか。

63：名無しの邪神  
はい、お疲れ。解散解散。

64：名無しの邪神  
なぜ、お前がここに居る……。

65：名無しの邪神  
なぜって……ああ、そういう意味ね。

66：名無しの邪神  
外なる神は俺が殺した。

67：名無しの邪神  
そうか、死ね。

68：名無しの邪神

じゃあお前は誰なんだよ。

69：名無しの邪神

旧き神かなんかでしょ（適当）

70：無貌の神

君たち真面目に話を聞く気無いね？

71：名無しの邪神

何を今さら。

72：名無しの邪神

時間の無駄だったわ、さよなら。

73：名無しの邪神

さよなら、さよなら、さよならあああくくく♪

74：名無しの邪神

急に歌うやん。

75：名無しの邪神

急に歌うよく♪

76：名無しの邪神

歌って戦う燃えアニメか何か？

77：名無しの邪神

あれ良いよな、名作。

78：名無しの邪神

それな。特に神を殺せる概念が出てくるのが激アツ。

79：名無しの邪神

殺されるかもってゾクゾクしちやったよな。

80：名無しの邪神

ね。

81：名無しの邪神

おっ、Mか？

82：名無しの邪神

私はLです。

83：名無しの邪神

世界一の名探偵来たね？

84：名無しの邪神

あ、S、M、Lで丁度いいな。

85：名無しの邪神

スマイル一つ！

86：名無しの邪神

急にファストフード店になるのやめて？

87：名無しの邪神

僕は今日も、ビッグバンを食べる。

88：名無しの邪神

超新星爆発を食ってんじやねえよ。



89：名無しの邪神

って、いつの間にかアイツ退出してね？

90：名無しの邪神

ホントだ、いつの間に。

91：名無しの邪神

じゃあ今の俺たち、雑談してるだけじゃん。

92：名無しの邪神

帰るか。

93：名無しの邪神

うん、信者が待ってるし。

94：名無しの邪神

んじやお疲れ。

95：黄衣の女王

ニヤル！今度遊びに行くから待っててね！

96：名無しの邪神

もうアイツ居ないよ。

97：黄衣の女王

えっ、そうなの!?

98：名無しの邪神

お前も早く帰ったほうがいいぞ。

99：黄衣の女王

うくん……それもそうだね！

100：黄衣の女王

それじゃまたね、ニヤル〜！

黄衣の女王が退出しました。

陰キヤで天才なムツツリデカ尻ドスケベマゾオナホ先生

「ふへ……いい、いらっしやいませ、北条くん……」

先に扉を開けた先生に先導される形で、中へ案内される。ごく普通のマンション、その一部屋。

大きくもなく、小さくもないといった、どこにでもあるワンルームマンションだ。

「お邪魔します」

ただ、長らく使われていないらしく、床に薄っすらと埃が積もっていた。

家具も大きめのベッドが一つだけという有り様だし、ここは本当に人が生活する為の空間なのだろうか。

「先生、何年くらい家に帰ってないんですか？」

「えーつと……三年くらいは、ずっと大学に居ましたかね……ふへ」

マジかよ。

「三年って……よくそんな時間、研究に没頭してましたね」

「ふへへ……」

なぜ照れる。

「じゃあまずは掃除からですね。掃除機とか……あるはず無いか」

「あ……掃除用具は、一階の共用スペースに置いてある……はずです」

「分かりました。取ってきますね」

とまあ、先生の家に来て早々、落ち着く間もなく掃除をする羽目になった訳で。

「本当に物が無いですね」

「ふへ……必要性を感じなかった……ので」

床とベッドを徹底的に綺麗にして、まだ明るいうちに掃除は完了したのだった。

今回は家具が少なく逆にあっさり終わったという、稀有なパターンだな。

「ふう、掃除終わりつと。先生、今日の夕飯は出前でも大丈夫ですか

「？」

「もちろん……です」

ちよつと身体が重くて、これから料理をする気にはなれない。丁度いいタイミングだし、ちよつと休みをもらおうとしよう。

この部屋、机すらないから、注文できる食べものって限られるな。取り敢えず手で持って食べれるやつか。

「ピザとかで良いですか？」

「ピザ……ふへ、徐々に食べますね……」

先生も嫌がってないみたいだし、決定ということ。そうしてスマホで宅配の注文をして、二人並んでベッドに座る。

繰り返すが、ここは椅子すらない虚無部屋なので、この行為は仕方のない事なのだ。行儀が悪いとか言わないでほしい。

「うわ、ベッドふかふかですね」

「ふへ……なんか、押し売りで買わされたヤツです……」

ベッドの押し売りとは。

「よろしければ……北条くんに、あげますよ……？」

「いやいや、こんなデカいの貰えませんか」

一応、僕の部屋にはベッド無いから、置くスペースならあるっちゃあるが。

というか、持ってくださいで一苦労するだろ、このサイズは。

「……とここで……」

ベッドに座った先生が、改まって口を開く。心なしか、少し申し訳なさそうな表情だ。

「わがままを言った……私が言うのも、何ですが……ミントちゃんは、一人にして良かったのですか……？」

どうやら、その場の勢いで言ったあの約束——僕を一晩だけ貸すという約束に、罪悪感を抱いているようだ。

こういう所を見ると、根は善人なんだっていうのがよく分かる。そういう所も先輩と同じらしい。

「大丈夫ですよ。何でもするって言ったのは先輩ですし」

「んー……」

「晩ごはんも作り置きしてきましたし、一晩くらいなら一人で過ごせると思います」

「それでしょうか……」

「ご飯食べて寝るだけですから、あの生活能力が壊滅してる先輩でも大丈夫……な筈です」

言つてて不安になってきたんだが、流石に一晩は過ごせるよね？

今どき小学生だって一晩くらいなら留守番できるし、きつと大丈夫だろう——と、思いたい。

「不安だ……」

おっと、思わず口から本音が。

「ふへ……北条くんは、本当にミントちゃんの事が……好きなんです  
ね……」

「いやあ、好きっていうか何ていうか」

好きとか嫌いとかいう次元は、もうとっくに超えてる感じするからなあ。隣にあの金髪爆乳ぶにあな生オナホが居ないと、どうも落ち着かないというか。

(あー、なんか先輩のこと思い出してたらムラムラしてきたな)

昼間に煽られて蓄積された獣欲に、再び火が付いてきてしまった。先輩は今ごろ気ままなオナニーライフでも楽しんでいるだろうか。

と、そんなことを想像していたら、余計にムラムラが加速してしまつたらしくて。

「あ……」

「え？」

気づけば、先生が股間を凝視していた。その視線の先にはもちろん。

「……勃起、してますね……」

「あー、えっと、これは……」

ズボンにテントを張るように、チンポが立派に勃起してしまつていた。

「おつきい……」

そんなズボン越しの勃起チンポを、九条先生は興味津々といった目

で見つめていた。

そんなジーツと見つめられると、少し意地悪したくなってくるな。

「興味あるんですか？」

「ふえっ!？」

「見てみたいですか？」

「い、いや、あの、その……!？」

「見たいんですよ？」

「う、その……はい……」

九条先生の期待に応えて、ズボンのジッパーを下げる。そうして少し下着をずらしてやれば、勃起したチンポが勢いよく飛び出してきた。

「ふわっ!？」

窮屈な拘束から解放されたれ、そそり勃つチンポ。それを瞬きもせず、一心に見つめ続ける九条先生。

ヤバいことしてるなって自覚はある。自覚はあるが、止められない。先生がそんな物欲しそうな目で見つめてくるのが悪い。僕は悪くない。

「わ、わぁ……は、初めて見ました……」

「もっと近くで見てもいいですよ」

「ふえっ!？」

隣に座る先生の左手を掴み、引き寄せる。思ったより軽かった身体が一瞬だけ浮いて、チンポと先生の距離が縮まる。

先生の体勢が崩れて、顔の前にチンポが突き出される形になった。

「あっ……んっ、すうー……くっつきあ？」

「昼間フェラされてから、洗ってないですからね」

洗う暇も無かったからな。濃いオスの匂いが溜まってしまっているのだろう。

その濃い匂いを、九条先生は恍惚の表情で吸い込んでいる。これは

——イケるのでは。

「先生、しゃぶってみますか？」

「ふえっ!？」

突然の提案に、ビクツと身をすくめる先生。しかし嫌悪感は感じられない。これはムツツリスケベの香りがするぞ。

「興味あるんですね？ 誰にも言いませんので、思うままにやっちゃってください。あ、歯を立てないようにだけ気をつけてくださいね」

「……………」

優しい眼差しで見つめ続けていると、ゆつくりと口が開かれていった。口の端からよだれが溢れ、ぽたりとチンポに零れ落ちる。

「んじゅるうっ?」

「うおっ!」

次の瞬間、生温かい口内にチンポがすっぽりと納まっていた。

やっぱりムツツリスケベだったか。

「んむっ?・むぶっ?・もぼおっ?」

「ちよっ、がつつき過ぎですよ」

あまりにも拙い、フェラと呼ぶのも憚られる行為。それでも歯を立てないよう、賢明にしゃぶる姿が愛おしく感じられる。

「じゅるるっ?んっぶ?・じゅぶぶうっ?」

と、しばらく辿々しい奉仕を受けていたら、視界の端にふりふりと揺れる尻が見えた。

白衣の上からでも分かるほどにデカイ、安産型のデカケツだった。

「むひゅうっ?!」

手持ち無沙汰になった右手で、デカケツを揉み込む。マシユマロのような柔らかさの中に、指を押し返すような弾力が感じられる。こいつは一級品のスケベなケツだな。

「ぶあっ……………?北条くん、何してっ……………」

「すみません。揉み心地の良さそうなデカ尻があつたので、つい」

揉んでみた感じ、一之瀬や先輩、果ては二宮よりもデカイ尻してるな。おっぱいが並な分、栄養がこっちに偏ってるのかもしれない。

「んやあっ……………?おしりっ……………?もみもみしないで、くださいっ……………」

「どうしてですか? こんなにエッチな尻してるのに」

「だ、だって……?こんな、おつきなお尻……?おかしいですう……?」

顔を真っ赤にしながら、その場で俯いてしまう九条先生。絞り出される声の奥には、性欲では隠しきれない嫌悪感が滲み出ている。

ふむ、どうやら先生はこの巨尻がコンプレックスのようだな。過去に何かあったのだろうか。

「そんなこと無いですよ。子供をいっぱい産めそうな、最高の尻だと思います」

「~~~~つ??」

「あ、今イキましたね」

片手で味わい続けるのも勿体ないと思い、両手でデカケツを鷲掴みにした瞬間、九条先生は全身をビクビクと震わせて絶頂した。

股の間から、濃いメスの匂いがぶんぶんしている。ケツ揉んだだけでイクとか、先輩に勝るとも劣らないクソザコメスオナホだな。

「はーっ?はーっ?はーっ?」

「九条先生」

だらしないトロ顔を晒す先生を、ぽすんとベッドに寝かせる。

そうして、ゆつくりと、着ている服を脱がせていく。

「ちよつと、我慢できそうにないんで」

すっぽんぽんになった所に白衣だけを着せて、これで準備は完了だ。

やはり、裸に白衣はくるものがある。全裸よりも興奮の度合いが半端ない。

「セックスしましょう」

「ふ、ふへ……??」

その笑いは肯定と取るぞ、デカ尻ドスケベマゾ豚オナホール先生がよ。



オスを誘惑するアルビノデカ尻オナホール先生

「セックスは初めてですか？」

「ひゃ、ひゃい……？はじめて、です……？」

ベッドに寝かせた先生に、四つん這いになって覆い被さる。こちらも服はとつくに脱いで、準備は万端だ。

「まあ、あれだけ研究一筋な生活してれば、そりゃ初めてですよね」

「あ、あうう……？」

これからする行為への恥ずかしさからか、先生は顔を真っ赤にして縮こまってしまふ。

そんな様子を見ると、髪色も相まって本当にウサギのような、小動物のような印象を受ける。

「初めてなら、ゆっくり解さないとですね」

「んひゃあっ!？」

左手を先生のおまんこに添えると、それだけでくちゆりと湿った音がした。どうやら愛液が溢れてしまっているようだ。

「もうこんなに濡らして……スケベなおまんこですね」

「ひいううう……？い、言わないでください……？」

指を割れ目に沿って動かすだけで、くちゆくちゆと卑猥な音が鼓膜を打つ。

指先に湿った肉の感触を感じて、否応なく興奮が高まってくる。

「オナニーとか、したことありますか？」

「な、ないですよ……?？」

「嘘つき」

「んつきゅう……?？」

こんなスケベな身体しておいて、オナニーしたことないとか嘘に決まってるだろ。ケツ揉んだだけでイクような、敏感オナホボディの癖によ。

「あっ……？んっ……?？おっ……?？」

少しだけ色素の沈着した胸に舌を這わせれば、先生はビクンと身体を震わせる。全体の肌色は白いのに、乳首だけが薄黒く変色している

のを見ると、なんだかとても背徳的な気分になってくる。

白の中に垂らされた黒。綺麗なものを穢す快感というものは、筆舌に尽くしがたい。

「んっ、れろっ」

「んひゃうううっ……!?おっ、おっぱ、おっぱいいいっ……!?」

小ぶりな、けれどガチロリの一之瀬よりは膨らんでいるおっぱいを、舌尖でもてあそぶ。

先輩のKカップ爆乳は言うまでもなく最高だが、先生の控えめCカップおっぱいも味があつて興奮する。

「あむっ、ぢゅるっ、ぺろぺろ」

「ひゃいいいっ??」

ビンビンに固く勃起した乳首を、甘噛みし、吸い上げ、舐めしやる。何度も女体を抱き潰してきたお陰で、女の感じる部分はだいたい見当がついてしまう。

「気持ちいいですか?」

「わがんにやいいっ……!?わがんにやいですうっ……!?」

指でおまんこを、口でおっぱいを。それぞれ執拗に責めていけば、九条先生はどんどん性感を高めていく。

涙を流し、よだれを垂らし、背筋をビクビクと震わせながら、軽い絶頂で何度も果てる。

終わりになき甘い快樂の連続。まさしく天国のような心地だろう。とても気持ちよさそうだ。

「だめえっ……?だめえええっ……!?な、なにかくるっ……?おっきいの、きちやいますうううっ……!?」

愛撫を続けていたら、不意に先生の身体が一際大きく痙攣し始める。大きい絶頂が来る合図なのだろう。

「そういうときは、イクって言っんですよ」

「いく……?」

「そう、イク」

「いく……?いくっ……?イクッ……!」

身体のビクビクが激しくなってくる。イク、イク、とうわ言のよう

に眩きながら、先生は初めての特大絶頂に身を委ねようとしている。  
「んへっ??あっ——んひやぎいいいつ!!?」

なので、絶頂の瞬間に合わせてクリトリスを思いつき擦り上げて  
やった。

絶頂のスイッチ。快樂の神経系が、未開発のクリトリスと一気に繋  
がる音がした。

「っ……!?!っ……!!?!?」

呼吸も忘れて、声を出すのも忘れて、人生初めての特大絶頂に浸る  
先生。

初めてがこんな極上アクメだと、もう中途半端な快樂じゃ満足でき  
なくなっちゃうな。アクメジャンキー確定だ。かわいいね。

「先生、息してください。流石に死んじやいます」

「かはっ……!!?!はっ、こひゅーっ、こひゅーっ……?」

陸に上がった魚みたいなのに、口をぱくぱくさせて酸素を取り込む。

よっほど気持ちよかったのか、恥も外聞も投げ捨てた無様なアへ顔  
を晒していた。

「はあっ……?はあっ……?」

「大丈夫ですか、九条先生」

「しゅ、しゅごっ……?しゅごっ、かっただすう……?」

「それは良かったですね」

赤い目の奥にハートマークを浮かべて、とろけた笑みを浮かべる先  
生。白い肌は紅潮して桃色に染まり、うっすらと汗が滲んでいる。

おまけに、全身からオスを誘うようなメス臭まで振りまく始末。ホ  
ントにセックス初めてなのか、このデカケツ兎オナホールはよ。

「やっ」と

とぶとぶ、と本気汁を吐き出すおまんこに、チンポの先端をくつつ  
ける。

おまんこがこれだけ濡れてれば、処女だろうと関係無い。今まで体  
験したことのない、最高に気持ちいいセックスが味わえるはずだ。

「ひっ……?」

先端が触れ合っただけなのに、先生は全身を震わせて小さく声を漏

らした。

嬉しそうな声出しやがって。視線もチンポに釘付けだし、やつぱど  
うしようもないマゾメスだな、こいつ。

「入れますよ」

「あ……う？あ、ああつ……!？」

今から、このデカケツオナホールを完膚無きまでにブチ犯す。その  
口火を切る一突きを突き上げようとした——その瞬間。

ピンポーン♪

と、インターホンの音が部屋に響き渡った。どうやら、頼んでいた  
ピザがちょうど届いてしまったらしい。

「……タイミング悪いですね」

「あ」

近づけていた身体を離してベッドから降りると、昂ぶっていた桃色  
の空気が一気に霧散する。同時にひどく残念そうな呟きが聞こえて  
きた。

それに対して申し訳なく思いながらも、流石に宅配が来ている状況  
でセックスに興じるのはダメだろうと、良識が性欲を抑え込む。

「取り敢えずピザ、受け取らないと」

「あ、はい……そう、ですね……」

目に見えて落ち込んでるな、先生。兎の耳とか尻尾がついてたら、  
絶対へによってなってるんだろうな。余裕で想像できるわ。

「あ、いいこと思いつきました」

「え……う？」

なんとか先生を元気づけられないかと高速で思考を回してみれば、  
ピンク色に侵された頭で最高のアイディアが思いついた。

「そのままの格好でピザ受け取ってくださいよ、先生」

「へ……う？」

ぜんぜん性欲抑え込めてないな。もっと頑張れよ、良識。

???

「はあ」

インターホンを鳴らしても中々出てこない住人に対して、時間ももつたないなと辟易しながらため息をつく。

どこにでもいるごく普通のバイト。それがこの少年の第一印象だった。

「……住所間違っていないよね？」

善人でも悪人でもなく、ただ社会という名の荒波に身を任せて流れているだけの、ただの人間。

そんな彼は、いつも通りに出来たてのピザを配達する仕事に従事していた。

スマホを操作し、伝票と位置情報のタブを交互に確認する。箱から漂ってくる芳しいシーフードの匂いが、小腹の空いた胃に直撃する。

「お腹減ったな……」

帰ったら何を食べようか、と思考を巡らせていると、ようやく目の前のドアが開かれた。

ガチャリ、と金属の音がして、重厚な見た目の割に軽い材質の扉がゆっくりと開く。

「あ、すみませーん。ピザの配達に参りました……た……？」

しかし、扉の中から現れたのは、少年の予想もしない光景だった。

「ふ、ふへ……うど、どうも……です？」

白い髪に、赤い眼と深いくま。およそ普通とは形容できないであろう女性が、扉を開けて現れた。

それだけならまだいい。それだけなら、綺麗だけど不健康そうな人だったな、で済むだろう。しかし、その女性が全裸であったのなら話は変わる。

「なっ……！」

「ぐ、ぐ苦勞……うさま、です……？」

いや、全裸と言うには語弊があった。一応、衣服は身に纏っている。しかしそれは肩からマントのように羽織っている白衣だけであり、身体の大事な部分を隠す役割を全く果たしていない。

(痴女だ)

少年の思考は、その一言で完結していた。

(エツロ……)

少しだけ色素の沈着した乳首は激しく勃起し、同じく手入れのされていない陰毛が生え散らかった割れ目からは、大量の愛液が垂れ落ちている。

童貞である少年には少々刺激が強い光景だった。ムクムクと、自身の一部が大きくなっていくのを感じ取る。

「あ、あの……う？」

「はっ！ す、すみません！ こちらにクレジット番号を入力してください！」

身体を隅々まで舐め回すような視線を感じ取ったのか、女性は顔を真っ赤にしながら、もじもじと内股をこすり合わせる。

箱に入ったピザと、タブレットを手渡す。後はカードの暗証番号を打ち込んでもらえば終わりだ。

「……………」

「……………」

女性がタブレットに数字を打ち込む間、無言の時間が流れる。その間にも、少年はこの光景を脳裏に焼き付けておこうと、女性の身体を思う存分視姦する。

自分の身体をじっくり見られていると理解し、女性はゾクゾクと背筋を震わせる。どぼり、と一際濃い本気汁が、股から垂れて地面に落っこちた。

「……………に、入力おわり、ました……………」

「あ、ああ……………はい。どうも」

支払いを確認し、タブレットを受け取る。受け渡す際に、くちゅくちゅという粘ついた水の音がしたが、少年にはもうどうでも良かった。

早く家に帰って、記憶したオカズでシコリたい。そんなオスの本能丸出しな、淫らな欲望しか考えられなくなっていたからだ。

「ふへ……………で、ではこれで……………」

「は、はいー」

興奮と周知で真っ赤になった顔に淫らかな笑みを浮かべて、白い女性  
は踵を返す。

その際、肩に掛けていた白衣が地面に落ちた。

「あ、すみません落ちま——」

少年の言葉は、最後まで続かなかつた。目の前に現れた光景が圧倒  
的すぎて、言葉を失ってしまったのだ。

「??」

「……でっ、か……」

落ちた白衣を拾おうと、少しだけ身を屈めたのが良くなかつた。

目の前に広がるのは、視界を埋め尽くすデカケツ。歩くだけでぶ  
んと肉が揺れ、男を誘惑する魔性の生尻。

おまけに、その隙間からは濃いメスの匂いを漂わせる本気汁がボタ  
ボタと垂れ落ちてきている。オスの理性をガリガリと削る、魅惑の匂  
いだ。

(も、もうっ……！)

我慢の限界だつた。何もかも投げ捨てて、目の前に置かれた極上の  
メスを喰りたい。獣欲に従って、このメスをメチャクチャにしてやり  
たい。

そんな原初の欲望が、少年の理性を押しつけて——

「遅いですよ。ピザを受け取るだけなのに、何してるんですか、先生」  
「あっ……？？北条くん……？」

暴走しそうになった本能が、辛うじて踏み留まる。部屋の奥から出  
てきた、北条と呼ばれた全裸の青年。彼はゆっくりとした動きで女性  
の側まで歩いてくると、むぎゆり、とデカケツを驚掴みにした。

「あんっ？」

たったそれだけの行為で、少年は理解した。目の前のメスは、この  
オスの所有物なのだ。

目の前に広がる、オスとメスが乳線り合う光景を見て——何故だか  
分からないが——胸の奥からものすごい敗北感が湧いてくる。

「っ……ぶ、っご利用、ありがとうございました!!」

これ以上見たくないと、少年は勢いよく扉を閉める。荒い息づかい

と共に、少年はその場から走り出した。

淫らな空気を振り切るように、オスとしての敗北を噛み締めるように。

「くっ……ううっ……い！」

ズボンの中ではち切れんばかりに勃起したチンポが、一筋の白い涙を流した。

口にするのも憚られる、無様な敗北の証。しかし、それは人生の中で最高に気持ちのいい射精であった。

この日、一人の少年が取り返しのないレベルのNTR性癖に目覚めた事実は、今はまだ誰も知らない事柄であった。



メス犬露出に目覚めたド変態マゾ豚オナホール

「はむ……美味しいですね、これ……」

「ピザってハズレ無いですよね」

ベッドに座って、たった今届いたシーフードピザを二人で頬張る。果てしなく行儀悪いけど、そこはもうスルーしてほしい。

というか、テーブルどころか冷蔵庫すら無いってのはマジでヤバイでしょ。どうやって生活するんだよ、こんな部屋で。

「後で飲み物買ってこなくちゃですね」

「はむ……もぐ……」

「それとコンドームも」

「コッ……」

先生の顔が赤く染まる。さつき思いつき前戯して、今もスツ裸なのに、何をそんなに恥ずかしがっているんだろうか。

「あ、なんなら今買いに行きましょうか」

「はえっ!?!」

ビクツと先生の肩が跳ねる。さつきの全裸でピザ受け取りプレイと同様に、これからされるであろうプレイを想像してしまったんだろう。

まあ、その予想は大体当たっている。

「先生もああいうプレイ、嫌いじゃないみたいですし、ね?」

「……???」

さつきよりも更に顔を赤く染めて、九条先生はもじもじと内股を擦り合わせる。

その度に、おまんこからぐちゅぐちゅと卑猥な音が響いて、興奮を煽ってくる始末。エロ過ぎるだろ、このデカケツマゾぶにオナホはよ。

「じゃあ、行きますか」

「……はい?」

ベッドから立ち上がって、先生に白衣を手渡す。

さあ、背徳的な買い物の始まりだ

???

「う、ううう……?」

「ほら九条先生。もつと背筋伸ばさないよ」

すっかり暗くなった町中を、先生と二人でゆつくりと歩いてゆく。もちろん服は着て、手には先生の白衣を持ったまま。

ただ、二足歩行で服を着て歩いているのは僕だけだ。肝心の先生はというと。

「はうう……?は、恥ずかしいですう……?」

ご自慢のデカケツを天高く突き上げ、ペットののように全裸のまま四足歩行をしていた。

全裸と言っても、流石に靴ぐらいは履いているが。

「その割には、随分おまんこが濡れてますけど」

「あうう……?み、見ないでください……?」

先生の首には、ペット用の首輪が着けてある。出かける直前に、部屋の戸棚から偶然発見したものだ。おそらく、前の住人が忘れていたものなのだろう。

「自分から見せつけといて何言ってるんですか、このマゾ犬デカケツペットが!」  
「????」

「つ~~~~~?!?!」

物欲しそ~~う~~にふりふりと揺れるデカケツを、思いっきり引っぱたいてやる。

すると先生は全身を震わせ、おまんこからプシュツと軽く潮を吹いた。イキやす過ぎだろ、この巨尻ペットマゾ豚オナホールはよ。

「はっ……?はっ……?」

「声を出すの、よく我慢できましたね。偉い偉い」

「お、っ??」

クソデカ喘ぎ声を我慢できた先生を讃えるべく、頭を撫でながら耳元で褒め言葉を囁いてやる。

その瞬間、先生は白目を剥いて絶頂した。

じよろじよろっ? プシッ? ぱちやぱちやっ? ぼっ? どころおおっ?  
じよぼぼぼっ?

尿道から勢いよくおしっこを漏らし、とろけた表情のまま、本物の  
ペットのように快樂を受け入れている。

道端にはほかほかと湯気を立たせ、淫らな匂いを放つおしっこ溜まり  
が出来上がっていた。潮や本気汁もブレンドされているようで、  
漂ってくる匂いだけで興奮してくる。

「おっっ……っ? あっっ……っ?」

「あらら。イケない子ですね、先生。ペットなら、おしっこはちゃんと  
した場所でやらないと」

「ちゃん、とお……??」

道の脇にある電柱を指差す。

それを見て、先生は再びぶるりと背筋を震わせた。

「犬なら犬らしく、電柱の陰にしてください」

「ひっ……っ? ひっ……っ?」

ぶるぶると全身を震わせながら、電柱を見つめて固まる先生。人と  
しての尊厳とか、プライドとかが邪魔してるんだろう。

まったく、世話の焼ける先生だ。

「上手くできれば、もう一回褒めてあげますよ」

「ひっ……っ? うう……っ?」

僕の言葉を聞いて、躊躇いながらもぺたぺたと、四つん這いのまま  
電柱に向かっていく先生。

よしよし、いい子だ。ちゃんとご褒美をあげないといけないな。

「こ、こう、ですかあ……??」

「もつと足を高く上げてください」

「こ、これ以上は、無理ですう……っ?」

「仕方ないですね」

四つん這いでのおしっこが不慣れな先生のために、少しだけサポー  
トしてやるか。

上げている方の右脚を掴んで、ゆっくりと上げてやる。よし、これ  
でいい角度になったな。

「は、はわわわあ……!?!」

「いいアングルですね。おまんこもケツ穴も、バッチリ見えています」

「い、いやあ……?しや、写真、撮らないでえ……?」

空いた方の手に持ったスマホで、九条先生の恥ずかしい部分を激写する。

真っ白な本気汁を噴き出すおまんこも、ヒクヒクと動いて物欲しそうなケツ穴も、全部が丸見えな恥ずかしい写真である。

「しようがないですね。じゃあ写真は止めてあげます」

「あ、ありがと、ごさいます……?」

「その代わり、先生のおしっこする場面を動画で撮らせてもらいます」

「っ——!?!」

お願い通り、写真は撮らない。でも動画を撮らないではお願いされてない。

快感と羞恥で頭が回っていない状態の先生につけ込んだ、完璧な作戦だ。

「ほら、はやくおしっこしてください。あんまりモタモタしていると、人が来ちゃいますよ?」

「っ……!?!っ……!?!」

あ、また軽くイッたな、このマゾオナホが。やっぱり見られて興奮する変態だったか。

ただ、今は見られるよりも数倍は気持ちいい事が待ってるからな。そっちを優先しよう。

「いやらしい汁をいっぱい垂れ流してるその割れ目から、しーって黄色い水を飛ばすだけで良いんですよ」

「あ……!?!」

「しーしー、しーしー」

「あ……!?!あ、あっ……!?!」

耳元でASMRのように囁いてやれば、先生はぶるぶると身体を震わせた。

次の瞬間、先生の尿道から勢いよくおしっこが飛び出してきた。激しい水音を鳴らして、大量の黄金水が電柱にぶつかっていく。

「あゝっ……??？」

とろけた表情で、九条先生は思うままにおしっこを放出していく。まるで本物のペットみたいだな。

「いっばい出ましたね」

「ほ、ほひっ……??ほおっ……??」

「よく頑張りました、アリス」

「あ——??？」

僕が九条先生<sup>???</sup>の下の名前を呼んだ瞬間、おまんこから大量の白濁本気汁が溢れ出してきた。

九条先生の本名は、九条アリスという。

アルビノという幻想的な見た目から親が勝手に付けた、メルヘン極まりない名前だ。

だから、九条先生は下の名前が嫌いなのだ。メルヘンチックな雰囲気、自分に合っていないくて嫌だと。そう言っていた。

「いっばいしーしーして、とつても偉いですね——よしよし」

「あ……??あ、あああっ……??！」

めいっばい頭を撫でて、めいっばい褒める。これまでの人生の埋め合わせをするように、先生<sup>アリス</sup>のすべてを肯定してあげる。

おしっこするだけで褒めてもらえるなんて、まるで赤ちゃんに戻ったような気持ちだろう。その証拠に、先生は今まで見たことも無いほどの、情けないトロ顔を披露している。

「これからもアリスって呼んでいいですか？」

「うん……?アリス、嬉しいよお……パパあ？」

「パパ？」

「えへえ……?」

夢見心地といった様子のまま、先生が抱きついてくる。どうやら本格的に幼児退行してるみたいだ。

しゃがんだままだとお互いに辛いので、さりげなく立ち上がってみる。意外と軽いな、先生。ちゃんと食事は摂ってるのか？

「もつとお……?もつと褒めてえ……パパあ？」

「よしよし、アリスは偉いね」

抱きついたままの先生の頭を、ゆっくりと撫でてやる。すると嬉しそうに目を細め、プシュツとおまんこから潮を噴き出した。

随分とドエロい子供だな、おい。こんな子供が居たら百パーセント襲ってるぞ。マジで。

「えへへ……はっ」

「お」

あ、正気に戻ったっぽい。

「え、あ、あの……ほ、北条、くん……？」

「はい。何でしょう、アリス先生」

真正面にある先生の顔が、どんどん真っ赤に染まっていく。今までも十分赤かったが、今はそれ以上に真っ赤っ赤だ。茹でダコみたいだな。

「あ、あう、あうあ……！」

「大丈夫ですか、アリス先生」

「ひう……！」

大丈夫じゃないっぽいな、これは。

「い、今のはちがつ……違うんですう……！」

「分かってますよ、アリス先生。気持ちよすぎて、頭がパーになっちゃってただけなんですよね」

「あうあうあう……！」

腕の中で狼狽える九条先生は、ハッキリ言ってめちやくちやかわいい。白に赤のコントラストというのは、やはり芸術的と言わざるを得ないな。

「はい、じゃあこれでお散歩はお仕舞いです」

「……ほえ？」

正直に言って、この状態になった九条先生はずっと見てたいレベルでかわいい。けれど、そういうわけにも行くまい。

いくら人通りの少ない道だからって、ずっと同じ場所にいれば見つかる確率も上がってきてしまうものだ。こういうのは、程々が丁度いい。

「どうぞ、白衣です」

「あ、ありがとうございますう……」

「外で半裸の痴女と出会おうと興奮しますよね」

「ほ、北条くんのいじわるう……」

それはもう不可抗力レベルではない。先生がエロ過ぎるのが悪いのだ。僕は悪くない。

「じゃあさっさと飲み物とコンドーム買って、部屋で続きやりましょうね」

「っ……??？」

続き、という言葉聞いて、先生はまたしても顔を赤く染め上げる。ポタリ、と道路に一滴の染みが出来た。

## 教え子チンポにハメ潰される激よわ生オナホ先生

あれから特に問題もなく飲み物とコンドームを購入し、僕たちは先生の部屋に戻ってきていた。

いやあ、前ボタンもない白衣一枚で、必死に身体を隠して、顔を真っ赤にしながら面白い物をする先生の姿は、実にエロかったなあ。

「無事に買えてよかったですね、先生」

「……やっぱり北条くん、いじわるです……」

先にベッドに腰をおろした九条先生は、ジトつとした目でこちらを見つめてくる。

不幸中の幸いというべきだろうか。買い物客が少なかったのは、マジで幸運だった。おかげで先生との露出買い物プレイに集中できたから、かなりムラムラが高まっている。

「そんなこと言って、先生のおまんこずっとびしょ濡れだったじゃないですか」

「そ、それはっ……」

「ふとももに愛液いっぱい垂らして、コンビニの床をあんなに汚して。まったく悪い先生ですね」

「う、ううう……?」

雨なんて降ってないのに、先生の足元だけ水たまりが出来てたからな。誰かが踏んで転んだらどうするんだ、反省しろマジで。

「そんな悪い先生には、お仕置きしないと」

「あっ……?」

無抵抗の先生をベッドに押し倒す。

無造作に伸びた白い髪が、ベッドの上にはらりと拡がった。

「きれいな髪ですね」

「はうっ……!?!」

「あ、枝毛……ちゃんと手入れしないと駄目ですよ。女性の髪はすぐに傷んじやうんですから」

「はうう……」

せっかく綺麗な白い髪をしているのに、ボサボサになってたらもっ



たいない。先生ってば可愛い顔してるんだから、身だしなみを整えればモテると思うんだけどな。

「い、いきなりどうしたんですかあ……？え、エッチなことをするんじゃない、なかつたんですかあ……？」

「こうやって気分を高めるのも重要なことですよ」

「も、もう十分高まってますよお……??？」

「知ってます」

さっきの四つん這い露出プレイで興奮は最高潮だろうからな。更に言うなら、その前のピザ受け取りプレイの時点で完璧に発情していた。

そこに追加で、露出買い物プレイまでしたのだから、先生のおまんこは切ない程ぐずぐずにとろけているのだろう。

「は、はやくう……うさ、触ってくださいい……う」

甘ったるい声で、愛撫を懇願する先生。脚を大きく開き、女の恥ずかしい部分を惜しげもなく見せつけている。

トロトロと愛液を垂れ流すそこは、とても淫靡で魅力的なカタチをしていた。

「エロいおまんこですね」

「~~~~~??？」

先輩や一之瀬、二宮とは違い、ピッチリ閉じている訳では無い割れ目。少しだけ色素が沈着して黒ずんでいるのは、やはり年齢のせいなのだろうか。

まあ、その黒と肌の白のコントラストが、余計にエロさを際立たせてるんだけど。

「はむっ」

「ぴゃあっ??？」

見てるこつちが辛抱たまらなくなつて、勢いよく先生のおまんこにしゃぶりつく。

そのまま息をする度に、とてもいやらしいメスの匂いが鼻から抜けて、興奮を加速させていく。

「れるっ、れろっ、じゅるるるっ」

「んはあああああつ!?!?!?!」

舌を伸ばして、臍口から中へと侵入していく。閉じた肉を搔き分けるように膣内を進んでいけば、内部の凹凸が舌越しにハッキリと感じられた。

更に入り口から奥まで満遍なくキュウキュウと締め付けられ、それだけで先生のアソコが締りのいい極上の名器なのだと、否が応でも理解させられてしまう。

(ん、ちゃんと処女膜あるな)

奥へ進もうとする舌が、薄い膜のようなものに阻まれる。少し力を込めれば破れそうなほど薄い膜だが、舌で破ってしまうのは勿体ない。

ここはやはり、チンポをブチ込んで派手に破ってあげるべきだろう。

「ぶはっ……ふう」

「はうう……う？」

小一時間くらい先生のおまんこを舐め回し、入れても痛く無いように徹底的にほぐし尽くした。

ぐったりとベッドに沈む先生を見下ろして、一息つく。吐き出した息が、自分でも感じ取れるほどにメス臭い。

(エロ……)

紅潮した白い肌、汗で濡れる白い髪。そして、快樂にとろける赤い瞳。先生の身体は、もうどこを見ても芸術のような女体だった。神に愛された肉体、というヤツなのかもしれない。

「先生——いや、アリス」

「ふえっ……?!?!」

自分の服を脱ぎながら、先生の本名を呼ぶ。やはり幻想的な身体には、幻想的な名前が似合っている。

「挿入れますよ」

「あっ……は、はいいい……?!?!」

唐突な名前呼びに驚いていたのも束の間。チンポの先端をおまんこに押し当てると、アリスはビクツと身体を震わせて頷いた。

同意は得た。後は思う存分、この肉体を貪るだけだ。

「……はっ！ ほ、北条くん……！」

アリスは処女だが、ここまでおまんこがぐちゃぐちゃになっていたら痛みも感じないだろう。ああ、はやくこの芸術品のような女体を、ぐちゃぐちゃに犯して——

「ちよっ、あの……！」

「なんですか、先生。今更やめるなんて——」

「ご、ゴム……！ ゴム付けないとです……！」

「あっ」

言われて気づく。そうだ、ここで付けなかつたら何のために買いに行ったのか分からなくなってしまう。

いや、個人的には露出プレイ出来たから、それだけで満足ではあつたんだが。

「……すみません、すっかり忘れてました」

「ふへ……ほ、北条くんもしっかりしてるように見えて、子供なんです  
ねえ……そ、そんなに私の身体が、魅力的でしたか……？」

「ええ。思わず理性を失っちゃうくらいには魅力的でしたよ」

「……??？」

なんで自分で煽ったくせに、反撃されて照れてるんですかねえ。

「これで、よしっと。ゴムも付けましたし、続きと行きましようか」

「ふへ……？そ、そうですね……？」

少しグダってしまったが、気を取り直して続きを始めるでしょう。

「あっ……？」

アリスの上に覆い被さつて、秘所同士を密着させる。くちゅくちゅ、という淫らな音と二人分の吐息だけが部屋の中に響き渡り、否応なく興奮を加速させていく。

「力、抜いてくださいね」

「んっ……!？」

ゆっくりと、身体を下に沈めていく。ゴムに包まれた先端が、アリスの肉穴にズブズブと埋まっていく。

そうしてチンポの先端が、処女膜に——触れた。

「あつ——んっはあああああああつ?!?!????

瞬間、一気に腰を突き出して処女膜をブチ破る。そのままの勢いで膣肉を広げて突き進み、最奥にある子宮口をチンポで叩き潰した。

「ひ、ひう……!?は、入ったあ……!?おちんちん、中に入ってるう……!?!」

「処女卒業ですね。おめでとうございます、アリス先生」

「え、えへへえ……??」

初セックスだというのに、やはり痛みは無いようだ。丹念にほぐしておいた成果だな。

「気分はどうですか?」

「さ、最高ですう……?頭ふわふわしてえ……?目の前パチパチっしてえ……?夢みたい……?」

うつとり虚空を眺め、快樂だけを存分に感じているメスの表情。ハッキリ言っつて、とてつもなくエロい。

チンポを入れただけでこれなら、ピストンを開始したらどうなってしまうんだろうか。

「動きますよ」

「っ、はい……?」

奥まで突っ込んでいたチンポを、ゆつくりと引き抜く。膣内の凹凸が感じ取れるほど、ゆつくりと。

「んぎぎぎいいいっ……!?!」

チンポが出ていかないようにと、無意識におまんこが締め付けてくる。しかしそれだけではチンポの動きを阻むことはできず、逆に膣壁をより強く擦られるだけの結果に終わった。

「ひゅっ——??」

そうして入口近くまで引き抜いたチンポを、今度は思いっきり最奥まで挿入する。バツチュン!——と派手な音がして、結合部から本気汁が溢れ出した。

「っ……!?っひゅ……!?!」

目を見開いて、口をパクパク動かすアリス。どうやら、何が起こっているか理解できていないらしい。

だったら畳み掛けるとしよう。先輩とのセックスで鍛えられたピストンで、しっかりとメス堕ちさせせてやる。

「おっ……???ごっ……???」

何度も何度も、高速で腰を打ち付ける。ピストンする毎にバチユバチユと淫らな水音が響き渡り、アリスの全身が痙攣する。

白目をむき、舌を放り出し、気絶しながら絶頂を続ける無様なメス肉。それが、いまの九条アリスという女のすべてだった。

「出しますよ」

「おっ……???へっ……???」

聞こえていないだろうが、耳元で射精の宣言をする。一際大きくピストンをして、子宮を叩き潰しながらゴムの中に射精した。

「~~~~っ~~~~」

チンポが脈動して精液を吐き出す度に、アリスの中でゴムが膨らんでいくのが分かる。

「ふうっ……めちやくちや搾り取られたな……」

「あ~~~~んあ~~~~」

潰れたカエルのように痙攣しながら、完全に白目を剥いているアリス。

そんな無様な姿が愛おしくて、気がつけば唇を奪っていた。不可抗  
力ってやつだな。

「んっ……ぷはっ。まだまだハメ潰してあげますからね、アリス先生」  
「んっ?むう?えへへえ……楽しみい?」

おまんこからチンポを引き抜き、コンドームを新しく付け替える。  
初めての夜は、まだまだ始まったばかりだ。

気絶しながらデカケツをぶっ叩かれてマゾイキする  
ド変態ペツト先生

「いい眺めですね」

「あつ……？あつ……？」

ベッドの上に四つん這いになったアリスの痴態を、上から眺めて優越感に浸る。

十人が見たら十人ともデカいと太鼓判を押す安産型のデカケツに、チンポを挟んで勢いよくしごいていく。

「見て下さいアリス先生。ケツ肉だけでチンポを挟めるのなんて、先生ぐらいのものですよ」

「う、ううう……？」

「立派に実った、いやらしいケツですね」

「ひいん……？そ、そんなこと言わないでください……？」

背後から見える耳が真っ赤に染まっている。どうやら、褒められて照れてるらしい。このオナホはマジでカワイイな、まったく。

「んー……」

「ど、どうしました??」

「いや、なんか背筋に悪寒が……」

先生の事を褒めるたびに、背筋に謎の悪寒が走ってくるのだ。なんだろう、これは。

「ふふ……北条くんを独り占めしてるから、ミントちゃんが恨んでるのかもしれないね……？」

「ああ、ありそうですね」

冗談めかしたセリフに、万感の思いで相槌を打つ。

そのついでに立派なデカケツを揉み込んでやれば、ビクツと背筋が震えた。

「先輩って、かなり独占欲強いですから」

「意外、ですね……ミントちゃんって、もっとサバサバしてるかと思いましたが」



「あー……やっぱり最高ですね、このデカケツまんこ」

「おぎっ、ぴいひいひいひいっ??」

高速ピストンを開始すれば、意味不明な叫び声を上げてのたうち回るデカケツオナホ。

その無様な様子に加虐心が刺激され、ますますいじめたくなってしまう。

「ははっ、そんなにチンポが気持ちいいんですか?」

「ぎもぢいひいひいっ???おちんぽぎもぢいよおおおっ???おにやかごりごりされてえええええっ???おかしくにやるうううううっ???」

「どうしようもないメス豚オナホですね……つとー!」

既にだらしないうへ顔を晒して、色々な淫汗を撒き散らしている無様なオナホ。そんな彼女をチンポで更に責め立てていく。

「おっごおおおっ!!?」

正常位の時より乱れ方が段違いに激しい。どうやら先生はバツクの方がお気に入りみたいだ。

デカケツを突き出しておまんこを突かれるのが大好きとか、やっぱりどうしようもないド変態だな、アリス先生は。

「やっぱりケツがデカイと締め付けも凄いですね! 今までセックスした中で、一番の締め具合ですよ!」

「えへへえ? やったあ? アリス、いちばんになったあ?」

一之瀬の未成熟キツキツおまんこはサイズ差による強制的な締め付けて感じだったが、アリス先生のふわとろギユウギユウおまんこはチンポをすべて受け入れた上で、自分の意志によって締め付けてる感じがする。

これが大人の包容力ってヤツか。ネガティブで陰キャだけど、そういうところはしっかりしてるんだな。見直したわ。

「あはあっ? ぱぱっ? ぱぱあっ? もつと? アリスのおまんこで? きもちよくなつてえええええ?」

「うおっ!」

あれこれ考えて油断していたら、いきなり先生が腰を動かしてきた。こっちのピストンと同時に腰を突き出してくるもんだから、さっ





「ぱぱっ??ぱぱっ??ぱぱあっ??」

先生にパパと呼ばれる度に、興奮が際限なく高まっていくのを感じる。体格差も相まって、まるで本当に娘を犯しているみたいに感じてしまう。

先輩や一之瀬みたいなロリ体型のメスを犯すのとは、また異なった背徳の味。血の繋がった——実際には繋がっていないが——娘を犯しているという、生命に対する背徳感。

親子の不貞とはこれほどに甘美なものなのかと、どんどん心臓の鼓動が高まっていく。

「くっ、そろそろ出そうだっ……!」

「出してえっ?!アリスのからだで、いっぱい気持ちよくなってええええええっ!」

こみ上げる射精感のまま、がむしやらに腰を振りたくる。おまんこの奥にチンポを入れる度に、ぶつかった尻肉がふるぶると柔らかかそうに震えた。

「んひいいいいっ?おしりいつ?もみもみしやれてりゆううううう??」

半ば無意識に両手が尻肉を掴むと、掌いっぱい収まらないほどのデカケツを揉み込んでいた。

指が沈み込む柔らかさと、その奥に指を弾く弾力を持った、世界最高峰とも呼べるケツ肉だった。

「同時にイけっ!…このドスケベデカケツ娘オナホがっ!」

「~~~~~」

スパァン!——と勢いよくケツを叩いた瞬間、先生の全身が派手に震えて、おまんこの締め付けが一層強くなった。

尻を思いつきり叩かれて絶頂するなんて、本当に救いようのないドマゾだな、先生は。

「ぐっ……おお……!」

おまんこが締め付けるままにゴムの中に射精し、背筋が震えるほどの快感を味わう。

「はぁ……」

大きく息を吐いて、おまんこからチンポを引き抜く。ゴムは破けていないのに、真っ白に泡立った液体に塗れている様がたまらなく淫靡に見える。

先生とのセックス、めっちゃくちや気持ちよかったな。やはりバックで突くのは、オスの征服感が満たされていいものだ。

「あへ……う？あひ……う？」  
ぐったりと脱力してベッドに沈む先生を一瞥し、箱からコンドームを取り出して装着する。

「んひっ!?!」  
そのままの流れでおまんこに先端を押し当てれば、先生はビクツと背筋を震わせた。

「にや、にやんで、また大きくなって……う？」  
「一回や二回で終わるはずないでしょう」

こちらとやりたい盛りの大学生だ。若者の性欲を舐めないでいた  
「さあ、もつとセックスしましょうねアリス。夜はまだまだ長いです  
よ」

「ひっ……う？あ、あ、あ……う？あ、くくくっ??」

デカケツオナホの喘ぎ声を合図に、第三回戦は幕を開ける。  
お楽しみは、まだまだ終わりそうもなかった。

自分で自分を慰める金髪ぶにロリ爆乳オナホ先輩

「うう〜！」

パソコンの前に座り、ぐちゅぐちゅと指でおまんこをほじくる裸の人物が居た。

「というか、三峰ミントその人であった。

「ずるいー・ずるいずるい！ ずるいぞくーちゃん先生！」

なんともご立腹のまま、人差し指と中指を突っ込んで膣内を弄くり回しているぷにロリ爆乳。その辺の男に見つかれば秒で犯されてしまふであろうその肢体は、淫らな熱をたっぷりと溜め込んでしまっていた。

その熱を開放できる唯一の存在は、今この部屋には居ない。画面の向こうで乳練り合う一組の男女を見て、ミントは激怒しながら自分を慰めていた。

「わ、わたしですら全裸露出ペット徘徊プレイはしたことないのに！

あまつさえ、白衣オンリー露出買い物プレイまでするなんて！」

そういうのはわたしとヤツてくれよ先輩くん！と追加で愚痴を溢すミント。まるでこつちが生き遅れの三十路のようである。

「あ、また始めた……これで何回戦目だい？」

画面の中では、ベッドの上で再び獣のようなセックスが開始された光景が映し出されている。

一之瀬から借りた盗撮用ドローンを使って盗撮を開始したはいいものの、一緒に帰ってから今までほぼエッチなことしかしていない。

普段の自分は棚に上げて『いい加減にしろ！』と心の底から叫びたい気持ちでいっぱいなミントなのであった

「むう〜！」

おまんこをほじる指を止め、机の上にあった電マを手取る。バッテリー内臓のいいヤツである。おまけに振動も十段階に設定できると、至れり尽くせりな代物だ。

「先輩くん……めっ！」

スイッチを入れ、いきなり振動をマックスにした電マをぐちゅぐ

ちよになつたおまんこに押し当てる。

「あつ？ふつううう？」

押し当てた部位が激しく振動して、溢れていた淫汁をそこら中にまき散らす。部屋中にメスの匂いがこびりつくのも時間の問題だろう。

「んー、やつぱりこれじゃないんだよねえ」

その振動に見合う快楽を与えてはくれるものの、やはり人の温もりとは縁遠い。電マには抱きしめてくれる腕も、キスをしてくれる口も付いてないのだから。

「はあく……物足りないよ、後輩くん」

電マを床に放り投げ、机の上に置いてあつた極太デイルドを手にする。

そのまま極太デイルドをおまんこに挿入すると、勢いよく上下に動かし始めた。

「あんつ？つく？」

やはり快楽は感じる。人間とはいえ生物なのだから、外からの刺激に反応して快感を発生させるのはごく当たり前の事だ。

しかし、足りない。心と心が繋がったあの感覚に比べれば、今の快楽は圧倒的にレベルが足りない。

「ふふつ？人間は心の生き物だとは、よく言ったものだね？」

だから想像する、妄想する。

まるで思春期の中学生のように。

雄々しいオスに抱かれる自分を想像する。

「んつ？くつ？ふうつ？」

とろとろになつたおまんこを極太デイルドでほじくり回し、どんな肉体的快感を高めていく。

それと同時に妄想も加速させ、精神的快感も高めていく。

「はあつ？はあつ？後輩くん？後輩くん？」

目を閉じれば、過去に抱き潰された経験が鮮明に蘇ってくる。遅しい腕、凛々しい声、そして雄々しくそそり勃つチンポ。

そのすべてがミントの精神を高揚させ、より身体を興奮させていく。やはり自分が好きな人を想像してするオナニーは、ただ惰性です









とても都合のいいオナホ先生

「んあ、あ、あ、あ、っ?!?!?」

「あー、このケツ最高」

!!!???

バックで尻穴を突くと、波打つケツ肉が映えてかなり壯観だ。

これは病みつきになる突き心地だな。

「本当にお尻は初めてなんですか？　こんなにぐっぽり啜え込んじゃってるのに」

「い、いわない？　れえっ？　くだひやいつ？」

おまんこに十発ブチ込んだ後——ゴムが無くなったので仕方なく——ヒクヒクと物欲しそうなアナルにチンポを生で突っ込んでから、先生はずっとこんな感じだ。

バックで一突きする度に、背筋を伸ばして全身を震わせるアリス先生。ハッキリ言ってみちやくちやエロい。

「やっぱりケツがデカいと、より感じやすいものなんですかね？」

「しらにやっ？　あおっ？　お、あ、あ、あ、っ？」

腰を押し付けてぐりぐりとケツ穴をほじくってやると、アリス先生は全身を震わせて絶頂した。

絶頂するとナカが収縮して、チンポが更に締め付けられるから、より気持ちいい。

「お、っ?!?ま、っ?!?いつでりゅ?!?いつでましゅからあああああああっ?!?!?」

なのでその締め付けを堪能しながら、追加でピストンをしてあげる。

絶頂中の所に更に絶頂を叩き込んで、気持ちいい場所から降りてこないようにする。

「にやあ、あ、あ、あ、あ、っ?!?!?」

今のアリス先生の頭の中は、最高のキモチイイでいっぱいだ。よだれも涙も垂れ流しにして、ケツ穴で感じる快樂に溺れている。

やっぱり、おまんこよりもケツ穴のほうが感度いいような気がするな。普通にセックスしてた時より、乱れ方が段違いだ。



のケツ。ホカホカと湯気が立つほどに熱くなっているそこから、マグマのように白い液体がゆつくりと垂れ落ちてきた。

「……エツロ」

いやもう……射精した直後だったのに、この光景でオナニー出来るぐらいにはエロい。

アナルセックスは先輩と何度かしたことあるが、今回はそのすべてを上回る気持ちよさだった。ケツ穴に関してだけなら、アリス先生は先輩を完全に上回っているとと言えるだろう。

「はあっ……っ？はひっ……っ？ひいうっ……っ？」

「大丈夫ですか、先生」

「ふへっ……っ？だ、だいじょうぶれすよお……っ？とつても、気持ちよかったですう……っ？」

にへら、とだらしなく笑って、快樂にとろけた赤い瞳がこちらを見つめた。

相変わらずキレイな瞳だ。目の下のくまが無ければ、もっと映えるだろうに。そう思うと、実にもつたいたいと言える。

「……先生は、なんでそんなに研究に打ち込むんですか？」

「ほへっ？」

唐突な質問に、アリス先生は目を丸くしている。ピロートークにする話題ではないと思うが、気になってしまったのだからしようがない。

「ふへ……私が研究に打ち込む理由……ですか」

「はい。世間一般的に見ても、先生は十分な研究成果を出しています」  
体勢を直して、ベッドの上で二人向き合う。

ふわり、と濃厚なメスの匂いが鼻をついた。

「だから、これ以上命を削って研究をする必要なんて無いと思うんです」

「ふへ……北条くんは優しいですね……」

アリス先生は伏し目がちに視線をそらして、言葉をつぶやく。

汗で張り付いた髪が、余計に物憂げさとエロスを際立たせている。めちやくちや真面目な雰囲気なのだが、理性がかなりヤバイ。今す

ぐ襲いたくなるわ、こんなの。

「……その、恥ずかしい話なのですが……私が頑張るのは、パパ——お父さんに認められる為なんです」

ゆつくりと、申し訳無さそうに、アリス先生は言葉をこぼす。

お父さん……そうか、セックス中に——褒められる度に、嬉しそうに。パパって言ってたのは、そういう。

「お父さんは、とても厳格で真面目な科学者でした……ノーベル賞を取ったこともあるんですよ？」

「それは凄いですね」

「ふへへ……でしょう？」

嬉しそうに、照れくさそうに、アリス先生は笑う。お父さんが心から大好きなんだと分かる、そんな優しい笑顔だった。

「でも、そんなお父さんだから……褒められた事がほとんど無くて……」

一転して、赤い瞳が下を向く。

白い髪が目元を隠し、更に場の雰囲気をも暗くさせる。

「お父さんに認めてもらうために……褒めてもらうために、私は研究者になったんです……ふ、不純な動機ですみません……」

なるほど、そういう事だったのか。偉大なお父さんに認められたくて、身を削って今まで頑張っていたと。

なんともいじらしくて可愛いじゃないか、この先生は。来年で三十路みそじになるなんて、全然思えないレベルの可愛さだ。

「そんなことないですよ。動機がどうであれ、先生が凄い発明をしたのは事実じゃないですか。誰がなんと言おうと、そこが覆ることは絶対ありません」

「……北条、くん……」

実際、充分すごい人だしアリス先生。比べる対象が凄すぎるノーベル賞つてだけで、そこらの一般人より知識も技術も遥か上なのは間違いない。だから、もっと自信を持っていいんだ。お父さんの影に囚われず、もっと前を向いていいんだ。

「でも……」

「僕は先生のこと、とても尊敬してます。それじゃダメですか?」

「だ、ダメでは、ないんですけど……はわっ!」

肩を抱いて、引き寄せる。

こういう時は多少強引にやったほうがいいと、先輩から教わったことがある。

「んっ」

「んむう!?!」

顎に手を添え、引き寄せて強引に唇を奪った。俗に言う顎クイというヤツである。

あー、アリス先生とのキス最高だな。柔らかいし、いい匂いするし、なんかほんのり甘い<sup>ん</sup>。ずっとやってられるわ。

「んむぐううううう<sup>ん</sup>!?!」

「ぶはっ……おつとすみません、夢中になりました」

「ぶあっ……うも、もう……?強引すぎですよ、北条くん……?」

キスの最中に胸元をポカポカ叩かれて、ようやく我に返った。危うく酸欠になるところだったな。

「えつと、その……?ほ、北条くん……?ひ、ひとつお願いが、あるんですけど……?」

「なんですか?」

頬を赤らめ、潤んだ瞳で見上げられる。29歳の姿かよ、これが……可愛すぎるだろ。

「こ、これから二人つきりになった時は……パパ、って呼んでも良いですか……?」

「もちろん良いですよ」

「……?」

アラサーのかわいい過ぎるおねだりを、二つ返事で快諾する。こんな迷う必要もないだろう。

「じゃあその代わり、僕も先生のことアリスって呼んでいいですか?」

「も、もちろんです……パパ?」

うわ、なんか背筋がゾクゾクしてきた。背徳感ヤバいなこれ。年上の女性にパパって呼ばれるの、予想以上にチンポに悪いわ。

「あ……パパの……、すごくおつきくなってる……?」

背徳感でビキビキに勃起したチンポを見つめて、アリス先生はさつきよりも更に笑みを深めている。

むつつりスケベだな、まったく。

「あ、あの……?」

そんなむつつりスケベなアリス先生は、くるりと後ろを向くと、さつきと同じようにうつ伏せになって尻を突き出してきた。

そのまま尻肉を掴み、左右に広げて極上のケツ穴を見せびらかしてくる。

「よかったら、アリスのほかほかケツマンコ……?また使ってください……?」

ぽっかりと開いたケツ穴から、さつき出した精液がドロリと垂れ落ちてくる。

ああもう、こんなエロケツ見せられて我慢できる訳ないだろうが。

「パパにケツマ<sup>め</sup>コ使ってもらえたら……アリスもうれし——んっひいいいいいっ?!?!」

我慢が効かな<sup>!</sup>なって、話の途中にも関わらずチンポをケツ穴にブチ込んでしまった。

まあでも、アリス先生も嬉しそうにしてるから別に問題ないだろう。

「朝まで犯しますからね、このいやらしいデカケツ娘オナホが」

「ひゃい……?ありがとうございしましゅう……?ぱぱあ……?」

激しいピストンでケツマンコを耕しながら、耳元で甘く囁いてやる。

さあ、これからめちやくちやに犯してやろう。

即座に後輩くんの心を奪い返すぷにロリ爆乳マゾオ  
ナホ先輩

「ん……」

気がつけば、朝だった。

ベッドにはいろんな汁で塗れた裸の男女が二人。そういえばシャワーすら浴びずに、そのまま寝落ちしてしまったのだと思い出した。「うわ……すごい匂いだな」

身体も洗わずに寝たので、淫臭がものすごいことになっている。精液と愛液がまじった液体が、全身に張り付いてカピカピに乾いていた。

まあ、まだ軽い方か。先輩とオールナイトした時の方が、もつと凄かったし。

「先生、先生、起きてください」

「んむう……」

身体を揺すつても、尻肉を揉んでも起きる気配が無い。だったら。

「アリス、起きなさい」

「んやあ……？」

どっちの呼び方でもダメなのか。こりや強引に連れてくしかないな。

「お風呂入りますよ、ほら起きて」

「んにゅう……」

お風呂に入れるために無理やり抱え上げると、身体を丸めて猫のように腕の中に収まってしまった。

何だこの生き物、かわいいな。

やっぱり、このダメダメ具合は先輩に通ずるところがある。自分がいないと、この人はダメなんだって思えてしまう。

「……ヒモ男に騙されるメンヘラ女みたいな思考だ」

想像して、ちよつと苦笑いが浮かぶ。普通こういうのって逆じゃないのか？

「むにや、ぱぱあ……」

「なんだいアリス」

「えへへえ……頭なでなでしてえ……」

「起きてますよね、先生」

僕の指摘に、アリス先生は一瞬だけ身体を強張らせる。腹芸に慣れてないのがバレバレだった。

そもそも、今まで研究一筋だった不器用人間だ。簡単に対人技能が身に付くはずもない。

「ぐ、ぐー、すやすや」

「はあ……まったくもう」

アリス先生の要望通り、抱き上げたまま頭を撫でる。片腕だけでも持ち上げられる程に軽かったのは、嬉しい誤算だ。

「よっよっ」

「えへへ」

ああもう、ちよつと甘えん坊すぎませんかね、このアラサー娘先生は。

まあ、可愛いからすべてが許されるんだろうけど。



そうして、風呂場でお互いの身体を洗い、興奮しておまんことアナルにそれぞれ五発ずつ出して、ようやく先生の部屋を出発できた。

いや、僕は悪くないよ。悪いのは全部あの魅惑のケツ肉を持つ先生だから。あれに誘惑されたら、どんなオスでも耐えられないから。

「結構遅くなっちゃったな」

スマホで時間を確認してみれば、既に九時を回っていた。大遅刻だ。

先輩が心配だから朝には帰りたいかったのに、結局セックスで時間を取られてしまった。普段こそ感謝しているが、今はこの旺盛な性欲が怨めしい。

「先輩、ただいま帰りまし……た？」



鍵を開けて、扉を開くと、部屋の中は暗いままだった。

まだ寝ているのだろうか、と靴を脱いで中に入ると、何やら奥から甘ったるい匂いが漂ってきた。

「これは……」

嗅ぎ慣れている先輩のメス臭だ。部屋の外まで漏れてくるなんて、今回は相当だな、これは。

「ん？」

と、半ば呆れながら先輩の部屋を目指して歩いていたら、何やらヌルヌルした液体を踏んづけてしまった。

靴下に染みて、足を離せばぬちゃりと粘っこい音を立て、床との間に糸を引く。

「……………ふう〜」

見ればその液体は、先輩の部屋の扉下から漏れ出ているようだった。

いやもう、どんだけ汁出してるんだ、あの淫乱ぶにロリ爆乳マゾメスオナホはよ。一人で満足に留守番もできねえのか。

「……………」

これはもう、お仕置きするしかあるまい。床をいやらしい汁でこんなに汚すなんて、言語道断だ。

「先輩、帰りましたよ」

溢れる獣欲を押し殺し、ゆっくりと扉を開ける。

すると、そこには。

「あゝ……………」

快樂にとろけた笑みを浮かべる、先輩の姿があった。

「うわ、メスくっさ」

僕が部屋に入ってきた事にも気づかず、先輩はガニ股で腰を上下に振り続けている。

湯気が立つほどに熱れきった身体は、もはや見ただけでチンポがいきり勃つ。

「あれえ？こっちはいくんだあ？こっちはいくんのまぼろしがみえりゆう〜？」

「本物ですよ、先輩」

おまけに、身体と一緒に頭まで茹で上がってしまったっているようだ。

「お、ん、っ？あ、ん、っ？」

っていうか、いい加減ピストン止める。目にも、耳にも、鼻にも、ついでにチンポにも悪い。勃起が収まらなくなる——というか現在進行系で収まらない。

「せーんーぱーいー？」

「んびやあっ??？」

先輩を正気に戻すために、両方の乳首を思いつきり捻り上げる。突然の衝撃に、先輩はおまんこから勢いよく潮を噴いて絶頂した。

相変わらずのクソザコ乳首だな、反省しろマジで。

「あひゅっ??はれっ??こ、こうはいくんっ??」

「やっと気づきましたか、先輩」

ようやく目の焦点が合ってきた。まったく、世話の焼ける先輩だな。

「よ、ようやく帰って来たんだね、遅かったじゃな——はぎゅうっ!!????」

「今更クールっぽく振る舞おうとしても遅いですよ、先輩」

すでに、先程のオナニー現場はバツチリ記憶した後だからな。あんな衝撃的でないやらしい光景、死ぬまで忘れることはないだろう。

「やああああ!!おっぱい、モミモミだつめえええ!!」

「何がダメですか。こんなに乳首勃起させておいて」

随分と久し振りに感じる先輩のKカップ爆乳を、両手いっぱいに掴んで揉みしだく。

全身が性感帯になっているのか、反応がすこぶるイイ。

乳首ごと一気に揉み込んだ瞬間、先輩はその場に尻餅をついて勢いよく足ピン絶頂をかました。

「あっ」

「ほぎよおおおおおっ!!????」

とまあ、尻餅なんかついたら、おまんこに挿入していたデイルドが一番奥まで入っちゃう訳で。

自分で自分の首を絞める形で、先輩は連鎖絶頂を堪能していく。子

宮口までいったな、これは。

「ほっ、ほおおおおお………??？」

先輩はすっかり夢見心地だ。こうなれば、こっちも好きに堪能させてもらおう。

「やわらかあ………やつぱりお尻とかお腹とは違う、唯一無二の感触ですよね、おっばいって」

「ひんっ?…いぎゅっ?…ひともみごとくに?…いっでりゅ?んお”お”お”お”っ??？」

さっきの続きとして、おっばいの感触を思う存分堪能させてもらう。

っていうか、おっばいだけでめっちゃイクじゃん。これはもしや、何か薬でも使ったか。

「先輩、何か飲みましたね」

「にや、にやんのことお??」

「とぼけないでください」

「ぎやひいいいい!!??」

オシオキとして再び乳首をつねれば、先輩は本日何度目かわからない絶頂を披露した。

おまんことデイルドの隙間から、ねっとり濃い本気汁が大量に溢れてくる。はつきり言つてめっちゃくちやエロい。

「じゃあ塗り薬ですか? 隠さずに、本当のことを言ったほうが身のためですよ?」

「しらにやいっ?…しらにやいのお?…くすりなんてちゆかつてないいいい?」

おっばいが潰れて形が歪むほどに揉み尽くしても、先輩は白状しなかった。

それはつまり、本当に使っていないという事だ。特大の快楽に犯されてる今の先輩に、嘘をつけるほどの理性は残っていない。

「ごうはいくんのことおもって?…おなにーしへひやらあ?おっばいもおまんこもあちゆくくなってえ?…とめられにやいのおおお?」

「先輩………」





その証拠に、またしてもチンポが一回り大きくなった。

「はー、最高。ずつと腰振ってられるわ、このオナホ」

「んぎゃあああああああっ?!?!」

杭打ちピストンで子宮口を叩き潰してやれば、もはや悲鳴のようなオホ声を上げて絶頂する。

どんだけオスを興奮させたら気が済むんだよ、この金髪碧眼ブサイキマゾメス豚合法ぶにロリオナホはよ。

「あー、出る出る。特濃精液、クソザコ子宮に思いつきりブチ込みますよ」

「だ、だめえええええ!!いま、しきゅーにせいえきそそがれたりやあ? あたま、おかひくなくなっひやううううう??」

「今更止めるとか無理です、覚悟決めてください」

「——えひっ??」

これから来る運命を悟ったのか、先輩は今日一番の淫らかな笑顔を見せてくれた。

最高にチンポにキク、最低に下品なアクメ顔。

ああ、やつぱり先輩は最高だな。

今まで堕としてきたオナホ達を、何度も何度も超えていく。いつとき抜かされても、すぐさま抜き返して一番に躍り出る。

そんな先輩だからこそ、僕はここまで夢中になってしまっただろう。

「出るっ!!」

「あっ——????」

最後の一突き。思いつきり腰を落とし、最奥で精を解き放つ。

どぼびゆるるる!ぶびゆぼっ!!どぼぼおおおっ!!!

「ほぎゅおおおおおおおおお〜っ?!?!」

濁流のような勢いで噴き出した精液は、あっという間に先輩のクソザコ子宮を制圧した。

ぶにロリイカ腹がぼっこりと膨れ、まるで妊娠したみたいになっている。

「ふう〜……あむっ」

「っ……うっ……っ？」

息も絶え絶えといった様子でアクメする先輩。その唇を奪い、口内を蹂躪していく。

舌を絡め、引っ張り、甘噛みする。

「ぶはっ……ちゅうっ」

「おっっ？」

次いで、おっぱいを寄せて両乳首を一緒に口に含んで吸い尽くす。舌で転がし、歯で甘噛みし、引っ張る。

「あゝゝゝっ??？」

激しすぎる絶頂を体験し、抵抗すらロクにできないメスの全てを奪っていく。

唇を。

胸を。

全身を。

思うままに、獣のように貪っていく。

なんという快感。なんという愉悦。

やはりこの世において、愛する人との性行為は唯一無二なのだと確信する。

「おっっっっっ？」

先輩の全てを堪能して、満足してチンポを引き抜く。

ごぼり、と粘っこい音を立てて、精液だか本気汁だか判別できない白濁液が、おまんこから大量に垂れ流されていた。

「はひゅっ……っ……はひゅっ……っ？」

先輩の小柄な体躯も相まって、ベッドの上がまるでレイプ現場みたいになっている。

まあ、こんなドスケベ金髪ぶにロリ爆乳が無防備にそのへん歩いてたら、レイプされるの確定だけだな。故に守ってやらねばいけないのだ。

「きよ、今日は一段と激しかったねえ、後輩くん？」

「正気に戻って第一声がそれですか」

やっぱりどこまでも生意気なオナホだな、先輩は。

「せめて『おかえり』くらいは言ったらどうです?」

「ふ、ふふん?後輩くんがわたしの元に帰ってくるのは確定事項だからね?わざわざそんなこと言うまでも——あ、っ?」

ドヤ顔がウザかったので、思いつきり乳首をつまんでやる。すると先輩は、おまんこから潮を噴き出してあっけなくイッた。

まったく。セックス直後で全身が敏感になってるだろうに、どうしてそこまでイキれるのか。

「ん、っ?イグツ?」

イキつてるといふか、イッてるというか。どっちもだろうな、これは。

「まあ……僕が絶対に先輩の所に帰ってくるってのは、その通りですけどね」

「な、なにか言ったかい、後輩くん?」

「何も言っていないです」

まったく、これじゃ男女の立場が逆じゃないか。なんかツンデレ女子みたいな反応しちゃったし。

男のツンデレとか、どの層に需要あるんだよ。あるわけ無いだろ。

「ふう……ようやく治ってきたよ。まったく、後輩くんはわたしをイキ死にさせるつもりだったのかな?」

「快樂じゃ人は死にませんよ、先輩」

「脳細胞は死滅すると思うんだよねえ……」

それは知らん。だいたい先輩はオナホなのだから、肉体だけ健全であればいいと思う。

「ははっ」

我ながら最低だなと苦笑する。でも、そんな最低の扱いを喜んで受け入れている先輩にも、かなり問題があると思う。

要するに、似た者同士というわけだ。

似たように倫理観が欠落している快樂狂い。お似合いのカップルだと思う。

「何笑ってるんだい?」

「いえ、おまんこから精液垂れ流してる先輩が無様すぎて、ちよつと」



「こうなったのは後輩くんのせいなんだけどなあ！」

珍しくほっぺたを膨らませて怒る先輩。怒ってる顔も可愛くて最高だな。

やつぱり、僕は先輩がいい。二宮も、一之瀬も、アリス先生も——全員魅力的だけど、それでも先輩が一番に感じてしまう。

「掃除、しちゃいますね。先輩の汁で床がベトベトですから」

「ん、ああ頼むよ、後輩くん」

ベッドから降り、まずはそこら中に散らばった大人のオモチャを回収する。

バイブ、ローター、デイルド。果てはアナルプラグまである。もしや、尻穴も開発してあるのか。

「ん、なんだい後輩くん」

ベッドに横たわる先輩……の白濁を噴き出すおまんこ……の下のアナルに目を向ける。

一見キュツと閉じた新品アナルだが、先程アリス先生のアナルを堪能してきたから分かる。分かってしまう。

「ちよつと失礼します」

「びゃあっ!？」

抱えていた大人のオモチャを脇に置き、先輩のアナルに指を入れる。

ローション代わりにおまんこから溢れる白濁液を使ったとはいえ、先輩のアナルはするりと僕の指を呑み込んでしまった。

「……………」

「ひぎいいい??？」

二本、三本、四本、五本。あつという間に、先輩のアナルは片手の指を全部呑み込んでしまった。

「これはどういうことですか、先輩」

「ひゃあああああ!?!開かないでえええ!?!」

突っ込んだ五本の指を円状に開けば、アナルは抵抗なくぽっかりと口を開けて見せる。

奥に蠢く淫肉が、食虫植物のように餌のオスを誘っているようだっ

た。

「こ、これは、その……?」

「これは、なんですか?」

「こ、後輩くんとこのセックスをより豊かにするためというか、バリエーションを増やすためというか……?」

僕の知る限り、この間まで先輩のアナルは普通のケツ穴だった筈だ。それが今じゃこんな、立派なケツ穴オナホになってしまった。

そうなるかと、考えられる可能性は一つしかない。

「薬、使いましたよね?」

「ひいん?」

おおかた、先輩はアリス先生と僕のセックスを覗き見していたんだろう。

そこで気持ちよさそうにアナルセックスをしていたもんだから、自分も対抗するために急遽お尻を開発したと——まあこんなところか。

「覚悟、出来てるんですよね?」

「……お、お手柔らかに頼むよ、後輩くん」

それは無理な相談だな。

「ひっ?ちよっ?まつ?あゝくくっ!!??」

回復してビキビキにいきり勃ったチンポを、一気にケツ穴オナホにブチ込む。

肉の宴は、まだまだ終わらないらしい。

いつも通りの日常を過ごすとうとするけどやっぱり我慢できなくなる鬼畜ドS後輩くん

「ん……」

気がつけば、夜だった。

辺りには様々な種類のオモチャが散乱し、ベッドの上では潰れたカエルのように寝そべっている先輩が居た。

「おひ……っ？えひ……っ？」

結局、また気絶するまで先輩を犯し尽くしてしまつたようだ。いい加減に我慢を覚えないとダメだな。

「もっと節度を弁えてセックスしなければ……」

セックスの時間を総合すると、勉強してる時間より確実に多い。

いくら大学生とはいえ、流石にこれはまずい気がしてきた。

「ど、どの口がいつひえりゆんだい……っ？」

「こっちは先輩みたいに天才じゃないんですよ」

まあ、天才だからって単位が免除される訳じゃないので、そこは先輩が頑張った結果だろうけど。

「決めました」

「ほえ……っ？」

「これから一週間、セックスは無しです」

「えっ……っ？」

先輩が呆気にとられたような顔でこちらを見た。

なんだ、そのあり得ないものを見たような顔は。

「後輩くん……できもしない目標を定めるのは、挑戦ではなく無謀というんだよ？」

「なんで達成できない前提なんですか」

失礼な先輩だな。流石に一週間くらい我慢できるわ。

「更にオナニーも禁止します」

「死ぬ気かい？」

死なんわ。本来、人間はセックスをしなくても死なない生き物なん

だよ。

「まあ、これを機に少しは真面目な生活スタイルに戻していきましよう」

「一緒に住み始めてからずっと、一日たりとも我慢できた日とか無かったじゃないか」

それは言わないでください。一年前からずっと、先輩の身体に溺れてるのは事実ですけども。

「今回は本気ですよ」

「ほくう？」

決意を新たに宣言しても、先輩は怪訝な視線を向けてくるだけだった。

ぜんっぜん信用されてないな。今までのセックス履歴を考えると、やっぱり仕方ないのかもしれないけど。

「それは見ものだね、後輩くん。じゃあ賭けでもしようか」

「賭け？」

意味深な笑みを浮かべた先輩は、スマホを弄って何かメッセージを打ち始めた。

なんか嫌な予感がするな。

「参加者はわたし、凜花ちゃん、陽毬ちゃんの三人だ。後輩くんが一週間の内、何日目に我慢できなくて射精するかを予想してもらう」

ピロン、とメツセージを送った音。その直後に、またピロン、とメツセージが返ってきた音。

おそらく、あの二人が爆速で参加を了承したのだろう。そうとしか考えられない。

「賞品は後輩くんに一日なんでも命令できる券だ」

「なに勝手に決めてんですか」

「外した場合の罰ゲームは、スケベ衣装を着てから後輩くんハマ潰されてもらう」

「だから、なに勝手に決めてんですか」

というか、それは賭け事と言えるのか。賭け事をする側の人間が参加するのはルールとしてアリなのか。

わからない。何一つわからない。

「それと後輩くんを射精させた人にも、なんでも命令できる券をあげよう」

「話を聞いてください」

まったくこつちの言い分を聞かないんだが、このぷにロリ爆乳オナホ。

「ふむふむ、凜花ちゃんは三日目。陽毬ちゃんは一日目か」

「一之瀬……」

あいつ、一日すら我慢できないと思ってやがる。失礼なやつだな。

「じゃあわたしは七日目にしよう」

「えっ、散々煽つという最終日なんですか」

意外だ。てつきり先輩も一日目に賭けると思っていたのに。

「だって長い間溜めてたほうが、濃い精液が出そうじゃないかい？」

ああ、後輩くんの熟成こつてり精液をお腹いっぱい……もしかしたら妊娠しちゃうかもねえ？ふふふ？」

「自分の手で射精させる気満々ですか」

分かった、これはアレだ。目標に手が届くと希望を持たせておいて、それを眼前で取り払うという極悪非道ムーブだ。

しかも、賞品の一日なんでも命令できる券も総取りするつもりでいやがる。強欲の化身かよ。

「悪いですけど、そう思い通りには行きませんよ」

「ふふ、楽しみにしているよ？」

負けない、絶対に負けない。必ず一週間耐えきって、真面目な生活をしてみせる。



「ふんっ、ふんっ、ふんっ！」

「おっぎゅおあああああ~~~~!!??」

金髪Kカップぷにロリ爆乳オナホには勝てなかったよ……これも全部先輩がエロ過ぎるのが悪い。僕は悪くない。



じにゆううううう!!??」

ピストンを加速させ、先輩の奥を叩き潰しながら着々と射精の準備を進める。

溜まりに溜まった精子が、キンタマの中で吐き出される瞬間を心待ちにしている。

目の前のメスを確実に孕ませると、極上の卵子を受精させると、魂の叫びを上げている。

「ガチで昇天しそうな顔してるんすけど……」

「あはあ?先輩のマジアクメ顔、最高です?」

「ツツコミ増やしてくんないツスカ?この状況一人で捌くのキツイんすけど?」

知らん、そつちで対処してくれ。こつちは一週間ぶりのセックスで手一杯だ。

「あつ?ひとまわり?おつきくなつたあ?」

射精の予兆を感じ取ったメス肉が、精液を迎え入れる為に締め付けを強める。ぐずぐずにとろけきつた膣肉が、まるで張り付くようにチンポを締め上げてくる。

「出すぞ」

「——うひつ?」

耳元で死刑宣告のように囁いてやれば、先輩はひとときわ淫らな顔で笑った。

「~~~~~っ!???」

どぶんっ?びゅぶぶばっ?どっぼお?ぶりゆりゆん?どぼぼぼおっ?

一週間溜め込んだ特濃精液が、すべて先輩の子宮に注ぎ込まれていく。

濃すぎて、もはや液体ではなく半固形化している精液。それらが全部、残らず先輩のナカに収まっていく。

「っ……ふう〜」

「あづっ!!?おにやかあづっ!!?あづいいいい!!?」

あまりの特濃具合に、注ぎ込んだ精液がぜんぜん結合部から流れ落

ちてこない。

正真正銘、精液はすべて先輩の貪欲子宮が飲み込んでしまったようだ。

ぽっこりと妊婦のように膨れたぶにロリ腹が、その証拠になっている。

「おっ？おっもお？しえいえきおっもお？」

「そりゃあ、一週間も溜めればそうなりますよ」

先輩おまんこからチンポを引き抜いても、まったく垂れてくる気配がない。人体の神秘ってやつだな。

「はひ……こ、これだけ濃ければ、妊娠したかなあ？」

「どうでしょうね。それだけ濃いと、避妊薬飲んでも無視して受精させられそうですけど」

「そうだといいなあ？」

特濃精液でぽっこり膨れたお腹を、愛おしそうに撫でる先輩。

その姿はいつものメス顔とは違っており、どちらかといえば母の顔をしているように見えた。

「赤ちゃんできたら、なんて名前がいいと思う??」

「気が早くないですか？」

「予行演習は大事だよ？」

まあ、将来的にはサッカーチームが作れるぐらい産ませるつもりだけど。

先輩はケツも——アリス先生と比べると流石に劣るが——充分大きい安産型だし、絶対イケると思う。

「……アタシら、絶賛蚊帳の外ツスね」

「先輩の赤ちゃん!?はあはあ、はあはあ!?そんなの、絶対に可愛いに決まってるじゃないですか?!も〜?!」

「……蚊帳の外でも充分楽しそうな人が居たツスね」

ああ、悪い悪い。一週間ぶりのセックスだから、つい暴走してしまった。やっぱり禁欲って体に良くないな。人間に生まれたからには、欲望は叶えてこそだ。

「さて」



「ほえ？」

「あつ？」

ベッドから降りて、二宮と一之瀬の乳首を捻り上げる。すると一瞬でおまんこが濡れそぼり、床に向けて潮まで噴いた。

「次はお前らだ」

「はあい？」

とろけた瞳の二人を引き寄せ、同時にキスする。禁欲してた分、ここで思いつきり発散させてもらおうか。



一之瀬おまんこの奥から溢れてくるオツユを、一滴残らず吸い上げて飲み込む。ついでに生意気に主張しているクリトリスも甘噛みしてやるか。

「カリッ」

「うきゅっ!?!?!?!」

まったく?!?!?! こんなにおまんこ濡らしておいて、なに余裕ぶってるんだか。期待してたのがバレバレだぞ。

そう呆れながら口を離せば、一之瀬はフローリングの床に力なく横たわった。スタミナ無いなコイツ。

「ぶはっ——身体は正直だな」

「は、はへええええ?!?!」

「うへ?へひひいい?!?!」

「あーあ、二人ともすっかりメロメロじゃないか」

ベッドの上から見下ろす先輩が、二人の痴態を見て、ため息をつく。どの口が言ってるんだ、と言いたい。一番メロメロなのは先輩だろうに。

「よし、準備は整ったな」

「ちよっ?ちよまっ——?」

ぐったりとうつつ伏せになっていた二宮のケツを、両手で鷲掴みにする。健康的に肉づいた、極上の桃尻だ。

大ききではアリス先生に遅れを取っているが、バランスで言えば四人の中で一番だろう。

「あっ——」

どっぢゅん!?!?!?!

そんな極上桃尻の中央に開く花卉を、極太チンポで串刺しにしてやる。

その瞬間、ブルブルと桃尻が震え、生暖かい液体が結合部からゆっくりと溢れ出してきた。

「っ……………?!?!?!?!」

「うわあ……………!?!?!?!?! たった一突きで失禁してイクとか、後輩くんのマジカルチンポ、ヤバ過ぎじゃないかい?」



「は、はいい?」

なにやら後ろでゴチャゴチャ言っているのが聞こえるが、こっちはそろそろラストスパートだ。一週間溜めた特濃精液、全部この中にブチ込んでやる。

「出すぞ、二宮」

「はひっ? い、いいッスよお? こーはいおまんこ、せーえきでたぶたぶにしてほしいッスう?」

その言葉と共に、子宮口が亀頭にちゅうちゅうと吸い付いてくる。尿道を的確に吸引し、子種を吸い尽くすつもりらしい。

上等だ。ならば望み通り、溜め込んだ精液をすべて注ぎ込んでやるう。

「イクぞっ!!」

「はひっ——ひいいいいいい!!??」

どぶりゅっ? どぼぼっ? ごぼびゆるるるうっ?

キンタマが収縮し、粘ついた精液が勢いよく亀頭から吐き出される。先輩に出したものより少し薄くなっているが、それでもまだまだゼリーのような粘度だ。

そんなゼリー精液を、二宮の子宮は美味しそうに啜り上げていく。まるでおっぱいにむしゃぶりつく赤ん坊のようだ。

「おごっ? おもっ? おにやか、重すぎるッスううう??」

「んぐっ……自分で飲み込んでおいて何言っただ、この欲しがり後輩マゾ子宮オナホが!!」

「びゃあああああ?!?! し、しきゅー揉んじゃダメッスううっ?!?! 精液が染み込んで、取れなくなっちゃ——あああああ?!?!」

吐き出した精液を一滴残らず飲み込んだ姿に敬意を表し!?! 外側から子宮を丹念に揉み込んでやる。

精液を溜め込んで膨れているせいで、さつきより揉みやすい。しっかりとマッサージしておいでやろう。

「おごおおおおおっ?!?!? はいらんっ? はいらんしちやうッスううう?!?!?」

「安心しろ。人間はセックスの刺激じゃ排卵しない」

ウサギや猫はセックスの刺激で排卵して、そのまま受精するらしい。

だが、人間の身体にそんな仕組みは備わってない。だから安心して子宮マッサージアクメを堪能してろ。

「あ、ちなみに豆知識なんだけどね——人間もセックスの刺激で排卵する事例が確認されているらしいよ」

「えっ」

マジかよ。先輩は博識だな。

「つまり、だ。このセックスで本当に排卵したら、凜花ちゃんやウサギや猫レベルのクソザコ獣おまんこであることが確定するという訳だ」  
「そ、そんなにやああ……う？」

先輩の雑学煽りに、二宮が子犬みたいな声を出す。ウサギなのか猫なのか犬なのかハッキリさせろ。

「簡単に子供が作れる獣おまんこ、嫌なのか？ 個人的にはエロくて最高だと思うんだが」

「いやじゃないれしゅうううううう」

!!!???

よし、じゃあ何も問題ないな。

「というわけで、次は一之瀬だな」

「ふん」

完全に傍観者の立ち位置に居た一之瀬へ視線を向けると、いつも通りのしかめっ面で鼻を鳴らす。

「しようがないわね。さっさとバカチンポを射精させて、ミント先輩とイチヤイチヤしましょうか」

「イキるなよ、こんなにおまんこ濡らしてるくせに」

「くひゅっ？」

二宮からチンポを抜いて、一之瀬のおまんこに先端を押し当ててる。それだけで一之瀬の口からは発情した喘ぎ声が漏れ出た。

上の口がどんなに強がっても、下の口は素直なのが大変よろしい。

「クリっ？ちんぽの先っぽでクリ弄るなあっ？」

「滑りを良くしてるだけだぞ」

「嘘つくなっ？絶対わざとでしょっ？」

チンポの先端でクリトリスを刺激してやれば、おまんこからはどぶとぶと白濁液が漏れ出てくる。

ホント一之瀬はクリトリスが弱いな。ちよつと弄るだけでメスイキ一歩手前じゃないか。

「い、いいから入れなさいよっ？そんで情けなく腰振って、さつさと射精しちやいなさい？」

頬を染め、荒い息を吐きながら、一之瀬は敢えて気丈に言葉を紡ぐ。先輩と二宮があれだけハメ潰されてる光景を見て、まだそんな口がきけるとは思わなかった。これは再教育してやらなきやダメだな。

「一之瀬」

「な、なによう？」

反抗的な——もちろん上辺だけの——目でこちらを見つめる一之瀬のおまんこに、しつかりと狙いを定める。

「徹底的にハメ潰すからな」

「くひゅっ？」

ドスの効いた声でそう告げれば、一之瀬は反抗的な表情を崩して淫らに笑った。

ちよつとイキただけでその数十倍は激しくハメ潰されるクソザコイキりおまんこ同期

「あっ!? あっ!? あうっ!?」

「相変わらず、入り口も狭いな」

おまんこから溢れる白濁液をチンポの先端にまぶし、滑りを良くした状態でおまんこに挿入する。

流石は四人の中で一番のロリ体型。締め付ける力は誰よりも強い。

「ふうふうふうっ? チンポ? チンポ入ってきたあ?」

「あっっ……!」

おまけに、おまんこの中は愛液と本気汁でぐちやぐちやのアツアツになっており、入れただけで火傷しそうなほど熱い。

最強の締め付けと、最高の温度。これが他のオナホには無い、合法ガチロリペド同期オナホの真骨頂だ。

「相変わらずのチビまんこだな。締め付け強すぎてちよつと痛いぞ」

「ふ、ふふん? 節操のないバカチンポなんか、私のおまんこで噛みちぎってやるんだから?」

「出来るもんならやってみな」

まあ、十中八九ロクでもない結果になるだろうけど。

「こ、後悔しないことね?」

「いいからサツサとやれよ」

「い、言われなくても……んっ!」

「おおっ」

一之瀬が腹筋に力を入れて力むと、先程よりも力強くおまんこがチンポを締め付けてくる。

おまけに膣壁がグニグニと蠢き、おまんこ全体がチンポを舐めしやぶってきた。

とんだ欲しがりおまんこだな、コイツは。

「ど、どーよ?」

「良いな。初めて感じるレベルのキツさだ」



「で、でしよう?」

「この状態で本気ピストンしたら最高だろうな」

「えっ?」

驚いたような顔をする一之瀬。そんなガチロリオナホの感情を無視して、ゆつくりとキツキツおまんこからチンポを引き抜いていく。

「名残惜しそうにしやがって。とんだ欲しがりマゾおまんこだな」

「んぎぎいいいいっ!?!おまんこめくれりゆううううう!?!」

「お前が勝手に吸い付いてきてるんだろ」

責任転嫁するな。寂しがり屋でめちやくちやチンポに吸い付くよ  
うな、激弱おまんこをしてるお前が悪い。

「よし、動くぞ」

「まつ?まちなひやつ?」

「ふんっ!」

「おっ——ごおっ?」

入口近くまで引き抜いたチンポを、一気に最奥までブチ込む。キツ  
キツでピツチリ閉じたメス肉を掻き分けて、強引に子宮口を叩き潰し  
た。

「ほえ……へえ……」

呆気にとられたような顔で、自分のお腹を見つめる一之瀬。そこ  
は、ぽっこりとチンポの形に浮き上がった、見事なイカ腹があった。

「うわ、陽毬ちゃんすこ」

「大丈夫ツスカ? 一之瀬先輩のお腹、破けちゃったりしないツスカ  
?」

外野から一之瀬の身体を心配するヤジが飛んでくるが、そこは心配  
いらないう。前回のセックスの時も奥まで突っ込んで無事だっ  
たのだから、今回も大丈夫なはずだ。

それにしても、一之瀬つて身体が小さいから、チンポを奥まで突っ  
込むとハッキリ形が分かるんだよな。これもガチロリ体型だからこ  
そ出来る技だ。

「お、おにやか……?わたしのおにやか……?ちゅぶ、れたあ……?」  
パクパクと間抜けに口を動かしていたかと思えば、そのまま白目を

剥いて気絶してしまった。

ちよつと刺激が強すぎたか。先輩だったら余裕で耐えていたんだが。

「ふむ、まるで妊娠初期みたいなほっこりお腹だねえ。ちよつと触ってみてもいいかい？」

「わ、私も触りたいツス！」

なんでそんな『赤ちゃんの成長具合を確かめるために、久し振りに会った親戚の妊婦さんのお腹を触る』みたいな、ユルい雰囲気出してんだらうか。

ちよつとは一之瀬の事を心配してやれと思う。まあ、気絶させた本人が言うことじゃ無いんだが。

「っん、っん」

「おう、っ？」

「わ、わあー……お腹の上からでも、チンポがドクドクしてるのが分かるツス？」

「あぎゅっ？」

二人がほっこりお腹に触れるたびに、当の本人は汚いアへ声を出して背筋を震わせている。

子供のような体型の一之瀬を犯してるだけでもインモラル過ぎるのに、先輩と二宮が腹越しにチンポつついてるとか、普通に興奮するな。

「はっ？はっ？はっ？」

「よし、本格的に動くぞ」

意識が戻ったようなので、オナホの事情などお構いなしに再開する。

無事に済むと思うなよ、この生意気メスガキぶにロリオナホが。

「えっ？ちよっ？ちよっ？ちよつとまって——？」

再びチンポを入り口まで引き抜き、もう一度子宮口を叩き潰す。

「お、っ——ごオっ????」

引き抜き、叩き潰す。引き抜き、叩き潰す。引き抜き、叩き潰す。引





ふく。まるでそういうオモチャみたいだった。

「ふう……最高だった」

「やっぱり先輩って鬼畜ツスねー?」

「それでこそ後輩くんだね」

チンポを引き抜き、大きく息をつく。ぽつかりとチンポの形に拡張されたメス穴からは、途切れることなく白濁液が垂れ流されていた。

エロ過ぎるな、このオナホ。

「さて、それじゃあ本番といこうか」

「本番?」

何言ってるのだろうか、このオナホ先輩は。本番ならさつき散々ヤッただろうに。

「賭けを始める前に言っただろう。負けた人は、罰ゲームでエッチなコスプレをしてもらって」

「ああ」

そーいや言ってたな、そんなこと。

もしかして、もう準備してあるのだろうか。

「ふふ?じゃあ着替えてこようか、凜花ちゃん?」

「は、はいツス?」

先輩が二宮を連れ立って、部屋の外へと出ていく。

そうして数分後、戻ってきた二宮の格好は。

「ど、どうツスカ先輩……?に、似合うツスカ??」

身体の前面の布地が取り払われ、代わりに腕や脚を布で覆った頭の悪いバニー服——通称、逆バニーと呼ばれるものだった。

「さ、凜花ちゃん」

「ほ、本当に言わなきやダメツスカ……?」

「もちろん。じゃないと罰ゲームにならないだろう?」

なにやら先輩に促され、二宮は口を開く。

頬を真っ赤に染めて、羞恥の声で言葉を紡ぐ。

「え、エッチなイタズラしちゃうウサギさんツスよく?びよんびよん?ご主人さまの精液で、ぽこぽこ排卵しちゃうザコまんこツスよく?びよん?」

エッチすぎるウサギを真似したモーションの、エッチすぎるエロ煽り。それと共に股間からドロリとした精液が溢れ、ボトリと床に落ちた。

「二宮」

「は、はいッス？」

「ぶっ壊しちゃったらゴメンな」

「っ??」

ブルリと身体を震わせ、またも二宮は精液を床に撒き散らす。エッチなウサギには、エッチなオシオキをしてやらなきやな。







しようがないので一旦ピストンを止めて、ゆっくりと身体を起こし  
てみる。

「へひっ？へひひひい？たまごお？しんせんたまごお、ぷりゅぷりゅだ  
すツスう？」

当然のことながら、眼下にはハメ潰されたドスケベ逆バニー後輩オ  
ナホが横たわっていた。その光景と淫臭だけで、おまんこ内のチンポ  
が更に固くなってくる。

しかし、今は先輩の話聞くほうが先だろう。幸いにも三発出して  
少しは落ち着いてきた。今なら十分理性的な会話ができそうだ。

「先輩？ どうしたんですか？」

「いやね、わたしも後輩くんが種付けプレスが大好きな事は知ってる  
んだよ。でも、毎回そればかりだと飽きが来るだろう？」

「いえ、別に」

「飽きが来るだろう？」

「いえ」

「飽きが来るだろう？」

あ、コレはあれか。RPGとかでよくある、ハイって答えないと先  
に進まないパターンのやつか。

「……そうですね、他の体位も試してみたいです」

「よしよし？そういう事なら任せておきたまえ？」

ハイと答えた瞬間、先輩は見るからに上機嫌になって僕の身体を  
ベッドに押し倒した。

その際にチンポが勢いよく抜けて、二宮が声にならないアへ声を上  
げていたが、まあ些細な事だろう。

「ちよつとそこで待っていたまえ？ほら、凜花ちゃん？起きて？」

「えへへえ……？はっ」

先輩が二宮のほつぺたをペチペチ叩くと、その瞳に光が戻る。その  
隙に手を引いて身体を起こさせると、がに股の体勢にさせて、そのま  
ま腰をチンポの上に跨がらせた。

流れる水のようにスムーズな動きだったな。これが熟練のテク  
ニックってやつなのか。

「あ、あれ……私、気絶してたんスカ……って、何スカこれ〜!!」  
「見て分かるだろう? ドスケベがに股騎乗位だよ?」

チンポの上で淫らに大股を開き、くちゆくちゆとおまんこをチンポの先端に擦りつけている。

普通に驚いているのを見るに、おそらく腰の動きは無意識なのだろう。とんだエロオナホだな。

「ほら? ウサギはウサギらしく、ぴよんぴよん交尾したまえ?」

「えっ、ちよっ? 足ガクガクでヤバインスけど? こんな状態でピストンなんてムリッスう?」

確かに、二宮の足はがに股状態こそ維持しているが、まるで産まれたての子鹿のようにプルプルしている。

ウサギに、猫に、犬に、挙句の果ては鹿か。どんだけ獣に例えられれば気が済むんだか。

「やれやれ、仕方ないなあ」

先輩はため息をつく、机の引き出しを漁って一つの試験管を取り出す。

中身はシヨッキングピンクの見るからにヤバイお薬だった。人体に使って大丈夫なやつなんだろうか、アレは。

「ほら、これを飲みたまえ」

「な、何スカこれえ?」

「なあに、ただの栄養剤さ——媚薬たつぷりの、ね」

媚薬が入ってる時点で、ただの栄養剤ではない気がするんですけどね。

「ほおら、グイっと飲みたまえ」

「や、やあ……? はぶっ!?!」

問答無用といった様子で、先輩は二宮の口にシヨッキングピンクの液体を流し込む。

うーむ、実にマズそうだ。絶対に飲みたくないな。

「んくっ……んくっ……げほっ、げほげほっ! ま、マズすぎるツス〜!!」

「良薬口に苦し、だよ」

なんかそれらしい事言ってるけど、先輩も苦い薬は嫌いですよ。そもそも良薬なのだろうか、それは。見た目は完全にアブナイ薬だった。

「さて。この薬は即効性が強いから、すぐに効果が出てくる筈だよ」「んっ……!!?? あおっ!!?? おうっ!!??」

先輩が得意げな笑みを浮かべた瞬間、二宮の全身から玉のような汗が噴き出した。

それと同時に、オマンコからドロリと濃い本気汁が垂れ流されて、ねっとりとしたチンポをコーティングしていく。

腰の動きも速くなり、傍から見れば発情した猿のような有様だ。

「んぎぎぎぎぎぎっ!!?? からだっ? からだがあああっ!!? あっついッスううううううう!!??」

「ふむふむ、吸収率は問題なしと。やっぱり腸から吸収されるタイプより、胃から吸収されるタイプの方が効果が出るのが早いね」

全身から淫らな匂いを振りまき、アへ顔のまま悶える二宮。そして、それを興味深そうに観察する先輩。

この金髪碧眼マゾまんこオナホ、オナホの本分も忘れて完全に研究者の顔になってるんだが。

「さあ、凜花ちゃん。やるべきことは分かるね」

「チンポお!!? おまんこにチンポ入れるッスう!!??」

アへっていた二宮の目が次第に鋭くなり、まるで獲物を狙う狼を思わせる目つきへと変わる。

不覚にも、少しゾクツときてしまった。

「その通り。さあ——」

先輩邪神の囁きに従って、二宮が勢いよく腰を下ろす。

ドスケベ排卵ケダモノおまんこが、勢いよくチンポを呑み込んだ。

「思うままに、貪りたまえ?」

ドスケベがに股騎乗位でウサギのように腰を振りまくってケダモノセックスを味わい尽くす逆バニーオナホ後輩

「おんっ!??????」

勢いよく腰を落とした二宮は、チンポを子宮口に叩きつけながら、おまんこ全部でチンポを啜えこみ——そして、その衝撃を受け止めきれずに白目を剥いて気絶した。

「くっ……!」

「お、あ、っ……?ごっお、お……?」

ぐったりと脱力した上半身が、緩慢な動作でこちらに降ってくる。その直後、胸筋にむにゆり、と柔らかい感触を感じとれた。相変わらぬずいとおっぱいだと感心する。

それにしてもクソザコおまんこすぎないか。何がしたかったんだ、コイツは。

「おやおや。せつかく薬でブーストしたのに、気絶しちゃうとは勿体ない。まあ仕方ないか、薬じゃ精神までは強くできないからねえ」

ニヨニヨと、イタズラっ子のような顔で先輩は笑う。その様子はまさしく、悪魔か邪神のごとし。

もしや、二宮が呆気なく気絶するって分かかって薬使ったな、このロリ爆乳オナホめ。

「ただ……この薬の真価はここからだよ?」

「え、それってどういう——うおっ!」

突如としてチンポの先端から快感を感じたと思えば、気絶しているはずの二宮の腰がゆっくりと持ち上がっていく。かと思えば、いきなり激しいピストン運動を始めた。

上半身をこちらに預け、腰だけがぐねぐねと動く淫らな様子は、まるで二宮の下半身だけが別の生き物に乗っ取られたかのように感じてしまう。

「あ、えっ?ギョうっ?ごおっ?」

「ちよつ、先輩っ！ これどういう事ですか！」

腰だけを上下に激しく動かし、口からは下品な喘ぎ声を吐き出し続ける。

まるで淫らな電動生オナホになってしまった二宮の姿に、激しい興奮と僅かな困惑を感じる。大丈夫なやつなのだろうか、これは。

「どういう事も何も、これがこの薬の本質さ」

したり顔で、先輩が告げる。

「理性あたではなく本能からだで快楽を求め、自動的に動くようになる——そういう薬なのさ」

邪悪な笑顔で、先輩は笑う。

「おゝえゝ っ？んゝ っ？おゝ っ？」

「んぐっ……！ 腰止めろ、二宮っ……！」

なんて薬作ってんだ、と声にする余裕も既に無い。

高速で行われる極上のピストンが、ドンドン射精欲を煽り立ててくる。

このままでは、この発情ウサギに精液を根こそぎ搾り取られる。そんな確信があった。

「ふふふ。流石の後輩くんも余裕が無くなってきたかな？」

先輩は余裕を崩さない。態度からして、既に勝利を確信していた。

後で覚えてろよ、この金髪碧眼ロリ爆乳オナホがよ。

「安心したまえ。性欲が満たされたら、自ずと腰の動きも止まるさ。もっとも、その頃には精液を全部搾り取られて、後輩くんはカラカラに干からびてしまっているだろうけどね」

「へえ……」

それはいい事を聞いた。

「おい、二宮」

「あひゅっ？ひゅっ？ひゅおっ？」

未だにチンポの上で腰を振り続ける下品なドスケベウサギに向けて、声を掛ける。

予想通り、返事が返ってくる事はない。返ってくるのは、無様なアヘ声だけだ。





「落ち着け二宮、快樂を拒絶するな」

「ひぐつ……うぐすつ……うううく……う？」

「その腰の動きは、お前の本能がやらせているんだ。だとしたら、理性を本能と同調させるしかない」

「ほんのうと……どうちよう……??」

人間は心の生き物だ。だから、精神に身体が引つ張られるという事例は数多く存在する。

それを利用して、身体の本能を理性で飼い慣らせばいい。人間なら、きつと出来るはずだ。

「抑え込むんじゃないで、乗りこなすんだ。おまんこに意識を集中させろ」

「は、はいッス……?」

「そしたら、頭の中を『気持ちいい』でいっぱいにするんだ」

「きもちいいで、いっぱい……?」

コツは教えた。後は、二宮がどこまで本能を飼い慣らせるかだ。

「……?」

「……?」

五秒、二宮が上半身を起こす。

「……??」

「……?」

十秒、腰の動きが止まる。

「……えあつ??」

「あ」

そして十五秒後、二宮はおしっこを漏らしながら静かに絶頂した。

おまけに結合部の隙間から、ドロリと白濁本気汁が垂れ流される。

「……むり?むりッス?おまんこ……よわすぎて?おちんぽさま……」

つよすぎてえつ?」

「おい」

「あは?わたし、おまんこ??」

「……ん?」

なんか、様子がおかしいんだが。どうしたんだ。



「おまんこ?おまんこ?おまんこお??」

「うおっ……!」

二宮の表情が快樂にとろける。

それと同時に、おまんこがチンポを捕食するように蠢き始めた。

「あははははっ!おまんこっ?まんこっ?まんこっ?まんこっ?」

「お、おい……大丈夫か二宮……っぐー!」

いつかの先輩と同じく、精神が幼児退行しているようだ。

それと同時に、おまんこが暴走するかの如く精液を求め始めた。

「あーら、完全に暴走しちやつてるねえ」

「先輩、見てないで助け——うぐっ!」

膣肉で激しくチンポを絡め取り、子宮口が先端に吸い付いて精液をねだる。

いつかの焼き増しのようなおまんこの動きに、たまらず背筋がのけぞる。

「おまんこ?まくんこ?おつまんこ?」

幼い口調で下品な歌を歌いながら、二宮は恍惚の表情でピストンを始める。

不覚にも、めちやくちやチンポにクル光景だった。

外見は誰もが羨む銀髪のクール美女だというのに、それが間抜けなアヘ顔で、バカみたいな歌を口ずさんでいる——それがこんなにもオスの興奮を煽るものだとは、今まで知らなかった。

先輩と違って、ちゃんと大人の体型をしている二宮だからこそその破壊力だな、これは。

「もう、しょうがないなあ凜花ちゃんは——ごによごによ」

「えへへえ?おまんこ——?」

そんな痴態に見とれていると、先輩が二宮の耳元で何かを囁いた。

それと同時に、二宮の目にハートマークが浮かび上がる。

「……………?」

「お、おい二宮?どうし」

その先の言葉は、続かなかった。

「ぴょくん??」

「はっ」

両手を頭の上に添え、まるでウサギのように軽やかなピストンを開始した。

先程までの、力任せで激しい獣ピストンとはまるで違う。本当にウサギが跳ねているかのような、躍動する上下運動だった。

「すきっ? すきっ? せんぱいしゆきっ? ぴよんぴよんっ?」

「急にどうしたんだ、二宮……っ!」

いやまあ、十中八九先輩が何かしたんだろうけど。

「さつき後輩くんがしたアドバイス……ちよつと違うんだよね」

「違っって、なにが……うおっ!」

ラストスパートと言わんばかりに、ドスケベ逆バニーオナホは動きを速く、鋭くしていく。

その動きに押され、キンタマで作られた新鮮な精液が尿道を登っていく。

「女の子は『気持ちいい』じゃなくて、『大好き』で頭を一杯にすると、心と体が一つになってくれるんだよ」

「あへへえっ? だいしゆきっ? しえんぱい? だいしゆきだぴよんっ??」

「くっ……!」

セックスしながらの告白に、チンポがまた一回り大きくなる。

ドスケベウサギが一際深く腰を落とした瞬間、そんなチンポの先端から、煮えたぎった精液が勢いよく飛び出していく。

「あ……」

どびゆるるるううううっ

「あ……あ、あ……」

「あ……あ、あ……」

「あ……あ、あ……」

「あ……あ、あ……」

満足したように、恍惚とした表情で精液を受け止めるド変態マゾ豚

ウサギオナホ。

その顔は心の底から幸せそうであった。男の視点から見ても羨ま

しいとすら感じる、完璧過ぎるアクメ顔。

これは確実に受精したな。

「うわ、凜花ちゃんすつごい受精顔だね。これは確実に孕んだんじゃないかな？」

「ふうー……だと、いいですね」

「えへ……う？えへへ……？あかちゃん……？あかちゃんできたあ……？」

中出しと共に腰の動きは止まっていた。受精したことで、本能もようやく満足したようだ。

チンポを抜き、そのままベッドに寝かせておく。

「さて、次は陽毬ちゃんの番だね。ちゃんと孕ませてあげるといい」

「……望むところですよ」

孕ませる、という言葉にチンポが反応し、一気にいきり立つ。

夜はまだまだ、これからだ。

女の子同士でイチヤイチャして興奮を高めあうおまんこぐちよぐちよマゾロリオナホ同期&先輩

「入っいいいよ」

先輩がパチンと指を鳴らすと、部屋のドアが開き、そこから一之瀬が姿を表す。

ドスケベセックスに夢中になって気づかなかったが、回復して着替えに行ってたんだな、コイツ。

「というか、その格好。」

「……………」

「……………な、なにか言いなさいよ」

「エロい」

「直球すぎるわよー！」

一之瀬のコスプレ衣装は、中国とかでよく見る黒いチャイナ服であった。髪型もそれに合わせて、左右にシニョンを作った中華スタイルになっている。

身体の前面と背面を隠すだけの、黒い布切れ。さっきの二宮とは逆に、腕と脚を完全に露出する格好になっていた。

「丸出しの脇と太ももが、めちやくちやエロくて最高だな、と」

「だから直球すぎるのよ！　ちよつとくらい欲望を隠しなさい！」

そんなこと言ったって、エロいものはエロいんだから仕方ないだろう。

「特に、その深すぎるスリットだな。足の付け根まで丸見えなのはマジでエロいと思う」

「こ、このスケベ……………」

脇腹から太ももにかけて全部丸見えで、股関節がハッキリと視認できるレベル。

ここまで深いスリットだと、着けられるショーツは存在しないだろう。ということとは、だ。

「もしかして、下着つけてないのか？」

「……そうよ、悪い？」

まさかのノーパンであった。

「見ていいか？」

「……勝手にしたら？」

勝手にしていいとの事なので、勝手にする事にした。

「どれどれ」

「っ……っ！」

チャイナ服の前垂れを掴み、まるで居酒屋の暖簾でもくぐるように中身を確認する。

するとそこには、一枚の絆創膏で隠された、一之瀬のロリまんこが鎮座していた。

「ほう、これはまたマニアックな」

「……変態」

なるほど。ピッタリ一本筋おまんこの一之瀬だからこそ、細い絆創膏でも完全に隠すことが出来るというわけか。

クソエロいな、この黒髪ガチロリ大和撫子オナホがよ。

「大事な所に絆創膏貼って隠してるような、ドスケベなド変態に言われたくないな」

「は、はあっ!? その絆創膏おまんこ見て、チンポガチガチにしてるのは何処のどいつよっ！」

「はいはい、喧嘩しないの」

ヒートアップしてきた口論を、先輩が間に入って仲裁する。

こういう所は年上っぽいんだよなあ……生活能力皆無の癖に。

「ほら二人とも、ごめんなさいは？」

「うう……すみません、ミント先輩」

「わたしに言ってもしょうがないだろう？」

「むぐ……ご、ごめん、北条……」

先輩の言う事なら、一之瀬は素直に聴くからズルい。実際、先輩に嗜められて、借りてきた猫みたいに大人しくなってるし。

僕に対しても、少し位そのしおらしきを見せてくれないものか。

「いやまあ……こつちこそゴメン。一之瀬の可愛いチャイナ服姿を見

て、知らずにテンション上がったみたいだ」

「か、かわっ!？」

何気なく口走ってしまった言葉に対し、一之瀬は一気に顔を赤くさせる。

ああもう。そういうところが可愛いんだぞ、このぷにロリチャイナ服オナホが。

「……そ、そんな調子のいいこと言っても、許してあげないんだから!」

「別にそんなつもりは無い。ただ本心を言ってるだけだ」

「くくくっ! こ、この天然タラシ! そうやって先輩も落とし込んだんでしょ!」

いや、先輩は普通にチンポで墮としたぞ。

杭打ちピストンで子宮口を叩き潰してやったら、すぐにメロメロになっただけだ。

「まあ、正直なのは後輩くんの美点でもあり、欠点でもあるからねえ。お陰で高校時代、何人の女の子が後輩くんに墮ちてたことか」

「やっぱり女タラシじゃないの」

「待ってくれ、誤解だ」

そんなつもりは無いんだ。ただちよつと、口について本心が出ちゃうだけなんだ。

だからずつと、心の本命は先輩で固定されてるんだ。信じてくれ。

「ふふ、そんなに慌てなくても大丈夫さ。どんなに浮気しようとも、後輩くんが最期に帰ってくる場所は——わたしの元だと、そう決まってるのだからね?」

「先輩……」

柔らかく微笑みながら、その豊満メスブタボディを押し付けてくる先輩。Kカップ爆乳が余すところなく腕を包み、興奮がどんどん加速していく。

まったく、このド変態ぶにロリKカップ爆乳マゾ豚オナホは……! っただけ人の心を惑わせれば気が済むんだか。

「む……! 北条ばっかりズルイです! あたしにもおっぱいサン

ドしてください！」

「おやおや、しようがない子だね」

「むぶっ!」

一之瀬のわがままに応え、その顔をおっぱいで挟んであげる先輩。規格外の爆乳は、あつという間に小さな顔を呑み込んでしまった。

これは……伝説のぱふぱふってやつじゃないか。羨ましいな、一之瀬のやつ。

「ほ〜ら、ぱふぱふ〜?」

「……………」

「ぱふぱふってより、もにゅもにゅって感じの音がしてそうなんです  
が」

実際にしてるしな。

「ふふ、気持ちいいかい?」

「〜〜?!」

「うお、更に顔押し付けてるし」

そんなに気持ちいいのか、Kカップ爆乳ぱふぱふ。後でやってもらおうかな。

「あん?陽毬ちゃん、そんなにおっぱい揉まないでくれないかい?」

「んふー?むふー?」

「うわ、ひつでえ顔」

爆乳おっぱいに挟まれ、完全に鼻の下を伸ばしたスケベフェイスになっっている。

せつかくの美少女が台無しなんだが。おっさんでもそんな下品な顔しねえぞ。

「ふふ?わたしのおっぱいは魔性だからね?女の子同士でも、すぐメロメロになっちゃうのさ?」

「自分で言うことじゃないですよね?」

そういうのは、他人からの評価ありきなんだよ。自分で言ったら価値が薄れるんだわ。

でもまあ、現に一之瀬はめちやくちや気持ちよさそうにしてるし、魔性ってのは認めていいかもしれない。

「はあっ?はあっ?しえんぱいつ?しえんぱいのおっぱい?やわらかっ?きもちいつ?」

「そうだろう?そうだろう?」

「おお……凄いですね、おっぱい効果。もう割れ目がぐちよぐちよになつてますよ」

絆創膏の吸水性を超えて愛液が溢れ出し、透明な液体が大量に太ももを伝い始めている。

薄暗い部屋の中でも光るように輝く愛液は、どんどん床に垂れ落ちて、一之瀬の足元にいやらしい水たまりを作っていく。

「そろそろチンポが欲しくなってきたんじゃないかな?」

「ちんぽ??ちんぽおっ?」

「そう、チンポ?ペニス?デカマラ?おちんぽ様?わたしたち女の子が絶対に勝てない、雄々しくて立派なオスの象徴……?」

先輩が耳元で囁く度に、一之瀬の目がとろんと熱を帯びていく。それに呼応するように、割れ目からぐぷりと本気汁が溢れ出した。

「ちんぽ……?ちんぽちんぽちんぽおおおおおっ?!!?」

「よしよし?完璧に発情したね、いい子だ?」

目の前で繰り広げられる、濃厚なメス同士の絡み。そんな時、ふと甘ったるい匂いが鼻をついた。

メスオナホの体臭とはまた違う、植物由来のような甘い香り。発生源は何処かと部屋の中を見回してみれば。

「……なるほど」

先輩の机の上で優しく燃えるアロマキャンドル。そこから頭がくらくらするような、甘い匂いが放出されている。

不快ではない。不快ではないが、ずっと嗅いでいると理性が飛んでしまうような——そんな予感を感じさせる匂いだった。

「先輩、また薬使いましたね?」

「ふふ、やっぱり後輩くんにはすぐバレてしまうね」

舐めないでいただきたい。こちとら、幼い頃から先輩の実験台になつていた身だ。このくらいの違和感ならすぐに感じ取れる。

「さっきのは飲むタイプだったからね。今度は吸い込むタイプを試し



てみようと思っただけさ?。」

「それ、こつちにも被害が来ませんか?。」

「なあに、ちよつと理性がトんで性欲に歯止めが効かなくなるだけさ?後輩くんにとっては——いつものことだろう?。」

確かにいつもの事だが。

「さあさあ?そんなことより、はやく陽毬ちゃんの欲しがりおまんこ?満足させてやってくれたまえ?。」

「……まったく」

ベッドに移動し、二人揃ってそこに腰掛ける。前後に並んで、まるで親子のような様相だ。

「おいで、後輩くん?。」

「ちんぽっ?ちんぽっ?。」

まるで母が娘を差し出すように、一之瀬のおまんこを指でくぱあ、と割り開く。丸見えになった膣口から、ドロリと発情の証が垂れ落ちる。

ああもう、このぷにロリメスオナホ共は。

「……それでは、お言葉に甘えて」

どこまで人のチンポをイラつかせれば気が済むんだ、まったく。



黒いチャイナ服に浮かび上がる、胸元にある二つの膨らみ。ロリちっぱいの癖にそこだけ立派に育った勃起乳首を、服越しに思いつきり捻りあげてやる。

次の瞬間、一之瀬は尿道から潮を噴き出し、おまんこをギュウギュウとめちやくちやに収縮させた。

このままだとマジで食い千切られそうだな。どんだけ気持ちよくなってるんだ、コイツ。

「気持ちよさそうだねえ、陽毬ちゃん？乳首も、おまんこも、クリトリスも？女の子の気持ちいい所ぜーんぶ責められて、天国みたいな気持ちだよねえ？」

どっちかという快樂地獄じゃないですかね、とは言わないでおいた。

それはひとえに、一之瀬の顔が幸福の色に塗れていたからだ。

「うえひひ？ひひ？あへへ？うへへえ？」

涙とよだれと汗でドロドロに濡れ、もはや普通のツンデレらしい面影は何処にもない。

ここに居るのは——ただ極上の快樂を思うままに貪る、一匹の淫らなロリメスだけだった。

「気をしっかり持て、一之瀬。壊れるのはまだ早いぞ」

「ぶっ壊した本人がそれを言うのかい？」

「マッチポンプってやつですね」

「ちよつと意味合いが違う気もするがけど……まあいいか」

「んぎゅひい??？」

呆れたように肩をすくめながら、先輩は自然な動作で一之瀬のクリトリスをつまんだ。

ビクン、と電流を流されたように肉体が飛び跳ねる。それと同時に、更に膣内の締め付けが強くなった。

「んぐつ!! ちよ、締めすぎだぞ一之瀬……!!」

「あへえっ!!?へええええええっ!!?」

「ふふ？クリトリスを虐めるとすぐイツちゃうね、陽毬ちゃんは？」

先輩がクリトリスを指でこねくり回す度に、一之瀬の膣内が別の生

き物のように蠢いて、思いつきりチンポをしごき倒してくる。

冗談抜きで根こそぎ搾り取られるぞ、これは。

「そ〜れ、クリクリ〜?」

「おんぎよほほほおおおおおおおつ???」

「うおつ、子宮口まで吸い付いてきた…!!?!」

オナホの必須技能の一つである、子宮口バキュームまで動員してくるとは。一之瀬の本気度が窺えるというものだ。

「そんなに妊娠したいのか、一之瀬」

「うんっ!? うんっ!? ほうじょうの赤ちゃんほしいっ!? かわいい赤ちゃんいっぱいほしいのおっ!?!」

いっぱいときたか。その小学生みたいなちっこい身体で、何人も子供を産むつもりなのか。

「ふふ? いい機会だ、想像してごらん後輩くん? このぺちゃんこなお腹が、後輩くんの赤ちゃんをぽっこり膨らんじゃってる所を?」

「あうっ?」

一之瀬のすべすべした腹部を撫でながら、先輩はうつとりした笑みを浮かべる。

まるで愛猫を撫でるかのような、優しく手慣れた手付きだった。

「そして赤ちゃんを育てるために、このちっちゃなおっぱいも必死に大きくなろうとするんだよ?」

「ひいんっ?」

一之瀬の勃起乳首をつまみながら、先輩は淫らな笑みを浮かべる。

まるでシャボン玉をつまむかのような、繊細でいやらしい手付きだった。

「最終的に——陽毬ちゃんはおっぱいの先っぽからミルクを垂れ流しながら、ずっと後輩くんにハメ潰される事になるんだ?」

「くひゅあっ???」

一之瀬の勃起乳首、その先端をカリカリと爪先で軽くひっかきながら、先輩は邪悪な笑みを浮かべる。

まるで使い慣れたオモチャで遊ぶような、荒々しくも慈悲深い手付きだった。

「さあ、後輩くん？思う存分孕ませてあげたまえ？」

一之瀬の代わりに、先輩が言葉を紡ぐ。

しかし、それは一之瀬の本心でもあるのだろう。

「良いんですね？」

「もちろん？ね、陽毬ちゃん？」

「ひやいいいいいい？」

快樂にとろけた頭で必死に絞り出したような、理性の欠片も無い返答。

チンポがイライラする。狭い膣内を押し広げて、更に勃起が激しくなっていく。

「そうか——??なら、遠慮はいらないな」

「おつごお!!」

さつき<sup>!</sup>ゆり<sup>!</sup>も大きくなったチンポを、遠慮なく奥までブチ込んでいく。

身体の内<sup>?</sup>に渦巻く猛りのままに、腰を打ち付けていく。

「あ<sup>?</sup>ん<sup>?</sup> つ<sup>?</sup>あ<sup>?</sup> あ<sup>?</sup> あ<sup>?</sup> ああ<sup>?</sup> あ<sup>?</sup> ああ<sup>?</sup> あ<sup>?</sup> ああ<sup>?</sup> あ<sup>?</sup> !????」

引き抜き、叩き潰す。

引き抜き、叩き潰す。

引き抜き、叩き潰す。

「お<sup>?</sup>へえ<sup>?</sup> え<sup>?</sup> え<sup>?</sup> えええ<sup>?</sup> え<sup>?</sup> えええ<sup>?</sup> えええ<sup>?</sup> えええ<sup>?</sup>」

引き抜く度に、膣肉が絡みついて別れを拒む。<sup>!?!?!?!????</sup>

叩き潰す度に、子宮口が屈服して本<sup>?</sup>気汁<sup>?</sup>を垂れ流す。<sup>!?!?!?!????</sup>

「F U N D P O R N U . N o . S C < ~ ~ ? ? ?」

仕舞いには、人間とは思えない意味不明な言葉を叫びながら、白目を剥いて舌を飛び出させる。<sup>!?!?!?!????</sup>

最高に下品なアクメ顔だ。オスの種付け欲をこれでもかと煽る、極上すぎるメスの表情。

「孕ます、絶対に孕ますっ……!」

「は<sup>?</sup>や<sup>?</sup> い<sup>?</sup> つ<sup>?</sup>パンパンはや<sup>?</sup> ああ<sup>?</sup> あ<sup>?</sup> あ<sup>?</sup> あああ<sup>?</sup> あ<sup>?</sup> ああ

!?!?!?!」

!?!?!?!」今までに無い速度で腰を振り、一之瀬の未成熟な口りおまんこを完



おそらく、無意識なのだろう。無意識の内に母性が一之瀬の手を動かす、赤ん坊を慈しんでいるのだ。

「ふふ？これは陽毬ちゃんも完全に受精したね？見なよ、この幸せそうな顔？」

「ふうー……めちやくちやエロいですね」

「うへへえ？えひひい？」

完全に理性が溶け切ったトロ顔で、気持ちよさそうに笑う一之瀬。見てることちまで気持ち良くなってしまいうような、極上のメス顔だった。

「これで二人目？ふふ、いったい後輩くんは何人孕ませれば気が済むのかな??」

「それは……」

至福の表情で気絶した一之瀬を抱き上げ、二宮の隣に寝かせる。

股から精液を垂れ流して眠る美少女二人とか、もうそれだけで勃起ものだな。陰茎が苛立つ。

「一番孕ませたい人を孕ませたら、満足するんじゃないですかね」

「うむ？」

内側で渦巻く情欲の昂りに任せ、先輩を視姦する。

バカみたいにデカいおっぱい。

ムチムチとしたお尻に、太もも。

可愛らしい顔に、エッチな性格。

改めて考えてみても、完璧過ぎる。こんなオスの欲望を具現化したような、最高のメスを孕ませることが出来たら——それは、どんなに最高の気分だろうか。

「いい答えだね？流石は後輩くんだ？」

先輩は笑う。無邪気に笑う。

まるで、淫らな事なんて何も知らない、純粋な子供のように。

まるで、全てを知っている神様のように。

「来たまえ？後輩くん？」

先輩は、自らのオンナを見せつけながら、とても楽しそうに笑っていた。

「わたしを、完膚無きまでに孕ませて？」

その淫らすぎる光景を目にして、僕の理性は今度こそ欠片も残さず  
吹き飛んだのだった。



## 形のいい桃尻をブツ叩かれてマゾイキするド変態メ スガキ先輩

本能が叫んでいる。

このド変態マゾ豚メスオナホールを、完膚無きまでに蹂躪して孕ませると、身体の中の本能が叫んでいる。

「あは？後輩くん、目が怖いよ？」

自分の身を守るように、自らのおっぱいを両手で抱いて見せる先輩。

実際は欠片も守れておらず、むしろ指が柔らかな爆乳の形を卑猥に変え、更にいやらしさを強調させていた。

「ざくこう？ざくこう？大好きな先輩一人妊娠させられない、ザコ後輩くん？悔しかったら妊娠させてみたまえ？」

「まったく、この先輩は……」

上下関係を全く理解していないメスガキじみたセックスアピールに、チンポが瞬く間に臨戦態勢へと移行する。

ただだけオスを煽れば気が済むんだ、このぷにロリKカップ爆乳メスガキオナホは。確実に妊娠させるからな、このマゾ豚が。

「おっっ？」

「舐めろ」

ビキビキに勃起したチンポを、先輩の鼻に押し当てる。

二宮と一之瀬、そして先輩自身の淫臭が染み付いたソレを、超至近距離で嗅がされる。そんな事をすればどうなるか——それは火を見るよりも明らかだった。

「く、くっひゃ？むじゆるぶ？こうひゃいきゅんの？んっぐ？ちんぽくっひゃあ？じゆるるるっ？」

「喋りながら舐めるのは行儀悪いですよ。どっちか一つにしてください」

「あんむっ？ぐぶっ？じゆるるぼっ？じゅぶっ？じゅぶっ？ずろろろっ？んぽおおおっ？」

「喋るのより、チンポ舐める方を優先するんですか。とんだマゾ豚ですね」

まあ、最初から分かっていた結果ではあったが。

この淫乱オナホが、チンポしゃぶりを一秒たりとも我慢できる筈が無い。

「おいひい？おちんぽしやま、おいひいよお？」

「むぐっ……！ チンポ啞えたまま喋るのは、行儀が悪いって言ったばっかだろ……！」

唾液でヌルヌルになった口内は、まるで最高級オナホールにでもブチ込んだのかと錯覚させるほどの心地よさだった。

締め付け、竿を搾り取ってくる食道。根本をベロベロと舐め回し、キンタマにまでご奉仕をする舌。そして極めつけは、ちゅぽちゅぽと鈴口を吸い上げる胃の入り口。

「れろお？んむみゅぽおおおおおおおおっ!!??」

「チンポ好きすぎだな、このメス豚オナホールが……！」

メスの本能が赴くままに、オスの精液を搾り取ろうとしている。消化器官が全部性器になったかのような、そんな印象を与えてくる。

「むびゅ？むぼっ？ぼぶっ？ぼぶっ？ぼぶっ？」

「くっ、出しますよ先輩!!」

消化器官全部を使ったチンポ攻めに、たまらずキンタマから精液が駆け上ってくる。

射精の感覚に身を任せ、先輩の頭を掴んで勢いよく腰を突き出した。

「もっぽおおおおおおおおおおおお!!??」

どぶっ？どぶんっ？どぼぼぼっ？ぼびゆるるるっ？!!??

「うぐっ……！ めっちゃ出る……！」

いつかの焼き増しのように、喉の最奥でありつただけの精を解き放つ。

先輩の身体の中を、精液で染め上げる勢いで放出していく。

「あ……うあ、あ……う」

全ての精を吐き出し終わった後、ゆっくりと先輩の口からチンポを引き抜いていく。

ねっとり濃厚な精液がいやらしく糸を引き、チンポの先端と口の間を淫らな白い橋が架かっていた。

「あゝ？あははあゝ？」

口内を精液で染め上げ、オスの匂いを目一杯吐き出しながら、先輩は恍惚の表情を浮かべていた。

ハイライトの消えた瞳。だらしなく上がった口角。そのどれもが、オスの興奮を際限なく高めてくれる。

「おぶっ!? あつ、やばっ!? ゲエエツプ!? おえっ? おごぼぼおお おおおおっ????」

数秒後、派手なゲツプと共に先輩の口から精液が飛び出し、床へと落ちる。

「ご飯も食わずに夜通しセックスをしていたせいで、出てくるのは純粹な精液のみ。多少胃液が混ざっているかもしれないが、それでも精液の方が圧倒的に多い。」

「げほっ? うえっほ? ゴ、ごめんね後輩くん? せっかく出してくれた精液、無駄にしちゃって? げほ?」

「別にいいですよ」

そんな事、まったく気にする必要は無い。

吐き出してしまったのなら、また注ぎ直せば良いだけなのだから。

「ひゃわっ?」

ただし、今度は下の口に、だが。

「あ、相変わらずの絶倫具合だねえ? 後輩くん?」

少しだけ場所を移動し、机に手をつかせる。

そのまま尻を突き出させると、汗でテカテカと光る桃尻をガツシリと掴んでみせた。

「ひうっ?」

もにゅもにゅと、揉み心地の良い桃尻の感触を堪能する。手のひらに先輩の体温が伝わってきて、非常に心地いい。

と同時に、際限なく興奮が高まっていく。さつき射精した筈なの



いくん、がんばってるのに、ゆるくしちゃってごべんなざいいいいい〜???

目の前に差し出されたデカケツを、思いつきり左右から引つ叩いてやる。

一発叩くたびに、先輩の身体がビクンと跳ね、股からは特濃の本気汁が溢れ出す。

悦んでいる。

先輩のマゾ豚本能が痛みを快楽に変換して、おしりペンペン（超ハードモード）でイキまくっている。

とんだド変態だ、まったく。

「オラッー！」

「びぎよっ???!」

左右から同時にビンタを浴びせてやれば、先輩は間抜けなオホ声を上げながら失禁した。

全身に電気でも流されたように痙攣し、身体から一際濃いメスの匂いを発し始めた。

「ごめんによさい?ごめんによさいっ?もうゆるくしないからあ?ゆるしてえ?おしりゆるしてえ?」

「これからはしても良いんだよっ!」

「びぎやああああああつ?!?!」

まったく、この先輩は何も分かっていない。先輩はオナホなのだから、常にオスを誘惑するのが仕事だろうが。

「ふう……スツキリした」

「あひ?ひひ?おひひひ?」

めちやくちやに叩かれたケツを真っ赤に腫れあげさせ、ピクピクと痙攣する先輩。

まさしくデカ尻マゾ豚オナホに相応しい、無様すぎる格好だ。

「下準備はこれくらいで良いですかね」

「あへ?んへへえ?」

肉を叩いて柔らかくするように、先輩メス肉も柔らかくなって準備完了したようだ。

これで、遠慮なくハメられる。

「孕ませますよ、先輩」

「うひ？いいよ、後輩くん？」

言質も取った。これで遠慮なく先輩を孕ませられる。

「あ……う？」

今までに無いくらい勃起したチンポの先端を、ドロドロになったおまんこに押し当てる。

もう、止まれそうになかった。









そう、狙っている。ただ狙っているだけなのだ。

(……ダメだったかあ……)

本能で悟る。

きつと、先輩は受精してない。

「はああ……う？おもお……う？おにやか、おもおい……う？」

全身の淫肉をぶるぶる震わせ、恍惚の表情で快楽を享受している先輩。しかし、受精したという宣言はしてくれない。

きつと先輩も分かっているのだろう。今のセックスでは、赤ちゃんは作れなかった——と。

「ふう……お疲れ様、後輩くん？」

「……お疲れ様です、先輩」

ガクガクと震える脚をなんとか動かし、先輩が振り向いた。

精液が詰まってぽっこり膨れたお腹を、大事そうに抱えて向き直る。

「まだ余裕そうですね」

「後輩くんもね？」

いや、こっちはかなり疲労困憊なんだが……二宮や一之瀬と合計で十発以上は出してるし、流石にもう打ち止めだ。

「いやあ、それにしてもすごい出したね？お腹がぽっこりしちやつてるよっ。」

愛おしそうに、膨らんだお腹をさする先輩。

まるで本当に妊娠してるのかと錯覚する程、母性に溢れた仕草だった。

「……先輩」

「おつと。その先はいいつこなしだよ、後輩くん」

ちよん、と鼻先に人差し指が当てられる。

「よい……しよつと……ほら、おいで」

震える脚を動かして、亀のような速度で先輩はベッドまで移動する。

そのまま縁に腰掛けると、両手を広げてこちらを見つめてきた。

「……………」

先輩に倣って、ゆっくりとベッドの方まで移動する。

身体が重いが、その程度の移動なら問題ない。

「はい、ぎゅ〜っ」

床に膝立ちになったまま、ベッドに座る先輩へ抱きつく。僕と先輩は身長差が凄まじいから、このくらいの体勢がちようどいいのだ。

「すっごく気持ちよかったよ、後輩くん」

「……僕も、気持ちよかったです、先輩」

柔らかな爆乳おっぱいに挟まれ、そのまま優しく包みこまれる。まさに極楽浄土という言葉が相応しい。

「疲れたねえ」

「疲れましたね」

先程のセックスが激しい快感なら、こちらは優しい快感。刹那的ではなく、いつまでも続くような緩やかな快感が全身を包み込む。

「まあ、ね？ 凜花ちゃんと陽毬ちゃんを受精させた後だったし、後輩くんも疲れてたんだらう。きつとそうさ、うん」

「そうですね……」

「ああもう。そんなに落ち込まないでくれよ、後輩くん」

別に落ち込んでなんかない。そりゃあ先輩を孕ませられなかったのは残念だけど、落ち込むような事ではない。

次こそは確実に孕ませてやる、と決意を新たにただけだ。

「くんくん……先輩、いい匂いしますね」

「そうかい？ 汗くさい匂いしかしないと思うが」

「ソレが良いんじゃないですか」

抱きしめ合っていると、なおさら先輩の匂いが鼻を突いてくる。

濃厚なメスの匂い。オスを発情させる、極上のメスの匂い。

「お風呂入ろうか、後輩くん」

「そうですね……勿体ないですけど」

それを洗い流すなんてとんでもない——と言いたいところだが、流石に洗ったほうが良いだらう。衛生的にも、精神的にも。

夜通しセックスしっぱなしで部屋も凄いことになっているし、こりや掃除が大変だ。

「そうだ」

いいタイミングだ。二宮と一之瀬も纏めて洗ってしまおうか。

「起きろ、お前ら」

「むにゆう……」

「ふあ……」

ほっぺたをペチペチ叩いて、爆睡していた二人を文字通り叩き起きます。

「おはようございますツス……」

「ねむい……」

「まあ、あれだけ激しいセックスしたら、疲れるのは当たり前だよ  
ねえ」

「ぶっ通しでセックスしてた僕が一番疲れたんですが……」

逆バニー姿の二宮と、ドスケベチャイナ服の一之瀬を抱えて、お風呂場に直行する。

それにしてもいい匂いするなコイツら。三人揃って濃さも三倍かよ。

「……おや、おやおやおや?」

お風呂場に向かう道中で、先輩がニヤニヤと生暖かい目を向けてくる。

その視線は、僕の股間に固定されていた。

「4Pソーププレイでもやるかい、後輩くん?」

「……今日はもうやりませんって」

「こちららマジで限界なんだって。」

「じゃあなんで、そんなにチンポを勃起させているのかな??」

「これは……その……生理現象です」

朝勃ちと似たようなものだ。だから見逃してほしい。

「わたし達はいつでも準備OKだよ? ねえ凜花ちゃん? 陽毬ちゃん?」

「……ツス?」

「……ふんつ?」

見れば、二宮も一之瀬も顔を赤くしてチンポを凝視している。

いや、ほんとに勘弁してくれ……マジで。

「ふふ？頑張ってくれたまえよ、後輩くん？」

先輩は人差し指を輪っかにして、そこにもう片方の人差し指を入れた。

そんな下品なジェスチャーをしても絵になるの、ホント勘弁してほしい。

余談だが、この後お風呂場でめちやくちや4Pセックスした。

## 黄衣の女王ちゃん編 名取先輩からの頼み事

「名取先輩からのお願い、ですか？」

「そうなんだよねえ」

お風呂から上がって、リビングで朝食を食べている最中。唐突に先輩が話を切り出してきた。

今日のメニューは、だし巻き玉子焼き、ソーセージ、海苔、そしてご飯と味噌汁というシンプルなものだ。四人いるし、仕方ない。

「後輩くんが禁欲してた間に、ちよつと相談を受けてね。一応伝えておこうと思ったわけさ」

「先輩がちゃんとしてる……明日は雷ですかね」

「おい、失礼だぞ後輩くん」

いやだって、普段の先輩なら僕に相談する前にオツケーしちやってるでしょ。

「ミント先輩に対して雑な対応しやがって……処す？ 北条処す？」

「やめろ」

先輩の隣に座った一之瀬が、ブツブツ呟きながらヤバい目でこつちを睨んでくる。

お前が『処す』とか言うのと、冗談に聞こえないからマジでやめてくれ。

「あ、先輩醤油取ってくださいっス」

「ほら」

「せんきゅーっス」

僕の隣に座った二宮が、受け取った醤油を玉子焼きに数滴垂らしている。

前々から思ってたけど、マイペースだなコイツ。

「で、なんですか名取先輩からの頼み事って」

「至極単純なお願ひさ。彼氏クンのためにNTTR<sup>ネットラレ</sup>動画を撮りたいらしい」

「……はい？」

「たつた今、箸で掴んだソーセージを取り落とす。

「あの……今なんて言いました、先輩」

「だから、彼氏クンのためにNTRネットラレ動画を撮るから協力してくれってお願いされたんだよ」

先輩の言葉が理解できない。というか、脳が理解を拒んでいる。

文章そのものがトンチキすぎて、ちゃんと1から説明してもらわないと頭に入らない。

「えつと……詳しく説明してもらっていいですか」

「しようがないなあ、後輩くんは」

「やれやれ、と呆れ顔で首をふる先輩。」

マウント取つてるところ申し訳ないんですけど、いきなりNTRとかいう単語が出てきたら、普通に思考がフリーズすると思うんですよ。

「まず、京香には年下の彼氏クンが居るんだが」

「初耳なんですけど」

「いやまあ、名取先輩美人だし、有り得ない話じゃないけども。」

眼鏡が似合うクール美女。黒髪と白衣のコントラストが素敵で、ウチのゼミで1番真面目かつ理知的な先輩。

ガチロリ体型な一之瀬とは似ても似つかない、まさしく大和撫子を体現したような完璧な先輩なのだ。

「おい、なんか失礼な事思い浮かべなかった？」

「気のせいだろ」

「処す？ やっぱ北条処す？」

『処す』

「よし、処すか」

「やめろつての」

もう一人の人格に話しかけてんじゃねーよ。それでオツケーすんな、お前は主人格を止めろ。

「まあそんな京香がね、この間その彼氏クンとやっとな初エッチまで漕ぎ着けたらしいんだ」

「すう……ふう……ふう……」

色々とツツコみたいが我慢だ。また話の腰を折ってしまう。

「そこからいいムードになって、いざ挿入——という所で、彼氏クンのチンポが萎えちゃったらしいんだよ」

「それは、なんとというか……」

せつかくの初エッチがそんな結果になったら、男として情けない事この上ないだろう。

ちなみに、先輩とヤツた初エッチは丸三日くらいベッドで盛り合ってた。今思い返すと、あの時はホントにヤバかったと思う。

「それで萎えてしまった原因を彼氏クンに聞いたらしいんだが、その原因というのがね」

「NTR、ということですか」

NTRは脳を破壊する劇薬だからな。高濃度のNTRを接種してしまうと、普通のセックスでは物足りなくなってしまうらしい。

つまり、名取先輩の彼氏は質の良い——この場合は『悪い』が適切か——NTRを接種してしまい、普通のセックスが出来ない状態になってしまったと。

「そう。そこで彼氏クンを興奮させられるよう、後輩くんに新鮮なNTR動画撮影の依頼が来たわけさ」

「なるほど……つまり、名取先輩を寝取ってほしいと、名取先輩本人からお願いされたわけですね」

いやという発想なんだよ。エロ漫画でも中々見ないぞ、本人からNTRの依頼が来るとか。

「なんでも、彼氏クンがバイトをしていた時に、真っ白な髪に紅い目をしたとんでもないデカケツの美女に出会って」

ん？

「更に、その美女が逞しい青年に嬉しそうに抱かれる光景を見て以来、NTRモノのオカズでしか抜けなくなったらしいんだ」

んんん？

「おや、どうしたんだい後輩くん。まるで凜花ちゃんのおしっこでも飲んだような顔して」

「うえっ!?! の、飲ませたことなんて一回も無いツスけど!?!」



「冗談だとも」

それは苦い顔つて意味でいいんだろうか……なんて、現実逃避の意味も兼ねて、先輩と二宮の会話に意識を傾けてみる。

というか、そのシチュエーションなんか身に覚えがあるような……いやまさか、そんな偶然あるわけ無いよなあ。

「……」応聞いておきますけど、その彼氏くんがやってたバイトつて何ですか?」

「あー、えーつとねえ……たしか、ピザ屋の配達員つて言ってたかな」確定じゃねえか。

白い髪に紅い目のデカケツ美女、抱き寄せる青年、ピザ屋のバイト——これらの事実から導き出される答えは一つ。

アリス先生とサカツてた時にピザを持ってきた、あの少年。彼こそが、名取先輩の彼氏だったということだ。

(……ん?)

でも、それだと腑に落ちない部分がある。その彼氏くとアリス先生は初対面だった筈だ。

だというのにNTRによって脳が破壊されたというのは、いったいどういうことだろうか。

(一目惚れでもしたのか?)

可能性としてはそれぐらいだが、それだけで脳が破壊されるなんてこと——いや、あるかもしれないな。

あの時のアリス先生は、どんなオスでも虜にできる魔性の色気を放っていた。それを至近距離で、かつ一人で味わってしまったのなら、NTRが十分成立するかもしれない。

もしかすると、この場合は更にB僕が先に好きだったのにS Sも発症して、脳内がもっと酷い状態になっている可能性もある。

「分かりました。名取先輩からのNTR依頼、受けましょう」

「即断即決だね、後輩くん。そういうの嫌いじゃないよ」

まあ、こっちは覚悟決めるとして、問題は先輩の方だ。

直々の頼みとはいえ、親友の名取先輩とセックスしても大丈夫なんだろうか。こう、家を空ける的な意味で。

「先輩は大丈夫なんですか？」

「大丈夫だとも。今更一人ぐらいセフレが増えたところで、何も問題ないさ」

「いえ、そうじゃなくて……セックスして動画撮影もするととなると、アリス先生の時みたい日に一日帰ってこれないかもしれないですよ」

「……………あつ」

あ、これは予想してなかった顔だな。先輩が『やつべ』みたいな顔するの、久々すぎて新鮮だわ。

「……な、なるべく早く帰ってきてくれたまえよ、後輩くん！」

「努力はします」

約束はできないけど。

「心配いらないわよ北条！ あんたが居ない間は、あたしがミント先輩のお世話をするから！」

「いや、お前も家事は得意じゃないだろ。普段から研究室に入り浸って、ロクな料理も作ってない癖に」

「う、うるさいわね!!」

事実だろうが。

あと、この中で家事ができる人間といえば二宮だが。

「えつと。頼めるか、二宮」

「うーん……先輩を一週間……いや、3日貸してくれるなら、考えなくもないッス」

「1日家事して3日独占って、それ無限ループになってないか？」

しかも負債が増えてくタイプのやつ。

僕を独占したら、当然その間は先輩の世話ができない訳だからな。

「……ふ、ふふふ。大丈夫だとも後輩くん……こ、今度こそ、一人でお留守番を遂行してみせるよ……！」

「めっちゃ不安そうなんですが」

心配だと思いう反面、これは先輩が成長する良い機会にも思えてくる。

そうだな。せつかく先輩がヤル気になっているのなら、今回はその行為に甘えさせてもらおう。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいますよ、先輩」

「も、もちろん良いとも、後輩くん！」

不安だ……そう思いながらも口には出さず、僕は白米を掬って一口食べた。

くとある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねる2  
)

1：無貌の神

はあく……暇なクスども寄つといでく、レスバしよく……はあ。

2：名無しの邪神

なんや、めっちゃ落ち込んでるやん。

3：名無しの邪神

壁と喋ってる定期。

つか元気なさそうね。どうした？

4：名無しの邪神

これはアレか、遂に恋人に愛想尽かされたか。

5：無貌の神

違うよ。後輩くんがわたしに愛想尽かすなんて、そんなのお父様が  
目覚めるくらいあり得ないからね。

6：名無しの邪神

すげえ自信じゃん。

7：名無しの邪神

じゃあアレか。遂に妊娠したか。

8：名無しの邪神

あく、つわりってやつ？

9：名無しの邪神

いや、倦怠期ってやつじゃないか？

10：無貌の神

どっちも違うよ。まったく、神であるわたしにつわりや倦怠期なんてあるものか。

11：名無しの邪神

じゃあなんだよ。お前が落ち込むとか、星が爆発する前兆か何かだろ。

12：名無しの邪神

モヤス、モヤス。ヨワキナアホ、モヤス。

13：無貌の神

いきなり燃やすなあ！てかどっか行けえ!!お前は呼んでねえんだよお!!!

14：名無しの邪神

化けの皮剥がれてて草。

15：名無しの邪神

そりやまあ、アイツは天敵だしな。

16：無貌の神

あちっ!?あちちちっ!?テメエエエ!!!ヤル気がゴラアアアア!!!

17：名無しの邪神

燃やされてるじゃん、ザマア（笑）。

18：名無しの邪神

日頃の行いが悪いからだな。

てか、この場所で攻撃とかできたっけ？

19：名無しの邪神

概念攻撃はホストにだけ有効だった筈。

それ以外だと、特に攻撃とかは出来なかった筈。

20：名無しの邪神

運の尽きつてヤツだな。そのまま灰も残さず燃やされるといい。

21：名無しの邪神

もつと燃えるがいいや☆

22：名無しの邪神

キチガイ☆

23：名無しの邪神

おい、誰だ毒電波垂れ流してるやつ。

24：無貌の神

ふう〜、死ぬほど熱かった〜。

25：名無しの邪神

あ、生きてた。

26：無貌の神

一回死んだけどね。また生き返っただけだよ。

27：名無しの邪神

極めて何か、生命に対する冒瀆を感じます。

28：名無しの邪神

お前が言うの？

29：名無しの邪神

キルスコア一位の人がなにか言ってますね。

30：名無しの邪神

どーでもいいけど、なんで落ち込んだん？話せば楽になるかもよ？

31：無貌の神

ああ、それね……実はね、また妊娠しなかったんだよ。

32：名無しの邪神

なくんだ。

33：名無しの邪神

いつもの事じゃん。

34：名無しの邪神

リ・テケ・テケ・リ

35：名無しの邪神

そんな事で落ち込んだのか、このバカめ。と申しております。

36：名無しの邪神

いや、普通に聞き取れてたから翻訳いらんが。誰に向けての配慮？

37：名無しの邪神

コレを見ている方……でしうか。

38：名無しの邪神

つまり、画面の前のお前らだよ！

39：名無しの邪神

何を言ってるんだコイツは。

40：無貌の神

いつものことだろうに……はあ、今回は濃さも量も最高峰だったし、イケると思ったんだけどな。

せつかく一週間も我慢して溜めてくれてたのに、これでもダメとか……もう自信なくなってくるよ。

41：名無しの邪神

黒山羊とかにアドバイス貰えばいいのに。

42：無貌の神

彼女は今、おねシヨタで忙しいんだって。門前払いされちゃったよ。

43：名無しの邪神

あー、そういやあいつも人間とねんごろしてたか。あいつも自分で孕もうとしてんだっけ？

44：名無しの邪神

このまえ様子見に行っただけど、随分進展してたよ。

45：無貌の神

わ、わたしだって進展してるとも！

46：名無しの邪神

いや、お前はセックスしてるだけじゃん。もっと健全にデートとかしろよ。



47：名無しの邪神

同意だな。

遊園地とか、水族館とか、映画館とか……とにかく肉体の距離を縮める前に、まずは心の距離を縮めろ。

48：無貌の神

む、むぐぐぐう………!!!

49：名無しの邪神

レスバしようとか誘ってたのに、レスバになってなくて草。一方的にボコられてるだけじゃん。

50：無貌の神

うぐぐぐつ………!!!

51：名無しの邪神

とりあえず、セックスより先にお出かけしてこい。妊娠はそれからだな。

52：名無しの邪神

身体より心を繋げることだな。

53：無貌の神

う………うつ、うわくくくん!!!

54：名無しの邪神

泣いちちゃった!

55：無貌の神

も、う、か、え、る、く!!!

56：名無しの邪神  
おう、じゃあな。

57：名無しの邪神  
おつゝ。

無貌の神が退出しました。

彼氏のために自ら寝取られる健気で美人なむつつり  
スケベオナホ先輩

街中にそびえ建つ、とある高層マンション。

見上げると首が痛くなるその建物の上層階に、目的地はある。

「い、いらつしやい……」

「お邪魔します、名取先輩」

チャイムを鳴らして少し待てば、部屋の中から一人の女性が顔を出した。

フレームレスの眼鏡をかけ、黒く艶やかな髪を腰辺りまで伸ばしたクール美女。二宮と同じく、威圧的なツリ目がクールな雰囲気を助長させているのだろう。

「は、早かったわね。ミントから連絡もらって、そんなに経ってない気がするけど」

「それは多分、先輩が連絡するの遅れただけですね」

大学や研究室で見る服装とは違う、ゆつたりとした黒のスウェットを着ている。

普段着なのだろうか。それとも、これからするコトを想定して極力体のラインを見せないように努力しているのだろうか。

いや、でもガッツリ生脚見えてるな……下は履いてるのか、履いてないのか、判断がつかん。

「会うのもなんか久しぶりですね」

「そ、そうね。色々と用事があつて、研究室に顔出せてなかったから」  
その色々っていうのは、彼氏とのチョメチョメの事だろうか。

まあ名取先輩は普段から真面目で、ゼミ内でも中間管理職みたいなポジションだから、そういう時期があつても誰も文句は言わないだろう。

「紅茶でいいかしら」

「はい。ありがとうございます」

玄関から駆け足気味にキッチンへと移動し、飲み物の準備を始める

名取先輩。

そんな後ろ姿を見つめながら、リビングのソファへと腰を下ろす。先輩と一緒に何度かお邪魔したことはあるけど、一人で来るのは初めてだ。

「きよ、今日はミント来てないのね」

「先輩がいると、ほぼ確実に混ざって来ちゃいますから。NTR動画を取るのに3Pになってたらマズいでしょう？」

「っ……………」

NTRという単語が出た瞬間、ビクリと肩を震わせる。

遠目でも分かる程度にはビクついてたな。

「もしかして、緊張してます？」

「そ、そそそんなことないわよ!?!」

めっちゃ緊張してるんだよなあ…………声とか震えまくってるし。

まるで、エッチに慣れてない初心な生娘のような反応だな。

(もしかして、名取先輩って処女なのか?)

彼氏との初エッチ前にチンポが萎えたって言ってたから、マジで処女の可能性があるぞこれ。

名取先輩、普段から如何にもガード硬い雰囲気醸し出してたから、今までセックスとかしてこなかったんだろうし。

「は、はい…………紅茶」

「ありがとうございます」

「それで、その…………やるの、よ…………ね? エッチな事…………」

「当然です」

肯定の言葉を告げると、ソファの隣に立つ名取先輩の顔が、徐々に赤く染まっていく。

うーむ、これは本格的に処女の可能性が出てきたぞ。良いんだろうか、他人の彼女の処女なんてレアなもの貰って。

「え、えっと、その…………こういうのって初めてだから、最初に何をするか教えてほしいんだけど…………」

「そうですね、じゃあまずは見るところから始めましょうか」

「見るって…………ひいつ?」

ズボンのジッパーを下ろし、座ったままチンポを露出させる。

萎えていても十分巨大なそれを見た名取先輩は、肩を跳ねさせて後ずさった。

「そ、そそそそれって……!」

「ええ。おちんちん、チンポ、男性器——要は男の生殖器ですね」

「そ、それぐらいわかるわよ!」

流石は名取先輩、理系なだけはある。ソツチ方面の補足は余計なお世話だったかな。

彼氏のチンポも見たことあるんだろうし、ここまでは小手調べと  
いった所だ。

「じゃあ、触ってみます?」

「……………」

ゴクリ、と生唾を呑み込む音がする。

流石は理系、やはり知的好奇心は抑えられないか。

「ほらほら、遠慮せずにどうぞ」

「え、ええ」

一歩一歩、ゆつくりと近づいてくる名取先輩。既に息が荒くなっている所を見るに、やはりむつつりスケベで確定だろう。

「彼の男性器とぜんぜん違う……長くて、黒くて、すごく大きいのね」

「まあ、経験の差ですかね」

自慢じゃないが、こちら先輩と四六時中セックスしまくってるんだ。そんじよそこらの男には負けないくらいには鍛えられてると、自負している。

「最初は幹の所を優しく握ってみてください」

「こ、こようかしら?」

恐る恐る股の間に跪いて、チンポの幹に手を添える名取先輩。

危険な液体にでも触れるように、指先を震わせながらチンポを握り込んで見せた。

「お、大きいけど、意外と柔らかいのね……」

「まだ勃起してないですからね」

「えっ?」

驚いた様子で、名取先輩はこつちを見上げてくる。そんな怪物を見るような目で見ないで欲しい。

そりゃあ興奮するような事は何もしてないんだから、勃起するわけ無いだろうに。性的興奮が無いと男性器は勃起しないと、知識では知っていると思うのだが。

「こ、ここから更に大きくなるの？」

「ええ、まあ」

改めて見てみると、確かにデカ過ぎだと思う。あの金髪爆乳ぶに口リマゾ豚オナホール先輩の腹が破けてないのが、奇跡だと感じるくらいにはデカイ。

「ど、どうやれば大きくなるのかしら」

「そうですね……じゃあ握ったまま、ゆっくり前後に手を動かしてくれませんか？」

「わ、分かったわ」

言われた通り、名取先輩はゆっくりとチンポを前後にしごき始める。

たどたどしい手付きだが、力加減は絶妙だ。理系でもあるが、意外と感覚派でもあるのかもしれない。

「ど、どうかしら……？」

「良いですね、その調子ですよ」

シユツシユ、シユツシユ、と一定のリズムでチンポをしごく名取先輩。

股の間に顔をうずめる、眼鏡の似合う超絶クール美人。そんな美人がデカチンポをしごいているというシチュエーションも相まって、徐々に興奮が高まっていく。

「あつ、だんだん固くなって……えっ？」

柔らかく暖かい手の中で、チンポがどんどん硬度を増していく。

そのまま反り返り、天を突くように勃起したチンポを見て、名取先輩は目を白黒させていた。

「な、なによこれっ……っ……お、おつきすぎると……っ？」

目の前で勃起するチンポを見上げて、驚嘆の表情を浮かべている。

初めてセックスする相手には必ず驚かれるけど——ここまで素直にビックリしてくれたのは、名取先輩が初めてだ。

「こ、これが、私の、中に……?というか、は、入るの……?」

「入れるんですよ」

入るか、入らないかじゃない。

入れるのだ。

「じゃないと、NTRセックスにならないですから」

「そ、そう、ね?」

会話している間も、名取先輩の視線はチンポに釘付けだ。

完全に発情したメスの顔になっていて、見ているだけでチンポがイライラしてくる。

(あー……どうしてこう、クール美人のメス顔ってチンポにくるんだろうな)

普段は冷静でキリツとした顔が、だらしなく緩んでいるというギャップ。そのギャップこそが、興奮を増長させる一番の要因なのだろう。

普段は怖さすら感じる切れ長の目が、今では見る影もない。うーん、めちやくちや興奮してきたな。

「ひっ?!ちよっ?更におつきくなってきたんだけど!?!」

「すみません。名取先輩のメス顔を見てたら、興奮してきちゃって」

「め、メス顔って……?北条くん、なんかキャラ変わってない?」

「お互い様だと思いますけど」

研究室では『ごく普通の先輩と後輩同士』みたいな会話しかしてこなかったから、こうしてオスとメスとして会話するのは新鮮だ。

まあ要するに、どっちも猫をかぶってたってワケ。

「名取先輩、顔に似合わずマゾだったんですね」

「なっ……!?!」

僕の言葉に、心外だと言わんばかりに勢いよく立ち上がる名取先輩。

その際に、ポタポタと足下に透明な液体が垂れ落ちる。愛液——メスが発情した時に垂らす、スケベ汁だ。

「あつ……?」

「なるほど。ただのマゾじゃなくて、ノーパン趣味のド変態マゾでしたか」

名取先輩も、自分の太ももを伝う液体の感触に気づいたのだろう。

慌ててスウェットの裾を引っ張り、股間を隠そうとする。

「あつ!?!ちよつ?やだあ!?!」

「隠さないで、全部見せてください」

未だにポタポタと、淫らでメス臭い液体を垂らしている股間。

スウェットにガードされているそこを確認するため、名取先輩の腕を掴んでバンザイの体勢にさせてみた。

「~~~~~!?!?!」

「うわ、びつちよびちよじやないですか」

男の腕力の前に呆気なく曝け出された、名取先輩のおまんこ。

非常にもつさりと毛が生え揃ったソコは、毛先までしつとりと愛液に濡れていた。

「勃起したチンポ見ただけでこんなに濡らしちゃったんですか? マ

ジのド変態ですね、名取先輩」

「そつ、そんなこと——ひいんつ?!?!」

反論を掻き消すように、淫らな茂みに指を這わせる。それだけで、名取先輩は口からメスの喘ぎ声を上げた。

どうやら、クリトリスに指が当たってしまったみたいだ。

生い茂った陰毛の中でも見つけやすい、見事なデカクリ。経験則か

ら分かる——これは、クリオナしまくって肥大化してしまった無様なクリトリスだ。

「どうやら、遠慮はいらないみたいですね」

「えっ、なに——んおおおおおおおつ?!?!」

淫らに育ったデカクリを、指先で軽く弾いてやる。

それだけでド変態クール眼鏡オナホは全身を震わせ、淫らな声を上げる。

「お望み通り寝取ってあげますよ、このよわよわ見掛け倒しクールマゾ豚オナホが」



「ひっ?ひうっ?」

事実も含めて罵ってあげれば、先輩はまたしても茂みからトロリと愛液を溢れさせるのだった。

手入れを怠っていたボサボサおまんこを見られて赤面するクールオナホ先輩

「それにしても、めっちゃボサボサですね」

「わ、わざわざ言わなくていいわよっ……っ？ひんっ!?!」

名取先輩をソファへ押し倒した僕は、股を開かせて間に顔を埋めていた。

舌で陰毛の森を掻き分けながら、先輩のクリ以上に大きく勃起したデカクリを舐め回す。

「れろれろ、れりゅんっ、ちゅっ」

「ひぎゅっ？ひっ？ひやあああっ!?!」

クリの先端を舌先で磨き、次にクリ皮の内側を丹念に舐め取っていく。唾液でピカピカになったことを確認したら、最後に全体を啜えこむようにキスをして終了だ。

すぐ下にある割れ目から、濃いメスの香りがむわっと立ち昇る。どうやら名取先輩も興奮してきたらしい。

「んっ？くっ？舌使い、いやらしすぎっ……っ？」

「鍛えられていますから」

伊達に毎晩先輩のおまんこをクンニしてないから。女性の感じやすいポイントはすべて把握している。

まあ、全員ポイントが同じとは限らないから、まだまだ要勉強だけど。

「でもまあ……クリに関しては、大体の女性は感じる場所が一緒なので」

「いぎいっ!?!?!」

人差し指の先っぽで、クリトリスの先端に触れるか触れないかの場所を撫でてあげる。

男性で言うところの、亀頭の先端。一番敏感で気持ちいい部分だ。

「ゾワゾワしますよね？」

「んぎっ？やゝあゝっ？さきっぽ？おがじっ……あゝっ!?!」

ガクガクと震える名取先輩の腰を押さえつけ、先端へのフェザータッチを継続する。

強すぎず、弱すぎず、絶妙な刺激で身体をトロトロに溶かしてあげる。

「あ、本気汁出てきた。名取先輩、クリトリス弄られるの好きなんですね」

「す、好きじゃな——？お、う、っ!?」

「まあ、このデカクリを見た時点で分かっちゃいましたけど」

皮からはみ出るくらいに肥大化したデカクリは、触れただけで絶頂する超敏感な性感帯だ。

指の腹で軽く弾いただけで、名取先輩は背筋を弓なりに仰け反らせて絶頂した。

「普段はどんなクリオナしてるんですか？ 教えてくださいよ」

「そ、そんなのしてなっ？」

「嘘つかないでください」

「ひゃぎいっ!?」

隠し事をしだお仕置きとして、クリトリスを指でつまんでひねり上げる。その瞬間、膣口から大量の本気汁が溢れ出してきた。

「どうやら、敏感な上にマゾ気質なデカクリらしい。救いようが無いな、マジで。」

「あ、そうだ。そんなクソザコクリトリスの名取先輩にピッタリなおモチャがあるんですよ」

「ほへえ……??」

惜しげもなくトロ顔を晒す名取先輩を放置し、テーブルの上に置いておいた鞆の中身を探る。

底の方から一つの小箱を取り出すと、その中身を取り出してソファへと戻る。

固めのシリコンで出来た、丸いリングのような物体。見た目こそ金属みたいなおメタリックな外見をしているが、指で触った感触はグニグニと指を押し返す固めのグミみたいだった。

「先輩から持たされてたんですよね、コレ」

「な、何それ……??ゆ、指輪……??」

そう見えるかもだが、違う。

これは指にはめるためのリングではなく。

「クリトリスにハメるリングですよ」

「ひあっ!?!」

キュポツ、と間拔けな音を立てて、名取先輩のデカクリにシリコン製のリングがハマる。

やはりピッタリだったな。まあ、左右に回してサイズ調整もできる優れものなので、そこは心配していなかったが。

「く、クリトリスに指輪って?ほ、本物の変態みたいじゃない?」

「ちようどいいじゃないですか」

「よ、よくないわよっ?」

そうかな。この後めちやくちやいやらしい動画を撮るんだから、思いつき変態になったほうが気が楽だと思うけど。

「それに、これは指輪じゃなくてクリリングですよ」

「クリ、リング……?」

クリトリス専用の、淫らなオモチャ。

気持ちいい場所を徹底的にいじめる、淫靡なオモチャ。

「じゃあいきますよ、スイッチ——」

「ちよっ?ちよっ、まつ?」

「オンー!」

「ぶぎゅおおおおおおおおおっ!?!?!?!?!」

小箱に備え付けてあったボタンを押せば、クリリングが勢いよく震え始めた。

女の子の弱体を、容赦なく振動させる悪魔のリング。名取先輩のオホ顔を見れば、その快樂がどれ程のものか分かるだろう。

「うわあ……」

瞳をグルンとひっくり返し、全身を痙攣させて思いつきりガチイキしている。

もはや普段のクールな面影はどこにも無い。そこに居るのは、ただ一匹の淫らなメスだった。



まあ、そういう厄介な所も興奮する一因ではあるんだが。

「お………???おへ………???」

すっかりトロトロになった名取先輩のメス肉。

むわつと濃厚なメスの匂いを放つ全身。

涙とよだれでぐちやぐちやになったアへ顔。

「………やり過ぎたか」

前戯にしては過剰だったかもしれないが、ここまでやった甲斐があるというもの。これは素晴らしいNTR動画が撮れそう。

早速、鞆の中からスマホスタンドを出してソファの前に設置する。

「えーっと、向きはこうで……自動録画っと」

スマホでも高画質な動画が撮れるようになったの、素直に凄いなと思う。

お陰でビデオカメラとか用意しなくて済んだし、こういうオモチヤにお金をかけられる。

「ほら、起きてください名取先輩」

「へえ?」

潰れたカエルのようにソファに寝転がっていた名取先輩を抱き上げ、隣に座らせる。

NTR動画の冒頭でよく見る、間男の隣に彼女が座っている構図だ。

「えー、コホン……イエイ、彼氏くん見てるー? これから君のカノジョ、このチンポでメロメロにして寝取っちゃいまーす☆」

「えへ……うへへ……?」

うん、チャラ男って確かこんな感じだったよな。とにかくテンション高くして、イエイとか言つとけば良いだろう。

それで名取先輩の唇を奪って、唾液を残らず吸い上げたら完璧だ。完璧なNTR動画の冒頭だ。

「よし、最初はこんな感じでいいかな」

スマホの自動録画を一旦停止し、名取先輩を抱き上げる。もはや抵抗すら無く、哀れな女体はされるがままに寝室へと連行されていく。

「次は本番ですよ、名取先輩」

「うへへ……？あへへ……？」

夢見心地って感じだな、このクールデカクリマゾ豚オナホがよ。  
徹底的にハメ潰してやるから覚悟しろよ、マジで。

背徳の味を存分に堪能して夢中で亀頭フェラするド  
変態クール剛毛デカクリオナホール先輩

快楽に浸りきった女体をベッドに寝かせ、スウェットを剥ぎ取る。  
半ば無理矢理に生まれたままの姿にされても、名取先輩はぐったり  
してロクな反応を示さなかった。

「じゃあ、次はフェラシーンでも撮りますか」

頭の方に回り込み、膝立ちのままベッドに乗る。そして丁度、チン  
ポの先端が顔に当たるように調整する。

「おっ？？すうく……くっさ？コレくっさあ？？」

目の間に差し出されたチンポの匂いを、恍惚の表情で嗅ぎ始める名  
取先輩。

そのメス顔をバツチリとスマホのカメラに収め、撮影を続行してい  
く。

「なによこれっ？すうく……げっほげほっ？くっさ？男くっさあ？」

「その割には、嬉しそうな顔して嗅いでますけど？」

「くっさ？おっ？？いぎゅっ？男の匂いでイぎゅっ？？」

「どぶっ？どぶっ？どぶっ？どぶっ？」

「あーあ、匂いだけでイツちやいましたね。これはもう言い逃れでき  
ませんよ」

ちん嗅ぎしただけで、名取先輩はおまんこの奥から白濁本気汁を溢  
れさせて絶頂した。

淫らで下品な匂いと音が、寝室中に広がっていく。

「もしかして名取先輩、匂いフェチですか？」

「んへえ??しゅきい?このくっさい匂いしゅきなのお?」

「なるほど、やっぱり匂いフェチなんですね」

薄々感づいてはいたが、やっぱり匂いで興奮する変態だったか。

というか、ト口顔で幼児退行しないでくれ。思わず襲い掛かってし  
まいそうになる。

「舐めてみますか？」



「なっ!?!?なめっ!?!?なめめめめっ!?!?」  
「なんかバグったんだけど。!?!?!!?!?」

うーむ。研究室だと絶対に見れない一面がいっぱい見れて、なんだか楽しくなってきたな。

「こつちも一発射精しないと落ち着かなさそうなんで、口でご奉仕してください」

「わっ?..わきやっ?...た、わ?..」

テンパリ過ぎてしどろもどろになりながらも、名取先輩は舌を伸ばしてチンポの裏筋を舐め始めた。

不規則に裏筋へと襲いくる、生温かいヌルリとした感触——それがより一層、性的興奮を高めてくれる。

「そうそう、上手ですよ」

「んっ?..れるれろっ?..れるうっ?..んあーっ?..」

「うおっ、飲み込み早っ!...! 流石は名取先輩ですね」

「ころころっ?..ちゅー?..ぽんっ?..:...えへへっ?..」

徐々に舐める位置が根本へと移動していき、最終的には金玉を舐めしやぶって、挙句の果てには玉袋に初々しいキスマでして、ようやく口を離す。

とんだスキモノだな、このクール眼鏡マゾ豚オナホ先輩がよ。ガチで犯すぞ、マジで。

「んはあ?..男の人の精囊、すごく濃い匂いがするう?..この匂い好きい?..」

「精囊だなんて、堅苦しい言い方はやめてくださいよ」

「えっ?..で、でも、精囊以外に呼び方なんて!...」

あるじゃないか、古来より日本各地で呼ばれていた名称が。

「キンタマ、ですよ」

「き、きんっ!?!?!!?!?」

その言葉を口にした瞬間、名取先輩は顔を真っ赤にしてこちらを見上げた。

何を今更恥ずかしがっているのだろうか。たった今、その恥ずかしい部位を舐めしやぶったばかりだろうに。

「ほら、言ってみてください、キンタマって」

「な、そ、そんな恥ずかしいこと……??」

うーむ、先輩や二宮やアリス先生だったら嬉々として言ってくれるのに。一之瀬は微妙かもだけど。

やっぱりまだ羞恥心が残っているんだな。素晴らしいNTR動画を撮るためにも、羞恥心は残さず捨て去ってもらわねば。

「彼氏くんの為ですよ。興奮させたいんですよね?」

「そ、それはっ……??」

揺れてる揺れてる。もう一押しだな。

「名取先輩が恥ずかしそうに淫語を喋れば、彼氏くんも興奮マックスになりますって」

「そ、そうかしら……?」

「絶対そうですよ。だからほら、言ってみてください」

今まで以上に顔を真っ赤に染め、意を決したように名取先輩は口を開く。

「き、キンタマ……??北条くんのキンタマ、ずっしり重くて、濃い匂いがして……??もう、鼻の奥が痺れちゃうくらい濃厚なキンタマなお……??」

潤んだ瞳、真っ赤になった耳、切なそうに甘ったるい息を吐く唇。

画面越しなのに、火照った熱や淫らな匂いがリアルに感じられるようだった。

(うお、エッロ……彼氏くんが羨ましいな、こりゃ)

自分の彼女が、他人の男のチンポを賞賛している光景——これは控えめに言っても、最高のNTRだろう。

こんな極上のNTR動画で抜けるなんて、彼氏くんは幸せものだなあ。

「じゃあ、次は啜えてみましょうか」

「え、ええ?」

体勢を変え、スタンダードな四つん這いの姿勢をとらせる。

そのまま再び眼前にチンポを差し出してあげれば、名取先輩は食い入るようにその先端を見つめていた。

「す、凄い張り詰めてる……痛くないの？」

「全然。むしろムラムラがヤバイです」

始めてからまだ一回も射精してないからな。興奮が高まりすぎてヤバイ。

「く、啞えればいいのね？」

「歯を立てないようになしてくださいね」

「こ、こようかしら……はもっ？」

「おうっ」

精一杯に大きく口を開け、亀頭部分をぱっくりと頬張る名取先輩。

鼻の下が伸び、ほっぺたも情けなく膨らんだその容貌は、クールな面影など何処にもない——むしろ無様さしか感じられない、見事なフェラ顔だった。

「んもっ？んぼっ？もぼっ？」

「ああー、良いですね。そのままゆっくりストロークしてみてください  
い」

「んむー？ぬぽっ？れろれろろっ??？」

「ちよっ!! 不意打ちやめてくれませんか!？」

前後ストロークに動かすって言ったのに、なんで口を離して舌先で亀頭を舐め  
しやぶってんですかねえ。

もしかしてこの人、口に含むよりも舌で舐めるほうが好きなのか？

「名取先輩、舌で舐めるの好きなんですか？」

「はあっ？はあっ？しゅきい？言語化出来ないこの味、癖になるっ??」

これは困った。マゾの上に匂いフェチで、おまけに味フェチでもあるだなんて。こんな変態が彼女とか、逆に彼氏くんの方が大変だろう。

このメス豚エセクール変態フェチオナホを満足させるには、並大抵の努力じゃ無理だ。頑張れ、彼氏くん。

「このさきつぽから出てくるお汁っ？これっ？これおいしいわっ？  
もっと舐めたくなるのっ？」

「カウパーって言うんですよ」

なんか楽しいな、これ。普段の実験なんかでは名取先輩に教えても

らうことのほうが多いのに、チンポに関してはこっちが教える立場だなんて。

ああもう、優越感と背徳感と絶頂感でめちやくちやに狂ってしまいそうだ。

(いや、彼氏くんのためにNTR動画とか撮ってる時点で、もう十分に狂ってるんだけどさ……)

頭の片隅で冷静になるが、それを押し流す程に興奮が増していく。

「べろおっ? れろれるううっ?? じゆるぽっ? れりよんっ? じゅぼぼぼっ???」

「んぐおっ……! そんな亀頭ばっか責めんな、このクールオナホツ……!」

必死に亀頭を舐めしゃぶり、カウパーを啜る姿に加速度的に興奮が高まっていく。

ビキリ、と一回りチンポが大きくなった。

「ちゅっ? ちゅー? ちゅー? ちゅぱっ?」

「あー、無理。出しますよ、名取先輩」

嬉しそうに亀頭にキスする姿を見て、理性が爆速で限界を迎えた。

キンタマが歓喜に震え、精液が勢いよく尿道を駆け上ってくる。

「出るっ!!」

「えっ?? わっ?!? ふわああああ?!?!!?」

名取先輩がキスを終えて口を離れた瞬間、鈴口から大量の精液が飛び出してきた。

背筋がゾクゾクする快樂と共に、バカみたいな量の精液がその顔に降りそそぐ。

「っふうく……めっちゃ出た……」

「わ? わあ……?」

髪から口、顔から眼鏡に至るまで、そのすべてをねっとりとした白濁で染め上げ、名取先輩は笑った。

どういう意味の笑顔なのかは、その淫らさによって一目瞭然だろう。

「こ、これが精液……? 熱くて、ドロドロで、とっても臭いのね……」

「あむつ?」

「あつ」

顔についた精液を指で掬い取り、ネチヨネチヨと弄ぶ——かと思えば、それをおもむろに口に運んで、咀嚼し始めた。

「……苦いわ」

「そりやそうでしょう、弱アルカリ性の液体なんですから」

目で、耳で、鼻で、舌で、五感で。人間の持つすべてで、初めての精液を観察している。

そんなにまじまじ観察されると恥ずかしいんだがな……こんな場面で研究者気質発揮しなくても良いのに。

「でも、クセになるような味ね?」

「やっぱ味フェチでしたか」

精液好きすぎだろ、このオナホ共がよお。

「わっ、髪まで全部ベトベトね」

「精液つて髪に付くと落ちにくいんですよね」

「じゃあなんで髪にかけたのかしら」

「……勢いで、つい」

ベッド脇に備え付けてあったティッシュを使って精液を拭き取ってみるも、やはり髪に付いたものまでは拭き取りきれなかった。

こうなるともう、シャワーを浴びるくらいしか洗い落とす方法が無くなってくる。

「名取先輩、シャワー浴びますか?」

「そうね、一旦綺麗にしてこようかしら」

少しでもクールさを取り戻した名取先輩は、自らの足で部屋を出てお風呂場に向かう。

その隙に、僕はさつき撮影した動画をスマホで再生してみた。

「おお、いい感じに撮れてるんじゃないか?」

亀頭フェラも顔射も、バッチリ動画に収まっている。これなら彼氏くんも満足してくれる事だろう。なにせ、めちやくちやエロいからな。

「先輩にも報告しておくか」

ショートメールに冒頭とフェラ動画の二つを添付し、短いメッセージを付けて先輩へと送る。

すると数秒後、爆速で返信が返って来た。

『先輩くん、君はチャラ男というものを全然わかってないね。ちよつと演技指導が必要なようだ』

そんな、100%ダメ出しの文章が。

いや何で？

究極のチャラ男を演じ切る為に先輩から演技指導を受ける絶倫チンポ後輩くん&理系大学生彼女とイチャイチャするドマゾ少年

『いいかい、後輩くん』

「はい」

『冒頭の動画を見たが、アレではぜんぜんダメだ。素材の味をまったく活かしてない』

「はあ」

連絡手段をビデオ通話に切り替え、なんだかよくわからないお説教を受けている最中です。

何で怒られてんの？ あの冒頭、普通にエロかったと思うけど？

『チャラ男というのはね、浅ましくて、軽薄で、ケダモノで……なんと  
いうか、ハイエナみたいじゃないとダメなんだ』

「チャラ男になんか恨みでもあるんですか？」

めっちゃくちゃデイスるじゃん。なんか嫌なことでもされたのか、  
チャラ男に。

『後輩くん、イエーイ☆って言うてればチャラ男になれると思っ  
てないかい？』

「思ってますけど」

『浅い、浅すぎるぞ後輩くん。チャラ男の鳴き声はイエーイ☆じゃな  
くてウエーイ☆だ』

「何が違うんですか、それ」

どこらへんが違うのか全くわからん。

イエーイもウエーイも、どっちも一緒だろ。

『あとね、チャラ男は敬語なんて使わないんだよ。このフェラ動画の  
時、思いつき敬語使っちゃってるじゃないか』

「まあ、それは……はい」

そこは自分でも分かる反省点だったな。でもなあ……名取先輩相  
手にタメ口で話せてのも、中々に難易度高いんだよなあ。

『あと、チャラ男はもつとガツガツ女を食い漁るような感じじゃないと！』

「いっつも食い漁ってるじゃないですか」

先輩、二宮、一之瀬、九条先生。

滅多にお目にかかれない最高の女体達を、いつも貪り食ってる筈なんだが。

『全然違うよ！ 後輩くんのセックスは高級料理店でステーキを食べるようなセックス！ チャラ男のセックスは、路地裏で残飯を漁るようなセックスなのさ！』

「やっぱりチャラ男に何か恨み抱いてますよね？」

なんかちよつと言葉の端に怨念が籠もってるし。普通に怖いんですけど。

『そして、そんなチャラ男ムーブをする後輩くんに残飯の如く犯される自分を想像すると、無性にムラムラしてくる！』

「あ、そうですか」

もうダメかもしれんな、この先輩。

『というわけで、もつと浅ましく！ もつと最低に！ 完膚無きまでに京香をアへらせるんだ！』

「一応、二人は親友なんですよね？」

もうちよつと親友の身を案じてやるべきじゃないだろうか。あと、うら若き乙女がアへらせるとか言うんじゃないやありません。

『プランもちゃんと考えてあるからね！ この通りに動画を撮れば、立派なNTR動画が撮れること間違いないさ！』

「不安じゃないんですか」

確かに先輩は天才だ。

思考も早いし、発想も柔軟。おまけに行動力まであるという、まさしく凡人とは一線を画す人だ。

だが、だからこそ心配なのだ。

天才とバカは紙一重と言うように、ちよつとしたボタンの掛け違いで大惨事に発展する事もある。

『大丈夫さ！ 大船に乗ったつもりでいたまえ！』



「その大船、豪華客船じゃないですよね？」  
沈没だけはやめてくれよ、ホントに。」



NTR動画撮影から二日後。

深夜、名取京香の寝室にて。

「今日は来てくれてありがとうアキラくん。時間とか大丈夫だったかしら。」

「は、はい。京香さんの為なら、いつでも時間作って会いに来ますよ」  
ベッドに腰掛けながら、一組の男女が会話に花を咲かせている。

一人はご存じ名取京香。もう一人は、京香の彼氏である武藤明だ。

「この前言ってたやつ、ちゃんと撮ってきたわ」  
「っ……!!」

二人は紛うことなき恋人同士ではあるのだが、初エッチをしたことが無いという関係。

今日はそんな初々しい関係に終止符を打つべく、こうしていい雰囲気  
の寝室へ来てもらったのだ。

「はい、これ」

京香から、大きめのタブレット端末を渡される。

震える指でロックを解除すると、画面には四つの動画ファイルが映し出されていた。

それぞれ『冒頭く凜々しい理系大学生がメス豚に堕ちるまで』『彼氏を裏切る背徳フェラチオ』『心までは屈しないゴムあり避妊セックス』『生ハメ寝取られ本気交尾』という題名が付いている。

「うあっ……!!」

「あっ?」

その題名をみただけで中身を察し、明のチンポが勃起する。

ちなみに、題名を付けたのは三峰ミントだ。人の興奮するポイントをよく分かっている。

「普通にセックスしようとした時は、全然おつきくならなかったのに

「……もうこんなにおつきくなってるわね???」

「こ、これはっ、違っ……!」

弁明しようと、慌ててタブレットから顔を上げる。

しかし、そんな明を諭すように京香は微笑んで見せた。

「大丈夫よ? アキラくんがどんな性癖でも、私は受け止めてあげるから?」

「京香さん……」

それはまさしく、至上の愛。

どれ程どうしようもない性癖でも、余さず包み込んであげるという母性の表れ。

「っ……!」

そんな愛に触れば触れる程、動画ファイルの中身を想像してチンポが勃起してしまう。

服を着ているのもどかしく感じるほど、興奮は際限なく高まっていった。

「あっ!」

「ふふ?」

そんな張り詰める股間に、京香が手を添える。

突然の刺激に、明の口からは驚きの声が漏れた。

「京香、さんっ……!」

「苦しそうだから、自由にしてあげるわね?」

ゆっくりと、丁寧にズボンのジッパーを下ろしていく。

数秒後。そこにはピンツ、とそそり勃った可愛らしい肉棒が鎮座していた。

「か、かわいいい?」

「うぐう……!」

彼氏のチンポを見つめながら、京香は目を輝かせる。しかしそれに反するように、明の顔は苦々しげだ。

それもその筈。一般的に、男の象徴をかわいいと言われて喜ぶ男性は多くない。『かわいい』ではなく、『かっこいい』と言ってほしいのが本音だろう。

「大丈夫よ?このチンポ、アキラくんらしくてとっても素敵??」

「そ、そうでしょうか……」

「そうそう?自信持つて?」

とはいえ、京香がこのチンポを素敵だと思っているのは事実だ。愛する彼氏の一部というだけで、心の底から愛おしさが湧き出してくるのだ。

「準備万端のようだし、そろそろ始めましょう?」

ベッドから腰を上げ、明の目の前に向き直る京香。

「ふーっ?ふーっ?」

息遣いは荒く、頬も赤い。相当に興奮しているのだと分かる。

「京香さん……?」

「み、見ててね、アキラくん……??」

しゅるり、しゅるりと布地が肌と擦れる音が部屋に響く。

徐々に増えていく肌色。床に落ちる衣服。

「はあっ、はあっ……!」

「ふうー?ふうー?」

上着、下着、全て脱ぎ捨て、産まれたままの姿を晒す。赤みがかつた肌から、発情したメスの匂いが漂ってくる。

頭を後ろ手に回し、両足を情けなくガニ股に開き、名取京香は人間から一匹のメスへ変態を果たした。

「ど、動画……?再生して……?」

「は、はいっ!」

彼女の痴態に見惚れる間もなく、指示が飛ぶ。

明は慌てて『冒頭く凛々しい理系大学生がメス豚に墮ちるまで』の動画ファイルを再生した——その瞬間。

『えへへへえ??アキラくん見てる??君のかわいい彼女の名取京香ちゃんはあゝ?今から彼氏じゃない他のチンポに抱き潰されちゃいまゝす??』

タブレット画面の中には、とびきり下品な笑顔でガニ股ポーズを取る京香の姿があった。

形のいいおっぱいも、陰毛が生え散らかったおまんこも、そのすべ

てが白日の下に晒されている。

「――」  
言葉が出ない。

言葉が出ないほどに、興奮している。

『この立派に育ったおっぱいもお？引き締まったウエストもお？小ぶりで掴みやすそうなお尻もお？マン毛がボーボーに生えた下品なダメまんこもお？今日はゼーンぶ北条くんのものでえす???』

ぴゆるぴゆると、先端からカウパーが吹き出る。

視線が画面に固定されて離せない。

『ウェーイ☆彼氏くん見てるく？☆今から君の彼女、徹底的にハメ潰しちやいます☆』

『あんっ???』  
「っ……っ！」

いきなり画面に入ってきて、無遠慮に京香のおっぱいを揉みしだく黒髪の青年。

筋骨隆々のその身体は、隣に立つメスと比べて遥かに逞しい。

まさしく、真のオスと呼ぶに相応しい肉体。

「で、でっか……っ！」

そしてもう一つ、注目すべきはその雄々しく勃起するチンポ。黒く淫水焼けた肉棒は、京香のへそまで届く勢いだ。

その雄大きさを前に、思わず背筋が震えてくる。男でも女でも関係ない――このチンポの前では、全ての人間が等しくメスとなる。

「アキラくん？」

名前を呼ばれ、ハッと正面を向く。

そこには、妖艶に笑う全裸のメスが立っていた。

『アキラくうんっ？私で興奮してえ???』

名前を呼ばれ、思わず視線を落とす。

画面の中では、だらしなく笑う全裸のメスが立っていた。

「ふふ？嬉しい……すっごい興奮してくれてるのね――もう出しちやうなんて???」

「え？」

気がつけば、腰がガクガクと震えている。  
更に股間にはじんわりと熱が広がる感覚。  
ビクビクと跳ねるミニチンポの先端で、精液が情けなく垂れ流され  
ていた。

「う……うああ……?」

「やっぱりアキラくん、かわいい?」

オスとして落第の射精。

メスに見放されてもおかしくない、情けない射精。

しかし、京香はそんなオスでも見放さない。

「いいのよ? 私の身体で?」

『私の痴態で??』

「いーっぱい射精して行ってね??」

現実の京香と、画面の中の京香が同時に笑う。

今まで見たことないようなエロさを感じて、少年のチンポは再び浅  
ましく勃起するのだった。

NTR動画に興奮しながら彼女に奉仕されて身体が半分メスに変化しちゃうふたなりメスオナホ少女

『それじゃあ、さっそく北条くんの逞しいおちんぽ?しゃぶっちゃいまっす?』

『しゃぶらせちゃいまっす☆』

画面の中で、京香が青年の股に顔を埋める。

横顔が見える構図になっていて、しっかり口の中にチンポがねじ込まれているのが見て取れた。

「うあ……?」

しゃぶっている。

いつも落ち着いていて、冷静沈着という言葉を体現したような、そんな彼女が。

『んもっ?んもっ?ぶぽっ?ぶぽっ?』

恥も外聞も投げ捨てて、一匹のメスとなってチンポをしゃぶっている。

「んふ?こっちもしゃぶってあげるわね?」

「あっ……!」

動画を再生するタブレットの下で、現実の京香が股の間に跪く。

画面の中の痴態に興奮し、ビクビクと震えているチンポを口に含んだ。

「~~~~っ?!!?」

画面の中のチンポとは違い、胃はおろか食道まで届かず、口の中だけで頬張れる大きさのミニチンポ。

そんなオスとしての失格レベルの肉棒にさえ、京香は愛おしそうに奉仕する。

『ずろろろろっ?ぐっぽっ?ぐっぽっ?ぐっぽっ?』

現実とリンクするように、画面の中でもフェラチオは徐々に激しさを増していく。

「んむ?れりゆん?れろおっ?んばあ?」

あつあつの舌で亀頭とカリ首を舐め回し、隙間にこびりついたチンカスを根こそぎ奪い取る。

そのまま戦果を報告するように、タブレットと身体の間隙からチンカスを乗せた舌を見せびらかした。

『れつろおおお??べろべろべろつ?じゆるるるつ?』

画面の中でもちようど亀頭とカリ首を舐めている所だったが、常に使い倒しているデカチンポにはチンカスなど溜まりようもない。

「あゝゝゝむっ??もっぎゅ?もっぎゅ?もっぎゅ——ごっくん???」

「うああっ……!?!?」

舌を自らの口内に押し込み、たっぷりのチンカスチーズを咀嚼してから飲み込む。

それは『あなたの汚い部分もすべて愛します』という、純愛宣言に他ならなかった。

「ぷはあっ?んべくっ?!」

「あ、あああ……!?!」

舌を伸ばし、口を開け、飲み込んだ証拠を見せつける。真っ赤な舌にも、真っ白な歯にも、チンカスは一ミリもくっついていなかった。

愛している。名取京香は、武藤明を心の底から愛している——これは、その愛が証明された瞬間だった。

こればかりは、画面の中の青年だっでもらったことは無いだろう。

「っ……!?!」

明の背筋が、ゾクリと震える。

この感覚はいつたい何だろう。

背徳感か、優越感か、独占欲か。

「んふふ?じゃあ本番、するね??」

「えっ……?」

分からないまま、淫らな行為は続いていく。

「れえゝっ?じゅぶじゅぶ?ちゅーっ?ぱくっ??コロコロ??」

「うああっ!?!」

溜め込んだネバネバ唾液をたっぷり竿に垂らし、そのままぷっくり

唇でピストンを開始する。

しばらく動いた後に強烈バキュームで亀頭を吸い上げ、離れた後にキンタマを咥え、舌の上で転がす。

足りなくなつた精子を生成するべく、身に着けた技術を総動員してオスの情欲を煽る。

『れえ〜っ?・じゅぷじゅぷ?ちゅーっ?ぱくっ?コロコロ??』

画面の中でも、現実と全く同じ責めをしている。

この青年に仕込まれた技だと理解した瞬間、理解できないほどの快感が脳を破壊する。

「あああああああっ???!」

「んむも〜っ???!」

思わず本能的に腰を突き出し、チンポの先端から溢れる熱をメスの口に解き放つ。

とぷとぷと情けなく溢れる白濁は、そのすべてが口内に収まるほど少量だった。

「じゅるるる?・じゅぞぞぞっ??」

「うあっ?!」

飲み足りないばかりに、京香はチンポの先端をバキュームする。射精したばかりの敏感なチンポには、少々刺激が強すぎる責めだ。

案の定、明は背筋を伸ばして強すぎる快樂に悶えている。

「だっ、め……!?!それ以上……はあっ?!」

「ぷはっ?アキラくん可愛いわ?女の子みたいね?」

「えっ……!?!」

「気づいてなかったのかしら??おちんちん舐める度に、口から甘い声が出てたわよ??」

出された精液をすべて飲み干し、ミニチンポを唾液で徹底的にマージングした京香は、口を離して身体を起こす。

オスの証である精子はまだまだ身体の中で生産されているにも関わらず、肉体は悩ましげに震えるのみ。

確かに明の身体は線も細く、顔も中性的な部類ではあるが——それでも。



「お、女の子みたいって、そんな……?」

「まあ当然よね?だって、これから女の子になるもんだもの——半分だけ、だけど?」

「へっ……??」

口元を拭い、笑みを浮かべる。

捕食者の笑み。

愛する者を喰らう、欲望の笑み。

「あっ……!?!」

どん、とベッドに押し倒される。

『出すぞっ!』

『んんんんんんんんっ?!?!?!?!』

手に持っていたタブレットは顔の側に落ち、オスの欲望とメスの嗚咽を撒き散らす。

どうやら、ちょうど射精のタイミングだったようだ。

「ほらっ、アキラくんのごこ、すごい濡れてるわ??」

「なっ……?!?!」

興奮しすぎていて気づかなかったが、ズボンの隙間から大量の液体が漏れ出している。もちろん股間部分はぐっしりと湿っていた。

生地が吸い取りきれなかった透明な愛液が、太ももを伝ってベッドを汚す。

「な……なに、これ……」

「アキラくん、さっき紅茶飲んだでしょ? それに薬を混ぜておいたの——性別反転薬っていう薬よ」

「せ、せいべつ、はんでん……?」

「簡単に言えば、男の子は女の子に?女の子は男の子になっちゃっ薬ってわけ?」

嬉しそうに語る京香を見て、下腹部がジクジクと疼いてくる。

心臓の鼓動に合わせて脈動するお腹。まるでお腹の奥に、もう一つ心臓ができたような感覚を感じる。

「それを半分だけ使ったの?量によって効果が変わるらしいわ?」  
「あ……?」

「ミントも北条くんも問題なく使ったっていうし、安全性はバツチりよ。」

「お、お腹あつつ……?」

反射的に腹部に手を添えれば、かなりの熱を溜め込んでいる事が分かる。

オスからメスへ変わる瞬間に発生する、淫らな熱。零れた熱がトロトロの愛液となり、股からとめどなく溢れていく。

「ほら、もうおまんこ出来てるわよ。」

「ひあつ???」

『すつかりメスの顔だな』

京香がズボンの上から股間に手を添えると、出来立ての未成熟おまんこがくちゆりと歓喜の音を上げた。

その刺激で口から搾り出されたメス声が、画面の中の喘ぎ声とリンクする。見れば、動画の中でも京香がチャラ男におまんこをほじくられていた最中だった。

『顔真っ赤にして、目えウルウルさせて……誘ってんのか、このド変態メスオナホがよ』

「う、うう……?」

青年の凜々しい声が、明の鼓膜を揺らす。

性別反転薬によって引き出されたマゾメスの本能が、お腹を——子宮を、更にキュンキュンと疼かせる。

「はくい?ヌギヌギしましょうね?」

「ちよつ!?!」

愛液でぐつしよりと濡れたズボンを、容赦なく剥ぎ取られる。

頼りないミニチンポは健在。しかし、その裏側からは止まることなく愛液が垂れ流されている。

今の明は、俗に言う『ふたなり』に変性していた。

オスとメスの性器をその身に宿す、雌雄同体。ある意味で、最も完成された生物の姿。

しかしそれは、オスとしてもメスとしても中途半端な欠陥品という側面も孕んでいる。

どちらに成れるかは、本人の素養次第だ。

「うんうん？ちゃんとおまんこ出来てるわね？」

だが、やはりというべきか。

「ぶつくり肉厚で、挿れたらとつても気持ちよさそうなおまんこだわ？」

明はメスの特徴が色濃く出てしまっていた。

「やあ……??？」

足を掴まれ、股を開かせられる。

頼りないミニチンポを持ち上げられ、その奥にあるおまんこをじつくりと観察される。

特大の恥ずかしさと情けなさが、明の背筋をゾクゾクと震わせた。

「でもその分、おちんちんは本物のオスに遠く及ばなくなっちゃったわね？これじゃあセックスできないかも？」

「そ、そんなあ……??？」

「んふふ？冗談よ？」

「あ……??？」

ちようど股間の上に跨がり、京香は自身のおまんこを割り開く。

興奮ですつかり熟れたその中身は、まるで食虫植物のようにウネウネと蠢いていた。

「アキラくんの童貞、私がしつかり貰ってあげるわ??？」

「きょうか、さん……??？」

快樂にとろけた視線が交差する。

それを合図に、京香はチンポの先端に狙いを定めて腰を下ろした。  
「~~~~~!!??？」

「んっはあああああ!!??？ふたなりメスおちんちん？私のナカに入っちゃったあ!!??？」

こうして、無事に少年の童貞は奪われた。

後は処女を奪ってくれる相手が現れるのを待つだけ。

「う、動く？わよっ？」

「っ!!??？」

しかし、それはまだまだ先になりそうであった。

今はただ、心のままに交わるのみである。

## 絶対に手が届かない画面の中でブチ犯されるクールビューティー年上彼女先輩

『おんっ??おんっ??おんっ??』

画面の中で、一人の女性が犯されている。

「あんっ?あんっ?きもちいつ?このおちんちん気持ちいいのおっ?」

ベッドの上で、一人の女性が犯している。

「きもち、いいのお、おお、おお!?!」

本能に任せた動物のような交尾。

愛に溺れた人間らしいセックス。

「ふうっ?ふうっ?」

どちらが幸せなのか比べる必要は無い。どちらの交わりも、確かな幸せを感じられる。

体と心、それぞれ満たされるものが違えど、そこには優劣など存在していないのだから。

「嬉しいっ?嬉しいっ?やっとアキラさんとセックスできたあっ?」

「きょうか、さんっ……!?!」

念願の、愛しい人とのセックス。

心と心がつながる感覚に、自然と身体も昂ぶっていく。

「ねえっ、覚えてるっ??私たちがっ?出会った時のおっ?」

「も、もちろん……うあっ?忘れたこと、無いですよ……?」

心をもっと深く繋げるため、出会った日のことを思い出す。

「一年前っ?僕の両親が離婚してっ?生活費を稼ぐために働きすぎて……?倒れちゃった僕を、助けてくれたのがっ?京香さんでしたっ?」

「ビックリしちゃったわよっ?荷物受け取ったらっ?あんっ?いきなり倒れちゃうんだものっ?」

近年でも珍しい程の、激しすぎる大雨の日だった。

ずぶ濡れのまま、玄関先で倒れ込んでしまった明を介抱したのが、



対する京香もやられてばかりでは無い。明の上着を捲りあげ、ぷつくりと膨らんだ乳首を露出させた。

元が男のものとは思えない程、立派に勃起したメス乳首。おっぱいの膨らみは無いに等しかったが、乳首だけは立派なメスへ変性していた。

「これでもっ?くらいなしやいつ?」

「っ——ひぎいいいいいいいいいつ?」

両手でぷっくり乳首をつまみ、思ひつきり捻り上げる。

男の乳首であれば、決して絶えられないほどの痛み——しかしマゾメスに成りかかっている明には、その痛みこそが極上の快樂に感じられた。

「だめっ?でるっ?でちゃううううっ?」

「出しなさいっ?私のナカにいつ?」

ぴゆるるるっ?ぴゅーっ?ぴゅーっ?ぷびゅっ?

当然、そんな快樂を感じて我慢できる筈もなく。

明のふたなりミニチンポは情けなく痙攣し、先端からうつつすい精液を放出した。

乳首を引つ張られて、自分の意志と関係なく暴発させられた、オス失格のマゾ射精。

「はあっ?はあっ?はあっ?」

男ならば恥ずかしくて死ぬレベルだというのに、明はその射精に途方もない満足感を感じていた。

マゾメスの本能が、満たされる気がした。

「あつたかい……?アキラくんの精液、あつたかあい……?」

「あ……?」

お腹の中にじんわりと広がっていく温かさ。それを慈しむように、京香はゆつくりとお腹を撫でる。

射精できた。

愛しい人の中に、自分の種を残せた。そう実感すると、オスの本能が満たされる気がした。

『んぎやおおおおおおおおおおおお?』

!?!?!?!!!!







しかし、明の中で渦巻いているのは怒りの感情などでは無かった。

「……………」

「ん？」

「……………」

「聴こえないわアキラちゃん？もつと大きな声で？」

目尻に涙を浮かべ、顔を真っ赤に染め、完全にメスの顔となって明は言葉を紡ぐ。

「ずるい……………ですつ……………？僕も——わたしも、おまんこどちゅどちゅされたいですつ……………」

メス堕ちを望むその言葉を聞いて、京香はニヤリと笑った。完全に墜ちたと確信したから。

「じゃあ、一緒に抱き潰されにいきましょう？」

ニコリと笑って、京香はふたなり男の娘オナホールの手を掴む。

ここにまた一人、新たなオナホが誕生した。

オスとメスのいいとこどりをした、ハイブリッドオナホの誕生だ。

出来たてホカホカおまんこを引っさげて寝取り男に犯されに来るハイブリッドふたなりマゾ男の娘オナホール彼氏ちゃん

「というわけで、犯されに来たわ？」

「何が『というわけ』なのか一切わからないんですが」

とある日の穏やかな午後に、突然の来客があった。

先輩は研究室に泊まり込み中なので、必然的に一人で対応することになった訳だが——玄関の扉を開いた瞬間、思わず数秒固まってしまった。

ビックリしたわマジで。なんでウチ知ってるんですかね。

「ほら？この子が私の彼氏、アキラちゃんよ？とつても可愛いでしょう？」

「は、はじめまして……？」

来客の正体は名取先輩。それも、隣に見知らぬ女の子を連れてくる。かなりの美少女だった。

「ど、どうも……はじめまして」

挨拶をする傍ら、己の抱いた感覚と、名取先輩の言葉との相違に違和感を覚える。

彼氏と紹介している割に、着ている衣服はスカートだ。顔立ちも丸く、線も細くて女性っぽい。

(これが噂に聴く『男の娘』ってやつなのか……?)

だが、見た感じ100%女性にしか見えない。十人が見たら、十人も可愛い女の子だと答えるだろう。それほど美少女。

匂いも女性特有の甘い香りで……いや、僅かに精液の匂いがするな。うっすいけど。

「まあ、とりあえず入ってください。お茶でも淹れますよ」

「お邪魔します？」

「お、お邪魔します……？」

身体をずらし、二人を部屋へ招き入れる。

その際、横を通った二人の身体から、むわりと濃いメスの匂いが漂ってきた。

(ヤバ……)

不意にメス臭を嗅いでしまった事で、ズボンの中でチンポが勃起し始めてきた。

今日は先輩が居なくて、丸一日セックスしてないのも原因かもしれない。

「ふうく……落ち着け、落ち着くんのだ」

犯されに来た、とか言ってたけど真に受けてはいけない。既にNTR動画は撮り終えて、普通の先輩と後輩の関係に戻ったばかりなのだから。

それなのに彼氏連れてやって来るとか、マジで意味が分からんのだが。どういう事だよ、ホントに。

「緑茶でいい、です、かね……」

「ふうく？暑かったわあ？」

「ふつ？ふつ？」

リビングに入った瞬間、二人は揃って着ていた服を脱ぎ始めた。

上着を脱ぎ、スカートを脱ぎ、あつという間に生まれたままの姿になる。

「……何してるんですか？」

「あら？言ったでしょ、犯されに来たって?！」

形の整った美乳に、引き締まったウエスト。アリス先生や二宮には劣るが、十分に安産型の尻。そして極めつけは、めちやくちや陰毛が生えまくったおまんここと、そこから顔を覗かせるデカクリ。

それらを惜しげもなく見せつけながら、名取先輩は呑気に伸びをしていた。

「よく恥ずかしげもなく全裸になれますね」

「そういうふうには調教したのは北条くんでしょ？」

「そうでした」

その身体を貪って、ムツツリスケベからオープンスケベにジョブチェンジさせたのは、他ならぬ僕だった。



目尻から涙を流し、全身から汗を噴き出し、完全なるメスの顔を見せつけている。

「わあ、凄い？私の中に出した精液より、量も濃さも段違いだわ??」

「……君、本当に元の性別って男の子?」

「ひぐつ……!???」

見られるだけで特濃本気汁まき散らして本気イキするとか、どんだけマゾなんだよ。初めて見たぞ、このレベルのマゾメスはよ。

「ふっ、んぐつ??」

一応、絶頂する度にチンポの先端から射精している様子ではある。だが、おまんこのメス臭に掻き消される程度には薄い。本当に元男なのか、この子。

「あらあら?もう我慢できなくて、腰がへこへこ動いちやつてるわね??」

「はっ?はっ?はっ?」

「うわエツロ」

思わず本能が漏れ出てしまうくらいにはエロい。

おまんこを割り広げて腰をへこへこ揺らし、チンポを誘惑する姿はまさしく天性のメス。

本当は女の子だったんじゃないのか、このふたなりド変態エロメスオナホールがよ。

「んふふ?この初心者メスに見せてあげて、北条くん?あなたの立派なおちんぼ様を?」

「いいんですか?」

「もつちろん?ね、アキラちゃん??」

「う、うん……??」

名取先輩の言葉に、アキラちゃんも控えめに頷く。

「……分かりました」

そこまで言われちゃ仕方ない。

お望みのもの、見せてやるとするか。

「わっ?わっ?わわっ?お、おつきい……!???」

ジーンズとトランクスを脱ぎ捨て、下半身を曝け出す。今さら羞恥

心もクソもない。

度重なるメス臭によつて、とつくの昔に天を突くほどバキバキに勃起したチンポ。それが今、初心なメスの前に姿を現す。

「こ、こんなおっきいの見たこと無い……???は、入るのかなあ……???」

「入れるんだよ、この真性マゾメスが」

「ぴっ??」

入るか、入らないかではない——挿入<sup>い</sup>れるのだ。

前も言った気がするが、入ると思ひ込めば入る。何事も、やってみれば意外と何とかなるものだ。

今までのオナホ達がそうだったように、アへ顔晒してチンポを受け入れる。

「いいんですね?」

彼女の方に視線を向ける。

ブツ壊しちやつて、いいんですね?

「ええ、もちろん?男の子でも、女の子でも、快楽に堕ちたマゾメスでも?私にとつては変わらない?どれも世界で一番愛してる——アキラちゃんだもの??」

「きよ、きょうかさ——あっ??」

美しい愛情だな。

素晴らしい恋人関係だ。

だが無意味だ。

「中途半端な姿しやがって……完璧にメス堕ちさせてやるから、覚悟しろよ」

「ひいっ??」

男とは到底思えない、メスそのものになった軽い身体を持ち上げる。

そのままソファアに運んでから寝かせると、両足を掴んでまんぐり返しの体勢に固定した。

「イイ眺めだな」

「っ……!??」

この体勢なら、ミニチンポもトロトロおまんこもよく見える。













ような気がする。

「初めてですし、今日はこのくらいにしときますか」

「おごっつ??」

お腹の奥からずりゆん?とチンポを引き抜くと、アキラちゃんの全身がビクンツと深く痙攣した。

ぽっかりとチンポの形に整形された肉穴から、ドボドボと白濁液が垂れ流される。

この部屋の床がフローリングで良かった。

「あひ……??いひひひっ……??」

だらしなく頬を緩め、気絶しながら笑うアキラちゃん。これが先輩だったら、子宮口を突き上げて叩き起こしていたところだ。

しかし、この子はこれが初めてのセックス。あんまり激しくして壊れちゃったらヤバイからな。

「うわあ……?あんなに射精したのに、まだ大きいままなのね……?」

「そりゃあ、先輩に鍛えられていますから」

今日は丸一日セックスしてなかったから、まだまだイけるぞ。

「名取先輩もヤリますか?」

「いいえ、今日は遠慮しておくわ」

優しく微笑んだまま、名取先輩は両手を差し出してくる。

その意図を察して、僕は抱えていたアキラちゃんを受け渡した。

「ありがとう、北条くん」

「んう……?」

すっぽりと腕の中に納まったアキラちゃんは、そのまま嬉しそうに顔を綻ばせた。

女子大学生でも一人で抱え上げられるとか、軽すぎんだろ。本当に元は男だったのかよ、この初心者ふたなりメスオナホがよ。

「今日はどうしても気持ちよかったわ?パートナーを取られるかもしれないって感覚、やみつきになっちゃいそう?」

「名取先輩もNTRにハマったんですね」

彼氏も彼女も、揃ってNTR好きとは……業の深いカップルだこ  
と。

「んふふう？また溜まったらお願いするかも？今度は二人一緒にね？」

「……まあ、別に構いませんけど」

こつちとしても、美少女を合法的にハメ潰せるのは非常に役得なので構わない。

ただまあ、世間一般から見たらかなり歪んでるよなあ、この関係。

「いや、今更か」

既に複数人の女性と関係を持ってしまっている時点で、モラルだ何だと言う権利は残っていない。

だったら、正々堂々この道を突き進むだけだ。僕なりのやり方で、オナホ共を幸せにしてあげよう。

「よいしよつと……これでよし。それじゃあまたね、北条くん」

「えへえ……？」

「はい、また研究室で」

脱ぎ捨てられた服を着て、アキラちゃんにも服を着せ、そのまま部屋を出ていく名取先輩。

アキラちゃんつてば、お姫様だつこなんてされちやつてるし。これじゃどつちが彼氏か分かんないな。

「ふう」

でも、これが二人なりの幸せなのだろう。めっちゃいい笑顔してたし。

「さて、先輩が帰ってくる前に掃除しないとな」

この後めちやくちや掃除した。

でも先輩にはあつさりバレた。

何故だ。

後輩くんを遊園地デートに誘う金髪碧眼Kカップ爆乳オナホ先輩

突然ですが僕は今、先輩と一緒に遊園地に来ています——どうしてこうなった。

「いやあジェットコースターには初めて乗ったが、なかなか良いものだね後輩くん！」

「そ、そうですよね……」

ハイテンションに飛び跳ねながら、まるで子供のようにはしゃぐ先輩。

その度にKカップ爆乳がぶるんぶるん震えて、ものすごく目に毒なんですけど。

「次はアレだ！ あのフリーフォールってやつに乗ろう！」

「ホント絶叫系好きですね、先輩……」

こっちとしては、もうお腹いっぱいなんだけど。

これでもう五個目だぞ。

「これはあれだろう？ ゆっくり上に昇って、一気に下に落ちてくるやつー」

「最近は途中で止まって、急に上昇するタイプもあるらしいですけど」

「そうなのかい!？」

「あと、上がるのと下がるのを組み合わせてスリルを演出するタイプもあるとか」

「ランダムに上下に!? まるでセックスみたいだね!!」

おい、あんまり大声でそういう事を言うな。

すれ違う人がビツクリしてこっち見たり、顔赤らめたりしてるだろうが。

「はあ……」

まったく、どうしてこんな事に……先輩との遊園地デートは素直にめちやくちや嬉しいんだけど、こっちは絶叫マシンばかり乗っていると気が滅入る。

僕自身、絶叫系はそんなに得意じゃないし——むしろ苦手だし。とはいえ、苦手を理由に身を引けるような、素直な性格してない訳で。「ほらほら、さっさと並ぶぞ後輩くん！」

いつもの淫らかな笑顔とは違う、普通の女の子みたいに天真爛漫な笑顔。

花が咲いたようなそれに、自然と頬が緩む。

「ん、何笑ってるんだい？」

「いえ……フリーフォールなんて乗ったら、先輩のクソデカおっぱいが大変な事になりそうだなって思っただけ」

「失礼だなあ、君は！」

ほっぺたを膨らませて、ポカポカとお腹あたりを叩いてくる先輩。いや可愛すぎるだろ。

「まったく！ 後輩くんは先輩への敬意が足りてないと思うぞ！」

「いやいや、ちゃんと尊敬してますよ」

「本当かい？」

「もちろん」

まあ、本当は尊敬よりも、愛情とか性欲が勝ってるんだけど。

「先輩」

ふわふわの金髪も、くりくりの目も、小さいけどバカデカいおっぱいも、柔らかくてピツタリフィットするおまんこも、生意気だけど純粹で好奇心旺盛な性格も。

そのすべてが大好きだ。ミント先輩という存在すべてを、心の底から愛している。

「大好きで——」

「あー！ やつとわたし達の番が来たよ！ 早く乗ろう後輩くん！」

いや聞けよ——なんて心の中でツツコンでも、現状は何も変わらなかった。

あれよあれよという間に、フリーフォールの座席へ座らされ、安全バーを下げられる。

「これでよし！ さあ、セツ——フリーフォール楽しみだねえ！」

「今、セツクスって言いかけましたよね」



こんな時まで頭ピンク色かよ、このぷにロリKカップ爆乳オナホがよお。

「うひょ〜！ たかいたか〜い！ さっきのジェットコースターよりも、随分と高いぞ後輩くん！」

「そりや高さが売りのアトラクションですからね……」

ゲンナリする僕とは対象的に、先輩は楽しそうに笑っている。

もう絶叫系はこれで最後にしよう。そう心に決めた瞬間、座っていた座席がガクンと落っこちた。

「きゃ〜〜〜！！」

「おうふ……」

思いつきりはしやく先輩を横目に、どうしてこうなったのかと疑問が巡る。

まるで死に際の走馬灯のように、昨日の記憶が鮮明に思い起こされた。



「遊園地に行こう、後輩くん！」

「……これまた唐突ですね、先輩」

先輩が研究室から帰ってきた日の夜。

食卓にて、いきなり旅行の話がお出しされた。

「遊園地って、アレですか？」

「そうだともし！」

窓の外からかすかに見える、超巨大遊園地。マスコットの人型二足歩行ハムスターが特に有名だと聞いている。

確か、テレビでエイプリルパレードが始まったとか言ってたな。春には少し、早い気もするけど。

「せっかく歩いて行ける距離にあるんだから、行かなきゃ損だろう！」

「そりやそうかもですけど」

いったいどういう風の吹き回しだろう。今まで研究と性欲ばかりにかまけて、レジャー施設なんて見向きもしなかったのに。

これは何か、裏がありそうな予感がする。

「誰かから、何か言われました?」

「な、ななななにを言ってるんだい? 誰かって誰かな? 研究室でも何も言われてなんてないが?」

なるほど、誰かからデートにでも行ってこいって言われたんだな。

「良いですよ。僕も気分転換したいと思ってたので」

「本当かい!」

目をキラキラさせながら、テーブルから身を乗り出す先輩。

食卓の上に乗ったKカップ爆乳の下半分が、むにゅん、と歪んで柔らかそうに形を変えている。うん、シンプルにエロい。

「よかったよかった、これでチケットが無駄にならずに済むね!」

「買ったんですか、わざわざ」

「いや、これは京香から、この間のお礼と言って渡されたもので——ハッ!」

墓穴掘りやがったよ、この金髪ぶにロリオナホがよ。

「なるほど、名取先輩から焚きつけられたと」

「ち、違うぞ後輩くん! 決して彼氏とラブラブの京香にアドバイスを貰いに行ったら遊園地のチケットを渡されたなんてことは断じて——ハッ!」

またまた墓穴掘りやがったよ。しかも凄い早口で。

「へえ、やっぱり名取先輩の入れ知恵でしたか」

「むぐ……」

名取先輩、グッジョブ。今度お礼にお菓子でも買っていかねば。

「……いや、ね……この前、子作り本気交尾をしたらどう?」

「めっちゃくちや気持ちよかったですよね」

「それでわたしだけ受精しなかったから、どうしたものかと相談したら……」

「遊園地でも行ってこいと?」

「……そうなんだよ」

この前の乱交パーティーで妊娠できなかったこと、まだ気にしてるのか。

意外と妊活に関してはセンチメンタルなんだな、先輩って。

「凜花ちゃんは『なんだかお腹があつたかい気がするツス』とか言うし、陽毬ちゃんは『酸っぱいものが欲しくなるんですよね〜』とか言うし！ 二人とも幸せそうな顔を隠そうともしないんだよ！ 酷くないかい!?!」

ものの見事にマウント取られてやがる。

「でもビックリしましたよね。二宮と一之瀬が、二人揃って妊娠してたんですから」

数日前、二宮にトイレへ連れ込まれたかと思えば、妊娠検査キットを手渡されて『今からおしっこするツスから、それで検査して欲しいツス』って言われた時はめちやくちや興奮したからな。

そして、結果は見事に陽性だった。

一之瀬も同様に陽性だったらしい。あつちは流石に、排尿妊娠検査プレイとかいう変態プレイはさせてくれなかったけど。

「でも、それでなんで遊園地に行くことになるんですか？ 行くなら産婦人科とかでは？」

「その点は心配ないよ。わたしの身体は健康体そのもので、卵子もたっぷり残っているからね」

ドヤ顔のまま、ポンポンと自分のイカ腹を叩く先輩。相変わらず、裸白衣の隙間から覗く肌色が眩しい。

まったく、なんでそんな何気ない動作までエロいんですかね——ブチ犯すぞ、このぶにロリオナホがよ。

「それに、凜花ちゃんたちの妊娠で後輩くんの精子もたくさん作られている事が分かったからね。男女ともに健康体ということは、問題の要因はそれ以外の場所にあると考えられるのが妥当だと——ひゃわっ!?!」

研究者モードになりかけていた先輩のKカップ爆乳を鷲掴みにし、現実を引き戻す。

「こ、後輩くん！ 今は真面目な話を——ひぎゅっ!?!」

「ごちやごちやうるさいですね……要は、先輩を妊娠させれば良いんでしょっ?」

「こ、後輩くん……?」

今ここで、完膚なきまでにブチ犯して妊娠させる。そのたっぷり卵が詰まった腹の中を、真っ白な精子で満たしてやる。

「先輩の卵は、全部僕のもんですからね」

「そ、そうだね……? お手柔らかに頼むよ、後輩くん……??」

それは無理な相談だな。

「ぎゃっ?」

先輩を抱き上げ、ソファに寝かせる。

覚悟しろ、この金髪碧眼ぷにロリマゾメスKカップ爆乳オナホがよ。

## 普通に遊園地を楽しむオナホ先輩&鬼畜後輩くん

で、まあ……妊娠させるつもりでしこたまセックスしても、やっぱり妊娠しなかった訳で。

「はあ」

何かの呪いなのか、これは。不妊の呪いでもかかっているのか。そうとしか考えられないんだが。

「次はどのアトラクションに乗ろうか!」

こっちの気も知らないで、先輩は嬉しそうに手を引いて遊園地内を歩いていく。

個人的な意見として、そろそろ休憩したいのが本音だ。

「……先輩、ちよつと喉が渴いたので、カフェに寄っても良いですか」「ん、ああいいともー!」

流石にこのコンディションのまま次のアトラクションに行くのは自殺行為ということ、少しだけカフェで休むことにした。

このカフェは、カフェというより売店に近い形式らしい。カウンターで飲み物や食べ物を受け取り、それを持って直接席に向かう。

「コーラを一つ」

「りんごジュース一つ!」

売店のお姉さんに注文をして、少し待つ。数秒後、あつという間にコーラとりんごジュースが手渡された。

「ありがとうございます」

「ありがとうね!」

素早く無駄のない対応に、流石はプロだと感嘆させられる——つていうか、先輩はここでもりんごジュースなんだな。

子供っぽいというか、ブレないというか、なんというか。まあ、そういうところが可愛いんだが。

「ぐくぐく……ぷはあつ! 美味しいねえ後輩くん!」

「それは良かったです」

「いつも飲んでる精液とは喉越しが段違いだ!」

「そういうこと言わないでもらえます?」

あつという間にコップ内の中身をすべて飲み干し、ご満悦な笑顔で浮かべる先輩。

可愛すぎるだろ……天使か、天使なのかオイ。発言は全然天使じゃないけど。

「じー」

そんで今度は僕が飲んでるコーラに狙いを定めてきてるんだが。

先輩、炭酸苦手でしょうが。

「……飲みます？ 飲みかけですけど」

「わーい！ 飲む飲む〜！」

くっそ可愛い。

なんだこの生き物は。女神か？

「んっぐ、んっぐ……ぷはあく〜！」

「満足しました？」

「もちろん！ まんぞくまんぞく——げっぷ」

あ、ゲツプした。

そんな姿も可愛いな、先輩。

「し、失礼。淑女として、はしたない姿を見せてしまった」

「何を今さら。ベッドの上では毎回、潰れたカエルみたいに無様な姿を晒してるでしょう」

「それとコレとは話が別なのだよ！」

そういうものだろうか。僕にとっては、どっちも可愛い先輩に変わらないのだが。

「さてと……休憩しましたし、そろそろ行きますか」

「あつ、待つてくれ先輩くん」

立ち上がろうとしたら、先輩から待ったが掛かる。何で引き止めるのかと疑問に思っ先輩の方を見ると、なんとそこには。

「にひっ？」

衣服をズラして、乳首をチラ見せしてくる先輩の姿があった。

「なっ……！」

一瞬、思考がピンク色に染まる。

しかし、すぐさま切り替えて、周囲に人の目が無いかを確認した。

「何してんですか先輩っ……!」

「おっぱいチャレンジというやつさっ…こういうの好きだろう?」

「大好きですけど!」

慌てて先輩の衣服を元に戻し、再び周囲を確認する。幸いなことに、ちょうど誰も見ていなかったようだ。

今日の先輩のコーデイネイトは、白のタートルネックに青色のカーディガン。下は同じく青色のタイトスカートとなっている。

(タートルネックなのに、なんで胸辺りに留めボタンが付いてるのかと思ったら……そういう事だったのか)

この先輩、内緒で衣服を改造したな、まったくもう。

いつもは面倒くさがりなのに、エロの事になったら急に積極的になりやがって。無駄にセンス良いのが腹立つな、コノヤロウ。

「おや、お気に召さなかったかな?」

「はあ……いや、先輩の乳首は大好きですけど、それとこれとは話が別っていうか」

単純な情欲よりも『先輩の身体は僕のものだ、決して誰にも渡さない』みたいな、燃えるような独占欲のほうが強くなっちゃうんだよな。

まあ、万が一先輩が他の男に寝取られるようなことがあっても、速攻で寝取り返してやるけど。誰が相手だろうと、必ず。

「とにかく、こういうハレンチな事は禁止です。今日は純粋に楽しみましょう」

「え〜」

「え〜、じゃありません」

まったく、この色ボケ先輩は。こっちがどれだけ襲いたい衝動を我慢してるのか、知らないのか。

今だって勃起を抑えるので必死なんだぞ。

「エッチな事なんてしなくたって、僕は先輩と普通にデートできるだけで楽しいですよ」

「先輩くん……!」

先輩の手をとって、席を立つ。

さあ、次はどのアトラクションに行こうか。



「うーわ、あの二人めっちゃイイふいんきツスよ」

「『ふいんき』じゃなくて雰囲気ですよ」

「うう……北条くん楽しそうですよ……」

「イイ感じに心の距離、縮まってるわね」

楽しそうに遊園地を巡る二人を、コソコソと物陰から監視する人影があつた。

二宮凜花、一之瀬陽毬、九条アリス、名取京香の研究室メンバー達である。

全員サングラスに帽子という、ドラマでしか見たことのないような、コテコテの変装を披露している。

「いやー、しかし今回の作戦は大成功ツスね」

「ミント先輩、あの日から目に見えて元気なかつたですからね」

共にあの日を経験した二人は、愛おしそうにお腹を撫でつつ、深く頷く。

見た目はあまり変わっていないが、ほんの少しだけお腹が膨らんでいるのが見て取れた。

「うう……人が多い……帰りたいたい……」

「もう少しだけ辛抱してくださいッス。というか、付いてきたいって言ったのは先生ツスよ？」

「そ、そうですね……」

「観念してください、アリス先生」

「陽毬ちゃん、あなたの本当の姿はみんな知ってるから、無理して演技しなくても良いのよ？」

「えっ」

ワイワイ、ガヤガヤ。

周囲の喧騒に紛れているが——否、あえて周囲と同じように振る舞っているのだろう。ラブラブな二人に尾行を気取られないために。「い、いつ知ったの？」



「ミントが隠し撮りしてた動画で？」

「ち、ちなみに、いつの映像？」

「ラブホで初めて、北条くんを抱き潰された時のやつよ？」

「忘れてくれない？」

「無理ね？あの時の陽毬ちゃん、可愛かったわ〜？」

「うげえ……:よりによって、一番知られたくない奴に知られちゃった……」

辟易するように頬杖をつく陽毬に対し、いつの間にか背後に回って抱きしめている京香。

彼氏のふたなり化以降、黒髪で小さい女の子を見ると、ついついイジメてしまうようになった京香なのであった。

「うう……:なんでみんな、こんなに元気なんですか……:溶けるう……」

「いつにも増してグロッキーッスね〜」  
「水素、ヘリウム、リチウム、ベリリウム、ホウ素、炭素、窒素、酸素、フッ素、ネオン——」

「あ、耐えきれなくて現実逃避モードになったッス」

目の前に広がる陽のオーラに耐えきれなくなったのか、アリスはブツブツと元素名を呟くだけの存在になってしまった。

濃い陰のオーラが、アリスの周囲を漂っている。

「それにしても、今さら遊園地デートなんてする必要あるんスか？」

先輩たち、傍から見ても相当ラブラブだと思っんスけど」

「それは確かに」

凜花の疑問に、陽毬が肯定を返す。

確かに、これ以上ラブラブ度は上がらなそうなのに、なぜ今さら普通の恋人みたいなデートをするのか。

その疑問には、昔から二人をよく知る京香が答えてくれた。

「それは簡単よ。あの二人、付き合ってから一回もデートしたこと無いんだもの」

「へ?」

「は?」

京香の言葉を聞いて、凜花と陽毬が顔をしかめる。

そんなカップルが居るのか、と。

「つまり今回が初デートってわけね」

「はく……前から常識外れだとは思ってたツスけど、まさかそこまでとは……」

「色ボケ北条が甲斐性無しなのがダメなのよ。後でシメましょう」

「いいツスね、お供するツス」

ノリノリで指を鳴らす、凜花と陽毬。本人の知らないところで運命が決まってしまった、哀れな北条なのであった。

「まあとにかく、今は二人の行く末を観察しましょ。きっと面白いわよ」

「トリウム、プロトアクチニウム、ウラン、ネプツニウム、プルトニウム、アメリカシウム——」

「二人だけまったく面白くなさそうにしてるんスけど、大丈夫ツスカ？」

「あ、移動するみたいね。私たちも行きましょ」

「話聞けツス」

二人が移動したのを見届け、四人はこっそりと後をつける。

まだまだ、淫乱カップルの初デートは始まったばかりだ。

実は尾行に気づいていた察しが良い後輩くん

あの後、ゴムボートで水に着水する派手な絶叫系に乗った。

結果、先輩はさらに上機嫌になった。今日は機嫌が青天井だな、この人。

「楽しかったね、後輩くん！」

「そ、そうですね……めっちゃ冷てえ……」

前の席に座ったせいで、水をモロに被ってしまったってヤバイ。めっちゃ冷たい。

しかし不幸中の幸いというべきか、今日は日差しも強めで暖かい日だ。風邪は引かなくて済みそうではよかった。

「先輩、次の行き先は僕が決めていいですか？」

「もちろん良いとも！ いっぱい刺激的な体験ができて、非常に満足したからね！」

それはよかった。絶叫系は苦手だったけど、付き合った甲斐があったな。

「それで、後輩くんはどこをご所望だい？ メリーゴーランドでも、ティーカップでも、何でも付き合うよ！」

「ありがとうございます、じゃあ——」

入口で受け取ったパンフレットを開き、次に乗るアトラクションを二人で決める。

こういう何気ない時間も、先輩と一緒にだと凄く楽しく感じてしまうな。

(……尾行されてなければ、もっと楽しいんだろうけどな)

バレないように、顔は向けずに視線だけで尾行者の姿を確認する。

すると近くのカフェのテーブルに、お粗末な変装をした四人が座っているのが見えた。

結構前から気づいていたが、何してるんだらうな、あの四人は。

「先輩は気づいてなさそうだけど……」

「んお？ 何か言ったかい、後輩くん？」

「いえ、何も」

とりあえず放置しておくか。今のところ実害は無さそうだし、関わりと逆に面倒なことになりそうだ。

それよりも、次のアトラクションを早く決めなければ。先輩が退屈してしまう。

「ここ、行ってみたいです」

「ホラー系か！ いいね！」

地図で指さしたのは、専用の乗り物に乗って幽霊の出るホラースポットを進んでいくアトラクションだ。

説明文を見る限り、ゆつくり進んでいくタイプらしいので、丁度いいだろう。

「じゃあ行こうか、後輩くん！」

花が咲いたような笑顔のまま、右手を差し出す先輩。

僕は、その手を掴んで。

「はー！」

自分でも、らしくないような——無邪気な笑みを浮かべた。



「ひゃわ〜！ なにココ、人がいっぱいだよ〜！」

ジェットコースターの支柱に飛び乗り、遊園地を一望する存在がいた。

黄色い外套を身に纏う、小さな人影。しかし肝心の黄色い外套はロボロに古びており、その端からは柔らかそうな太ももが覗いていた。

男が見れば一目で欲情間違いなしの、エッチすぎる太ももだった。

「う〜ん、ボクがちよつと目を離れた隙に、こんなに繁殖してるだなんて……人間ってエッチだなあ」

フードによって目元は見えない。しかし、その艶やかな唇から紡がれるソプラノボイスは、聴く者すべてを虜にする。

危険な魅力、とでも言うべきだろうか。関わったら破滅が確定するような、そんな予感を全身から放っていた。

「見つけたよ、ニャル」

ピンク色の瞳が、キラリと輝く。獲物を見つけた狩人のように、ゆっくり口角が上がっていった。

「お楽しみ中みたいだし、ちよ〜つとイタズラしちやおっかなあ？」

建物内のアトラクションに入っていく、一組の男女。その姿を見つけ、黄衣の女王は建物を指差す。

それと同時に、おぞましい気配が建物内を包んだ。今の一瞬だけで、彼女がアトラクションに何かを仕掛けたのは明白であった。

「名付けて、綱渡りドキドキ☆急接近大作戦〜！」

どうやら、ネーミングセンスは皆無らしい。



「……チツ、あの黄色……」

「どうしました、先輩？」

「ああいや、何でもないよ」

アトラクションの世界観説明も終わり、専用の乗り物に乗って出発した直後。先輩がイラついたように、何かを呟いた。黄色って何のことだろう。

「結構雰囲気ありますね」

「ああ、そうだね……」

真っ暗な建物の奥の方から、ひんやりとした空気が流れてくる。

まるで、今にも本物のお化けが飛び出してきそうな雰囲気だ。

「……シャン、聞こえる？ 狩人も——そう。そっちはお願いね」

「先輩？」

「なんだい、後輩くん？」

なんか真剣な顔しながらブツブツ言っていたから、気になって声を掛けたのだが。

なのに声をかけた瞬間、いつもの先輩に戻ってしまった。どうしたんだろうか。

「さてさて、鬼が出るか蛇が出るか……」

「なに身構えてるんですか、先輩。もしかしてホラー系は苦手でした？」

「別にそういう訳じゃないが……むしろ、わたしは本来脅かす側というか、なんというか……」

歯切れの悪い返事だ。いつもの先輩らしくないな。

「先輩」

「わひゃっ!?!」

隣に座る先輩の手を、両手で優しく握りしめる。

すべすべで、柔らかくて、小さくて——なんというか、ずっと握っていたい感触をしていた。

「こっ、後輩くん!?!」

「大丈夫ですよ、先輩」

先輩の体温が、先輩の鼓動が、握っている手を通して伝わってくる。

「先輩のことは、僕が絶対に守りますから」

「……っ!」

向き合いながら、先輩に自分の思いを告げる。ちよつとクサイかもだけど、たまにはこういうのも良いだろう。紛れもない、本心からの言葉だ。

「まったく、後輩くんは……そんなこと言われたら、ますます好きになっちゃうだろう」

「ダメなんですか?」

「ダメじゃないが……ああくそっ、心が繋がる感覚とはコレの事か……!」

真っ赤になった顔を逸らしながら、またしてもブツブツと呟く先輩。

やっぱり、このアトラクションに乗ってから、なんか様子がおかしいぞ。

「先輩、どこか具合悪いんで——」

と、口を開いたその瞬間——乗り物が暗闇を抜けて、最初のホラーゾーンに突入した。

「3p!?!」

。

「E<E\$、C;ZΘ全<!?」

「Γ(・X<)/ー47!一々Γ」

そこは、外国の墓場だった。

映画で見るとな、平たい墓石が建てられた、中世の墓場。

そこで異形の存在——ゾンビやグール——たちが、楽しそうにダンスを踊っている。

「……アイツ、マジ……ホントマジ……」

「先輩?」

なんか俯いてプルプル震えてる。

本格的に心配になってきたんだが。

「げっほげっほ……うわぁ、最近のアトラクションって臭いまで再現してるんですね」

「……認識阻害かけといて良かったよ……」

肉が腐ったような臭いと、魚が腐ったような臭いが合わさって、なんとも言えない『吐き気を催す臭い』を醸し出している。

これは日本に住んでたら中々嗅げない臭いだぞ。最近の遊園地って凄いなあ。

「……まあ、後輩くんの身に直接的な危害が及ばなければ、別にいいか……」

そうして、乗り物は次のエリアに進んでいく。

「・E全\$} 0\*、ZX!」?

「・8<ρ4X6E)(%!」

「!;・C」?、、、——・」

そこは、黄金の蜂蜜が壁を覆っている空間だった。黒い蜂のような生き物が飛び回り、せっせと蜂蜜を集めては、透明な瓶の中に詰めていく。

ホラーと言うより、どつちかと言えば、おとぎ話に近い光景だった。「……自分の眷属まで駆り出すのか……」

今度の先輩は、なんか白目を剥いて呆れていた。

そして今回はさつきと違い、本物の蜂蜜みたいな香りが漂ってきている。





その後。

先輩はヤケ食いと呼んで、売店のハニーポップコーンを五袋ほど食べ尽くしたのだった。

いや食べ過ぎだろ。

## 結局家まで我慢できなくなってラブホに転がり込む ドスケベ先輩&後輩

「いや、今日は楽しかったねえ！」

「そうですね」

あれから日が落ちるまで、二人で色々なアトラクションを回り尽くした。

途中こそ不機嫌になっていた先輩だったが、アトラクションを巡ったり、一緒にパレードを見ている内に、徐々に機嫌も回復してくれた。今ではすっかり上機嫌に戻っている。可愛い生き物だな、まったく。

「先輩とこういう……普通のデートをするのって、初めてだったから……なんかすごい、充実してました」

「わたしもさ、後輩くん」

夜の帳が降りた街を、二人並んで歩いていく。なんだか、少女漫画の登場人物にでもなったみたいだ。

先輩と一緒に居て、丸一日エッチなことを我慢できたのなんて、今回が初めてじゃないか？

「出会ってから今まで、恋人らしいことなんて全然してこなかったからね」

「そもそも、厳密には付き合っただけですよね……僕たち」

「まあね。恋人だの、付き合うだの、結婚だの……そういった面倒くさい事は必要ないと思っていたんだ」

ピタリと、先輩の足が止まる。

「だけど、今日のデートで自覚したよ。わたしは後輩くんの事が好きだ、大好きだ」

「先輩……」

静まり返った住宅街に、先輩の可憐な声がよく響いた。

「だから、わたしと——結婚してほしい」

月明かりが先輩を照らし、その表情をあらわにする。

頬を赤く染め、目を潤ませ、真剣な顔でこちらを見つめている。

「……僕からも、言いたいことがあるんです」

そんな、今まで見たこと無い先輩の姿に、不覚にもドキッとさせられた。

だから、今度はこっちが先輩をときめかせる番だ。

「今日のデートで気づいたんです。知ってたつもりになってただけで、僕は先輩のことを何も知らなかったんだって」

「先輩くん……」

先輩がジエツトコースターを好きだなんて、今まで知らなかった。

先輩があんなふうは無邪気に笑えるなんて、今まで知らなかった。

知らなかっただけで——知ろうとしなかっただけで——先輩には知らない一面がいつぱいある。

「だから」

だから——

「結婚を前提にお付き合いしてください、先輩」

「っ……!」

跪いて、両手を差し出す。生憎ながら、今は指輪なんて洒落たものは持っていない。

だから、ひとまずお付き合いから始めさせてもらおう。色々順序が逆なのは、重々承知してるけども。

「……ふふっ」

「先輩?」

不意に、先輩が笑った。

何かおかしい箇所があっただろうか。

「散々セックスしておいて、いまさらお付き合いからなのかい?」

「む、矛盾してるのはわかってます……」

「ごもつともな意見だ。あれだけ淫らな関係を構築しておいて、いまさら清く正しくなんて、そんな虫のいい事が通らないのは分かってる。」

でも、先輩が好きな、この気持ちだけは——絶対に本物だから。

「まあ……これだけ歪な方が、わたし達らしいのかもね」

差し出した両手が、柔らかい両手に握られる。  
先輩が、僕の手を握ってくれていた。

「よろしくお願いするよ、後輩くん。もとい——」  
そのまま、顔同士が近づいて。

「彼氏くん？」

月明かりの下、二人の唇が優しく触れ合った。



「で、結局こうなるんですね……」

ピュアすぎる告白を終えた僕たちは、そのままの流れで近場のラブホにやって来ていた。

いや、おかしくない？ さっきまでなんかいい雰囲気だったよね？  
なのになんで、いきなりセックスする流れになってるわけ？

「ふふ？この方がわたし達らしいだろう??」

「そりゃまあ、そうですね」

甘酸っぱい青春とか、とっくに通り越してるからな。成熟しすぎて、甘く腐り落ちそうなくらいには。

「さあ、服を脱ぎたまえ？さっそくシャワーを浴びよう？」

「こういうのって、最初はベッドに座って雑談する流れなのでは？」

「察してくれたまえよ、後輩くん？コッチはもう限界なんだ?」

言うが早いのか、先輩はおもむろにタイトスカートの中に手を突っ込んだ。

そのまま勿体ぶるように白のショーツを脱ぎ去ると、中心を見せつけるように、これ見よがしにひっくり返して掲げてみせる。

「ほらっ、こんなに濡れているんだよ?」

ネバネバと糸を引く愛液と、それによって付けられた淫らな染み。  
白いからこそ、淫らな汁で汚れた部分がよく見える。

「……反則ですって」

「ふふ?」

そんなものを見せつけられては、こっちも我慢ができなくなる。

既にズボンの中では、準備万端になったチンポがドクドクと脈打っていた。

「観念して早く脱ぎたまえ？君に拒否権は無いのだよ？」

「そのセリフ、普通逆じゃないですか……？」

スルスルと慣れた手付きで服を脱いでいく先輩に続いて、こちらも手早く服を脱いでいく。

いつも全裸で過ごしてる人は、脱衣するのも早いらしい。

「うわ？いつもより勃起が激しくないかい??」

「それくらい興奮してるんですよ」

「スケベだね？」

「先輩こそ、足首まで愛液が垂れてますけど」

お互い全裸になり、向かい合った状態で性器を確認し合う。

確かに、いつもより固さも太さも増している気がする。そして、それに呼応するように、先輩もいつも以上に淫汁を垂れ流している。

「あはあ？さきっぽパンパンだねえ？」

「んっ」

うつとりしたような顔で、先輩が亀頭に触れる。しかし乾いた不快な刺激は無く、ヌルヌルとした心地の良い刺激が亀頭を襲った。

「ローションなんて持ってきましたっけ」

「ローション??そんなもの必要ないよ？」

見れば、先輩は自分の股間に手を当て、溢れ出る愛液を掬ってローション代わりに亀頭にまぶしていた。

いやエロ過ぎるだろ。何やってんの。

「こういうの好きだろう、後輩くん？」

「大好きですが」

前から思ってたが、ローション代わりになる愛液ってなんだよ。どんだけ汗気が多いんだよ。

ああもう、余計にチンポがイライラしてきやがった。

「わっ？すごいビクビクしてるね？もしかして、気持ちいい事を期待してるのかい??？」

「先輩のせいですよ」

先輩がそんなエロいことするのが悪い。僕は悪くない。

「ふふ？お風呂前に一発出しちやおうか？どうせ洗うんだし？」

「うあつ……い！」

ヌルヌルになった先輩の手が、チンポに沿って縦横無尽に動き回る。

亀頭を中心に、弱い部分を徹底的に擦り上げてくる。

「ちよっ、先輩っ……い！ 激しいですって……い！」

「ほらほら？出せっ？精液出したまえっ??」

手のひらで亀頭を撫で回し、指先でカリ首をなぞり、空いた方の手で竿をしごいてくる。

熟練したテクニクが、チンポに射精を強要してくる。震える鈴口から、少量のカウパーが漏れ出た。

「あと一押しか……ならば、これでどうかかな？」

チンポから手を離し、愛液まみれの両手を自身のお腹にあてがう。

そのままぬりぬりゆと動かせば、愛液でテカテカに光った、見事なぶにロリ腹が出来上がった。

「ほおくら？ふにふにのお腹に、いくっばい精液ぶっかけておくれ?」

エロい、エロ過ぎる。この先輩は、いったいどこまでエロくなれば気が済むのだろうか。

「ずくり？ずくり？」

チンポの先端が柔らかいお腹に擦り付けられる。時折り特に柔らかい部分に沈み込み、そしてハリのある部分に移動して弾かれる。

まさかのお腹ズリとか、誰も予想できねえわ。なんだよ、この未知の感覚。すっげえ気持ちいいんだけど。

「ふふ？気持ちよさそうだねえ??なら、おっぱいも追加してあげよう??」

お腹ズリの最中に先輩が上半身を屈ませれば、ちょうどおっぱいが竿の部分にのしかかる。

そのまま両手を左右に添えて、すさまじい体勢でパイズリまで始めてしまった。

「根こそぎ、絞り取ってあげるよっ??」

「っ……!!」

上から見ると、まるでチンポが上半身を貫いているかのよう。

亀頭はお腹に、竿はおっぱいにそれぞれ責められて、あつという間に精液が尿道を駆け上ってくる。

「ぐうつ……出るっ!」

「あつ??」

どぼぼぼっ!?どびゅぐぼぼっ!?どぶぶぶっ!?ぶぼぼぼおおっ

!???

「あはっ?!いっぱい出たあ??」

先っぽを先輩のお腹に押し付け、思いつきり射精する。精液が勢よく飛ばず、くぐもったような射精音が響き渡った。

射精している間も、パイズリで根こそぎ精液を搾り取ってくる強欲さ。流石は先輩、他のオナホとは一線を画すレベルの高さだ。

「うっわあ?ベツトベトだあ?」

「はあ、はあ……!」

屈めていた上半身を起こすと、先輩のお腹にべったりとゼリーみたいな精液が張り付いていた。

一日我慢しただけあって、かなり濃いのが出たな。

「おっとと……はぶっ?じゆるじゆる?もぐっ?もっぎゅ?」

「食べてる……」

比喻とかじゃなくて、マジで食べてるよ。そんな美味しいもんじゃないだろうに。

精液の主成分はアルカリ性だ。アルカリ性は人間の味覚において、苦味の部分を大きく刺激する。

「もきゅ?んくっ?ぷはあつ?」

まあ要するに、精液は苦いのだ。

「別に無理して飲まなくていいんですよ」

「無理なんてしてないさ?精液だって、後輩くんの一部だろう?だから彼女のわたしが、残さず飲み干してあげるのさ??」

「そうですか」

口の端から精液を溢し、とろけた笑みで先輩は笑う。

(ああもう！ 可愛すぎるだろ、この先輩！)

サラッと彼女とか言ってくるし、可愛さが留まるところを知らないな。

これは、さっさと犯してやらねば無作法というもの。

「……早くシャワー浴びますよ」

「にひっ？いいとも?？」

隣に並び立ち、後ろから手を回してデカ尻を揉み込む。

それに対抗するように、先輩はガチガチに勃起したチンポに手を添えた。

「たあ〜っぶり？洗ってあげようね?？」

同じ歩幅で、お風呂場へと歩いていく。

犯し尽くしてやるからな、この金髪碧眼ぶにロリKカップ爆乳オナホール彼女がよ。



身体を洗われただけでマジイキする敏感Kカップ爆乳マゾオナホール先輩の逆襲

「さあ？汚した分しつかり洗ってくれたまえ、後輩くん？」

「はいはい……」

蛇口を捻り、お湯を出す。そうして浴槽にお湯を貯めている間に、精液で汚れた身体を洗う。

実に効率的な時間の使い方だ。先輩の研究者らしい一面が垣間見える。

「自分で射精させた癖に、人に洗わせるんですね」

「好きだろう？わたしのカ・ラ・ダ??」

「大好きですが」

すべすべで、ぷにぷにで、どこを触っても指が沈み込む柔らかさ。思い出すだけで、チンポが勃起しすぎてエライことになる。

ぶつちやけ、ずっと洗ってほしい。先輩の身体を、隅々まで洗い尽くしたい。

「ふふ？だったら文句を言わずに洗いたまえ？」

「分かりましたよ……」

備え付けのボディークリームを手に乗せ、そのまま泡立てる。

十分に泡が立ったところで、まず精液で汚れているお腹に狙いを定めた。

「じゃあ、洗いますよ」

「ふふ？手の動きが変態みたいだよ、後輩くん？」

いや、だってしょうがないでしょ。こんな極上の女体を前にして、我慢しろって方が無理な話だ。

なので、手が勝手にワキワキして、変態チックな動きになってしまふのは、もう仕方のない事なのだ。

「まずはお腹から……」

「あんっ？」

Kカップ爆乳をかき分けて、モチモチのお腹に両手を当てる。

一番汚れた部分から洗うのは、当然の攻略法だ。

「我ながら濃いの出しましたね……」

「落ちそうかい？」

「まあ、慣れてるので」

今まで何度精液とか、本気汁とかの掃除してきたと思ってるんだ。こちとら、もうプロの領域に片足突っ込んでるんだぞ。プロがどこまでのレベルか知らんけど。

「あはっ？くふっ？くすぐりたいよ後輩くん？」

「我慢してください」

丹念に洗ってから、シャワーで温かいお湯をかけて流す。

すると、精子を保護する透明な液体・精漿が洗い流され、残った精子がお湯で固まる。

そこを丁寧に指で纏めてやれば、意外と簡単に落とせるものなのだ。

「わあ？精子の玉が出来てしまったね？さながら——」

「ポイツ」

「ああ、勿体ない……」

使い道もないので、そのまま排水口にポイする。

というか、なんで残念がってるんですかね、この人は。

「まあいいか？これからいっつぱい、子宮に注ぎ込まれるだろうからね？」

「それはまあ、そうですが」

確かに犯し尽くすつもりでいるが。

先輩のメス肉を、余すところなく味わうつもりでいるが。

「でも、まあとりあえず……身体は洗っておきましょうか。後ろ向いてください」

「はいはい？」

今すぐチンポをブチ込みたい衝動を抑えて、再びボディソープを泡立てる。

今度こそ、全身をくまなく洗ってしまおう。

「ふふ？いい力加減だね、後輩くん？」

「それはどうも」

首筋から、肩、二の腕、腕の順に丁寧。

背中から、お尻、太もも、脚の順に丁寧に。

「はい、前向いてください」

「んっ?」

次は片方のおっぱいに両手を添えて、丹念に揉み込んでいく。

うっわ、相変わらずめちやくちや柔らけえ。指がどこまでも沈み込んでいくんだが。

「あっ?んひっ?こ、こっちはいくっ?ひあっ?」

手は結構大きい方だと自負しているのだが、それでも片手じゃ掴みきれない。本当にメロンかスイカくらいのサイズあるんじゃないか、これ。

「ひぎゅっ?んやあっ?もまにやいでえっ?」

右乳が終わったら、今度は左乳に移る。こちらも丁寧に、泡立てた両手で揉み込んでいく。

この感触、ヤバいくらい楽しくて気持ちいい。マジで無限に揉んでもられるわ。

「ひぎいいいんっ?ちくびい?!こりこりらめえっ?!」

この乳首のコリコリ具合も、いいアクセントになってて最高だな。気を抜いていると、マジでずっと揉み続けてしまう。

「こ、こっぴやいきゅん?おっぱいはもう?いいかりやあ??」

「分かりました」

ならば、本命を洗うとしよう。

「ひゃあうっ?」

お腹を軽くなぞり、ピッタリと閉じた割れ目に手を這わせる。

本命であり、弱点でもある、メスの本体——おまんこだ。

「うわ、どんだけメス汁垂れ流してるんですか。泡が流れてつちゃうんですけど」

「後輩くんのせいだろう??後輩くんが、あんなにいっぱい?おっぱい揉むからあ??」

そうかな、そうかも。





片方をマーキングしたら、もちろんもう片方もする。まるで発情期の獣みたいだった。

どうしよう、チンポがもう爆発寸前なんだが。

「脚も？・しつかりいつ？・くふうんっ??？」

腕にマーキングを施して満足したのか、今度は脚におまんこを擦り付けてくる。

参ったな、これじゃあ全身くまなく先輩の匂いが染み付いちやうよ。

「最後につ——おちんぽ様っ?」

最後の仕上げということだろう。股の間に跪いたかと思えば、柔らかおっぱいでチンポを勢いよく挟まれる。

その瞬間、限界を超えていたチンポは勢いよく射精した。

「きやあっ??？」

おっぱいの隙間から、勢いよく噴き出る白濁。

僕はそれを、他人事のように見つめていた。

(……気持ちいい……)

気持ちいい。

ただそれしか感じられなかった。

あまりの快感に、脳がバグったのかもしれない。

「いっぱい出たねえ？・後輩くん??？」

「……おかげさまで」

出した精液を掬い取りながら、先輩は笑う。

淫らでありながら、どこか楽しそうな——今までに見たことの無い

笑顔だった。

「先輩」

「なにかな？・後輩く——きやっ??？」

ベッドまで待とうと思ったが、もう我慢できない。

体の奥から溢れ出る獣欲が、先輩を浴室の床に押し倒した。

「ブチ犯します」

「あはっ？・興奮させすぎちゃったかな——いいよ、後輩くん？」

押し倒されながらも、先輩は楽しそうに、淫らに笑ってみせる。

その笑顔で、さらに興奮が高まっていく。  
「めちやくちやに、犯して??？」

心が繋がったので思いつきり孕ませセックスをする  
ぶに口り爆乳オナホ先輩

「はあ、まったく？後輩くんは手加減というものを覚えたまえ？意識  
が飛んでしまうかと思つたよ？」

「実際、何回か飛んでましたよね」

お風呂場にて、泡まみれの先輩を犯しまくってから数分後。再び身  
体を洗つて、今は湯船に浸かっている最中だ。

ひとまずは性欲も落ち着いたからな。まあ、これからまた燃え上  
がることになるだろうが。

「つてこら、後輩くん？話しながら人の胸を揉むんじゃない？」

「すみません。揉みやすい位置にあつたから、手が自然に」

今の僕たちの体勢は、浴槽に座つた僕の上に、先輩が同じ向きで腰  
掛ける構図になっている。

なんとというか、すごく犯罪臭がする絵面だ。先輩が童顔で低身長だ  
から、余計に。

「……………？」

もつぎゆ？もつぎゆ？ぐにゆううつ？だぶるうん??

「……………??？」

ぐにいいいいつ??どぶるん??だっぽ？だっぽ？すりすり??も  
にゆん???

「……………??？」

ぎゆううつうつ??もつぎゆ？もつぎゆ？もつぎゆ？どぶんつ  
？どたぶん??むつにゆううつうつうつ???

「……………いつまで揉んでるつもりかな??？」

「すみません、手が勝手に」

マジで無限に揉み続けてしまう。

魔性のおっぱいだ、これは。

「本当におっぱいが大好きだね、後輩くん??」

「大好きですが」



そもそも、おっぱいが嫌いな男は居ないと思うんですが。オスとは皆すべからく、おっぱいが大好きな生き物なのだ。

「先輩のおっぱいは、こう……揉んでると猛烈にムラムラしてくるんですよ」

「ほうほう?」

なんか、興味津々な顔してるんですが。

「他にはどんな効能があるのかな?」

「効能って」

温泉じゃないんだから。

「はやく答えたまえ、後輩くん? でないと? もう先輩おっぱい揉ませてあげないぞ?」

別に先輩が許可しなくても、勝手に揉むけどな。でもまあ、答えないと不機嫌になるのは目に見えてるので、さっさと答えるとするか。

「まず、揉んでると心臓の鼓動が早くなります」

「ふむふむ?」

「次に、チンポがあり得ないくらい固くなります」

「ほうほう?」

「最後に、キンタマがものすごい勢いで精子を作り始めます」

「パーフェクトだ、後輩くん?」

何がパーフェクトなんだ。

「これなら、完璧にわたしを孕ませてくれそうだねえ??」

なるほど、あの時のリベンジマッチというわけか。

いいだろう。今度こそ、先輩のクソつよ卵子を、完膚無きまでに受精させてみせる。

「さっきお腹に注いでもらった精液も、貪欲に卵子を探し回ってるからねえ??これは排卵したら、一発で受精しちゃうかもねえ??」

ニヤニヤと、メスガキみたいな笑顔でこつちを見つめてくる先輩。

先程のおっぱい揉みのお陰で、こつちは準備万端だ。いつでもブチ犯せる。

「さあ行くかうか? 後輩くん——本番へ??」

湯船から上がった先輩に手を引かれて、こちらも立ち上がる——い









受精したばかりなのに先走って乳首から母乳を垂れ流すド変態マゾ豚お母さんオナホール先輩

「うわあ……あの凄まじいイキっぷり、確実に受精したツスね」とあるラブホの一部屋にて。

ベッドの上でタブレットを囲み、三人の女性たちがとある男女の交尾を覗き見している。

あまりにも壮絶なセックスを前にして、凛花は軽く引きながらも頬を赤らめていた。

「ついにミント先輩もお母さんかあ……あたしも先輩にヨシヨシされたい！甘やかされたい！」

「陽毬ちゃんもお母さんになるんだし、甘えさせる側になるんじゃないかしら？」

陽毬の言葉に、京香がツツコミを入れた。

確かに、このガチロリペドオナホのお腹には新しい命が宿っているので、的を得たツツコミである。

「くー……すー……むにやむにや」

生徒三人が女子トークをしている横で、大人であるアリスは惰眠を貪っていた。

引きこもり陰キャのアリスにとって、今日のお出かけは重労働だったのだろう。実に気持ちよさそうな寝顔である。

「っていうか、これってどうやって隠し撮りしてるんスか？ ラブホの個室じゃ、カメラとかも設置できないツスよね？ ドローンで撮ろうにも、窓も完全に閉まってるツスし」

「ああ、それはね」

陽毬がポケットを探り、小さなプラスチックケースを取り出す。

「コレを使ったのよ」

「ぴゃっ!？」

その中には、小さな蜘蛛が入っていた。

脚は四対八本、眼も四対八つ。関節までもが無駄にリアルに再現さ

れている。

それは虫嫌いな人からすれば悲鳴が出るレベルの、完璧に近い再現度だった。

「な、ななな何スカそれえ……!」

「あら、凜花ちゃんってば蜘蛛は苦手なのかしら?」

「蜘蛛が苦手っていうか、虫全般は全部ダメツスう……!」

「あらあら」

思わず飛び退き、反射的に京香の後ろに隠れる。

まるで本物かと思紛うような、リアルな出来栄えの子蜘蛛だった。

それこそ、一目見た程度では機械だと気づけないだろう。

「これは遠隔で操縦できる蜘蛛型ロボットよ。知り合いに貸してもらったの」

「へっ? ロボット?」

確かに、ケースの中の入っている蜘蛛は微動だにしない。本当に生きているのなら、身じろぎくらいはしてみせるだろう。

「そ、それならそうと早く言ってくださいいツスよ」

「あんたが勝手に怖がったんでしようが」

ホツとする凜花に、呆れた視線を向ける陽毬。

出会った頃よりも、かなり気安い関係になれたようだ。良い傾向だろう。

「なるほど。コレを部屋の隙間から侵入させて、隠し撮りをしてたってワケなのね」

「そうよ。本物の蜘蛛と同じく、壁や天井に張り付いたりも出来るわ」

「む、無駄に高性能ツスね……」

実際、この子蜘蛛型ロボットはかなりのハイスペックだ。

機動力、耐久性、録画性能。全てにおいて高水準。どこに出しても誇れる盗撮専用ロボットであった。

「でも、どうして蜘蛛の見た目してるの? 他にも候補はいっぱいあるはずだけど」

「そ、そうツスよ! 虫系じゃなくてもいい筈ツス!」

疑問を提示する京香と、便乗して抗議する凜花。そんな二人の方を

向いて、陽毬は呆れた顔をする。

「あたしに言われても困るわよ。そういう事は、コレを作ったアイツに直接言いなさい」

「アイツ？」

「さつき言つてた知り合いね」

陽毬は、その顔を思い浮かべる。

常に妖艶な雰囲気を持つ、一人の少女の顔を。

「そう。これを作ったのは、あどらくな 亜虎久那——あたしの悪友よ」

そうして陽毬は、盗撮という自分の行い罪を棚に上げて、呆れ顔を作るのだった。



さて、先輩が無事に受精して、確実に孕ませるっていう一大目的は果たした訳だが。

「おっ??？」

ぴゅるるるっ???ぷびゅっ?ぴゅーっ?

「先輩……まだ母乳を出すには早いんじゃないですか?」

「しょ、しょんなこと言つたつて?勝手に出てくるんだからしようがないだろう?」

広いベッドの上に二人で座って、先輩の身体をまじまじと観察してみる。

バカみたいにデカイKカップ爆乳の先端から、ぴゅるぴゅると真っ白な液体を滴らせていた。甘い匂いが周囲に振りまかれ、先輩の甘い体臭と混ざってとんでもないことになっている。

いや、エロ過ぎるだろ。それに加えて下乳を伝う母乳がエッチ過ぎるだろ。

「うう、止まんない……」

その液体こそ、他でもない。女性が妊娠した際に生成する母なる液体——母乳だ。

乳首の先っぽから、溢れるように流れ出ている。



「普通だったら、妊娠後期に出始めるんですけどね」  
「いったいどうなってるんだろう、この人の身体は。」

普通だったら母乳は細かい乳腺から出てくるので、エロ漫画のように乳首の先端からは出てこない。

乳首の各所や乳輪から、水風船に小さい穴を開けたときのように、細かく漏れ出てくるものなのだ。

「うーむ、色んな薬を治験した結果かな？」

「大丈夫なんですか、それ」

身体機能が変わるレベルって、どんだけ治験したんだよ。マジで大丈夫なのか、それ。

「大丈夫さ、こうして生きているのが何よりの証拠で——おっほっほ?」  
ドヤ顔になったと思ったら、いきなり母乳をまき散らして絶頂してしまっただ。

なるほど、母乳を出すといクのか。

「こ、こによっ?なんで母乳が出るだけで——ほおっ?」

どうやら、神経系までもが治験によって変わってしまったらしい。

通常、乳腺に感覚は通っていない。そうでなければ、世の中は授乳するだけで絶頂する、スケベママだらけになってしまう。

「こ、後輩くん?ニプレス持つてないかい?」

「持つてるわけ無いでしょう」

先輩は僕をなんだと思ってるんだ。

日頃から女性用ニプレスなんか持ち歩いてたら、それはただの不審者だろうか。

「な、無かつたら絆創膏でも良いんだ?じゃないと無限にイキ続け——ひよおっ?」

残念ながら、ニプレスも絆創膏も持つてない。気の済むまでイキ散らかしてくれ。

「ちよっ?ほうっ?見てないで?はぎゅっ?助けてくれたまえっ、後輩くんっ?んほっ?」

おっぱいとおまんこから、断続的に白濁液を垂れ流す先輩。エロ過ぎるのもっと見ていたかったのだが——まあ、頼まれたのでは仕方



「うわあ……甘い匂いとメス臭さが混ざって、大変なことになってるんですけど。どうしてくれるんですか、先輩」

主に、股間にそそり勃つ肉棒が大変なことになっている。今日は打ち止めだと思っていたのに、この匂いを嗅いだらフル勃起してしまった。

ヤバいな、頭がくらくらする。

「ひっ?ひうっ?ごめんにやさしい?おっぱい出してイっちやう淫乱でごめんにやさしい?」

「悪いと思ってるんなら、その身体で償ってくださいね」

「ひぎいっ?」

正面に回り込んで、先輩の乳首に口をつける。

奥の方に、まだミルクが残っている気配がある。

「一滴残らず吸い出してあげますから、覚悟してください」

「あ、っ——?」

コリコリに勃起したエロ乳首を思いっきり吸い上げれば、奥に溜まっていた特濃ミルクが口の中に流れ出てくる。

うん、甘い。これはいい母乳だ。

「~~~~っ??あ、赤ちゃんの分は残しておいてくれたまえよ?後輩くん?」

「嫌です」

「ひっ??」

残さず飲み尽くしてやる。

だって先輩の全ては、僕のものなんだから。

「あ、~~~~っ??」

妊娠しても、まだまだ長い夜は終わりそうになかった。

本懐を遂げて妊娠したけどまだまだ厄介事が続きそうだと懸念するぷにロリ爆乳オナホ先輩

「あひ……？？ひひ……？」

「ご馳走さまでした、先輩」

白濁に染まった水溜りの上で、潰れたカエルのように痙攣している先輩が一人。

結局、母乳を噴き出す姿がエロ過ぎて、我慢できずに襲ってしまった。

「やばあ？こりえやばあ？うひひひっ??」

母乳と本気汁と精液にまみれて、肌色が見えないほど真っ白になってしまった先輩。

淫らな匂いもかなり濃く、もはや匂いだけで射精できるレベルだ。実際、何度か暴発しちゃったし。

「これはまた身体洗わないとですね……立てますか、先輩」

「むりい？腰抜けちゃってえ？立てないのお？」

まあ、そんな事だろうと思っていたが。

しょうがない、連れて行ってあげるか。

「よいしよつと……シーツも洗わないとですね」

「あはあ？べつとべとお？」

後でお風呂場に持って行って洗っておこう。携帯用洗剤ならば、常に常備してある。

だが、母乳も洗剤で落ちるんだろうか。初めてだから分からないが、まあ一緒に洗っておこう。

「はあく？身体洗うの気持ちいいねえ？後輩くん？」

風呂イスに座らせ、ドロドロになった身体を再び綺麗にしていく。先輩がお風呂嫌いとかじゃなくて、本当によかった。

「先輩って、けっこう綺麗好きですよね」

「そりやそうだとも。身体に付着した汚れが原因で実験結果が変わるだなんて、あつてはならない事だからね」

なるほど。言われてみれば、たしかにそうだ。

そういう所『だけ』はしっかりしてるんだよなあ。

「ふふ？」

「何笑ってるんですか、先輩」

なんで急に笑い出したんだ。

思い出し笑いなのか。

「いやね、本当に妊娠したんだなあって思って」

少しだけ身体を丸めて、慈しむようにお腹を撫でる先輩。

後ろからだ顔は見えなかったが、きつと嬉しそうな微笑みを浮かべているに違いない。

「そうですね……随分苦労しました」

普段からセックスしてるってのに、全然妊娠しないし。

一週間溜めた精液をありったけ注ぎ込んでも、全然妊娠しないし。

もう一生、妊娠させられないんじゃないかって思ったくらいだし。

「ま、これでもうや胸を張って報告できるよ」

「誰にですか？」

両親とか、兄妹とかだろうか。

そういえば、先輩の家族って一度も会ったことないような。

「あれ？」

子供の頃の記憶に、先輩の両親の姿が見当たらない。ただ忘れてい  
るだけなのか——いや、こんなに鮮明に先輩との過去を覚えている以  
上、その周辺に居た人も記憶している筈。

だったら、これは——この記憶はなんなのか。

「……先輩？」

「なんだい、後輩くん」

子供の頃、先輩と一緒に遊んだ記憶。

子供の頃、先輩とお風呂に入った記憶。

子供の頃、先輩の隣で眠った記憶。

「過去の記憶が、先輩との思い出しか無いんですけど」

「……………」

スツ、と先輩の目が細まる。

あ、これは、なんかマズい地雷を踏んでしまったか。

「はあ、気づいてしまったか後輩くん」

立ち上がり、くるりと回ってこちらを向く。

「お前の作業だな——ハスター」

その視線は、しゃがんでいる僕の頭上に固定されていた。

「アハツ？バレちやったあ？」

空間が歪む。

ズルリ、とソコから何かが這い出す気配がした。

「不意打ちとは卑怯なことするじゃないか。しかも、わたしじやなくて後輩くんを狙うなんてねえ」

「だくつて、ニヤルつてば全然スキが無いんだもくん」

僕と先輩の間に、もう一人の人物が降り立った。

思わず立ち上がって、一步だけ後ずさってしまふ。

「安心して、子供の頃の記憶を戻した以外は何もしてないから」

「信じるんでも？」

「そこは信じてほしいなあ。虚言癖のキミじやあるまいし」

黄色い外套に身を包んだ少女だった。

フードのせいで顔は見えないが、ボロボロになった外套から覗く肢体は一級品だと断言できる。

特に胸と太ももだ。

先輩にも負けず劣らずのおっぱいと、今まで見た誰よりも太い太もも。アレで挟んで扱かれたら、そりやもう天国のような気持ちよさを味わえるだろう。

「……なーんか？この人間チャンから、いやらしい視線を感じるんだけど？」

「どこ見てるのかな、後輩くん？」

「すみませんでした」

うん、今シリアスな雰囲気だったよね、ごめんなさい。外套に隠れた身体が特上すぎて、つい空気の読めない視線を向けてしまった。

でもそんなダイナマイトボディ、見るなっていう方が無理だと思っただよ。男だったら自然と目が惹かれちゃうものなんだよ、大きすぎ

るメス肉には特に。

「流石は邪神と赤ちゃん作った変態だね？ボクの姿を見ても怖気づかないどころか、欲情するだなんて？」

「後輩くんはこういう子なのさ……可愛い女の子を見ると、すぐチンポを勃起させて……まったく困ったものだよ」

「なんか今ディスプレイられてます？」

それを言うなら、いつもオナニーしてる先輩のほうに困った子だからな。床に飛び散った潮とか本気汁とか、全部処理してるの誰だと思ってるんだ。

「アハッ？面白いなあ？——ねえニヤル」

黄色い外套が、ヒラリと翻る。

「この子、ボクにちようだい??」

細くてしなやかな腕が、僕の腕に絡まる。

大きくて柔らかい二つの塊が、黄色い外套越しに、むにゆりと脇腹に押し付けられた。

「はっ。」

その瞬間、先輩がキレた。

過去の記憶含めても、先輩のキレ顔を見たのは、生まれて初めての事だった。

(おお……怒った顔も可愛いなあ)

それに対して、めちやくちや呑気な感想を浮かべる僕なのであった。



昔々——という程でもない、十年くらい前。

面白そうな事を探して、人間界を見下ろしていた一柱の邪神がおりました。

そんな時、日本という小さい国のある場所で、一人の男の子を見つけたのです。

『面白そうな素質を持つてる』

邪神は男の子を一目見た瞬間、その内に秘められた特別な力に気づきました。

それは、膨大な知識を持っている邪神にも判別できない、未知で未確認な力でした。

『面白い』

邪神は、男の子に興味を持ちました。

男の子と同じ年くらいの分身を作り、この時代の——邪神はいろんな時代に存在しているのです——本体をその身に宿して近づきました。

『ねえ、なんで泣いてるの?』

俗に言う公園と呼ばれる場所で、一人寂しくブランコを漕いでいた男の子。

地平線の向こうに沈んでいく夕日が、果てしない物悲しさを感じさせました。

『だれ……?』

『わたしは——』

顔を上げる男の子。その目には薄っすらと涙が溜まっており、目元も腫れていました。泣いていたのです。

『きやわあああつ!!!』

『え?』

なんか今、邪神にあるまじき鳴き声が聞こえた気がします、気のせいでしょう。

気のせいという事にしておいてください。いいですね?

『面白い素質持つてるだけじゃなくて、純粹に可愛いとか反則ですよ!』

『わふっ』

おい、なに抱きしめてんだ。過去のわたしとはいえ、シヨタ後輩くんを抱きしめるなんてうらやま——ハッ。

コホン。

そうして、偉大なる邪神はたった一人の男の子に心を奪われてしまったのでした。



『く、くるしいよ、おねえちゃん』

『あつ、ごめんね！』

男の子を解放して、邪神は改めて男の子の顔を覗き込みました。

近くで見ても、面白い素質の正体は分からない。それが、邪神をより一層昂ぶらせました。

『ふむふむ、わたしの見立てによると『まだ開花していない』といったところか。もう少し成長すれば、自ずと分析もできるだろうね』

『え……？』

困惑する男の子を置き去りにして、邪神は一人でドヤ顔のまま頷いています。

邪神の悪いところが存分に出てしまっていますね。

『実に面白い……少し育成してみるか』

育成とか言うな。

『君、名前は？』

『……お、お父さんとお母さんが、知らない人に名前を教えちゃダメだって……』

『ふむ、イイ教育が施されているようだね』

男の子から少しだけ離れ、夕日を背に、邪神は意気揚々と口を開きました。

『わたしの名前は三峰ミント！』

そして、思いつきり偽名を名乗りました。

『さあ、これで知らない人じゃ無くなっただろう？』

笑みを浮かべて、邪神は男の子に近づきます。

『君の名前を、教えてくれるかな？』

この世のものとは思えない——冒瀆的な笑顔を浮かべて。

子供時代でも性が目覚めたらオナサポしてくれる金髪ぶにロリオナホ先輩

「お姉ちゃん！」

「やあ、来たね」

わたしと後輩くんが出会った、とある公園にて。入口の方から走ってくるその姿を確認して、自然と頬が緩んでしまう。

笑顔のままこちらへ駆け寄ってくる後輩くんの姿は、まるで天使のように可愛らしかった。

「お姉ちゃん！」

いや、天使じゃないか？ 天使だコレ。抱きしめてしまおう——と思つて両手を広げたら、後輩くんの方から抱きついてきてくれた。

「ぎゅーっ！」

「はい、ぎゅー」

ああ今すぐ食べてしまいたい。襲え、襲うのだ今すぐに。過去を変えろ、過去のわたし。

なんて、ナレーションの中で呼びかけても、過去の映像が変わるはずもなく。

「お父さんとお母さんには話をしてきたかい？」

「うん！ 今日遊んできて良いって！」

それは良かった。念入りに暗示の魔術を仕掛けた甲斐があったというもの。

わたしが側に居る限り、後輩くんを不幸な目になど合わせはしない。

「それじゃあ、今日は何して遊ぼうか」

「うーん……鬼ごっこ！」

「ほう」

「お姉ちゃんが鬼ね！」

鬼ねえ……確か、日本固有の妖怪だったか。

人間が遭遇したら、SAN値がどのくらい減るか実験してみたいも

のだ。

「それじゃあ10数えたら追いかけてきてね！」

「任せたまえ」

この頃はまだ年相応というか、おっぱいも無く真っ平らなので、走るのにも支障は出ない。

後輩くん好みの身体を追求したら、今ではとんだクソデカおっぱいのドスケベボディが完成してしまった。若人の性欲にも困ったものだよ、まったく

「逃げろ〜！」

キヤツキヤツ、と子供らしい笑い声を上げて逃げていく後輩くん。

ああ、マジで可愛いね。鼻血出そうになってきた。

「い〜ち、に〜い、さ〜ん」

心の鼻血を止めながら、鬼ごっここのルールを再確認する。

舞台はこの公園の敷地全部。後輩くんを見つけてタッチしたら勝ち。実に簡単なゲームだ。

「は〜ち、きゅ〜う、じゅ〜う」

さて、捕まえに行こうか。

「んっしょ、んっしょ」

わあ〜、シヨタ後輩くんが入口の街路樹に登っているよ、可愛いね。

そこならわたしが追ってこれないと考えたのかな？

「ふう、ここなら——」

「はい、捕まえた」

「えっ」

ぽん、と肩の上に手を置く。すると枝の上に腰掛けていた後輩くんは、ビックリしたような表情でこちらを見た。

いやー、最高。この表情だけでご飯三杯はいけるね。マジで可愛い。

「な、なんで……っ？」

「何でだろうね？」

こういう場合はとぼけるに限るね。すべての物事に理由があるわけじゃないと知るのも、成長の内だよ。

「さて、鬼ごっこはわたし勝ちだ」

「むむむ……！」

「納得いかないって顔してるね」

ほっぺたを膨らませて、可愛らしい抗議を示している後輩くんなのであった。

そのモチモチほっぺた、つんつんしていいかな。五時間ぐらい。

「じゃあ、今度は別のゲームをしよう」

「……何するの？」

「乳首当てゲームさ」

後輩くんと共に木から降り、ベンチの方に移動する。別に座る予定は無いが、腰が砕けちゃう可能性もあるからね。

「ちく……？」

おおっと、ここで純真無垢な後輩くんのエントリーだ。乳首のちの字も知らないとは、なんて純粹なのでしょうねえ。

「ルールは簡単さ。こうやって両手の人差し指を立てて、おっぱいの頂点をつつくんだ」

後輩くんの手を取って、ルールを説明してあげる。この指先が、わたしの未開発乳首に——ヤバいな、想像しただけでちよつと濡れてきたぞ。

「三回以内に見事当てられたら君の勝ち、外したら負けだ」

「……………」

「どうだい、シンプルなゲームだろうか？」

「う、うん……」

おやおや、柄にもなく緊張しちやつてまあ。

まったく、この頃の初々しさはどこへ行っちゃったんだろうねえ。

「では遠慮なく、乳首をつつきたまえ」

「わ、わかった……！」

ゴクリと生唾を呑み込み、標準をわたしのおっぱいに合わせる。

そんな熱い視線で見つめられると、乳首が勃ってきてしまうのだが。

「あつ……」

「????」

服の上からでも分かるほどに、乳首が思いつきり勃起する。ブラジャーなんて野暮なものは付けていないし、着ている服の生地は薄く透けている。

これでは弱点がすべて丸見えだ。どうしよう、困ってしまうね。

「……え、えい??」

「んうううっ?!?!」

小さな両手の火差し指が、固く勃起した乳首に押しつけられる。

布越しに触れ合っただけで身体は絶頂し、スカートの前部分を暗く濡らす。

「だ、大丈夫!? お姉ちゃん!」

「へ、平気だよっ?ちよつと、軽くイツただけだからねっ??」

軽くじゃないだろう。めちやくちやイツてるだろう、乳首触られただけで。

過去のわたしとはいえ、羨ましすぎるな。

「さ、さて?この勝負は君の勝ちだ??」

震える脚で、尚も気丈に笑みを浮かべる。身体は既に完全敗北しているというのに、精神は頑なに負けを認めようとしない。

思えば、この頃から既によわよわだったんだなあ、わたしの身体。

「だが、まだつつけるチャンスは二回ある?君はどうする??」

渾身のメスガキ顔で、オスの情欲を煽っていく。

すると、後輩くんは更に息を荒くさせ――

「えいっ!」

「くひいんっ?!?!」

遠慮なく、わたしの乳首をつついてみせた。

「お、おひゅっ……?せ、正解だよ?これで君の二勝――」

「えいっ!」

「んんんんっ?!?!」

追撃。

どうやら後輩くんは、この頃から鬼畜だったらしい。

「はひゅっ……?しゅ、しゅごいじゃないか……?君の全勝だよ?お

っ?」

ピッチリ閉じたおまんこからは透明な汁が大量に溢れ出し、太ももを伝って地面に垂れ落ちていく。

もちろん、ブラジャーと同じく子供パンツも着用していない。邪魔だからね。

「さ、さあ?勝者には敗者に命令する権利がある?何でも好きに命令してごらん??」

まあ、セックス以外だけど。

セックスは大学に入って、同棲を始めた日の夜と決まっているからね。いくらわたしと言えども、そこだけは変えられないのさ。

「え、えつと……じゃあ」

もじもじと内股をあわせて、何やら恥ずかしそうにしている後輩くん。

この時点で、何を頼むか想像がついただろう。まったく、この頃から無自覚ムツツリスケべなんだから。

「お股がむずむずして、変なかんじで……これ、どうやったら治るのかおしえてほしいな……」

「お安い御用だともっ??」

嬉々としてシヨタ後輩くんの下半身へ飛びかかり、あつという間にズボンを脱がせる神業を披露して見せる。

服を脱がす系の技能は、この世界における必須技能だからね。もちろん習得してるとも。

「はわわあゝ??こ、これがチンポ——いや、おちんちんかあ??」

サイズ感的に、チンポというよりはおちんちんと呼んだほうがしっくりくる。

いやあ、でもこの時点でも一般的な男子小学生のサイズは越えてるんだよね。エロい才能の塊だよ、本当に。

「それじゃあ、いただきまーす??」

「えっ、なっ、なにしてるのお姉ちゃ——んうっ!」

幼いながらも立派に勃起したおちんちんを、ぱっくりと一口で啜えちゃう。

今では喉奥まで到達するチンポも、この頃は口の中に収まるサイズだったんだよねえ。

「んもっ?・むじゅぶ?・じゅぶ?・じゅぶ?・れろんっ?・れろんっ?・じゅぞぞぞぞぞっ???'」

この時は唾えるのも初めてだった筈なのに、まるで熟練の娼婦みたいな舌使いでおちんちんを扱きまくってしまってたね。

まあ、そのせいで後輩くんの性癖が歪んだ事実も否定はできないかな。

「ああああああああああああっ!!!」

「むぼおっ???'」

どぼびゅぐっ!・ぶびゅっ!・びゅぐぐっ!

「んふー?・ごっぎぎゅ?・んっぎぎゅ?」

初めての射精——つまり、精通。おちんちんの先端から、青臭くて初々しい精液が溢れ出してくる。

苦くて、コクがあつて、喉に絡みつく初物のソレを、喉を鳴らしながら思いっきり飲み干す。

「あ、あああ……」

「ちゅーっ、ぽん??・ふふっ?・ごちそうさま??」

とても伸びしろを感じる精液だった。

お腹の中で、小さなオタマジャクシがびちびち跳ね回っている光景を幻視してしまうね。それ程までに濃くて、生命力に溢れた精液だった。

「量は少なかったけど、濃さは一級品だね?これからの成長に期待して——ん?」

くいくい、と袖を引つ張られる。

何事かとそちらを見れば、真っ赤な顔をした後輩くんが再び勃起したおちんちんを差し出していた。

「い、いまのっ……もっかいやって、お姉ちゃんっ……!」

「ふふふ?」

ああ、そういえば後輩くんはこの頃から、もう絶倫だったんだよねえ。お陰で毎回鎮めるのに苦労したよ。

「いいとも??キンタマが空っぽになるまで又いてあげよう??」  
再び、過去のわたしが後輩くんのおちんちんにむしやぶりつく。  
幼いシヨタのオナサポは、まだまだ終わりそうになかった。



おしっこする様子を見せてとせがまれたのでノリノリで見せつける金髪ぶにロリオナホール先輩

「ふあああああああつ?!?!?」

びゅぶつ!どぶつ!びゅぶぼぼぼつ!

「んふー?じゅるるるつ?じゅぶぼつ?」

今しがたチンポから飛び出した精液を飲み尽くし、次いで尿道に残っていた精液も吸い尽くす。

これで二回目の射精を終えたわけだが、さて。

「はあつ……! はあつ……!」

「ちゅぽつ?れーつ?ぶつくん?」

「っ……!」

搾り取った精液を舌の上に乗せ、これみよがしに見せつけてから呑み込む。

わたしの痴態を前に、後輩くんのキンタマが元気よく脈動する。減った分の精液を補充しているのだろう。

「ふふ?ずいぶんと元気だねえ?普通の人間なら、二回も出せば落ちて着くというのに?」

普通の人間であればそうだっただろう。だが、後輩くんは『素質を持った人間』だ。

「だ、だって……お姉ちゃんの口の中、気持ち良すぎて……!」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか??」

わたしとの触れ合いによって、素質が芽吹き始めている。一種の防衛本能のようなものだろう。

わたしという強大な力を持つ存在に触れて、自己を守るために進化しているのだ。

「わ、わああ……!」

「ほうら?今度は手でシコシコしてあげようねえ?」

生物は、何かを虐げなければ生きていけない。

そして、理性は虐げる行為を悪とする。

「しーこ？しーこ？」

「んっ……………」

「ふふ？サービスだ、タマタマも揉んであげよう？」

「っあ……………!？」

本能と知恵の狭間で生きる者、それが人間だ。

「しーしー？しーしー？」

生物の本能を持ちながら、知恵を得た理性ある存在。そんな人間だからこそ背負っている罪がある。

それこそが七つの原罪——『怠惰』『傲慢』『強欲』『嫉妬』『憤怒』『暴食』——そして『色欲』。

「そろそろ出そうかな？じゃあカウントダウンしてあげようね？」

後輩くんは、生物の本能とも呼べる原罪の一つを宿している。

「さくん？」

この底なしの性欲も、宿した色欲の罪によるものだろう。

「に〜??」

ああ、まったく。人類という種の罪をたった一人に押し付けるだなんて。

「い〜ち??？」

人間は、本当に渡し難い？

「ゼロツツ??？」

びゅぐるるるるるっ！びゅぐっ！びゅぐぐっ！

「……………っ！」

「わあ？いっぱい出たねえ??？」

チンポの前に差し出した手のひらに、濃厚な精液が惜しみなく吐き出される。

子供の小さな手では、こぼれ落ちてしまうほどの量。しかしながら地面には落ちず、スライムのように指の隙間から垂れ下がっている。

「おっど？もったいない？」

精液まみれの手を口元に持っていき、こぼれ落ちそうな精液を啜り上げる。

食感はプルプルしていて、歯ごたえはぐにゅぐにゅして——な

んとも不思議な液体だよね、精液というやつは。

「ずじゅるっ？はむっ？もぎゅ？むぎゅ？ぐっくん??」

「うあ……………」

一滴もこぼさぬように、口の中に入れたすべてを飲み下す。漲る生命力を感じるそれを、残らず腹の奥に仕舞い込む。

そういえば、この頃に保存した精液で受精してみるのも一興だね。受精のコツは掴めたわけだし。

「ぶはっ……………??ちそうさま??」

精液を残らず飲み干したわたしは、淫らな笑顔で後輩くんを見上げる。

膝立ちのまま、困惑と情欲にまみれたシヨタ顔を思う存分堪能する。

「次はどこで、どうやって射精したいかな??」

「はあっ……………！ はあっ……………！」

「髪でも、脇でも、太ももでも？君の好きな場所を使って良いんだよ?」

細い指先で、艶やかな髪をつまむ。

腕を上げて、熱のこもった脇を見せつける。

内股を擦り、肉のついた太ももを強調する。

「わたしのすべてを、存分に使い潰しておくれ??」

ゴクリ、とシヨタ後輩くんの喉が鳴る。少し落ち着いたと思ったチンポが、再び硬さを取り戻していく。

さあ、このムツツリスケベ鬼畜後輩くんはどの箇所を選ぶのか。

「——お」

「お??」

まさか、おまんこ——

「お、おしっこ……………いきたい……………」

じゃなかったらしい。

「ふむ？確かに男性は、射精した後におしっこをしたくなる事例が多いようだね?」

「うう……………」

「恥ずかしがることは無いよ?ごく普通の生理現象だからねえ??」

性知識が乏しい子供時代では、おまんこという肉穴にチンポを突っ込んでゴシゴシすればめっちゃくちや気持ちいいという事までは知らなかったようだ。

とはいえ、これは逆にチャンスでもある。

「じゃ、じゃあ……トイレ行ってくるね」

「おやおや?どこへ行くんだい??」

公園のトイレへ向かおうとする後輩くんを引き止め、わたしは膝立ちのまま上に向かって口を大きく開ける。

「便器ならここにあるだろう??」

わざわざ移動しなくても、ここで済ませれば良い。いまのわたしは肉便器なのだから、当然おしっこも飲み干してみせるとも。

「え、お姉ちゃん何言ってる……」

「分からないのかい??君のおしっこを、わたしが全部飲んであげると言ってるんだよ??」

困惑の眼差しで見下ろしてくるが、それでも瞳の奥には隠しきれない欲望が蠢いている。

仲良しで、少し年上のお姉ちゃんを正真正銘の便器として扱うなんて、背徳感マシマシのシチュエーションだろう。一生忘れられない思い出になっちゃうね。

「い、いいの……?」

「もちろんだよ??」

ゆつくりと、チンポが顔の前に掲げられる。

この光景だけでおまんこ濡れるね。濡れまくるね。

「じゃあ……いくよっ」

「はやくっ?おしっこ??おしっこしてえ??」

「んっ……」

「んぼっ??がぼぼっ??(ぼぼっ?がぼぼぼぼっ??)」

目の前にそびえ立つチンポの先端から、わたし目掛けて黄色い液体が降り注ぐ。

勃起したチンポでは狙いをつけづらいのか、大半が顔にぶち撒けら

れてしまった。多少は口に入ってくれたが——むう、もったいない。

「あつ、ご、ごめんなさいお姉ちゃん……!」

「ごっぎゅ???ふふ?大丈夫だよ?あつたかくて気持ちいいくらいさ??」

後輩くんの体温を感じる。軽いアンモニア臭に混じって、ほんのりと精液の匂いがする。

ああ、これはいいものだ。エッチが過ぎる。

「さて?スッキリしたところでさっきの続きといこうじゃないか??わたしにしてほしい事を言ってくれたまえ?」

おしっこでベットベトになった顔のまま、無邪気に笑みを浮かべて後輩くんを誘惑する。

例えば、こちら辺で性癖がバッキバキに拗れた感あるね。いい思い出だよ。

「あ……じゃあ、その」

「ん??」

「お姉ちゃんのおしっこも、見せてほしい……な」

「おやおや?」

顔を真っ赤に染めつつも、興味津々といった様子で口を開く。

そんなに緊張しなくとも、わたしのおしっこぐらい気軽に見せてあげるのに。

「ふふっ」

早速準備といこう。立ち上がってからスカートの中に手を突っ込み、子供パンツに手をかける。

そのまま一気にずり下ろせば、おしっこをする準備は簡単に整った。

「っ……!ごっくっ……!」

「目が怖いよ?」

「ご、ごめんなさい……!」

「ぎゃー?恥ずかしい?」

棒読みの悲鳴を上げながら、わたしは下げかけの子供パンツを完全に脱ぎ去る。

「恥ずかしくって、こーんなにスケベなお汁が漏れてしまったよ???」  
そして、手の中に収まったソレを——まるであやとりの紐のように指に絡め——後輩くんの眼前に晒す。

もちろん股布の部分をつひっくり返し、たつぷりと広がった恥ずかしい染みを見せてつけている。

「こ、これが、お姉ちゃんのおしっこ……?」

「ぶぶー? 不正解だ?」

子供パンツの影に隠れ、淫らに笑う。ピッタリ閉じたスジマンから愛液が溢れ、ポタリと地面に垂れ落ちる。

「これは愛液? 別名スケベ汁さ?」

「スケベ……」

「女の子がエッチな気分になった時に、お股から溢れ出してくるんだ??」

今掲げている子供パンツの股布部分は、まるで水に浸したかの如くびちゃびちゃだ。

これだけで、わたしがどのくらい興奮していたかが分かるだろう。「はい、あげる?」

シヨタ後輩くんの手を取り、びちゃびちゃの子供パンツを握らせる。

それはプレゼントだ。是非後でオカズにしてほしい。

「じゃあ、本番いこうか?」

両手でスカートをたくし上げ、脚を大きく広げる。発射する場所がよく見えるように、腰を突き出す。

「う、あ……!」

幼いオスの視線が、釘付けになる。燃え滾る性欲を孕んだ視線が、わたしのおまんこを容赦なく視姦する。

「んっ……?」

ぷしっ? しゅっ?? ぷしゃあああっ??? じよろろろろっ??? チョロ  
チヨロ……?? ピュッ?

「ふう……? どうだったかな??」

立ったままおしっこを出し尽くして、後輩くんの方を見る。

「う……い！ うあつ……い！」

すると、痛そうな程に勃起したチンポの先端から、勢いよく精液が噴き出してきた。

たった今出した水溜り——もといおしっこ溜まりの上に、覆い被さるように降り注ぐ精液。これはもう体外式セックスと言っても過言では無いのでは。

「おやおや？ おしっこする瞬間を見ただけで射精してしまったのかい??」

「はあつ、はあつ……い！」

情欲まみれの視線で、わたしのおまんことおしっこ溜まりを交互に見比べている。

すると無意識に右手がチンポに添えられた。本能がオナニーの準備を始めたのだ。

「お姉ちゃんっ、お姉ちゃんお姉ちゃんっ……い！」

「ふふ？」

必死にチンポをしごく後輩くんの姿を見て、期待に胸を膨らませる。これは搾りがあるぞ——と。

そう思ったら、つい無意識に微笑みを浮かべてしまうのだった。

自分の身体を使って保健体育の授業を行うドスケベ淫乱マゾ豚オナホールお姉ちゃん先輩

「はい？これが女の子の一番大事な場所——おまんこだよ??」

オナニーをしているシヨタ後輩くんにとっておきのサービスを提供する。

ピッタリ閉じたスジマンを指で割り開き、中に詰まった具を惜しみなく見せつけていく。

ああ、癖になってしまっそうだ。

「この小さいのがクリトリス？その下に開いてる小さい穴が尿道??その下のぴらぴらが小陰唇??そして、その中央にあるのが膣口——子宮に繋がっている、おまんこの本体さ??」

「っ……………」

シコシコ、ゴシユゴシユ。

割れ目の奥に見える、濃厚な白濁本気汁を垂れ流す膣口。それを認識した瞬間、チンポをしごく手の動きが早まる。

まったく、おまんこをくぱあして見ただけでこんなに興奮するなんて。子供時代でも、やっぱり後輩くんはスケベだなあ。

「うあっ……………」

「ほら？がんばれ？がんばれ?」

無意識に腰を突き出し、射精の照準をおまんこに合わせている。

セックスもまだだと言うのに、本能でわたしを孕ませようとしている。

その事実にも、ゾクゾクと背筋が震えた。

「出るっ……………！ 出る出るうっ……………！」

「ほらほら？膣口をよーく狙って??」

「あああああああっ!!」

どびゅびゅびゅるるるるるっ!!

「ふふっ？すっごい勢いだね??」

「はあっ……………はあっ……………」



盛大に発射された精液は、見事な弧を描いてわたしの膣口にブチ当たった。

おまんこを割り開いていたお陰で、膣内に少しだけ精液が侵入してくる。

(根性のある子がいるね……でも残念)

この頃のわたしはまだ処女だ。処女膜に阻まれ、精子は子宮内までたどり着けない——つまり、どんなに頑張ったところで無駄死にだ。

ああ、最高にゾクゾクする。後輩くんの一部とも言える精液をむぎむぎ見殺しにしてみようなんて、これ以上ない背徳の味だ。

「はあああつ……???さいつこうだね……???」

今しか味わえない味を噛みしめ、おまんこについた精液をぬるぬると塗り拡げていく。

「ふふふ? 何度も出してるというのに、全然衰えないじゃないか??? ごらん? おまんこどころか、ふとももまでベタベタになってしまったよ???」

吐き出された精液を、股間まわりに塗りたくる。ヌルヌルとした白濁液は、容赦なくわたしの肉体を汚していく。

量が多すぎて、なかなか乾きそうにない。つまり、いいローションになるということだ。

「というわけで? 今度はふとももでも又いてあげようね?」

「あつ!」

精液でベタベタになったふとももで、後輩くんのチンポを挟み込む。

予想通り、大量の精液がローション代わりとなってくれたようだ。すごく気持ちよさそうな顔をしている。

「これは世間一般で素股と呼ばれていてね? 左右のふとももと、上のおまんこの三点からチンポを責める非常に効率のいい体位なのさ??」

正面から後輩くんに抱きつき、更に身体を密着させる。すると、ふとももだけでなく、割れ目がチンポの竿部分にむちゅり? と吸い尽く。

まったく。自分のことながら、とんだ好き物おまんこだね。堪え性

というものがまるで無い。

「お、おねえちゃん……これっ……!」

「気持ちいいだろう???」

チンポを挟み込んだまま腰を前後に動かせば、柔らかい幼肉が三点から弱点を刺激する。

おまけに、ケツ肉が丁度カリ首に当たって四重の刺激を生み出している。長チンポの賜物だね。

「ほらっ・ほらっ・ほらっ」

幼いメス肉が、みずみずしいメス肉が、まるで吸い付くようにチンポに奉仕している。

快楽をより上乘せし、時折カリ首にぶつかるとケツ肉の刺激が、射精感をこれでもかと煽りまくってくる。

「ふぐっ……ぐうううっ……!」

「ふふ?かわいいねえ??あー、んっ??」

「んむっ!」

必死に快感に耐え、情けない表情を晒すシヨタ後輩くん。その姿があまりにも愛おしくて、思わず唇を奪ってしまった。

言わずもがな、これが二人のファーストキスだ。

「んんんんっ?!」

「ぶあっ?ん!!っ??ちゅばっ?ちゅっ??」

腰の動きは止めず、チンポに刺激を与えながら唇を貪る。ああ、なんて贅沢なんだろうか。全身、余す所なく食い尽くす。それが、食材への礼儀だ。

「んもおおおおおおっ?!?!」

「んーっ??」

どびゅぐぶぶぶっ!びゅぐぶぼっ!びゅるるるっ!

「ぶはっ……はーっ……はーっ……!」

「ぶはっ?お疲れ様?」

ふとももに挟んでいたチンポが激しく脈動し、先程よりも激しく精液が噴き出してくる。

まるでお漏らしみたいだね。後輩くんの性欲が旺盛すぎて怖く

なってくるよ。

「さて?・じゃあ今度は、乳首の先っぽで責めてあげようね?」

わたしはおもむろに着ていた服を脱ぎ去り、上半身を露わにする。まだ全然育っていないちっぱいと、それに不釣り合いなほどに凛々しく勃起した乳首。

後輩くんの前に跪き、その先端をチンポにゆっくりと押し付けた。

「乳首の先っぽで、チンポの先端を——クリクリっ?」

「ふおっ!」

固すぎず、柔らかすぎず、絶妙な弾力を持った乳首が龟头をなぞる。鈴口に当たらないギリギリを責めながら、じつくりと性欲を高めていく。

「どうかな?・不思議な感覚だろう?」

女の子の大事な乳首に、チンポを当てるという背徳感。これから産まれてくる赤ちゃんよりも先に、その場所を汚したという優越感。

後輩くんの中で様々な感情が混ざり、溶け合い、キンタマで精子を作る栄養となる。

「ふふ?・赤ちゃんか口をつける場所に、チンポを押しつけるなんて?

本当に悪い子だなあ?」

わたしの方から押し付けたんだけどね。まあ、そんな野暮は言いつこ無しさ。

「あっ……あっ……出るっ!」

びゅぶぶっ!どびゅぶぶぶぶぶっ!ぶほほほほほほっ!

「あはっ?・さつきより濃くなってないかい?」

チンポをおっぱいに押し付けたまま、シヨタ後輩くんは射精する。濃さも量も、全く衰えていない。凄まじいな、まったく。

「ふふっ・ドロドロだあ?」

小さなおっぱいにぶち撒けられた濃厚白濁精液を、両手で目一杯塗り込んでいく。

乳首と乳輪が真っ白に染まって見えなくなるまで、丁寧に丁寧に塗り込んでいく。

「これでおまんことおっぱいは制覇できたね?」

立ち上がり、ベトベトの身体を広げて、後輩くん見据える。

「次はどこを制覇したい??ここからは、君のやりたいようにやっつけてらん??!」

性欲にまみれた視線が、わたしの身体を這い回る。手、足、腕、脚、顔、髪。まだまだ綺麗な箇所はたくさんある。

全部全部、真っ白に汚してほしい。

「いい、の……う?」

「もちろん??!」

その瞬間、わたしは芝生に押し倒された。

「ふうー……ふうー……!」

「あっ??!」

上に乗っているシヨタ後輩くんの目に、もはや理性は無い。ただ本能のままにメス肉を食う存在となってしまった。

「いよいよ……きて?」

思うままに、貪って。



これが、わたしと後輩くんの過去——その断片。  
初々しくも幸せな、子供時代の記憶だ。

気に入った人間を自分の住処に誘拐していくピンク  
髪Nカップ爆乳淫乱人外ちゃん

「あげるわけ無いだろ、ハスター」

「えく？ それ、キミの許可が必要な事象なのかなあ、ニヤル」

お風呂場にて睨み合う二人の間に、ピリついた空気が流れ始める。

いや、どうしてこうなった。

「ちよつ、あの——」

「後輩くんは黙っててくれ」

「人間チャンは大人しくしててねく」

初手から発言を封じられてしまった。マジでどうしよう、この状況。

「そもそも、過去の記憶を改竄して自分に懐くようにコントロールしてたんでしょ？ だったら、そんなの正妻とか言わくない？ むしろ悪女ムーブじゃん」

全く理解も納得も出来ていないが、どうやら過去の記憶が先輩の手で改竄されてたらしい。

だとしたら、あのとき二宮が『幼い頃に結婚の約束をしていた』と言ったのは、真実だった可能性がある。

「ハッ、分かってないねえ。あの頃の後輩くんの惨状を見ていないからそんな事を言えるんだよ」

今、惨状って言ったか？ そんなにひどい過去なのか、僕の過去は。というか、先輩って何者なんだ？ 上位存在か何かか？

「親の意向で朝から晩まで勉強、および習い事の毎日。果てには、親の意に沿わなければ教育と言う名の体罰。友達一人も作れないあんな閉鎖的な環境で、幼い子供が心を保つのは不可能というものだよ」

え、なにそれ知らない。そんな家庭だったっけ、僕の家。

あ、いやでも——少しだけ、思い出してきたかも。

「それでも人生を弄んだのには変わりないじゃん。それに、友達は何人でも許嫁は居たんでしょ？」

「……まあ、ね」

ハスター、と呼ばれた女の子の言葉に対し、先輩が少しだけ口ごもる。

許嫁とか居たのか、知らなかった。

「後輩さんの許嫁は、凜花ちゃんだよ」

「えっ?」

「だから本来、後輩さんの隣に居るべきなのは——凜花ちゃんだったのさ」

「……………」

ああ、なるほど。それで合点がいった。

許嫁だったら、幼い頃に結婚の約束もするか。

「ほくら、やっぱり人間ちゃんの人生弄んでるじゃ〜ん」

「まあ、否定はできないかな」

「人間ちゃん、ボクと一緒にいこう? こんなのに縋ってても良いかと無いよ?」

「同類のくせに、何言ってるんだか」

いや、口論しながらおっぱいを押し付けなくてくれ。左腕と脇腹が幸せになっちゃうだろ。

しかもこの感触——外套の前部分を開けて、生乳を押し付けてきてるな。かなりシリリアスな雰囲気なのに、構わずチンポが勃起しそうになるんだが。

「ん、コレなに? あ?もしかして?」

「……後輩くん?」

そんな目で見ないでください。

だって、しょうがないだろ。男はおっぱいを押し付けられたら、無条件に興奮する悲しい生き物なんだよ。

だから、美少女二人の前でチンポがビキビキに勃起するのも、ただの生理現象なんだ。不可抗力なんだ。

「アハッ?ボクのおっぱいで気持ちよくなるなら、もうニヤルはいらないね〜?さあ人間ちゃん?家に帰って、ボクと一緒に気持ちいいことしようね〜?」

「むう〜……!」

ちよつ、だからそんな押し付けしないで。興奮しちゃうから。先輩もほつぺた膨らませてないで、早く助けて。

「か、勘違いするなよハスター。後輩くんは、わたしの裸を見ているから興奮してるのさ」

なんか得意げな顔しながら、今度は全裸の先輩が右腕に絡みついてきた。おっぱいで右腕を挟み込み、脇腹にまで押し当ててくる。

「ね、ねえ? そうだろう、後輩くん?」

K・A・W・A・I・I。

「わっ? さつきより大きくなった……?」

「ふ、ふふん? これでどっちに興奮しているのか証明されたね?」

目を潤ませて、上目遣いで見つめてくるの、めちやくちや可愛いな。可愛すぎる。

「そんな小手先のテクニクで、いい気にならないでよねっ!」

「んむっ!」

おっぱいに包まれた左手が引つ張られ、唐突に唇を奪われる。

甘くて、柔らかくて、いい匂いがした。

「ぷはっ? へっへくん? キスもくらいっ?」

「あーっ!」

一方的に唾液を注ぎ込まれ、口を離される。

なんか、めちやくちや甘かったな。蜂蜜みたいな味がしたような。

「後輩くん、すぐに吐き出したまえ!」

「いや、もう飲んじやいましたよ」

「むっ!」

無茶言わないでほしい。

「なら、上書きするまでだよっ——はむっ?」

「んむっ」

今度はおっぱいに包まれた右腕が引つ張られ、再び唇を奪われる。

甘くて、柔らかくて、いい匂いがした。

「無駄だよ、ニヤル。こういう事はボクの方が上手なんだから」

「んじゅるるっ?? ぶじゅる? じゅぼぼぼっ??? べろべろおっ? どれ

ろおおおおっ???

「あの、話聞いてる?」

さつきとは対象的に、口の中の唾液をすべて持って持たれる。かなりの美少女である先輩が、ブツサイクな顔でディープキスをしている。中々にチンポにクル光景だった。

「ごつきゅ?ごつきゅ?ぷっはあ???ごちそうさま、後輩くん?」

「ぶはっ……お粗末さまでした」

スケベすぎだろ、なんだそのト口顔は。

襲うぞ、今すぐに。

「見せつけてくれるね、ニヤル」

内に秘める情欲のままに、先輩に手を伸ばそうとして――

「でも、やっぱりボクの方が一枚上手だ」

その手が、力なく垂れ下がった。

「後輩くん?」

全身から力が抜けていく。

意識が黒く塗りつぶされていく。

「キミの伴侶、ちよつと借りるね?」

「なっ!」

左腕を引つ張られる。

力の入らない身体では抵抗することもできずに、底の見えない闇の中へ落ちていった。

「後輩くん!」

先輩の声が聴こえる。

残った意志の力を振り絞って、手を伸ばそうとした。

「ご機嫌よう、千の顔を持つ無貌の邪神――ニヤルラトホテプ」

しかし、伸ばした手は届かず――僕はハスターちゃんと共に、闇の

底へと落ちていくのだった。



思い出した。



僕の実家は日本どころか、世界でも有数の巨大な製薬会社だった。  
『やめて』

僕はその家の長男として産まれた。

『思い出さないで』

家を継ぐという使命を背負った僕に、両親は惜しみない投資を繰り返していた。

曰く、人の上に立つ者はそれ相応の責任と覚悟が必要なのだ。

『辛いことばかりだよ』

立派な大人だったと思う。それこそ、人の上に立てる見本のよう  
な、清廉潔白な大人だったと思う。

でも、親としては失格も良いところだった。

『ねえ、お願い』

そりやあ人間、欠点の一つや二つあつて然るべきだろう。何の欠点  
も持たない人間が居たら、その人こそ神様と呼ぶべきだ。

『後輩くん』

まあ要するに。

僕の両親は、神様では無かったというだけの話だ。



「やられた……まったく、あのお転婆め」

ラブホテルのお風呂場にて、ミントは鮮やかな金髪を搔いて顔を  
かめる。

同僚の邪神に、見事にしてやられた。有り体に事実を述べるのなら  
ば、北条が連れ去られたのだ。

「ふふ……」

先日の、アリスに一日レンタルされた時とはワケが違う。

邪神に気に入られ、連れ去られるということの意味を、他ならぬミ  
ントはよく知っていた。

「ふふふ……くつくつく……なあ〜んてね?」

パクリ、とミントの背中が裂ける。

「ハスターのやつ、まんまと出し抜いたつもりだろうけど——わたしがそんな初歩的なミス、するわけ無いんだよねえ？」

綺麗な碧色の瞳から、光が失われていく。

「ふふ？まあ後輩くんの中に眠る力——『色欲』の力があれば、とりあえず精神は大丈夫だろう？発狂もしない筈だ？」

その裂け目から、数本の黒い触手が飛び出してくる。

『ああ、待っててくれたまえ、後輩くん？』

飛び出た触手が、ミントの身体を押しえつける。次いで顔だけが綺麗に抜け落ちている、異形のヒトガタが這い出してきた。

敵に囚われた愛する人を、自らの手で助けに行く。そんな心躍るシチュエーションを前に、無貌のヒトガタは思わず身を震わせる。

『すぐに、助け出してあげるからね？』

ここに、無貌の外なる神——ニャルラトホテプが完全顕現を果たしたのだった。

〜とある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねる4  
)

1：無貌の神

ハスター居る〜？ぶつ殺してあげるから出ておいで〜？

2：名無しの邪神

なんだなんだ。

3：名無しの邪神

まくたトリックスターがご乱心か。

4：名無しの邪神

いつもの事だろ。

5：名無しの邪神

ふむ、どうやらハスターがニヤルの伴侶を誘拐したようですね。

6：名無しの邪神

マジ!?

7：名無しの邪神

命知らずな事するなあ〜。

8：名無しの邪神

いのち……？

9：名無しの邪神

市民、命とは何ですか？

10：名無しの邪神

あれ、唐突にパラノイア始まった？

11：名無しの邪神

zap! zap! zap! イゴーロナク!

12：名無しの邪神

えっ、オレえ!?

13：名無しの邪神

黄金の風、2002年発売予定!

14：名無しの邪神

何イツ!?

15：名無しの邪神

無敵か、コイツ……!

16：名無しの邪神

実際無敵だろ。

17：名無しの邪神

人間と比べればね。

18：名無しの邪神

ぶっ殺してやるう!

19：名無しの邪神

ぎゃあ、自分殺しい!

20：名無しの邪神

前が見えねえ。

21：無貌の神

もともと目が無いだろう、君。

22：名無しの邪神

一般的には身体と口だけで描かれるが、それは過ちだ。最近では『股間に顔が生えている』という絵も散見されるようになってきた。

23：名無しの邪神

こわ、変質者じゃん。

24：無貌の神

え、それはつまり……セックスしたらフェラと性交を同時に行える、という事かい！

25：名無しの邪神

食いつくな食いつくな。

26：名無しの邪神

デユラハンと似た感じになるのかな。

27：名無しの邪神

あれ首の断面どうなってるの？

28：名無しの邪神

テケリ・リ。

29：名無しの邪神

普通に肉塊だったそうです。

30：名無しの邪神

会ったことあんのかよ。いやまあ、不思議でもねえか。

31：無貌の神

というか、今わたしはハスターを探しに来てるんだよ。無駄な雑談してるなら帰らせてもらうが？

32：名無しの邪神

おー、とつとと帰れ。

33：名無しの邪神

ハスくんねえ……そう言えばスイスに新しく教団を立ち上げたとか何とか言ってたような。

34：名無しの邪神

ほう、スイスですか。

35：名無しの邪神

大したものですね。

36：大いなるもの

ほう……あのクソバカはスイスに居ると。ちよつと殺しに行つて良いか？

37：名無しの邪神

あつ、起きた。

38：無貌の神

ダメだよクトウルフ。あいつはわたしの獲物だ。

39：大いなるもの

フン……別に誰のものでもあるまい。人間の間では、何と云うんだったか……そう、早い者勝ちだ。

40：無貌の神

だつたらわたしが勝つが？

41：大いなるもの

やってみなければ分かんたろう。

42：名無しの邪神

不屈の闘志！

43：名無しの邪神

ヒューマンスピリッツって言うんでしょ、それ。

44：名無しの邪神

まあ、人間と神の境界って、絶大な力を持つてるか否かみたいな所あるからな。

45：名無しの邪神

高位の存在なら、人間の言葉くらい容易く習得できるしねえ。

46：名無しの邪神

まあ、それで人間相手に心を割くかどうかは別の話だがな。人間だつて、足元のアりに慈悲を与えたりしないだろう？

47：名無しの邪神

慈悲（水責め）

48：名無しの邪神

死は救済だからな。

49：名無しの邪神

誰に向かって話してんだ定期。

50：名無しの邪神

あれ、ニヤルとクトウは？

51：名無しの邪神

いま戦ってる。

52：名無しの邪神

どこで？

53：名無しの邪神

ルルイエ。

54：名無しの邪神

ホームグラウンドか。なら結構いい勝負するんじゃない？ ニヤルも化身モードらしいし。

55：名無しの邪神

せつかくだから賭けでもしようか。

56：名無しの邪神

どつちに賭ける？

57：名無しの邪神

そりやニヤルでしょ。

58：名無しの邪神

大穴でクトウルフ。



59：名無しの邪神

あ、クトウグアが宙から降ってきた。

60：大いなるものの眷属

ギヤアアアアアアア  
!?!?!?

61：名無しの邪神

うわー、めっちゃ海蒸発してるじゃん。

62：名無しの邪神

いいぞ、やれやれ。

63：名無しの邪神

あつ、燃えた。

64：名無しの邪神

決着ウウウウウツ!!!

65：名無しの邪神

横から全部持っていったな……

66：名無しの邪神

あつ見て、クトウグアが宙に帰っていくよ、可愛いね。

67：名無しの邪神

可愛くはないだろ。

68：無貌の神

ふう、ひどい目に遭った。

69：大いなるもの

フン……お前と関わるとロクなことが無いな。

70：名無しの邪神

分かりきった話では？

71：名無しの邪神

なんで自分から突っかかっているのか、コレガワカラナイ。

72：名無しの邪神

(コイツラの心配など) フヨウラ！

73：無貌の神

というわけで、ハスターはわたしが貰うね。

74：大いなるもの

おい、待て。まだ決着は――

75：無貌の神

早い者勝ち、なんだろう？ 悔しかったら化身でも作って、  
ルル<sup>そ</sup>レイ<sup>こ</sup>エから出てきたまえ。

76：大いなるもの

ぐぬぬ。

77：無貌の神

それじゃあ、お先に。さようなら諸君？

78：名無しの邪神

おい、じゃあな！。

79：名無しの邪神

一生伴侶とラブラブやっててくれ。そうすれば少しは平和になる。

80：名無しの邪神

クトウルフ大丈夫かー？

81：名無しの邪神

息、してる？

82：大いなるもの

……作る。

83：名無しの邪神

えっ。

84：名無しの邪神

何を？

85：大いなるもの

我も、ニヤルラトホテプのような化身を作る！  
そしてあいつを完膚なきまでに出し抜く！  
あとハスターは殺す！

86：名無しの邪神

おお。

87：名無しの邪神

ねぼすけがヤル気になつとる。

88：深淵の蜘蛛

フフフ……その作戦、お手伝いしましょう。

89：名無しの邪神  
誰だお前は！

90：深淵の蜘蛛  
神々の争いを見るのが好きな蜘蛛、アトラック・ナチャ！

91：名無しの邪神  
テーンテーンテテツテテンテーン♪

92：名無しの邪神  
うるせえ！

93：大いなるもの  
ほう……手伝いとは？

94：深淵の蜘蛛  
簡単な事です。ルルイエから出られないあなたの化身を、ワタシが  
用意するというだけの話。

95：大いなるもの  
その化身を使えば、あやつらに一泡吹かせられると？

96：深淵なる蜘蛛  
それはお客さま次第でございます。

97：大いなるもの  
なるほど……気に入った。是非頼む。

98：深淵なる蜘蛛  
ありがとうございます。では、意識のみをこちらに。

99：大いなるもの  
うむ。

100：全知の父

あくあ、どうなつても知らないぞつと。

深淵なる蜘蛛、大いなるものが退出しました。

## 春、出合いの季節

濃いような、いつも通りなような——そんな特に変化のないピンク色の毎日を送っていたら、いつの間にか四月になっていた。

時が過ぎるのは早いものだ。

「ふあ〜……眠いねえ」

「しっかりとしてください、先輩」

春、それは出合いと進級の季節。

他の大学生たちの例に漏れず、僕たちも無事に進級を果たしていた。

と言っても、特に変わったことは無い。研究室に集まり、いつものメンバーで会話に花を咲かせている。

「そんなこと言ったって、しょうがないだろう。実験が大詰めだったんだ……ふあ」

先輩は四年に。

「本当ツスか〜？ 先輩と朝までしっぽりヤツてたんじやないんすか〜？」

二宮は二年に。

「ああ、あくびをする仕草でさえ美しいです、ミント先輩……！」

一之瀬と僕は三年に。

「相変わらずミント狂いね、一之瀬ちゃん」

名取先輩も四年に。

「今日はこれから顔合わせなんですから、もう少しシャキツとしてください」

「ああ……確かゼミに新しく新入生の子が入るんだっけ？」

「珍しいツスよね〜。一年から、しかも入学して早々ゼミに入るなんて」

二宮の言葉は尤もだ。

普通、ゼミに入るのは二年以降から。入学してすぐゼミに入る子は中々居ない。単純に講義を優先する子が多いからだ。

「どんな子なの？」

「んふふ、いい子よ」

一之瀬の問いに、名取先輩は笑って答える。そりやまあ、名取先輩が面接したんだから知ってるだろうけど。

補足しておくが、ウチのゼミの面接官は名取先輩だ。その理由は……まあ察してほしい。

先生があんなだから、お鉢が生徒に回ってきたというだけの話だ。ホントはダメなんだけど。

「具体的には？」

「そうねえ……人好きのする性格で  
ふむふむ。」

「一人称がボクで」

ん？

「珍しいピンク色の髪と目をしてたのよ」

おいおい。

「……先輩」

「……ああ。猛烈に嫌な予感がするね」

明るい性格で、一人称がボクで、ピンク色の髪と瞳。そんな人物と、つい最近どこかで会ったような気がする。

具体的には、セックスまでして妊娠させたような気がする。

「ピンク髪って……染めてるんスか？」

「いや、地毛って言ってたね。色素異常だって言ってた」

「色素異常……ね」

髪がピンクになる色素異常なんて存在するはず無いだろ、いい加減にしろ。

「これ、確定ですよね」

「ああ、間違いなくクロだね」

どうやったのかは知らないが、確実にあの子が入学してきている。しかも、九条研にまで来るだなんて。

「お、お待たせしました……」

ガラリ、と研究室の引き戸が引かれ、アリス先生が入ってくる。その後ろには、いつか見たピンクの髪。

「こちら、今日からゼミに入る一年の……」

「先輩のみなさくん！　こくんにくちわく！　新入生のハス——じやなかった、八尋寧々やひろねでくす！　よろしくお願いしまくす！」

ピンク色の髪に、アクセントの黄色いリボン。俗に言う童貞を殺す服——胸元が派手に空いたセーターに白衣という、なんとも破壊力の高いコーデイナート。

それらを視界に収めることで、嫌な予感はず信に変わった。

「はあ……」

「はあ……」

僕と先輩はため息をつき。

「ホントに髪ピンク色なんスね！　かわいいツス！」

「ミント先輩に似た顔つきしてるわね……親戚かしら」

「ね、元氣ない子でしょ？」

二宮と一之瀬と名取先輩は呑気な感想を抱き。

「あわ、あわわわわ……！」

アリス先生はひたすら狼狽えている。

「アハッ？」

そんなカオスな空間の中で、ハスターちゃん——もとい八尋ちゃんは、渾身のメスガキ顔を浮かべてみせた。

「これからよろしくお願いしますね？　せくんぱいつ??」

そのピンク色の瞳で、僕と先輩をしつかりと見つめながら。



## 大いなる邪神編

生徒同士のイチャイチャシーンを見て羨ましくなる  
デカケツマゾ豚オナホ先生

先輩を孕ませてから一ヶ月後。

つまり、二宮と一之瀬に種付けしてから三ヶ月が過ぎようとしていた。

「おお〜？かなりぽっこりしてきたツスね〜？双子だから、大きさも二倍なんスかね？」

「ふふん、そういう凜花こそ目立ってきたわね。やっぱり元のスタイルがいいから、膨らむと目立つのよ」

「えへへ〜？スタイル抜群だなんてそんな〜？」

「そこまでは言っていないけど」

研究室内の仮眠室にて、二宮と一之瀬が服をめくり、お互いのお腹を見せ合って微笑んでいる。

うーむ、なんとも母性を感じる光景だなあ。

「……で、なんで僕は手足を縛られて布団の上に寝かされてるんだ？」

それも拉致被害者の立場じゃなければ、素直に喜べる光景だったんだけど。

「そんなの決まってるじゃないツスか？」

「あなたにお仕置きするためよ」

お仕置きって。

「聞いたわよ。この間のデート、ミント先輩との初デートだったんだって？」

「誰から聞いたんだよ」

「名取先輩ツス！」

あの人か……流石は先輩の親友なだけある。そんなことまでリサーチ済みだったなんて、迂闊だった。

「それで、そんな甲斐性無しの北条に制裁を加えるべく」

「アタシ達がやって来た!?!というわけツス!?!」

なるほど——要するに、先輩の敵討ちというわけか。死んでないけど。

「これに懲りたら、もっと色んな場所にデートしに行く事ね」

「ついでにアタシ達ともデートするツス!？」

「それは構わないが……」

バカ高い買い物とかは出来ないが、どつかに出掛けられるぐらいの余裕はある。高校時代にバイトを頑張ったお陰だ。

というか、そっちの約束取り付ける方が目的だろ、こいつら。油断も隙もないな。

「言質取ったツス?」

「スマホでも録音済みよ」

「用意周到だな……」

そんなに念を入れなくても、デートくらいしてやるつてのに。

まあ、保険を掛けておくと安心するのは人間のサガってやつか。

「というわけで」

「ここからはお仕置きタイムツス?」

「結局お仕置きはするのか……」

言うが早いのか、二人は手早く僕の服を脱がせていく——お仕置きつて、ソッチ系のお仕置きかよ。ならむしろ大歓迎だわ。

「うわあ……?あ、相変わらずのデカチンポね……?」

「勃起してないのに、アタシの腕くらいあるツス……?」

裸に剥かれて、再び布団に寝転がされる。先輩もそうだけど、なんか服を脱がせるスピードがめっちゃ早くないか?

「さてと」

「まずは勃起させるツスよ……?」

小さく細い指と、滑らかで長い指が、ゆつくりとチンポに触れる。

小さい指——一之瀬の指が龟头周りを優しく包み、長い指——二宮の指が竿部分を優しく握り込んだ。

「すーり?すーり?」

「しーこ?しーこ?」

触れるか触れないかの絶妙な龟头責めと、優しいながらもしつかり

とした竿扱き。どちらも、熟練の手技と呼んで差し支えないものだった。

少しずつ、だが確実に、チンポに血液が集まってくる。

「……なんか、やけに上手くないか？」

「そりやそうツスよ？」

「今日のために、ミント先輩からご指導を賜ったんだもの」

マジでか。最近なんかコソコソしてると思ったら、そんな事してたのか。

「だから、北条の感じる部分とかは」

「全部把握済みツス？」

なるほど、これは手強そうだ。

「まずは指先で感じる部分をソフトタッチ」

「息を吹きかけるのも効果的って聞いたツスよ？ふう〜っ？」

先程の亀頭責めに加えて、二宮の息がチンポを撫でる。すると当然、興奮したオスの臭いと、メスの吐息が混ざって広がっていく。

そんな発情待ったなしの匂いを嗅いでしまえば、チンポが勃起するのは当然の摂理だった。

「わ…………？」

「何回見ても壮観ツスね〜??？」

数秒後、バキバキに勃起したチンポが二人の前に現れる。メスを完膚無きまでにハメ殺す事を目的とした、凶悪な肉棒。

二人は何度も見てきた筈のそれを、うっとりとした顔で見上げている。あく…………そのメス顔、何度見てもチンポにクするな。

「こ、ここからが本番よ？」

「覚悟してくださいツス？」

いたずらっぽく微笑む、一之瀬と二宮。しかし、その表情とは裏腹に、股間からは透明なメス汁がダラダラと溢れ出している。

ちよつとくらい我慢できねえのか、このマゾ豚お嫁さん妊婦オナホールがよ。



「……………」

仮眠室でいちやつく一之瀬、二宮、北条の三人を、羨ましそうに扉の隙間から見つめる人影があった。

目に見える負のオーラを纏いながら、眉を寄せて扉に張り付いている。

「ひ、陽毬ちゃん……凜花ちゃんも……ず、ずるいですう……」

大きめの白衣でも隠しきれないデカイケツを揺らしながら、ドスケベマゾ豚アルビノデカケツオナホールこと九条アリスは羨ましそうな視線を中の三人に向けていた。

「ほらほら、どうかしら?」

「アタシ達の手コキ、気持ちいいツスカ?」

いたずらっぽい笑顔を浮かべながら、一之瀬と二宮の二人はチンポをいじめ抜いていく。

一之瀬の小さい指で先端をねっとり刺激し、二宮のしなやかな指で竿部分を軽やかに扱っていく。

「くっ……………」

そんなテクニカルな動きに反応してか、鈴口から透明な涙が流れ始めた。俗にカウパーや我慢汁と呼ばれる、男が興奮や快感を感じている証だ。

「ふふん? 順調に反応してきたわね?」

「このままイクツスよ?」

滲み出たカウパーを、一之瀬の指がゆつくりと亀頭全体に塗り拡げていく。すると、先程よりも濃厚なオスの匂いが部屋の中に充満していった。

精液ほどではないにせよ、カウパーも少量の精子を含んでいる。濃くなつた匂いに反応して、二人は股間から更にメス汁を垂れ流す。

「このままっ? 寸止めして? チンポイライラさせたままにしてやるんだからっ?」

「……………うう?」

「ちよっ!? 何おまんこ弄ってるのよ!」

果断にチンポを責め続ける二人だったが、竿部分担当の二宮が突如として動きを鈍くする。

それもその筈。二宮は右手でチンポを扱きながら、左手でおまんこをほじくり始めていたのだ。

「や、やめなさい！ 今は北条のチンポを責めてるのよ！ オナニーしてる暇は……っ?」

「はああ??チンポおろ??チンポいい匂いッス??」

「だ、だからダメだつてば!」

おまんこをほじるのに夢中になり、チンポの扱きが疎かになっている。

これでは、連携など満足に取れないだろう。

「も、もう我慢できないッス——いただきますッス!??」

「あーっ!」

両手を自身の股間に移動させながら、勢いよくチンポにむしゃぶりついた。恍惚とした表情で、二宮はオスの象徴を舐めしやぶっている。

「んむ、??むぶ??むじゆるぶ?ぐっぽ?ぐっぽ?ずろろろ??」

「ああもう、台無しだわ……」

下品なひよつと顔で、チンポに奉仕を始めてしまう二宮。北条にお灸を据えるつもりが、逆に喜ばせてしまっている。

その証拠に、北条はかなり気持ちよさそうな顔をしていた。これでは本末転倒だろう。

「あ……??」

淫らな生徒の姿を盗み見て、アリスは自分のおまんこが疼いていた事を自覚する。

子宮はキュンキュンと収縮し、膣口がクパクパと開閉して、オスを誘う濃いメス汁を垂れ流す。

「う……??ふっ……??」

生徒たちの痴態をオカズに、アリスは無意識の内に雑魚メスオナニーを始めた。

指を股間に伸ばし、ショーツの上から割れ目をなぞっていく。

「あっ………んふう………」

溢れるメス汁が潤滑油となり、指の動きを速めていく。

既にショーツの股布部分はぐちゃぐちゃになっており、アリスの興奮度合いが伺い知れた。

「あぁっ………ずるい、ですうっ………」

目の間に逞しいオスが居るというのに、目の前で生徒がイチャイチャと乳練り合っているというのに——どうして自分は、こんな隠れながら惨めにオナニーをしているのだろうか。

「ふぐうううく………」

クリトリスを擦り、身体を強張らせて雑魚アクメをキめるアリス。

ねつとりと糸を引く指を見つめながら、荒い息を吐き出し続けている。

「わ、私もっ………」

頭が茹で上がり、正常な判断ができなくなったアリス。

身体から湧き上がる欲望のまま、勢いよく仮眠室の扉を開くのだった。



ス〜???

「はあ……サキユバスみたいな顔しやがって」

精液臭に当てられたト口顔のまま、二宮は口内からチンポを引き抜く。

鼻から精液を逆流させて、白い鼻水を垂らしている姿が最高に無様だ。

「つて、ちよつと凜花！ なに北条に気持ちよく射精させてるのよー」

「あは〜??しえんぱいのおちんぽを〜??きもちよく??しやせーさせてあげるツス〜??」

「……ダメだわこいつ」

お前が言うな。

色々と総合すると、お前が一番ダメだからな。主に倫理観とか。

「で、アリス先生はどうして乱入してきたんです？」

「えっ、あつ、えつとその……」

頭がトんでしまった二宮はいったん脇に置いておいて、どうしてアリス先生がこんな事したのか聞いておこう。

あと、あわよくばこの拘束を解いてもらいたい。

「……ふ、ふたりも、ミントちゃんも、北条くんに種付けしてもらってるのに……わ、私だけ種付けしてもらってないから……し、してもらいたいなって……?」

少しだけ俯きながら、顔を真っ赤に染めてアリス先生は呟く。

ああもうなんだその表情は。三十路のくせに可愛すぎるだろ、犯すぞ。

「なるほど。一人だけ疎外感を感じてしまってた、と」

「うう……」

優しく話しかけても、アリス先生はバツの悪そうな表情を崩さない。

あれだけ濃厚なセックスをしても、やっぱり根底にあるネガティブ気質は変わらないようだ。

「わかりました。先生にもしつかり種付けしますので、この拘束を外してください」



「ほ、本当ですかっ……?」

「はい、本当ですとも」

目に光を宿し、アリス先生は嬉々とした表情で側によってくる。うーむ、チョロいな。こんなんじや、どこぞの悪い男に騙されてあつという間に食べられちゃうぞ。そうなる前に、しっかりとマーキングしておかなければ。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ! 今はお仕置きの時間なんだけど!」  
「諦めろ。相方がパーになってるんだから、これ以上は無駄な足掻きだ」

「えへえへく??」

間抜けな顔で笑う二宮を一瞥して、一之瀬に投降を促す。一対一の勝率なんてゼロに等しいからな。

というか、二宮のやつこんな弱かったっけか。精液飲ませただけなのに、ベロベロに酔っ払ったみたいになってるぞ。

「今すぐに投降すれば、悪いようにはしない。決めるなら早くした方が良いぞ」

「くっ……!」

「それとも、何か勝つ算段でもあるのか?」

一之瀬も一回エッチすればデレデレになってくれるんだけど、それ以外のときはツンツンなんだよなあ……これが古き良きツンデレってヤツなのか。知らんけど。

「はい、解けました……!」

「ありがとうございます、アリス先生」

「あ、アリスって……呼び捨てにしてください……?」

「よく頑張りましたね、アリス」

「はあいっ??」

「手懐けられてる……」

拘束を解いてくれたお礼に、アリス先生の頭を優しく撫でる。そのまま名前で呼んであげれば、先生は嬉しそうに声を上げた。

可愛くて健気な娘だなあ、オイ。徹底的に犯し尽くすぞマジで。

「というわけで、何か遺言は?」

「あ……う？」

だがしかし、今はこつちの性悪ガチペドロリオナホにお仕置きするのが先だ。縛られていた手首を解しながら、一之瀬の前に歩み出る。膝立ちの状態だから、ちようどチンポが目の前に来る構図になっているんだよな。絶好のイラマチオ日和だ。

「あ、あ、あ、あ……ぜ、ぜつたいチンポなんかには負けな——おっぎゅぼおっぎゅ!!??」

こんな状況になっても負けん気の減らない口に、敗北の一撃をブチ込んでやる。

それだけで一之瀬は股間から潮を吹き、喉奥はチンポを締め付ける天然の生オナホと化した。

「あー、やつぱり体温高いな一之瀬は」

「もっぼおっぎゅぶっぎゅおっぎゅおっぎゅ」

頭を掴み、前後に動かす。激しいストロークでアツアツの喉奥をめちゃくちゃに犯してやれば、股間からは色々な汁が溢れ始めた。

お仕置き返しなんだから、このくらい激しいのが丁度いいだろう。それに、コイツも先輩に負けず劣らずのマゾ豚だし。

「ずろろろろろっぶっはあ!!?ま、まっで??じぬっ??じんじやうがらあっ??」

一旦チンポを引き抜き、息も絶え絶えな様子で一之瀬は言葉を紡ぐ。

死ぬ死ぬ言ってる割には、口元がニヤケまくってるように見えるんだが。

「さつきまで、そのなっがい舌でチンポの根本舐めてただろうが。喉奥ブチ犯されてるってのに、キンタマまで舌伸ばしてきてよお……余裕たっぷりだったように感じるんだがなあ?」

「そ、それはっ……!!??」

はい論破。

結局のところ、一之瀬も本性はメス豚だって話だ。

「そんなガチペドロマゾ豚オナホには、もっと激しいお仕置きしても良いんだよな?」



なんかフェラさせてばかりな気がする。二宮、一之瀬、そしてアリス先生——まあ、征服感が得られて興奮するから、別に良いんだけど。

「じゅるるっ? れろおおっ? ちゅううっ? ぽんっ??」

「よしよし、よく出来ました」

「えへへえ……??」

あーもう可愛すぎるだろ、このアルビノデカケツ娘オナホがよ。絶対孕ませてやるわ、覚悟しろ。

「このまま犯しますよ」

「よ、よろしくお願いします……パパあ??」

アリス先生を布団の上に押し倒し、そのまま覆い被さる。薄手のスカートを捲ると、純白のショーツが白日の元に晒された。

「ぐっちよぐちよですね」

「あうう……??」

割れ目を守る純白のショーツ。その股布部分が、エッチなメス汁によって暗く濡れている。

期待しすぎだろ、このデカケツアルビノマゾ豚オナホールがよ。

「絶対、孕ませますから」

「あっ……??」

何度でも言ってる——完膚無きまでに孕ませてやるからな、このデカケツアルビノマゾ豚オナホールがよ。

完膚無きまでにブチ犯されてオスのチンポに完全屈服するドスケベデカ尻マゾ豚オナホ先生

ショーツの股布をずらし、割れ目の部分を露出させる。

ほかほかと湯気を出す程に熟れた大人おまんこが、オスを誘惑する魅惑の匂いを放っていた。

「もう準備万端ですね」

「い、言わないでくださいい……!?!?!」

どつかでオナニーでもしてきたんだろうか。それとも、さっきの痴態を鑑賞でもしてたか。

まあどつちにしろ、アリス先生がスケベなことに変わりない。

「一人だけ仲間外れなの、そんなに嫌だったんですか?」

「うう……?!」

彼氏が居る名取先輩は除くとして、確かにオナホの中でアリス先生だけ孕んで無いんだよな。

先輩も、二宮も、一之瀬も、八尋でさえ孕んでる訳だし。

「何人くらい仕込んで欲しいですか?」

「あう……?!」

先輩と二宮は一人。一之瀬は双子。八尋に至っては七つ子を妊娠してるからな。

まあ、最初はスタンダードに一人でいいだろう。慣れてきたら双子でも三つ子でも、好きなだけ孕ませてやる。

「……………?!」

「黙ってたら分からないですよ、ほら」

「あ……?!?!」

くちゆり、とチンポの先端をおまんこに宛てがう。少しでも腰を突き出せば、根本まであつという間に呑み込まれるだろう。

正直、今すぐにもブチ込みたい。柔らかく熟れた肉穴で、肉棒を思う存分しごき倒したい。

「——にん……?」











となれば、答えは自ずと出てくる。

「あっ……っ？」

ぽこんっ???

「あっ……っ??ああっ……っ??」

ふよふよ???

「ああああああああっ……っ??」

ぞわぞわぞわっ???!ぷっ、ちゅん???

「ほあっ……っ??」

受精した。!

あっという間に、完膚無きまでに。

「おめでとうございます」

「はっ……っ??はひいっ……っ??」

お祝いの言葉を告げ、赤ちゃんの誕生を祝福する。これで、オナホ達は全員受精した訳だが——そんな喜ぶべき中でも、一つ心配事がある。

「今更ですが、安定期まで我慢できますか?」

「な、何をですかあ……っ??」

「セックスですよ」

「あ……っ?」

受精したということは、これから安定期に入るまでセックスはお預けということだ。

最高に気持ちいいクソザコおまんこセックスを覚えてしまったアリス先生に、この仕打ちは厳しいものがあるだろう。

「だ、大丈夫、ですっ……っ??」

しかし、予想に反してアリス先生は力強く言い切ってみせた。

「が、我慢……っ??してみせます……っ??北条くんと赤ちゃん……?産みたいので……っ??」

頬を赤らめながらも、しっかりと前を向いて。

「あく……っ??ブチ犯していいですか?」

「ふえっ??」

精液と愛液にまみれながらも、ビキビキに反り勃ったチンポ。それ

を再び、おまんこに宛てがう。

そんな表情見せられたら、我慢なんて出来るはずないだろう。またクソザコおまんこブチ犯してやる。

「あっ……!?ちよっ……!?やめえっ……!?ああくく……!?」

気が済むまで犯し続けてやるからな、このデカ尻ド変態クソザコおまんこアルビノ先生オナホールがよ。



そんな二人を尻目に、獣のようなアへ声を上げるアリス。反射的にそちらへ目を向けてみれば、その肢体は完膚無きまでに貪り尽くされた後だった。

「あへえ……??うひひ……??」

全身を精液まみれにし、お腹をぽっこりと膨らませた状態で布団に沈む。

その顔にはとろけるような恍惚の笑みが浮かんでおり、今までの種付けセックスがどれほど淫らだったのかを物語っていた。

「完全敗北じゃない……」

「というか、逆に自分から負けに来てたツスよね?けぶつ?」

「どうやったら倒せるのよ、あのセックスモンスター」

「いや?無理なんじゃないツスカね?」

自分たちでは、逆立ちしてでも倒すことは出来ない。二人は、本能的にそう悟った。

故に。

「あ……?」

「ツス……?」

振り返った北条を見て——正確には、その股間でいきり勃つチンポを目にして——思わず背筋を震わせた。

「全然足りないな」

一歩、北条が足を進める。

「ちよつ、ちよつと待ちなさいー!」

慌てた様子で、陽毬が後ずさる。

その様子は、正に狼に狙われた子羊のごとく。

「せくんぱい??」

嬉々とした様子で、凜花が近づいていく。

その様子は、まるで自らライオンの檻に飛び込む子牛のごとく。

「な、なんで自分から近づいてるのよ!早く逃げなさい、凜花!」

「え?だって、この状態になった先輩相手に逃げてても無駄ツスし?だつたら自分からイッたほうが良いかな?って??」

服を脱ぎ去り全裸になって、北条の身体に柔らかい肉を万遍なく押

し付ける。すると、股間のチンポは更に雄々しく天を突いた。  
「あんっ??？」

不意に、北条の手がおっぱいを揉み込む。  
ぐにゆぐにゆと形を変える大きな柔肉は、確実にオスの情欲を煽つていく。

「あ、あの？お腹に赤ちゃんがいるので……優しくエッチして欲しいッス……んむっ??？」

膨れたお腹を撫でながら、凜花は照れくさそうに告げる。

次の瞬間、気づけば唇を塞がれていた。

「ん……っ？ぶあ？はっ……っ？あむっ??？じゅるるるっ？ちゅぶっ??？じゅぶべろおっ??？」

唇を合わせ、口を吸いあい、舌を絡める。

(しゅきっ？しゅんぱいしゅきっしゅく???)

およそ恋人以外やらないような、濃厚すぎるディープキス。それを数分間も続けて、二人はようやく唇を離れた。

唇と唇の間に、透明な橋が掛かる。淫らで甘い、愛の橋が。

「ぶはあっ——おひっ??？」

間髪入れずに、北条はおまんこに指を這わせる。キスによってトロトロにほぐれたソコは、透明な愛液を大量に溢れさせていた。

「まつ？まつてくださいッス??？おまんこはダメッスよ??？あ、赤ちゃんが居るんスから??？」

おまんこを撫でる指を制し、北条の腕を押さえる。今現在、子宮すべては赤ちゃんのものだ。それだけは伝えておきたかったのだろう。

「そうだな」

その行為自体は全くの無意味だが、態度で示しておくのは有効だ。

北条は鬼畜ではあるが、外道では無い。事実、凜花が拒否すれば大人しく引き下がるのだから。

「まあ、本~~命~~はこっちなんだが」

「んひよっ?!?!」

瞬間、凜花のお尻に電流が走る。

(ほへえ??？な、なにがおこったッスかあ  
???????)







程の衝撃と快楽を、凜花は心ゆくまで味わい尽くしていた。

「はへっ……っ？へひっ……??」

はしたなくヨダレを垂らしながら、絶頂の余韻を噛みしめる。

その顔はだらしなくトロけきり、実に幸せそうな表情をしていた。

「おんっ??」

夢心地の凜花だったが、アナルからの新しい快感で目が覚める。

そう——射精したとはいえ、チンポがまだ突っ込まれたままだ。

「もう一発又いてもいいか？」

「ひっ……っ？うひっ……??いい、いいツスよ??こ、心ゆくまで？使い倒し

てくださいツス??」

新しい快楽を知った淫らなメスは、嬉々として笑顔を浮かべる。

「あゝあゝっ??」

初めてのアナルセックスは、まだまだ終わりそうになかった。

気の強いメスはアナルが弱いという通説を証明して  
しまうクソザコマゾ豚ガチペドオナホール同期

「ほうっ……??ほへっ……??」

徹底的に犯し尽くされたアナルが、ぽっかりと口を開けている。

ドロリと白濁液をこぼしながら、凜花はアナル絶頂の余韻に浸り続  
けていた。

「さて、じゃあ一之瀬」

「ひっ」

壁際にへたり込んだ陽毬に向けて、北条は情欲に満ちた視線を向け  
た。

可愛らしい顔を、未成熟な乳房を、膨らんだお腹を、薄い尻を、短  
い脚を。

すべて、舐め回すように視姦する。

「セックスするぞ」

「っ……う」

ストレート過ぎるセックスのお誘いに、陽毬は僅かに頬を染める。

それを開戦の合図と取ったのか、北条は素早く距離を詰めて唇を  
奪った。

「んむみゅう??」

口内に舌を突っ込み、舌と舌を絡める。

「んっ!?!んっむう!?!」

陽毬の長い舌が、ヌルヌルと絡みついてくる。絡めたと思ったら、  
絡め返されている。

舌技においては、陽毬はオナホの中でもトップクラスだ。キスで勝  
てる人間は存在しないだろう。

(このまま??キスだけでっ??骨抜きにしてあげるんだからあ???)

舌と舌を絡ませるだけではなく、時折離れて相手の口内を舐め尽く  
していく。

そうしてかき集めた唾液を、嬉しそうに飲み込んで胃の中に納めて

いく。

(おいひっ??ほうじょうのだえきっ??おいひいよおおっ???)

その動きは、相手を気持ちよくさせる行為ではなく——自らが気持ちよくなるための行為。

つまり、心の中では『骨抜きにしてやる』なんて息巻いていたが、その実すでに負けているのだ。

(ほうじょううっ??しゅきっ??だいしゅきいいい???)

ツンツンな態度の裏に隠された本音。照れくさくて派手に拒絶しているが、本当は大好きだと思いつけている。

本人には絶対に言わないし、言葉にもしない。しかし、その情熱的なキスだけで、北条には筒抜けであった。

「ぶはっ……」

「ぶあっ??!はあっ?!はあっ?!」

流石に息が続かなくなったので、名残惜しくも口を離す。

この時点で、陽毬のキスだけで骨抜きにするという作戦は破綻しているのだが。

(わあ……?あたしのおまんこ、すっごい濡れてる……?)

まあ本人にとっては、そんな事どうでもいいらしい。

(チンポっ?チンポっ?北条のチンポっ??)

自ら股間に手を添えて、流れ出る愛液を掬う。そして、それをアナルに塗り込んでいく。

始まる前まで拒否していたというのに、いざ始まってみれば非常に乗り気な陽毬なのだ。これがツンデレというやつなのだろうか。

「わわっ……??」

一人でアナルセックスの準備をしていたら、おもむろに身体を抱え上げられる。

背中を胸板に密着させられ、脚を掴まれて折り畳まれる。そうなれば当然、股間同士がくっつくのは必然であった。

「あ、あのっ?北条これっ?この状態でチンポ入れられたらっ?快樂が全然逃せないと思うんだけど??」

俗に言う、フルネルソンと呼ばれる体位。オスがメスを抱え上げ、

まるでオナホのように上下させるといふもの。

まさしく、女体をオナホとして使うのに相応しい体位だった。

「ね、ねえっ？聞いてるのっ？北条？ほうじょ——うっ！???」

一突き。

愛液でベチャベチャに濡れた新品アナルに、ぐっぽりとチンポが突き刺さっていた。

「~~~~~っ」

声にならない声を上げ、陽毬が絶頂する。尿道から思いっきり潮が噴き出し、床を濡らしていく。

「っ!?!はあっ?!?!はあっ?!?!」

続けて、膣口から濃厚白濁液本気汁が溢れ出し、ぼとりと北条の足下に落ちる。

「なんだ、入れただけで本気イキしたのか」

「う?うるしゃいっ?イってない??絶対イったりなんかしてないんだからあっ??!」

などと気丈に反論しているが、陽毬のおまんこからは白濁本気汁がボタボタと垂れ落ちている。

どれだけ言葉を取り繕おうとも、身体は正直というやつであった。

「じゃあ、もつと激しく動かしても大丈夫だな」

「えっ?ふおっぎゅ??」

空気の抜けた風船のような、間抜けな音が聞こえる。それが陽毬のイキ声と気づいた時には、既にチンポは奥深くまで突き刺さっていた。

「お——ふんっぎゅ??んぐっ?ぶっ?んぶっ?う~~~~っ」

汚いアへ声を上げないよう、空いている両手で口を押さえる。少しでも無様な姿を晒さないように、必死で抵抗しているらしい。

しかし、そんな無駄な努力よりも、おまんこから溢れ出す白濁本気汁を止める努力をしたほうがいい。それを見れば、陽毬が感じている事など一目瞭然なのだから。

「うおっ、めっちゃケツ穴うねってるぞ。そんなにチンポ欲しかったのか」





「……………」

陽毬の身体から力が抜け、手足がだらんと垂れ下がる。よわよわアナルを責められすぎて、気絶してしまつたらしい。おしつこまで漏らしている辺り、ガチで気絶している。

だが、涙とよだれでぐしゃぐしゃになった顔は、これ以上ないくらい幸せに満ち溢れていた。

「おやおや？気の強い女の子はお尻が弱いとよく言うけど、どうやら本当だったみたいだねえ？」

メスとオスの匂いが充満する仮眠室に、一人のメスが姿を現す。

鮮やかな金髪碧眼に、低身長ながら立派に育ったKカップ爆乳。

ご存知、三峰ミント先輩だ。

「先輩、来てたんですか」

「結構前からね？喘ぎ声がうるさくて実験に集中できないから、覗きに来てしまったよ？」

ケツ穴からチンポを抜き、気絶した陽毬をゆっくりと布団に寝かせる。

ケダモノみたいなセックスをする癖に、そういう所は紳士的な北条であった。

「セックスします？」

「もちろん？だけどその前に、伝えておくことがあってね？」

勿体ぶつたような態度で、ミントは懐から一枚の用紙を取り出す。

「今年の研究発表会、沖縄でやることになったらしいよ？」

夏の研究発表会——まあ、早い話が勉強会を兼ねた合宿である。

「つまり？」

服をすべて脱ぎ去り、セックスの準備をしながらミントは告げる。

「青姦し放題、というわけだね??」

沖縄と聞いて真っ先に青姦という単語が出てくるあたり、この先輩はどこまでも色狂いのオナホであった。

海に来ててもやることは変わらない色狂いアへ顔マゾ  
まんこオナホ先輩

「おお……これは凄いな」

空港を出て最初に出迎えてくれたのは、青い海と白い砂浜だった。  
こんなに色鮮やかなビーチを見たのは、生まれて初めての経験かも  
しれない。なんか、ガラにもなくテンション上がってくるな。

「うみツス〜！」

白いワンピースに身を包んだ二宮が、浮かれたようにはしゃいでい  
る。服装だけ見れば、いいところのお嬢様に見えなくもない。

というか、色々見えすぎだろ。下着が透けて……って、それ水着  
か？

「早速泳ぐツスよ〜！」

「待って待て、脱ぐな」

天下の往来で水着になろうとするんじゃない。せめて海の近くに  
行ってから脱げ。

というか、ブレーキ役の一之瀬や名取先輩は何やってるんだ。

「うぶ、つわりが……」

「乗り物酔いしちゃった……」

僕たちに遅れて、空港から青い顔をした二人がやってくる。二人と  
も口元を押さえていて、足取りもフラフラだ。

マトモ枠が二人揃って撃沈かあ。幸先不安だな、まったく。

「ってか一之瀬、お前大丈夫なのか。体調悪いんだったら、無理に来な  
くてもよかったんじゃない……」

「へ、平気よ。ミント先輩から頂いた薬を飲んだから、すぐに良くなる  
わ」

「むしろそれが原因じゃないか？」

あのマッドサイエンティストが作る薬のどこらへんが大丈夫なの  
か、懇切丁寧に教えていただきたい。

ちゃんと母体と赤ちゃんに無害な薬品使ってるんだろうな。じゃ



なきや色々やバいぞ。

「わ、私も、ミントから貰った酔い止めを飲んだから……しばらくすれば……うぷつ、回復すると思うわ……」

「だから、むしろそれが原因じゃないんですか？」

個人的には、その薬がブツちぎりで怪しく思えるんだが。いや、もう一周回って逆に怪しくないまであるな。

「ひどい言い草だね、後輩くん」

「先輩」

そんなやり取りをしていたら、満を持して先輩が姿を現した。

鮮やかな赤いアロハシャツに、大人びた黒いスカート。澄み渡る青空よりも青い瞳と、爽やかな風を受けてたなびく金色の髪。

南国の風景が、これ以上なく似合っている。控えめに言って最高のビジュアルだった。

「二人に渡した薬は、正真正銘、安全で無害な代物だとも。ちゃーんと後輩くんが治験したからね」

「せめて自分で治験してくれませんかね」

だからこそ、もうちよつと素晴らしい光景に浸らせてもらいたかった。口を開いたら、いつもの先輩に戻っちゃうわけだし。

というか——もう慣れっここではあるが——人の身体を実験台にするのは少々遠慮してほしい。これ以上性欲が暴走したらどうするんだ。

「もちろん、わたしで治験はしたとも。サンプルデータは多いほうが良いからね」

「それならまあ……いや、良くはないんですけど」

「カタい事は言いつこなしたよ後輩くん。せつかくの沖縄合宿なんだ、楽しまなきや損というものさ」

「無理やり論点を換えようとしてませんか？」

だいぶ強引に話をズラしただろ、今。

「まあまあ、コレをあげるから見逃してくれたまえ」

「……なんです、これ？」

唐突に、先輩から一粒の錠剤入りのケースを渡される。紐が通して

あり、首から掛けられるようになってるタイプのやつだ。

というか中の錠剤、めっちゃショッキングピンクな色してるんですが。

「性欲を5000倍に上げる薬さ？飲んだら一週間はムラムラが止まらなくなるよ？」

「なんてもん渡してんですか」

性欲5000倍って、それはもう薬じゃなくて劇物なんだわ。人間が服薬していい薬じゃないんだわ。

「まあ、いざれ必要になるときが来るさ？それまで大事に持つておくことだね？」

「一生来てほしくないんですが」

この薬が必要になる場面って、どんな場面だよ。まったく想像がつかないんだが。

「あれ、そう言えば八尋が居ないような……？」

飛行機にはちゃんと乗ってた筈だよな。あいつの座席、僕の隣だったし。

「ああ、ハス……じゃなかった。寧々ならちよつと野暮用が出来たら、後から合流するって言ってたよ」

「……それってもしかして、神様に関係のあることですか？」

「さあね。どっちにしろ、後輩くんは知らなくていい事さ」

含みのある笑みを浮かべながら、先輩はホテルの方へ歩いていってしまっただ。

うーむ、ロクな事にならないければいいが。

「と、溶ける……溶けちゃいますう……」

取り敢えず日陰で溶けかかっているアリス先生を背負ってから、僕も先輩の後に続くのだった。



「それで、海に来て一発目にやるのがコレですか」

ホテルに荷物を置いて、早速海へやって来た——かと思ったら、い

きなり岩陰に連れ込まれ、海パンを脱がされた。

珍しく一番乗りしてるなと思ったら、そういう魂胆かよ。どこまでいつても色狂いだな、この金髪Kカップ爆乳ドスケベ変態オナホだよ。

「ふふ？青い海、それっぽい岩場？となれば、青姦するに決まっているだろう??」

別に決まってると思うんだが。なんて反論は、目の前に広がるエロすぎる光景によって塵と消えた。

「どうかな？後輩くん？」

先輩が身に纏っているのは、白のマイクロビキニ。辛うじて乳首と割れ目が隠れているだけの、水着と呼ぶには布面積が少なすぎる代物だ。

ちよつとでも動いたら、すぐにも乳首が見えそうな——最上級のドスケベ衣装だ。

（乳首とアソコは見えてないけど、乳輪とマン肉は丸見えなんだよなあ……）

むしろ裸よりエロいかもしれない。なんだ、この歩くセックスシンボルは。

Kカップ爆乳に相応しいデカ乳輪は、どこをどう見てもまったく隠れていない。

それに加えて股間の布地がマイクロすぎて、やわらかマン肉が完璧にハミ出してしまっている。

「ふふん？後輩くんも準備万端のようだね？」

そりやそうだろう。そんなドスケベ水着を見せつけられて、我慢できるやつがこの世に居ると思ってるのか。

あー、めっちゃムラムラしてきた。足腰立たなくなるまで犯し尽くしてやるからな、覚悟しやがれ。

「あんっ??？」

自分の意志で身体を動かす前に、本能が先輩のKカップ爆乳を揉みしだいていた。

やわらかい——果てしなくやわらかい。もはや感動さえ覚えるや

わからかさだ。まさしく人体の神秘と言える。

「ふふ？妊娠してから更に大きくなったからね？存分に堪能してくれたまえ？あんっ??」

なん、だと……既に充分デカイのに、まだデカくなるのか。これ以上デカくなったら、胸囲が身長と同レベルに達してしまうのだが。

身長超えの爆乳とか、最高すぎるだろ。願わくばおっぱいに埋もれて死にたい。

「ん、じゃあ今は何カップなのかって??軽く測ってみたら、なんとNカップになっていたよ??一気にカップサイズが三つも上がってしまつて、ブラジャーが悲鳴を上げ始めているんだ??これはまた買い換えれないといけないねえ??」

Nカップ。

なんだそのカップサイズ、聞いたこと無いぞ。

「おや？更にチンポがおつきく……?今の話を聞いて興奮してしまつたのかい??」

当たり前だろ。これで興奮しなかつたら何で興奮するんだ。

あーもう犯す。このエロ乳、完膚なきまでにブチ犯す。

「んきやつ??」

両手でしっ!つかりとNカップ爆乳を掴み、その谷間にチンポを挟み込む。

やわらかな極上おっぱいによる、至高のパイズリだ。

「熱っ??後輩くんのチンポ??すっごく熱くなってるう??」

ずりゆん?ずりずりっ??ずっちゅずっちゅ??だっぽんだっぽん??

もっぎゅうううう??むっぎゅうううう??

「すっげえ気持ちいい……!」

先輩にしてもらうパイズリも最高だが、こうして自分で動かすのもいい。

おっぱいをオナホみたいに扱って、極上の快楽を貪るのがこれ以上なく興奮する。

「孕めっ! Nカップ爆乳で孕めっ!!」

「きやつ??」

あつという間にキンタマから精液が上ってきて、おっぱいの間に特濃精液が吐き出される。

めちやくちや気持ちいい。頭が真っ白になって、このおっぱいを白く汚すことしか考えられなくなる。

「はあ、はあ……??いつもよりいっぱい出たね??解放的な雰囲気のおかげかな?」

ゆっくりおっぱいを左右に広げると、谷間に出した精液がねつとりと糸を引いていた。

なんだこの光景……エロすぎる。

「ふふ?まるでザーメンブリッジだね——あくむっ??」

かと思えば、先輩は徐ろにその精液を食べ始めた。どんだけ頭ピンク色なんだよ、このオナホはよ。

そんな姿見せつけられたら、こっちも我慢できなくなるんですが。

「おや?まだまだイケそうだね??けぷっ?」

出した精液を根こそぎ舐め取り、小さなげつぶをする先輩。

そんな何気ない仕草や表情を見せつけられ、更にチンポが固さを取り戻してゆく。

「それじゃあ次は——こっちにブチ込んでくれるかい??」

デカ尻を突き出し、立ちバックの体勢に移行する先輩。トロトロに濡れたおまんこが、オスを誘惑するようにヒクヒクと蠢いていた。

「ふう……もちろんですよ、先輩」

南の海を舞台にした青姦は、まだまだ始まったばかりだ。

妊娠中だけど神様なので普通におまんこ使っても問題ないドスケベ淫乱マゾ豚オナホ先輩

「ほらほらあ？はやく犯しておくれよ??」

立派に実ったケツを揺らし、先輩がオスを誘惑するダンスを踊る。眩い太陽に照らされる白い肌は、汗に濡れて淫靡に光っている。

ああもう、こんなドスケベダンス見せつけられたら、我慢できるわけねえだろうが。

「赤ちゃんなら大丈夫だとも??神さまの赤ちゃんだし、ちよつとくらい乱暴にしても全然平気さ??」

熱に浮かされた瞳が、こちらを見据える。どこまでも淫らで、魅力的で、退廃的な雰囲気塗れた瞳。

歪ませたくなる。ピンク色に染まっているその瞳を、自分の色で染めたくなる。

「だからあ？赤ちゃんにも、びゅーびゅーつて？おちんぽミルクちようだあい??」

ブチッ、と。何か大事なものが切れたような気がする。理性とか、倫理とか、そういう——人間として大事なものが。

「はやくう？トロトロになっただ彼女おまんこに、ぶつといチンポちようだ——お、おっほお、っ?!」

気づけば、チンポの先端が！おまんこに挿入されていた。そのまま膣肉のひだひだを味わいつつ、奥まで一気に突っ込む。

めちやくちや気持ちいい。温かい肉に包まれているチンポから、頭がとろけるような快感が伝わってくる。

「ほひっ?!ひいっ?!」一気に奥までえっ?!」

「っぐ……!」

半分ほどしか入らなかったが、いつもより締め付けが強い気がする。

おまけに亀頭へ吸い付く子宮口のせいで、思わず精液が引っこ抜かれる所だった。







龟头をびったりと子宮口にくっつけ、思いっきり射精する。中の赤ちゃんが溺れてしまうと思えるくらい、大量の精液が吐き出される。目の前がチカチカすると同時に、とてつもない快感が股間から全身に広がる。

これは……ハッキリ言ってかなりヤバい。快感と背徳感で、どうにかなってしまいそうだな。

「あがつ？はひつ？ひいつ？」

射精した瞬間、またしても先輩のNカップ爆乳から大量の母乳が溢れ出す。足下が更に白く染まり、むせ返りそうなミルクの匂いが周囲に広がった。

ちよつとは我慢してほしかったな。周りの人に気づかれるだろうが、このド変態ミルクサーバーオナホがよ。

「おゝゝゝ??おにやかあ?あつたかあい??あかちゃんもお?ごくごくしえーえきのんでる??」

とろけたような声を上げ、メスの液体を垂れ流す先輩。ここだけミルクの海になってしまっている。

べつに工業廃水とかじゃないから、いくら垂れ流しても平気ではあるんだが。全部人体から精製された有機化合物だからな。

「はあ……?はあ……?最初からトックスピードだねえ、後輩くん??」  
「そつちから誘惑しといて、よく言いますね」

青姦、水着、彼女。そんな興奮しかない要素が揃ってたら、そりや犯しまくるに決まってる。

むしろ、一発だけで理性を取り戻した事を褒めてほしいものだ。

「ふふ?もう一回するかい??」

こちらに向き直り、おまんこを広げてみせる先輩。両手で割り広げたそこから、出したばかりの精液がゴポゴポと溢れ出す。

ああもう、マジでこのオナホは色狂い過ぎる。このままだと、合宿一日目がセックスだけで終わることになるんだが。

「そうしたいのは山々ですけど、あんまり戻らないと二宮とかが探しに来ちゃいますよ?」

「いいじゃないか?見つかったら一緒にセックスすればいいだけさ

「？」

もつともらしい事を言っているように見えて、完全に論理が破綻している。

そりや僕だって、時間があればもつとセックスしたいけども。でもそうはいかない。時間は有限なのだから。

「おや？時間を気にしてるのかい？じゃあこうしようか？」

「だからナチュラルに心読まないでください」

もう神様の権能を隠そうともしなくなってるな。矮小な人類には、良い事なのか悪い事なのか判別がつかないけども。

「それ？」

パチン、と先輩が指を鳴らす。すると、周囲の景色が逆再生したように巻き戻り始めた。

「は……？」

人間を含めた動植物どころか、さつきさんざん汚した足下の海も綺麗な青色に戻っている。

「さ？これで思う存分セックスできるね？」

「ええ……？」

脳の理解が追いつかないんだが。

これも神様パワーを行使した結果なのだろうか。

もう何でもアリだな。

「来て？後輩くん？」

先程と同じくおまんこを広げ、こちらを誘惑する金髪碧眼Nカップ爆乳オナホ。

そつちがその気なら、とことんやってやろうじゃねえか。

「途中で、やっぱりやめたなん？言わないでくださいね」

「もちろん——ほん”ぎゅお”っ！！」

欲望のままに、正面から勢いよくチンポを突き入れる。

その一突きを合図に、無限に続く第二ラウンドはここに開始されたのだった。

海に来たのにやるのがいつもと変わらない淫乱N  
カップ生オナホ先輩

「ふう？いや、満足満足??」

精液でぽっこり膨れたお腹をさすりながら、先輩が幸せそうに笑う。

体感で三時間以上ブツ続けでセックスしたら、そりゃ満足もするだろうよ。してもらわなきゃ困る。

「今更ですけど……沖繩に来て、一番初めにやるのがセックスなんですか」

「本当に今更だね？いいじゃないか？気持ちいい事はどこでやっても気持ちいいものさ?」

それはそうだが。

「そ・れ・に?後輩くんもノリノリだったじゃないか?」

沖繩の清涼な空気にそぐわない程、先輩は蠱惑的な笑顔を浮かべる。

まあ、ノリノリだったのは否定しない。というか、そんなドスケベ水着見せられたら、性欲が湧き上がってくるのは必然というか。

「さて?じゃあみんなと合流しようか?」

「その前に……そのお腹に溜まった精液、掻き出さないとですよ」

「ああ?これなら心配無用さ?」

先輩が笑うと同時に、目に見えて先輩のお腹がしぼんでいく。

おまんこからは一滴だつて垂れてないんだが、いったい何が起こつているのだろうか。

「ふふ?お腹の子も後輩くんの精液が大好きなようだね?子宮に出された精液、残らず飲み干されてしまったよ?」

「ええ……」

「これでは生まれる前から淫乱になってしまうねえ?あ、ちなみに女の子だよ?」

「いや、そこじゃないです」

重要なのはそこじゃないんだわ。なんで赤ちゃんが精液飲み干してるんだよ、おかしいだろ。

やっぱり神様の子供ってのは、人間の常識では測れない存在なのだろうか。

「神様の子である前に、君の子供でもあるんだけどなあ？後輩くん？」  
「だから、ナチュラルに心読まないでください」

ちよつとでも気を抜くと、すぐに読心してくるんだよなあ。そこら辺のモラルの無さは、かなり神様って感じるけども。

「そろそろ凜花ちゃんたちも、着替えが終わった頃なんじゃないかな？」

「実時間では何分ぐらいセックスしてた計算になるんですか？」

「ほんの五分程度さ。あまり皆を待たせても悪いからね」

「そうですね」

五分かあ……やっぱ神様の不思議パワーヤバいな。三時間のセックスが五分になるとか、時間の概念を無視しすぎだろ。

「あ、いたいた。おーい」

浜辺に集合していた皆に、先輩が声を掛ける。

二宮と一之瀬と——あれ、名取先輩とアリス先生の姿が見えないな。まだ着替え終わってないのだろうか。

「あつ、どこ行ってたんすか先輩！」

「ああ悪い。ちよつとトイレに」

「ミント先輩と二人でツスカ？」

「うっ……」

青いパレオ型の水着を身に纏った二宮が、ジトツとした流し目でこちらを睨んでくる。

痛い所突いてくるじゃないか。成長したな、二宮。

「ハンツ！ どうせミント先輩にフェラチオでもさせてたんでしょ！」

「いや、そんなことは」

「死刑よ死刑！ 北条は即刻死刑よ！」

「話聞いてくれ、頼むから」

身体を覆うような、ドレス風の水着に身を包んだ一之瀬が、射殺するような瞳で睨んでくる。

「とうか、真つ昼間のビーチでフェラチオとか言うな。周りの人に聞かれたらどうするんだ。」

「ふふ?二人とも妊娠初期だから気が立ってるのかな?」

「ひゃう!?!」

「あひゃん?」

そんな二人の怒りを鎮めるべく、先輩が水着に包まれたおっぱいを驚掴みにする。

二宮の巨乳と、一之瀬の貧乳。それぞれが小さな手によって、いやらしく形を歪ませていた。

「妊娠初期はホルモンバランスが崩れて精神が不安定になりがちだからねえ?こうして定期的にガス抜きしてあげないと?」

「ひいひいひいっ?!?!ちくびカリカリ駄目ツスうううう?!?!」

「の、伸びるう?!?!ちくび引っ張られて?ちっぱいちくび伸びちゃううううううう?!?!」

熟練したテクニクで乳首をいじめられ、二人はあつという間に絶頂する。

妊娠初期ということで、流石に母乳は出ないようだ。その代わりと言わんばかりに、股間からは勢いよく潮が噴き出していたが。

「おやおや?海に入る前に、もう股間と太ももが濡れてしまったねえ?」

「先輩、そのへんにしてやってください。流石に気づかれちゃいますよ」

「大丈夫さ?このくらいのスキンシップじゃ気にならないように、認識を弄ってあるからね?」

「何してんですか」

いや、本当に何してんだ。フリーダムすぎるだろ、このフリーダムNカップ爆乳マイクロビキニドスケベ女神オナホはよお。

「おやおや?旅行前に説明しただろう?凜花ちゃんと陽毬ちゃんのお腹が目立たないようにするって?」



白い砂浜に落ちた、大量の白濁本気汁。これはもう、芸術作品と言って差し支えないんじゃないだろうか。

「すっごい声だね?こんなドスケベな声出したら、周りの人に気づかれちゃうかも?」

その時はその時だ。それに、バレるかもってスリルがあつたほうが興奮する。人間ってのは、そういう背徳感にすら快感を見出す生き物だからな。

ああ、アリス先生と露出ペットプレイをした時を思い出すな。あの時もチンポがヤバいことになってたっけ。

「あ、あああああ………??」

「おひつ、ひいいいい………??」

ト口顔を晒しながら、股間から白濁本気汁を垂れ流す水着の美少女。

うーむ、エロい。果てしなくエロい。ムラムラが止まらなくなる。

「ふふ?エッチだねえ?」

周囲を濃いメスの匂いが埋め尽くす。強い日差しと激しいアクメで、汗が流れて匂いが増す。

「そうですね……めちやくちやエロいです」

さつき先輩とめちやくちやセックスしたばかりなのに、キンタマで次の精子が作られている。目の前のマゾメス共を、隅々まで食らいつくせと叫んでいる。

「するかい??青空の下で、水着セックス??」

「いいんですか?」

「もちろん?でも、あんまりやりすぎると——?」

乳首から手を離し、できあがった二つのマゾメス水着オナホルの手を引く。

先輩を含め、目の前に極上の柔肉が並べられる。

「本当に見つかっちゃうかもね??」

そう言い残して、先輩はメスガキのように笑った。







「こつち?こつちツスう?」

「こ、この母親失格メス豚のトロトロおまんこにい?かたあいおちんぽしやま?思いつきりブチ込んでくださあい???」

ケツを振りながら、水着の股布をずらし、割れ目を開いてアピールしてくる両者。

視覚的なエロさで言えば同点くらいだ。なのでここで重視するのは、おねだりのセリフ回し。

「よし、そこまで言うなら一之瀬からだな」

「そ、そんなあゝ!?!」

「あはあ?ありがとうございますう?おちんぽしやまあ???」

よく覚えておけ、二宮。欲しいものがあるなら、それを手に入れるためにアピールは必要不可欠なんだ。

いや、それにしたって一之瀬のセックスアピールは積極的すぎたけど。

(いつもとは大違いだな……旅行先だからって浮かれてるのか?)

あの一之瀬に限って、そんなことは無いと思うが。でも世の中には夏の魔物ってやつが存在しているらしいし、その可能性も無くはないか。

というか——そんな意味のない事をごちやごちや考えている暇があったら、目の前のメス肉を食うべきだろう。こうしている時間ももったいない。

「あっ???」

海パンをずり下げ、そそり勃ったチンポを白昼に晒す。その威容を見て、一之瀬が嬉しそうな声で鳴いていた。

真つ昼間のビーチで下半身を露出させるとか、完璧に変態なんだよな。いや、メスオナホの乳首つねってイかせてる時点で、だいぶ今更か。

「挿れるぞ」

「どうぞ来てくださしい?偉大なるおちんぽしやまあ??夏の日差しよりもアツアツのおまんこでえ?お迎えさせていただきましゅう???」

チンポを求めて、くぱくぱつ?と蠢く一之瀬のガチペドロリおまん

こ。

散々ヤツておいて今更だが、一之瀬とのセックスは犯罪臭がすごい。今はロリボテ妊婦なんて属性まで付いてるのだから、背徳感がヤバすぎる。

「おっ???」

小さな入口に、亀頭が触れる。そのままゆっくり腰を突き出せば、ペドまんこが淫らにチンポを呑み込んでいく。

なんだ、この貪欲すぎるおまんこは。赤ちやんが入ってるつてのに、構わず奥までフリーパスなんだが。

「あ?あ?あ?ああっ???!」

ゆっくり、ねっとり。普段の獣みたいなセックスから見れば、お遊びみたいな速度でチンポが沈んでいく。

先輩は大丈夫って言ってたけど、それでも赤ちやんが居る事にならない。最初は慎重にいこう。

「こ、これえっ?!?おまんこのひだひだでえっ?!?おちんぽしやまを思いつきり味わつちやううっ?!?あっイグっ?!?イグイグうううっ?!?」  
子宮口まで届く前に、一之瀬は全身を震わせてガチイキした。結合部からドロリ?と白濁本気汁が溢れ出し、既に射精したのかと疑う状態になっている。

いや、さすがにクソザコおまんこ過ぎないか。まだ一往復もしてない内に絶頂したんだが、このガチペド変態マゾまんこオナホ。

「ほひっ?ひっ?おちんぽしやまあ?あちゆいよお?たくましいよお?うへへえ??」

まさしく夢心地といった様子で、一之瀬は淫らな声を上げる。  
なんか、前よりも明確にクソザコになってないか?

「おやおや、ずいぶんと顕著に効果が現れたねえ?陽毬ちゃんもずいぶんと素直になったじゃないか?」

「先輩の仕業ですか、これ」

トロトロにとろけた一之瀬の姿を見て、先輩は満足そうに笑った。  
なんか様子がおかしいと思ったら、やっぱり何かしてやがったか。

「なあに、そう大した事はしてないさ?ちよつと素直になれるように

薬を盛っただけだとも?」

「してるじゃないですか、大した事」

何でもない事のように、先輩は笑みを深める。パラソルで影になっているせいか、その顔は闇に覆われたように真っ黒に見えた。

後輩に薬を盛るのは充分ヤバイ事だろ。いやまあ、先輩と、後輩と、同期と、果てには先生とまでセックスしてる奴が言えたことじゃないとは思うけども。

「あ、飛行機の中で一之瀬に渡したっていう酔い止め……」

「察しが良いじゃないか後輩くん?陽毬ちゃんが飲んだ薬は、酔い止めなんかじゃない——本能を増幅させる薬だったのさ?」

本能を増幅させる、か。なるほど、それでこんなに一之瀬はトロトロになってる訳だな。

おおかた、セックスしたい欲が溢れ出たか。いや、それいつもと変わらないじゃん。いつも通りじゃん。

「ズルいつスう?あたしもチンポ欲しいツスう?」

「えへへえ?おちんぽしやま美味しいのお??」

「二宮にも盛ったんですか?」

「いいや? 凜香ちゃんは完全にシラフだとも」

水着の中に手を入れて、ぐちゃぐちゃと中身をかき回す二宮。いやらしい水音が、綺麗なビーチに響き渡る。

一之瀬と大差ない状態じゃねえか。いよいよ本格的に、薬のせいなのか、いつも通りなのか、よく分かんなくなってきたな。

「難しく考えなくて大丈夫さ、後輩くん」

ゆったりと、子供に諭すような声色で、先輩は言葉を紡ぐ。

「君はただ、気持ちよくなればいい?目の前に並ぶ極上のボテ腹オナホで、思う存分?性欲を発散させれば良いのさ??」

そうかな……そうかも。

「お??」

中ほどまで入っていたチンポを、一気に奥まで押し込む。不意打ちで子宮口を叩き潰されて、一之瀬は間抜けなオホ声を上げた。

そうだな。難しいことは考えずに、単純に楽しめばいい。

「お望み通り、ブチ犯してやる。覚悟しろよ、このガチロリド変態ボテ腹オナホが」

「ひゃっ??ひゃあい??」



「普段は毒舌でツンツンしてる所も、セックスが始まればトロトロになっちゃう所も、研究にかける情熱も、全部大好きだ」

「あつ……？あつ……？ああつ……?!?!」

奥まで染み込むようにゆっくりと、一之瀬の好きな部分を挙げていく。

実際、一之瀬の性格は好みだ。生意気で気が強いところから、一気に甘々になるギャップが特に。

「あつ……?!?!あたしもっ？ほうじょうのこと好きいつ?!?!」

「ああ、知ってる」

好きじゃなかったら、こうしてセックスしないもんな。

「しゅきっ？しゅきしゅき？だいしゅきいつ?!?!」

「先輩と比べたらどっちが好きだ？」

「ミントしえんぱい……?!?!」

「だと思ったよ」

セックスして双子の赤ちゃんまで作ったのに、やっぱり一之瀬の一番は先輩なんだなあ。

ま、それも一之瀬らしくていいけど。こっちも一番は先輩な訳だし——こう見るとライバル関係なんだよな。

「ふふ？フラれちゃったねえ後輩くん？」

「茶化さないでくださいよ」

当の本人がそんな調子じゃ、こっちもどんな顔すればいいか分からないんですけど。

「笑えばいいと思うよ？」

「やかましいですよ」

だから心を読むなって言ってるんでしょうが。また呂律が回らなくなるくらいブチ犯しますよ。

「だしてえく？しえいえき出してよおく?!?!」

「おうっ……急に締め付け強くすんな」

先輩と軽い漫才をしていたら、一之瀬のおまんこがキュウツ？と締まってチンポに刺激を与えてきた。

危うく半端に出るところだったんだが。まったく、油断も隙もねえ





艶やかな背中が丸見えになっている事に。

身体の奥から湧き上がる欲望に身を任せ、その白い背中に舌を這わせた。

「ひゃわあっ????」

当然、背中を舐められた一之瀬は可愛らしい悲鳴を上げた。しよっぱい。

しかし、不味くは無い。端的に言って、クセになるような味だった。現役ガチペドロリ女子大学生の汗……ある意味でめっちゃ貴重な代物かもしれないな。

「な、何するのよ北条!」

「あ、戻った」

まだ繋がったままではあるが、快感とは別種の衝撃で正気に戻ったようだ。

おそらく、薬の効果時間も切れたのだろう。もうちよつとトロトロの一之瀬を見ていたかったが、仕方ない。

「今回はずいぶん乱れてたな、一之瀬」

「う、うるさいわね……」

「だいしゆき、とか言ってなかったか?」

「だからうるさ——んぐつ……?あ、あっ????」

まだ固さを保っているチンポを、ゆっくりとキツキツおまんこから引き抜く。たったそれだけの動きでも、敏感になった一之瀬の身体は勢いよく潮を噴いていた。

「はあっ?はあっ?ほ、ホント?北条ってデリカシー無いわね?」

「普段から暴言吐きまくってるお前にだけは言われたくないな」

まあ、それも照れ隠しだって分かってるけどな。今回先輩が飲ませたのは『本能を増幅させる薬』だ。

ということつまり、一之瀬の大好き発言は心の底から——本能から出たものという訳で。

「クツクツク」

「な、なによ。そんな悪役みたいな笑い方しちゃって……」

「いや、やっぱり一之瀬のこと好きだなあって」

「は、はあっ!?!い、いきなり何言つて…!?!」

同期つていう、先輩や後輩とは違って気軽に触れ合える距離感が良いんだよな。

悪友であり、セフレであり、先輩が好きな恋のライバル同士でもある。

なんとも歪な関係性だが、一之瀬との距離感はこのくらいがちょうどいい。

「ふ、ふんっ！ あたしなんかにうつつを抜かしたら、いつかミント先輩のこと寝取っちゃうんだからねっ！」

「おう、頑張れ」

「ムキーー！ 余裕綽々なのが鼻につくー！」

一之瀬には頑張ってもらつて、ぜひ先輩を寝取ってもらいたい。その後、秒で寝取り返してやる。

ああ、一之瀬が必死で上げた成果を一瞬で無に返すの、最っ高に楽しいだろうなあ。

「いい雰囲気のところ悪いんだけどね？あれ、どうにかしないと脱水症状起こしちゃうよ?!」

「え?」

一之瀬との漫才を続けていたら、唐突に先輩から声がかかる。

相変わらずのニヤケ面で、あらぬ方向を指をさしていた。視線を動かし、その先を見てみると――

「おゝゝゝゝゝっ?!!あゝゝイグっ?おゝゝイグっ??イグイグイグっ? イツグうゝゝゝっ?!!」

おまんこをほじくり回し、連続アクメに耽っている二宮の姿があった。

水辺でもないのに砂浜には大きな染みが作られ、片っ端から蒸発して濃厚なメスの匂いを振りまいていた。

「あ、やっべ。流石にはっとき過ぎたか」

「ふふ?相変わらずの鬼畜っぷりだねえ、後輩くん?」

狙つてやったわけじゃないんだけどなあ。

「んゝゝゝゝっ?!!」





「そ、それに？ぶつきらぼうに見えてめっちゃ優しいツス??」  
「それから？」

「あと——チンポがでっかいツス??」

「やっぱりチンポが好きだけじゃねーか。」

「お仕置きだな、こりゃ」

「あ？——ふんぎゅおっ??」

勢いよく腰を突き出して、思いつきり子宮口をどつき上げる。纏わりついてくるひだひだの膣肉を振りほどき、奥の弱点を徹底的に責め続ける。

赤ちゃんが入ってるつてのに、精液求めてクパクパしやがって。早産でもしたらどうすんだ、反省しろこの母親失格のマゾメスオナホが。

「言葉責めのお手本を見せてやる——覚悟しろよ」

「ひいっ??」

火照った身体を抱きしめ、愛の言葉を囁く。好きな所、魅力を感じる所、可愛い所。

心の奥から湧き出す感情を、言葉に整形してぶつけていく。

「まずはそのトロ顔だな。普段は威圧感を与えるツリ目なのに、セックスしたらすぐトロトロになって目尻が下がってくるの、最高にチンポにクる」

「ひうっ……??」

「次に、この身体だな。身長高いし、おっぱい大きいし、ケツもデカいし。元気な赤ちゃん産んでくれそんな身体だと思うぞ」

「はああ……??」

「最後に、その大型犬みたいな人懐っこい性格だな。話したり、リアクション取ったり、その度にかわいいと思ってたんだ」

「ふおおおおおお……??」

ゆったりとしたピストンに移行しながら、耳元で囁くように告げる。快感と言葉が肉体を通して繋がり、心に染み渡っていく。

その証拠に、先程よりも結合部からあふれる本気汁の量が段違いだ。ここが砂浜じゃなかったら、足下が本気汁溜まりになってる所





ぱっ?ちゅううううう——ぶはあっ?!!???

「ぶは……ちそうさま、凜香」

「あへへ……う?ふひひ……う?」

濃厚なディープキスで骨抜きになった凜花の膾内から、ゆつくりとチンポを引き抜いていく。

引き抜く際に五、六回ほど絶頂してたが、まあ誤差だろう。

「うわあ……せつかくの可愛らしい余韻が台無しですね……」

「まあ後輩くんだしねえ?」

気絶した凜花を抱えて二人の元へ歩いていけば、何やら呆れたような視線を向けられた。

何か間違ったような対応したかな。自惚れでもなく百点満点だったと思うんだが。

「っていうか北条! 凜花のこと名前で呼ぶなら、あたしも名前で呼びなさいよ!」

「一之瀬はまだダメだ」

「なんでよ!」

ほうじようポイントが足りてないからな。もう少し優しく接してくれたら、速攻で溜まるぞ。

「ふふ?名前かあ?」

「先輩も、名前で呼んだほうが良いですか?」

思えば先輩も、先輩としか呼んでいない。名前で呼ぶべきなんだろうか——付き合ってる、んだし。

「いや??後輩くんには本当の名前で呼んでほしいからねえ?その時まで、楽しみは取っておくことにするさ?」

「本当の名前……」

そうか。先輩には人間じゃなく、神様としての名前が別にあるんだった。

たしか、ニャルラトホテプって言ったような。何となく可愛い響きの名前だな。

「いつかその時が来たら……本当の名前で呼んでもいいですか?」

「もちろんだとも?とびつきりイケボで呼んでくれたまえ?」



イケボで。別に声には自信無いんだが。

「な〜んかいい雰囲気だねえ〜?」

「うおっ、ビックリした」

後ろから、最近になって聞き慣れた声が聞こえてきた。

凜花をビーチチェアに寝かせ、振り返る。

「どこ行ってたんだ八尋、遅かったじゃない——か?」

振り向くと、そこには。

「ごめんなさ〜い?ちよつとお?野暮用があつてえ〜?」

「おいハスター、御託はいい。さつさと本題に入れ」

黄色い極小スリングショット水着の八尋と共に、水色っぽい青髪を靡かせた、競泳水着を身につけた長身爆乳美少女が立っていたのだった。

いや、どちら様ですか?

「我はクトウルフ。海底都市ルルイエに眠る、偉大かつ冒瀆的な——海の神である」

あ、ナチュラルに思考読んでくる。

本物ですね、これ。

## 仇敵

時間は戻り、北条たちが沖縄に着いた頃。

「むむ」

人間に擬態した邪神・ハスターこと八尋寧々は、眉を寄せながら沖縄空港に降り立った。

歩いただけで、だぶん？とOカップ爆乳が揺れ、周囲の視線が釘付けになる。

「どうかしたのかい？」

そんな意図せず発生したドスケベ空間に、もう一つの超巨大おっぱいが現れた。

赤いアロハシャツに包まれたNカップ爆乳が、どぶん？と揺れ、周囲の視線を奪い去る。

「ずいぶんと険しい顔をしているようだけど。美人が台無しだよ？」

人間に擬態した邪神・ニヤルラトホテプこと三峰ミントは、首を傾げながら寧々の方を見つめた。

寧々の肉体がミントの肉体を雛形としている事もあって、二人の見た目はよく似ている。知らない人間が見たら、姉妹かと勘違いするレベルだ。

「別に……って言いたいけど、ちよつと無視できない殺気を感じちゃってさ」

「ああ、ここは海に囲まれた離島だからねえ。当然といえば当然かな」  
納得したように、ミントは頷く。その様子を見て、寧々は更に顔をしかめた。

「無視していい……？」

「あまりオススメはしないかな。アイツ『来ないならこっちから行くぞ』ってタイプだしね」

「封印されてるくせに……」

「アトラの蜘蛛が、依り代を用意したみたいだからね。ほら、これ口グ」

トン、と軽く頭を小突かれると、邪神たちによる冒流的な会話が頭

に流れ込んでくる。

普通の人間が見たら発狂必死なその情報を、寧々は呆れた顔で読み流していった。

「マジじゃん、あのワーカーホリックめ……ってというか、コレ見る限りアンタのせいでもあるっぽいんだけど!？」

「ははは、そんな訳ないだろう。よしんばわたしの所為だったとしても、それは後輩くんを拐ったキミが元凶でもある。つまり、自業自得という奴さ」

「むぐう……!」

無駄に回る弁舌で、寧々を説き伏せる事に成功したミント。ぐうの音も出ないとはこの事か。

ひとしきり唸って頭を抱えた寧々は、観念したように顔を上げた。

「あーもう分かったよ! ボク直々に行けばいいんでしょ! 行けば!」

「ふふ。面白い土産話、期待しているよ」

「死ね!」

シンプルかつこの上ない罵声を飛ばしながら、寧々はくると踵を返した。

そうしてそのまま、研究室のメンバーが出ていった出口とは別の出口から外に出る。

「あつっ……」

扉を開けた瞬間に感じる、圧倒的な夏の空気。寧々の憂鬱を加速させるには、これ以上ない気候であった。

「はあ……さっさと済ませよ」

空港を出て、徒歩五分。

沖繩の海が一望できる展望台に着いた寧々は、おもむろに着ていた服を脱ぎ捨てた。黄色いワンピースが空に舞い、そして虚空へ消えていく。

邪神ともなれば、衣服の収納など自由自在なのだ。

「はあ……この身体でアイツに会いたくねえ……」

ボテッ?と膨らんだ自身のお腹を触りながら、寧々はため息をこぼ

す。

お腹に宿っているのは、七つ子の赤ちゃんだ。数が数な上に人間の赤ちゃんではないので、妊娠初期なのに臨月かと疑う程に腹が膨れている。

「重いし、動きづらいし、殺し合いになったら勝てる気がしないんだけど」

愚痴をこぼしつつも、お腹を撫でる寧々の顔は穏やかで幸せに満ちている。それは普段のメスガキ顔とは似ても似つかない、母の顔だった。

「しゃくない、覚悟決めますか……お？」

そう呟いた直後、海面から異形の姿が顔を出す。人間と魚を掛け合せたような、人間が魚に変貌したような、冒瀆的な姿。

先程の慈愛に満ちた笑顔から一転、寧々は表情を険しくする。身重とはいえ、深きものどもに遅れを取る程なまってるない。

「さっそく刺客……やることが陰湿というか、なんというか……やるなら相手になるけど？」

「E<X>く全X、<(%)\*」

「へえ……？ 珍しいこともあるもんだね、話したいことがあるなんて」人間には聞き取れない言葉を理解し、戦闘態勢を解く寧々。

なんだか肩透かしを食らった気分だ。

「.;#・ΘS、XZΘ?。」

「え、そのために服を脱いで待ってたんだらうって？ いや、そっちが拒否しても無理やり殴り込みに行くために脱いだんだけど」

「%ーo・Eρ……」

自由奔放で好戦的な寧々の言動に、深きものどもは早速胃を痛めていた。

神話生物といえど、その実態はブラック企業の下っ端社員と同じ存在。上司、もとい上位存在の破天荒さに振り回されてばかりなのだ。

「そんじや遠慮なく——お邪魔しま〜す」

ザボン、と躊躇なく沖繩の海にダイブする寧々。そのまま海の中を漂い、深きものどもの先導について行く。

もちろん息継ぎなど必要ない。ガワは人間とはいえ、その本性は邪悪な神話生物だ。この程度の環境変化じゃビクともしない。

「色鮮やか……こういうのを、人間の感性では綺麗って表現するんだっけ……お？」

そうしてしばらく海の中を進んでいると、目の前に巨大な神殿が見えてきた。

海底都市ルルイエ——にある小型神殿のレプリカだ。分譲住宅というやつである。

「さてさて、どんな罫が待ち構えてるのかな」

気怠げに、だが警戒は怠らず。寧々は慎重に神殿の門をくぐった。「よく来たな、ハスター」

するとそこには、巨大な玉座に腰掛ける、水色っぽい青髪のシカツプ爆乳長身少女が存在した。そして当然のように全裸である。

ふわふわと水中に浮かぶ爆乳が、普通のシチュエーションでは拝めないエロスを生み出していた。

「えつと……クトウルフ？」

「他の誰に見えるというのだ。目玉が腐ったか？」

「いや、誰だっけ見間違えるでしょ、その姿は」

普段の邪神に相応しい容姿とは打って変わって、今のクトウルフは誰もが認める美少女だ。

黄金の比率で整った顔パーツ。雄大な海を思わせる青髪。サファリアを思わせる青い瞳。

どこを切り取っても、絶世の美少女という単語が相応しい。

「アトラの蜘蛛が拵えたものでな。中々に心地が良い」

「人間キライじゃなかったっけ？」

「好かんとも。だが、それは精神性に限ったもの——肉の器に嫌悪感など抱かん」

「そりやまた、成長したねえクトウルフ」

数千年会っていなかった間に、いつの間にか成長していた仇敵。それを貶すでも馬鹿にするでもなく、寧々は素直に称賛した。

お互いに随分丸くなったと言える。まあ、寧々の方は物理的にも丸

くなっているのだが。

「で、ボクに話って何なのさ」

「その前に——その腹はどうした」

呆れたような、訝しむような、不思議な表情でクトウルフは寧々のボテ腹を指差した。

まんまるに膨らんだお腹をさすりながら、寧々は呑気に喋り始める。

「ああ、コレ？　コレはねく……『色欲』の原罪を宿した人間ちゃんにブチ犯されて、七つ子を孕まされちゃったの！」

「ほう、七つの原罪か」

ニタア？と、ちよつと見せられないレベルの淫らで冒瀆的な笑顔を浮かべながら、寧々は嬉しそうに言葉を紡ぐ。

そんな寧々の様子も気にせず、クトウルフは眉を寄せて思案を始めた。

「もしや、その人間とは——ニヤルラトホテプの伴侶ではないか？」

「あつたり〜！　なになに、クトウルフもニヤルの恋人のこと知ってたんだ〜！」

「不本意ながら……な。今日貴様を呼んだのは他でもない、その人間について話をするためだ」

玉座から立ち上がり、クトウルフは告げる。

「単刀直入に言う——ニヤルラトホテプの伴侶をNTRしたい」

「なんて？」

寧々は、自分の耳が腐ったのかと錯覚した。

「あのクソ生意気な自称トリックスターの最も大切なものを奪い、絶望させてやるのだ！　ああ目に浮かぶぞ、泣きべそをかいて我の前に跪くニヤルラトホテプの姿が——クツクツク、ハーッハッハッハ!!!」

「ええ……」

上機嫌に、高笑いまでして、クトウルフは自らの作戦をひけらかす。

しかし、そんなクトウルフの姿を見ている寧々はいえ、既視感しか感じていなかった。

(これ、この前のボクじゃん……)

ニヤルラトホテプの伴侶を誘拐し、逆に分からせられた自分そのものだと感じていたのだ。

当人に恥をかかせたいが為に、伴侶を狙った点まで共通している。やはりライバルだと思えば回路も似るのだろうか。

(うーん……まあ面白そうだしいいか！)

この黄色が好きで邪神、無貌の神ほどではないが、面白そうなのが好きなタチであった。

もちろんそれだけというわけではなく『ここで頼みを断ったら殺されそうだな』という心配もあったからだ。

つまり北条を生贄に捧げたのだ、この邪神。正しく人の心を持たない邪神の所業であった。

「いいよ、手伝ってあげる」

「そうか」

「えくつとねく……拐ったりする姑息なやり方だとまず成功しないから、真正面から突破しよう」

「真正面から、だと？」

訝しむクトウルフに、寧々は——ハスターは告げた。

「その魅力的なおっぱいとおまんこで、人間チャンを骨抜きにしちやおうってコト??」

絶対に成功しないであろう作戦を、性に無知で無垢な邪神に向けて。

海の神だろうと濃厚デープキスでメロメロにして  
ハメ潰す色欲後輩くん

競泳水着を身につけた長身爆乳美少女さん——クトウルフさんは、  
尊大な雰囲気を纏った瞳でこちらを見下ろしていた。

でっかいなあ……色々と。

「やあやあクトウルフ、君まで来たんだねえ。珍しいこともあるもんだ」

「先輩、知り合いですか？」

「まあね。昔から色々要因縁のある相手さ」

神様同士でも知り合い関係があったりするのか。それは初耳だった。

何となく八尋の方に視線を向けてみれば、得意げに胸を張って黄色いスリングショートの極小水着をどたぶん？と派手に揺らしていた。エロ過ぎんだろ。

「寧々、陽毬ちゃんを連れて遊びにでも行ってきなよ」

「えく？　なぐんでボクがキミの命令を聞かなきゃいけないワケく？」

「今度、後輩くんといっしょに寝ていいよ」

「はいはい？　この八尋寧々ちゃんにおつまかせく？」

おそろしく速い変わり身、僕でなきゃ見逃しちゃうね。

というか、サラツと人を生贄にするのやめてくれませんか。

「それじゃあ行きましょつか、一之瀬センパイ」

「ちよっ！　い、いきなり何なのよく!？」

笑顔の八尋に手を引かれて、一之瀬はビーチの人混みの中に消えていった。

まあ、知らぬが仏とはよく言ったもんだな。

「それで、何の用なのかな？」

「ふん、お前に用など無い。我が求めるものは——お前だ、人間」

「え、僕ですか」



ビシツと、こちらに向けて指をさすクトウルフさん。凜々しい声  
が、沖繩のビーチに響いて消える。

なんとなく、そんな気はしてた。

だって、出会ってからずっと視線向けられてるし。先輩の方に見向  
きもしないし、何なんだこの人。

「後輩さんに用事？ 悪いけど、わたしたちもこう見えて忙しくて  
ねえ……また今度にしてくれるかい？」

「断る。なぜ我が、お前の言い分を聞かねばならんのだ」

「おわっ」

無遠慮に腕を掴まれる。咄嗟の事で反射的に振りほどこうとした  
が、ビクともしなかった。

めちやくちや力強いな、この人。華奢な見た目してるけど、見た目  
通りの力じゃない感じ。

「さあ来い、人間。我と共に——」

「おい」

クトウルフさんの細腕を、先輩が掴んで引き離す。その瞬間、細い  
腕が回転してねじり上げられた。

うわー、グロ……なんか肉と骨が混ざり合ってるんですけど。アレ  
どうなってるの？

「人の恋人に手え出すんじゃないよ、タコ野郎」

「……ふむ」

一瞬で片腕が肉塊になったというのに、クトウルフさんの反応は薄  
い。

痛くないんだろうか。少なくとも自分の腕があんな有り様になっ  
たら、僕は間違いなく気絶する。

「触っただけでその怒りよう——やはり、我の見立ては間違っていな  
かったようだ」

「ふん。ハスターと違って、お前は何するか分からないからね」

「うわグロお……」

次の瞬間、クトウルフさんの腕は復元を始めていた。メキメキと異  
音を上げながら、傷のない綺麗な腕に復元していく。

これも神様の力なんだろうか。神様ってすごい。

「ならば、その人間の方から来てもらうとしよう」

そう言うと、クトウルフさんはおもむろにガニ股の姿勢をとって腰を突き出した。けっこう勢いよく突き出したので、反動で上半身の爆乳が派手に揺れた。

うん、シンプルにエロい。さっきのグロさは何だったんだと言いたくなるくらいのエロさを放ってるんだが。

「無駄だよクトウルフ、後輩くんには認識障害の魔術を施してるんだ。オマケでどんな魔術もすべて弾くようにした、チート性能のやつをね」

「初耳なんですが」

「ちなみに認識障害っていうのは、グロいもの、物騒なもの、S A N 値が下がりそうなものがマイルドに見える魔術のことだよ！」

「だから初耳なんですが!？」

気づかない内にそんなもの掛けてたのか、先輩……っていうか、S A N 値ってなんだ？

「ふん、そんなものは承知の上だ——故に、抜け穴を突く」

「抜け穴？」

なんか漫画とかでよく見る能力バトルじみてきたんだけど……こういうのって大抵、先出ししたほうが負けるのがテンプレだよな。

あれ、じゃあ今の状況って結構ヤバイんじゃないやね？

「抜け穴って、そんなものわたしの認識障害にあるはず無いだろう」

「——『色欲』」

「っ！」

クトウルフさんの言葉に、一瞬だけ先輩が反応を示す。

もしかして、本格的にヤバイ感じですか。

「その小僧が持つ『色欲』の罪のせいで、性に関する魔術は効果が無いのだろう」

「なんでそれを……!？」

「ハスターがすべて教えてくれたとも。まったく、持つべきものは良き仇敵よなあ？」

「あんの黄色……！ 戻ってきたらシメる！」

なんか脳裏に、満面の笑みでダブルピースする八尋の姿が浮かんだ。

なんだ、その無邪気な笑顔は。アへ顔ダブルピースに変えてやろうか。

「つまり、こういう事だろう——さあ人間、我とセックスをしろ!!!」

「……はい？」

水着をずらし、おまんこを指で割り広げ、その奥に蠢くピンク色の肉を見せつけてくるクトウルフさん。

さつきまでのシリアス気味な空気が霧散し、代わりになんとも言えない空気が流れる。

いきなり何言つてんだ、この青髪爆乳全裸お姉さんは。

「クッククック！ 魅力的だろう、この肢体は！ チンチクリンのそやつより数億倍な！」

「チンチクリンじゃないが!? わたしはあえて低身長爆乳って属性を付与したんだが!？」

あーもうめちやくちやだよ。どうすんだよ、このぐだぐだになった空気。

「さあ、我のもとに來い人間！」

「行つちやダメだよ後輩くん！ 絶対ロクなコトにならないんだからね！」

なんか脳裏に、どの口が言つてんだオメーって呆れ返る八尋の姿が見えた。

うん、その点は八尋と同意見かな。トラブルメーカーが何言つてんだって感じた。

「……すみません、先輩」

「ちよつ、後輩くん!？」

白い砂浜を踏みしめ、クトウルフさんの方へ歩いていく。

先輩には悪いけど、クトウルフさんには一言物申さなきゃ気が済まない。

「おお来たか人間！ では早速セックスを——んぶうつ!??」



弛緩した太ももに手を這わせ、ゆつくりと中心に移動させていく。  
くちゆり、と粘つく淫らな音が聞こえた。

「まずはイク所から始めましょうか」

「ひっ？あっ？んぎっ!?!」

ぐぢゆり？ぐぢゆっ？クリクリっ??ずりゆりゆりゆりゆっ??ぐ  
ちやちやちやちやちやっ???

「んひいいいいいいいいいっ?????」でりゆうううう!!???  
うううううう!?!?!」

ぶぼっしや!?!ああああああああああっ???ぶぼぼっ?ごぼっ?ど  
ぼぼおっ??

「はい、よくイケました」

クリトリスとおまんこの入口を愛撫して、快感を脳裏に刻み込ませる。するとクトウルフさんは勢いよく潮を噴き出し、膣口から大量の本気汁を溢れさせた。

今まで見た中で一番の量と勢いだな。流石は海の神だ、水を操るのはお茶の子さいさいって訳か。

「な、なんりやいまのお……??？」

「潮吹きですよ。メス豚が気持ちよくなった時に出ちやうやつです」

「き、きもちよく……??」

さて、ここからが本番だ。

「本当のセックスってやつを教えてくださいますから——覚悟してくださいね?」

「は、はひっ??？」

最高に気持ちいいセックスを、その長身ムチムチLカップ爆乳処女ボディに教え込んでやる。

初対面セックスで処女をブチ破ってもきっちり気持ちよくさせる絶倫デカチンポ後輩くん

キスをしながら、乳首をつねる。

キスをしながら、お腹を撫でる。

キスをしながら、ケツを鷲掴みにする。

キスをしながら、クリトリスを押しつぶす。

「んむぶう・じゆるぶう・じゆるるるっ??」

キスによって目覚めた快感と、身体の性感を繋げていく。それによって、身体は快感を覚えていく。

ああ、初物の女体を開発して、メスオナホに変えていく瞬間というのは——どうしてこう甘美なんだろう。

「むぼっ? おぶっ? ぶじゆるるっ?」

挨拶代わりのキスで一時間、乳首と同時で一時間、お腹と同時で一時間、ケツと同時で一時間、クリトリスと同時で一時間。

計五時間、僕とクトウルフさんはキスをし続けていた。唇はふやけ、ほっぺたは唾液まみれ。青く澄んだ瞳は、すっかり快樂のピンク色に染まっていた。

「むおっ つぶうぶおっ??んうっ??」

「……………」

「むじゆるるるるっ??ちゆうううっ??ちゅっ?」

「……………いつまでキスしてるんだい、二人とも」

背中に呆れた視線が突き刺さる。先輩が時を戻してくれているとはいえ、流石に五時間はやりすぎたか……反省。

「……………」

「ぶはあっ??はあっ? はあっ? お、おによれにんぎえん??われに、??の  
ようなはずかしめ!——ほおおおおおおおおおおおおおおおおおっ  
!」

完全に開発したつもりだったが、まだ足りなかったらしい。目覚め  
たばかりの性感帯を順番になぞって刺激してやれば、クトウルフさん  
はオホ声を上げて絶頂した。手つかずの割れ目から、真っ白な特濃本











鬼ピストンを続けていると、急に膣肉が蠢きだした。

本能的に精液を絞り取ろうとしているな、この青髪ドスケベクソザコ無知無知オナホが。

「お望み通り、一番奥で出してやるよー!」

「なっ? やっ、やめっ——??」

ズドムツ——どびゆるるるっ! びゅぐぐぐっ! どぼっ! ど

びゆるぼぼおっ!???

「んぎいゝゝゝっ!??」

「くっ……! めっめっ絞られるっ……!」

膣ひだの搾精に逆らわず、キンタマに溜めた精液を思う存分解き放った。

背筋を快感が駆け抜けていき、チンポの先から凄まじい量の精液が子宮に注がれる。

「ほごおっ……!??んごっ……!??」

「ふう……めちやくちや気持ちよかったですよ、クトウルフさんのおまんこ」

射精を終えたチンポを抜き取り、身体を離して立ち上がる。眼下に見えるのは、潰されたカエルみたいな姿になった、青髪シカップ爆乳美少女だ。

股間から濃厚なオスとメスの匂いを漂わせ、無様すぎるアへ顔を晒しながら気絶している。

「お疲れ様だね、後輩くん? いやあ、しかしこれで三人目かあ? 順調に神様オナホが増えてきてるねえ?」

「……今更ですけど、ものすごい不敬な事してる気がしてきました」

「いいんだよ? どうせやることもなくヒマしてる連中ばかりなんだから? 思う存分、そのチンポで墮としてあげたまえ??」

「はあ……」

ノリが軽いんだよな。まあ、オナホを増やすって話なら望むところだ。

神様だろうがなんだろうが、全員纏めてオナホにしてやるよ。

## 邪神の逆襲

「ふござおつ……!?こつ?ここによお……!???  
!???'」

「あ、起きましたね」

「しぶといね、クトウルフ。もう勝敗は決しただろう?」

先輩と話していたら、のそのそと緩慢な動きでクトウルフさんが起き上がる。ただし、全身をビクビクさせ、疲労困憊といった様子だ。

さつきまで処女だったのに起きてくるの凄いな。普通のメスだったら、夜まで気絶コースなのに。

「み、認めん……?認めんぞ……?この我が、人間のチンポ如きに屈するなど……!?!」

「いい加減に認めなつて。エツチで後輩くんには勝てる存在なんて……ああ、お父さまならイけるかな。逆に言えばそれぐらいしかない——諦めたほうがいいよ」

お父さま……先輩ってお父さん居たんだ。いずれ挨拶しにいかなきやだな、娘さんを僕にくださいって。

「うるさあい!こうなつたら、強硬手段だ!」

「ちよつ、何する気ですか!」

ヤケクソにも聞こえる叫び声と同時に、さつきまで晴れていた空を暗雲が覆っていく。

神様の強硬手段つて、絶対ロクなことにならないだろ。今のうちに止めたほうがいいと思うんだが。

「ふうん……せいぜい面白そうな事をしてくれよ」

「ラスボスみたいなこと言っていないで、早く止めてください!」

すっかり暗雲に覆われ、悪天候に見舞われたビーチ。急な雨に降られた周囲の人混みは、徐々に少なくなっていく。

いやこれ、肝心の先輩はやる気なさげだし、これもうどうすりゃいいんだよ。

「クツクツク……『色欲』は無理だったが、その人間——そいつは何の力もないタダの人間だろう」

ニヤリと、あくどい笑みでクトウルフさんは笑う。そのまま右腕を

振り上げると、肘から先が無数の触手に変化した。

大量の触手が殺到する先には——マズい。

「凜花！」

気付いた時には、気絶したままの凜花に触手が殺到していた。ヌルの触手が、凜花の艶やかな肢体に纏わりつく。

とてつもなくエッチだ。触手プレイ万歳。

「おっと、下手な真似はしないことだなニヤル。この人間が死んだら『色欲』が悲しむぞ？」

「……チツ」

アホな事を考えていた間に、凜花はクトウルフさんによって囚われ、周囲の空気は剣呑と化していく。

これはもしや、シリアスな感じですか。そうですか。

「安心しろ、この人間は大事な人質だ。傷一つも付けたりせん——ニヤル、お前が素直に従えばな」

「……何がお望みだい？」

いやあの、シリアスなところ申し訳ないんですけど、股間からめちゃくちゃ精液垂れてますよクトウルフさん。

エッチなビジュアルのせいで空気が台無しになってますよ。

「そんなもの、決まっているだろう」  
「っ？」

今度はクトウルフさんの左手が大量の触手に変化し、先輩に殺到する。凜花と同じように四肢が縛られ、おまんこに極太の触手がブチ込まれた。

うむ、こつちもこつちで、かなりエロい。縛られて強調されたおっぱいが特に。

「お前から『色欲』を寝取る作戦は失敗したからな！ 今度は『色欲』からお前を寝取ってやろうというわけだ！」

「っ……？」

いや、クソ真面目な顔で何いってんだコイツ？

「覚悟しろ、ニヤル！ その綺麗なおまんこをガバガバにして、『色欲』のチンポを二度と啜え込めないようにしてやるわあ！」

「わ、ワー？コワイナー？ワタシドウナツチャウンダロー??」

そして先輩は驚くほど棒読みだし。さつきまでのシリアスな空気を返してくれ。

「クックツク……ハーツハツハツハ！ この二人を取り返したくば、直接我のもとに出向くのだな、人間！」

「いや、あの」

「もつとも、それまでニヤルのおまんこが無事である保証は無いがなあ！ ハーツハツハツハ！」

「あの、だから——ちよつとお!?!」

上機嫌に高笑いしながら、クトウルフさんは先輩と凜花を連れて海の中へ飛び込んでしまった。それと同時に、暗雲が晴れてビーチは元の明るさを取り戻す。

いや、これは……どういう状況なんだ？ 当事者の筈なのに、まったく現状が理解できない。

「先輩……凜花……」

ただ一つ理解できるのは、大切な人たちが拐われたということだけ。そして、それを取り返しに行く必要があるということも理解した。

そこらに落ちていた自分の水着を履き直し、気持ち新たにする。

「いや〜なんか変な天気だったね〜」

「海に入っていないのに、すっごいびしょ濡れになったんだけど……」

海を見つめながら呆然としてみると、遊びに行っていた八尋と一之瀬が帰ってきた。

タイミングがいいのか悪いのか……まあとりあえず、同じ神様である八尋に相談してみようか。餅は餅屋って言うしな。

「あれ〜ニヤル……じゃなかった、ミントちゃんと二宮センパイは〜?」

「ああ八尋……実はな」

腕を引っ張って一之瀬と距離を置き、耳元でさつきまでの経緯を簡潔に伝える。

かくかくしかじか、まるまるうまづま。

「ほくん、クトウルフがニヤルと二宮センパイをねえ……やるじゃん  
アイツ」

「で、こっからが本題なんだが——どうやって取り返しに行けばいい  
？」

「え、センパイってばマジ？ 本気で言ってる？」

「本気だが」

マジもマジの大マジだが。先輩のおまんこがガバガバになるのな  
んで、黙って見過ごせる筈ないだろ。

先輩のおまんこをガバガバに耕していいのは、僕だけなんだから。

「うくん……」

腕を組み、うんうん唸る八尋。爆乳Oカップおっぱいが両腕によつ  
て押しつぶされ、いやらしく形を歪ませている。

極小スリングショットでまったく隠せていないデカ乳輪が、ぷつく  
りと膨れて存在を主張していた。

(エツロ……)

こんな時だつてのに、めっちゃムラムラしてきた。だけど流石に  
襲つたりはしない。このムラムラも、二人を救出する原動力にさせて  
もらおう。

「それじゃあ、ビヤーキーちゃんを貸してあげよつかな。あの子と  
一緒なら、宇宙旅行したつて無事に帰つてくれるからね」

ビヤーキーっていうと、この前4Pセックスしたあの子か。それは  
心強いな。

「おいで、ビヤーキーちゃん」

八尋が指を鳴らすと、目の前の空間が歪み始める。その歪みから、  
小さな全裸の女の子が現れた。

地面まで届く黄色い髪に、背中から生えた蝙蝠のような羽根。そし  
て相変わらずの無表情。

「久しぶりだね、ビヤーキーちゃん」

「はい。お久しぶりございます、主様の伴侶殿」

「だから違うつてば。北条センパイはニヤルの恋人で……いや、アイ  
ツが居ない間なら、伴侶つてことにしても問題ないんじゃない？」

「いや問題ありまくりだわ」

クトウルフさんに続いて、八尋まで寝取ろうとしないでくれ。もう既にお腹いっぱいなんだ、NTRは。

「バカなこと言ってるんで、早く二人を取り返しに行くぞ。案内頼む、八尋」

「えく？ ボクも行くのく？」

「手伝ってくれたら、お前の気が済むまで肉デイルドとしてチンポ使っついでいいから」

「ふっふっくん!?このハスターこと、八尋寧々ちゃんにまつかせなさくい!?!」

「チヨロい……」

相変わらずエロい誘惑によわよわ過ぎるだろ、このOカップ爆乳メスガキ淫乱ピンク神様オナホがよお。

「こんだけチヨロいと別の意味で心配になってくるぞ、マジで。」

「じゃあ行こっか。人間のことわざでは、善は急げって言うんでしょ？」

「そうだな。よし、早速向かおう」

八尋を筆頭に、雄大な海に向き直る。青く輝く美しい海。今からその深淵に足を踏み入れていく。

今更だけど、呼吸とか大丈夫なんだろうか。ビヤーカーちゃんが一緒なら大丈夫だって言ってたけど……やっぱり不安なものは不安だ。

「どっか行くの、北条？ っていうか、その子誰よ？ ミント先輩と凜花は？」

と、少しだけ足踏みしていたら、後ろから一之瀬の声がかかる。

「まあ、そうだよな。一般人の一之瀬からしたら、何も分かんない状況だよな。」

「大丈夫だ一之瀬。二人を連れて、すぐに返ってくるからな」  
「そうそう。『何も心配いらぬ』ですよ、一之瀬センパイ」

瞬間、ハチミツのような甘い香りが周囲に漂う。八尋のやつ、神様の力を使ったな。一之瀬の目が若干虚ろになっているのが、その証拠だろう。



便利だけど、多様はしないでくれよ。これ絶対、精神に良くない影響あるから。

「……そう。早く帰ってくるのよ」  
「もちろん」

「安心して待っていてくださいね」

一之瀬の見送りを背に、一息に海の中へ飛び込んだ。生ぬるい海水と独特の浮遊感が、一息に身体を包み込んでくる。

「ビヤーカーちゃん」

「はい。失礼いたします」

ビヤーカーちゃんが後ろに回り込んで、身体を抱えるように抱きついてくる。すると不思議な光が全身を包み込んだ。

海中に居る筈なのに、いつも通りの感覚が戻ってくる。呼吸も、視界も、陸上に居る時と遜色なくらい鮮明になっていく。これが眷属の力ってやつなのか。

「おお……凄いな、これ」

「じゃあ行くよ」

八尋の先導で、海の中を泳ぎながら進み始めた。

待ってるよ、二人とも。必ず助け出してやるからな。

# 触手パラダイスで恥を捨ててイキまくる金髪Nカツ プ爆乳ド淫乱邪神オナホ先輩

「ん……ん……は……？」

頬に当たる生ぬるい液体の感触によって、二宮凜花は目を覚ました。

ぼんやりと霞む視界のまま、周囲を見回して状況を確認する。

「ふおお お おお おお おお おお おお おお おお おお おお  
「え」  
!?!?!?????」

すると、目の前でガチアクメをキメるミントの姿があった。

全身を触手に揉みくちやにされながら、四肢を壁に固定されている。エロ同人とかでよく見るやつだ。

「な、なんスかこれ……どういいう状況ツスか？」

困惑の表情で、凜花は周囲に視線を走らせる。しかし周囲は触手で埋め尽くされており、ここが何処かまったく分からない。

おまけに、自分自身もミントと同じく壁に四肢を埋め込まれており、身動きの取れない状況になっていた。

「あ、あの！ ミント先輩、大丈夫ツスか！」

「おぶつ???むじゆる?あ、ああ?平気さ?こんなもの、なんとも——んぐうつ???」

触手の責めに対して、強がって見せるミント。しかし、ぶつとい触手をおまんこにブチ込まれると、そもいかないらしい。

口の端からよだれが垂れ、艶やかな汗が白い肌を滑り落ちる。

「こつ?これはね?んごおつ?クトウルフの?仕業だよつ?ひぎゅつ?」

「クトウルフ……って誰ツスか？」

「ほおつ?わ、わたしの?ふん?つ?古い?知り合いと?お?つ?いつたところかな?あああダメダメダメイッグうううううううう!?????」

「わきやつ!」

ぶつとい触手におまんこを激しくほじられ、ミントは絶頂する。



そして先程よりも大量のイキ潮が、凜花の頬をたつぷりと濡らしていた。もはや顔面びしょびしょである。

「おゝ………???ほおゝゝ………???くっそお………?クトウルフのやつ、容赦ないねえ………?」

「ちよつと楽しんでないツスカ?」

「まさか?おゝ つお?わたしは必死に?ふつぎゆ?耐えているだけさ?」

触手で思う存分アクメするミントに、凜花はジトツとした視線を向けた。

まあ実際、半分くらいは楽しんでる。もう半分は、ガチで抜け出せなくて内心焦っている、と言ったところか。

(マズったなあ?興味本位でクトウルフに捕まってみただけ?予想以上に拘束が強固だ……?魔力も練れないし、これじゃ自力での脱出はふかの——イツツツグ????)

ぷしやあああつ?と、本日何度目になるか分からない潮噴きをキメた。

ホカホカと湯気を立てるメス汁溜まりが、際限なく広がっていく。

「乳首イクツ!?おまんこイクツ!?あくイグツ!?おゝイグツ!?イグイグイググうううゝうゝううゝうっ?!!!?!」

「うわあ………」

乳首とおまんこを同時に責められ、ミントは恥も外聞も投げ捨てて連続絶頂をかます。

誰にも見せられないレベルのアへ顔を目撃してしまい、凜花はドン引きした。

「はへえ………?ちくびい………?おまんこお………?」

「気をしっかり持つてくださいッス! ミント先輩!」

「はっ………!?あ、危ない危ない?危うく快樂堕ちするところだったよ?」

「……………」

いや、もう堕ちてるでしょ………とは言わなかった。思っただけでも、口にしちやダメな事はあるものだ。





スと認識したのだ。

「じよ、冗談ツスよね……?!? あ、あんな責め方されたら……?!? し、死んじやうツス……?!?」

「ふ、ふふ……?!? 覚悟を決めたまえ、凜花ちゃん?」

トロトロにとろけた顔で、ミントは告げる。

「大丈夫さ? 後輩くんとセックスを思い出せば、余裕で耐えられるよ?」

「そ、それとコレとは話がちが——うっ?!?」

次の瞬間、ぶつとい触手が凜花のおまんこに突き刺さった。反射的に、尿道から潮が噴き出す。

「ぐっ……?!? ふ、ふつといツス……?!?」

「どうだい? 後輩くんのチンポと比べたら楽勝だろう?!」

「そうかもツスけど……?!? 問題は量ツスよ……?!?」

「そうだねえ? 質より量ってやつかな?」

もちろん、何百本と生えている触手の責めが、これで終わるはずがない。

それを証明するかのよう、壁から生えた無数の触手が二人に殺到した。

「とにかく耐えるよ凜花ちゃん? そうすればきつと、後輩くんが助けに来てくれるからねえ?」

「た、耐えるって……?!? い、いつまでツスカ……?!?」

おっぱいに触手が巻きつく。乳首に触手が吸い付く。クリトリスに触手が群がる。おまんこに触手が突っ込まれる。

およそ人間には不可能な責め方で、触手は二つのメス肉を責め立てる。

「さあねえ? 三日後か、一ヶ月後か……?!? とにかく、責めに屈しないようにね?」

「あは……?!? あはは……?!?」

無数の触手を前に、乾いた笑いが漏れる。

淫らな拷問は、まだまだ終わりそうもなかった。

敵の根城に乗り込んだからとりあえず邪神後輩の母乳で腹ごしらえする鬼畜後輩くん

八尋の後に続き、ビヤーカーちゃんに抱えられたまま海中を泳いでいく。

「沖繩の海、めっちゃ綺麗だ……」

水も透き通って、サンゴも色とりどりで……こんな状況じゃないきゃ、もつと楽しめたんだろうけど。

「見えてきたね、アレがクトウルフの根城だよ」

そう言っ指をさす方向には、そこそこの大きさを誇る立派な神殿が建っていた。

いや、沖繩の海にあんなのが建ってるなんて、全然聞いたことないんだが。

「なんか、海の中に神殿が建ってるように見えるんだけど……あれ本物か？」

「本物だよ。おおかた、ルルイエの神殿を真似て作らせでもしたんでしょ。まったく、見えっ張りなんだから」

頬を膨らませながら、八尋はクトウルフさんへの不満を口にしていく。

悪い人には見えなかったんだけどなあ、クトウルフさん。むしろ勢いのある天然って感じの、愉快な人のように見えたんだけど。

「そんな事ないから！ アイツは四六時中ルルイエの奥でグータラしてるだけのダメ神性だから！」

「お、おう……そうなのか」

というか、お前もナチュラルに思考を読まないでくれるか。先輩だけで十分なんだわ、そういうの。

「おまけにいつも年上ツラしやがるし！ 色々な媒体で前面に出てくるのはいつもアイツだし！ なんでクトウルフ神話なんだよ！ ハスター神話にしろよ！」

「八尋、落ち着け。落ち着いてくれ、頼むから」



まさに怒髪天を衝くというやつだろう。周囲の景色が不自然にうねっている。

神話になってるのか、クトウルフさん。まあ神様だし当然……なのか？

「はあ……まあいいや、今更だし」

「落ち着いたか、八尋」

「いずれその地位から引きずり下ろしてやるから、首洗って待ってろクトウルフ……」

「怖い怖い」

全然落ち着いてなかった。なんか、人に見せられない顔になってるんだが。

「申し訳ございません、北条様。主様はクトウルフ様絡みのことになると、よくブレーキが壊れてしまうのです」

「そうなのか……犬猿の仲ってやつ？」

「はい。ですが、以前よりも仲良くなりました。以前は顔を合わせただけで、壮絶な殺し合いに発展しておりましたので……」

「ビヤーカーちゃん！ 余計なこと言わなくていいの！」

「はうっ……も、申し訳ございません……」

二人の関係をビヤーカーちゃんが教えてくれたり、そのせいで怒られたりしながらも、順調に神殿の入口へ近づいてゆく。

そうして、僕たちはそのまま神殿の中に入ることができた。豪華な意匠が施された大きな門を、三人揃ってくぐり抜ける。

「おっ」

「わっ、空気がある……前に来た時は無かったのに」

入口をくぐった瞬間、空中に放り出される。背中のビヤーカーちゃんが翼を羽ばたかせ、僕たちはゆっくりと地面に着地した。

ちなみに、八尋は普通に着地してた。あんなボテ腹だというのに、とても軽やかな動きだ。

「凄いな……」

神殿の中は、とても広かった。随所に豪華な装飾が散りばめられており、部屋の奥には巨大な玉座まで設置してあった。

一見神聖そうであり、どこか邪悪にも感じる。不思議な印象の建物だった。

「どういうつもりだろうね、クトウルフのやつ……水の中の方が有利なはずなのに」

「なんか、既に戦う思考になってないか？」

「戦わないの!？」

「なんでビックリしてんだよ……戦わないよ」

今回僕たちがクトウルフさんの元にやって来たのは、先輩と後輩を返してもらったためだ。荒事をしにきたんじゃない。

ビーチで話してみた感じ、クトウルフさんも全く話が通じない神様ではなかった。ならば、話し合いで解決できるはずだ。

「はあく……センパイは甘いんだね」

「まあ、話が通じなかったらブチ犯すけどな」

「アハッ?だから気に入った?」

「主様……北条様……」

なんか、ビヤーカーちゃんに呆れた目を向けられた気がした。多分気のせいだな、相変わらずの無表情だし。

と、のんきに話し込んでいたら、物陰から複数の視線を感じた。おそらく、あの大きな柱の裏からだ。

「誰か居るのか?」

「ああ、深きもの共でしょ。おおかた侵入してきたボクたちを排除しに——あ、いいこと思いついた?」

指先を大きな柱の方向に向けながら、ニタリ?と八尋は冒険的な笑顔を浮かべる。

いや、お前の言ういいことって、絶対ロクでもない事じゃん。こちらら、もう先輩で十分理解してるんだぞコノヤロウ。

「おい八尋、いったい何を——」

「くらくらく!女体化ビーム!？」

「は?」

なんの説明も無しに、八尋の指先から黄色のビームが放たれる。

それは一直線に飛び、大きな柱を貫通して、見事に獲物を仕留めて

見せた。

「 $\square$ 、 $\square$ 全々・@Γ $\square$ (4 $\square$ 6・ $\square$ !?)」

「全o!・\*全々o $\square$ !?!」

「#( $\square$ )| $\square$ Γ $\square$ Γ $\square$ !?!」

次の瞬間、冒流的な叫び声が部屋中に響き渡った。なんて言ってるか全然わからんけど、悲鳴っぱいってのはなんとなく分かる。

「よっし?命中?」

「いきなり何してんのお前……」

「アハツ?センパイが戦つちやダメっていうから?戦い以外の方法で無力化させようかな?って思ってた?」

戦い以外って……まさか。

「な、なんだコレ $\square$ !?!」

「人間のメスになってる $\square$ !?!」

「ど、どうということだ $\square$ !?!」

ああ、阿鼻叫喚の悲鳴が聞こえてくる。今度はちゃんと、人間の言葉で。

「アハツ?」

やりやがったよコイツ……ってか、誰が相手すると思ってるんだ?

「は、ハスター様の仕業ですか!?!」

「どうするんですかコレ!」

「何故クトウルフ様と瓜二つのお姿なのですか!?!」

大きな柱の影から、勢いよく三人の美少女が飛び出してくる。

その姿は、クトウルフさんに瓜二つだった。唯一違いがあるとすれば、髪や眼の色が青ではなく黒になっている点だろうか。

それ以外は、まるっきりクトウルフさんと同じだった。

「メロンがいっぱいだ……!」

そう、つまり、あのスケベ過ぎる身体も完全にコピーされてるとい  
うわけで。

「センパイってば、おっぱい見ただけでももうおつきくしてる?童貞  
みた $\square$ い?」

「は?童貞じゃないが?」

海パンを持ち上げるチンポを見つめて、八尋がメスガキみたいなムーブをかましてくる。

おっぱいがあんなにいっぱい、しかもぶるんぶるん震えて弾んでたら、そりゃ興奮するってもんだろう。むしろ興奮しないほうがおかしい。

「……一応聞いたくが、なんでクトウルフさんと瓜二つにした？」

「え〜??それはあ?クトウルフがバチボコに犯されてるみたいで、気分が良くなるから!???」

「……………」

拗らせてんなあ。嫌いの裏返しは好きってやつか。

「てなわけで、ハイドーン!!?」

「おわあああ!?!いきなり水着おろすな!」

裏布が勢いよく亀頭に擦れて、めっちゃ痛かったんだが。いや、痛いのも嫌いじゃないけどさあ……これはなんか違うじゃん。

「あっ……………!?!」

「なっ、ななな……………!?!」

「生チンポ……………!?!」

水着がおろされ、三人の前にチンポが勢いよく曝け出される。すると、当然のごとく三つの視線が一箇所へ集まってくる。

なんか、既に股間から白っぽい汁が垂れてるように見えるんですけど。いきなり発情してないか、あれ。

「アハッ?あの子達も準備万端だね〜?もちろん相手してあげるんだよね〜??セ・ン・パ・イ??」

笑みを深めながら、八尋が耳元で囁いてくる。その姿に、その雰囲気、あの金髪碧眼クソザコNカップ爆乳オナホ先輩の姿が重なって見えた。

ああ、やっぱり同族なんだなと。忌憚なく、そう思えた瞬間だった。

「やってやるよ……………やってやろうじゃねえかコノヤロー!」

「えっ……………?!!?」

燃え滾る闘志と共に、八尋のOカップ爆乳を鷲掴みにする。そのまま引き寄せ、おっぱいの先端にむしゃぶりついた。



「な、なんて傍若無人な……??」

「ハスター様を、まるで使い捨てミルクサーバーみたいに……??」  
「んで、なんでそっちの三人もおまんこに指突っ込んでオナニー始めてるわけ？」

「主様あ……?主様あ……?おちち搾り、とても気持ちよさそうにございましたあ……??」

「ビヤーキーちゃんまでオナニーしないでいいんだよ？」

「カオスだな……」

まあ、とりあえずやつとくか。話はそれからだ。

主人と同じ姿に女体化させられて犯される憐れな爆乳マゾ豚お魚オナホちゃん達

「ほら」

勝手にオナニーを始めた三人娘に向けて、バキバキに勃起したチンポを差し出す。すると、間髪入れずにそちらに視線が移った。

必死すぎるだろ。どんだけチンポに飢えてたんだよ、この量産型マゾ爆乳メス豚オナホ共がよ。

「お〜……う？ハッ！ なつ、何をしている！」

「ん〜……う？んあつ!? そ、そうです！ その汚らしいものを今すぐ隠しなさい！」

「お、おちんぽ……??」

おつ、早速一匹連れた。

「おちんぽ……う？おちんぽお……う？」

「よしよし、いい子だな」

わざとらしく腰を揺らして見せれば、揺れるチンポを目で追いつつフラフラと近づいてくる。

なんだこれ、面白いな。まるで魚釣りでもしてる気分になる。

「おい、早く戻れ！」

「そうですよ！ そんな男性器にうつつを抜かしては、クトウルフ様を守る事など——」

「あ〜、むっ??」

後ろでなんかギャーギャー騒いでいるが、メス汁でべちやべちやの両手じや説得力も何も無いな。そんな事してる内に、お仲間はチンポ啜えちまったし。

あー、唾液でねっとりした口内が気持ちいい。メスを屈服させてるって優越感が凄まじいし、やっぱりフェラはいいものだな。

「あんむっ？むじゆるぶぶぶっ？ぶぶっ？ぶぶっ？ぶぶっ？じゆるるるっ？じゅっぽじゅっぽじゅっぽ??」

「おー、いいぞ。齒は立てないようにな」

頭を前後に動かし、甲斐甲斐しくフェラをする黒髪の女の子。顔の造形はクトウルフさんと同じだというのに、どこことなく愛嬌がある。性格次第で、受ける印象って結構変わってくるからな。この子はたぶん、優しくて人懐っこい子なんだろう。

「こ、こいつ……!?!」

「あ、あんなに激しく……!?!」

一生懸命フェラする様子を見て、後ろの二人も段々と顔が赤くなってくる。

一人は怒ったような顔でこちらを見つめ、もう一人は困り顔のままフェラする様子を見つめていた。

「ぶはあっ?ど、どうでしゅかあ?わたし、うまく『ごほーし』できてましゅかあ??!」

「ああ。初めてにしては上出来だ」

「えへへえ?!」

やっぱり、顔は同じでも個人によって受ける印象はだいぶ変わってくるな。

一番最初に釣れたこの子は、明るく元気なクラスのアイドルタイプ。

そして、怒った顔をしていた子は、真面目で堅物な委員長タイプ。最後の困り顔の子は、教室の隅で読書している物静かだけどムツツリな文学少女タイプってところか。

(性格診断みたいで、ちよつと面白いかもしれん。というか八尋のやつ、全員同一人物じゃなくて、ちよつとくらい違う特徴入れてくれても良かったのにな)

例えば、前髪にそれぞれ違う色のメッシュ入れてみるとかだな。そうすれば見分けやすくなったんだが。

「ま、これはこれで貴重な体験だから、別にいいけど」

同じ顔のメスと4Pとか、普通の人生送ってたら絶対できないからな。せいぜい楽しませてもらうとしよう。

「主様……?主様……?おっ?起きてください……?んあっ??」

「ほへえ?おっばいい?おっばいびゅ〜びゅ〜だしゅによお?」



こつちもこつちで、ビヤーカーちゃん八尋を正気に戻そうと四苦八苦してるし。

でもとりあえず、その股に当ててる両手を離してからの方がいいんじゃないかな。オナニーしながらじゃ、起こせるもんも起こせないぞ。

「さて、じゃあセックスするか」

「ひゃいつ?」

初々しいフェラによって、精液も充分溜まった。クトウルフさんと同じく処女まんこブチ抜いて、最高のセックスをご馳走してやろう。

「そつちの二人は、見てるだけでいいのか?」

「くっ……!??」

「う、うう……!??」

一応、セックス前に声をかけておく。まだ来ないと思うけど、一応気にかけておかないとな。

まあ、股間からめつちや白濁本気汁垂れ流してるし、時間の問題だとは思っけど。

「はやくっ?はやくっ?おちんぽくさあい?」

ごろんと床に寝転がり、両足を抱えてまんぐり返しのポーズをとる三号ちゃん。トロトロおまんこから新品アナルまで、すべてが丸見えになっていた。

「エロ……偉いぞ、三号ちゃん」

「さんごう?」

「名前がないと不便だから、便宜上の仮名つてやつだ。嫌ならもつと凝ったやつを考えるけど」

「さんごう……?ひんっ!??」

開けっぴろげられた股間から、ブシユツ?と潮が噴き出す。

それはOKって意味でいいのかな?

「ちなみに、そつちのアナル弱そうの方が一号ちゃん」

「あなっ……!??」

「それで、そつちのムツツリスケベの方が二号ちゃんね」

「むっ……!??」

とりあえず、残りの二人にも同じように名前をつけていく。完全なる独断と偏見で名付けたが、まあ大丈夫だろう。

あと、二人揃って『心外だ』みたいな顔してたけど、お前らも股間から勢いよく潮噴き出してたからな。OKって意味に取るぞ。

「そ、そんなのどうでもいいからあつ?!?はやくつ?はやく三号のおまんこぶち抜いてえええ?!?」

もう我慢できないといった顔で、三号ちゃんが両手でおまんこを割り広げる。

色々なメス汁でトロトロにふやけたおまんこは、オスを待ちわびて絶えず蠢いていた。

「分かってるよ。全員キツチリ犯してやるから安心しろ」

「あつ?!?」

覆いかぶさるように三号ちゃんの上にのしかかり、チンポをおまんこの入口に押し当てる。すると、抵抗もなくスルリと亀頭が呑み込まれた。

ガバガバおまんこか? と一瞬思ったが、挿れた亀頭が処女膜に触れている。間違いなく処女だ。

「……まあ、奥まで入れてみれば分かるか」

そんな軽い気持ちで、腰を突き出す。  
すると。

「くっ……!?!」

「おごっつ?!?ほおおおおおおおおお?!?おちんぽつ?!?おちんぽきたああああああ?!?!」

処女膜をあっさりブチ破って、最奥までチンポが侵入する。その瞬間、膣肉が蠢いて竿の隅々まで吸い付いてきた。

クトウルフさんや八尋の膣内と似た——しかし、微妙に異なる吸い付き。これは気持ちいい。

「うれしいいい?!?えひひい?きもちいいよおおおお?!?」

「うおっ」

引き抜こうとした瞬間、膣内の吸い付きが強くなる。まるで『いけないで』と懇願しているかのようだ。

この動きは、あの邪神オナホ共じや到底できないな。二人ともプライドの高い上位存在だから、こういう女々しいおまんこムーブは無理だろう。

「おおお……人外おまんこ人間心が合わさると、ここまで気持ちいい動きが出来るのか……」

「ふうふう??ふうふう??おまんこ?きもちつ?きもちいいつ??」

精液を搾り取る動きじゃない。ただ、ずっと側にいてほしいと願う、いじらしい少女のような動き。

なんというか、今まで食ってきた中でもトップクラスに人間臭いおまんこだな。初めてのタイプだ。

「……………?」

「……………??」

「お?」

そんなこんなで珍しいおまんこに夢中になっていたら、いつの間にか一号ちゃんと二号ちゃんが近くに立っていた。

左右に分かれて、それぞれ違う角度から僕と二号ちゃんのセックスを見下ろしている。

「なんだ、興味湧いたのか? さつきはそんなのダメだー、みたいな事言ってたのに」

「う、うるさい……!」

「み、見るだけ……これは見るだけですから……!??」

見るだけ、ねえ。

「ほっ??」

「ふぎやっ!??」

じゃあ、もつと遠くから見ればいいんじゃないやねえかな。

なんでわざわざ、手の届く至近距離にまで近寄ってくるんだよ。

「あがああつ??やっ、やめろおおつ??」

「ひぎいいつ!??ゆびっ!ふといゆび、は!いつてきたああつ!??」

中指と薬指をおまんこに突っ込み、即座にGスポットを押しつぶす。親指でクリトリスをコリコリ弄るのも忘れない。

ちゃんと左右の手で、それぞれ手マンできるよう両側に立ってるあ



これ、男としての征服欲がヤバいくらい満たされるプレイだわ。マジで最高のシチュエーションすぎる。

最愛の彼女を取り返しに来た色欲魔神にバチボコに  
犯し尽くされる大いなる邪神オナホ

左右の手で、処女おまんこをほじる。

「あああああああああああ」

腰を突き出して、チンポを割れ目に突き入れる。

「びぎやあ、あ、ああ、あ、ああ、ああつ」

舌を動かして、肉穴の中身を舐め尽くす

「きやううううううん」

全身にメスの本気汁を浴びながら、極上のメス穴を蹂躪していく。

ああ、いいな。凄くいい。

「じゆるるるつ、ごくつ、ごくつ、ごくんつ」

「あああああ飲まれてるっ? ぜんぶ飲まれちゃいましゅううううつ」

「?!?!?!」  
甘い。おまんこの奥から溢れてくるメス汁をすべて飲み干し、そんな感想を抱く。

八尋の特濃甘々母乳といい、ビヤーカーちゃんの甘みたっぷり本気汁といい、ハスター陣営の体液はどれも甘いな。

「はうううううううううつ」

徹底的に舌でほじくり回していたら、より一層濃い本気汁を撒き散らしてビヤーカーちゃんは絶頂した。

もちろん、それも全部飲み干す。

「ほへえ……」

人間とは根本的に違うが故に、人間の身体で得られる快樂には弱い……ということだろうか。そう考えることにする。いくらなんでもイキすぎだからな。

「も、もう……だめ……」

「へひっ? えひひい……ん? ぶんぎゅっ!」

「あっ」

あまりの快樂に気絶したビヤーカーちゃんが、仰向けに倒れ込んで



「しゅごっ? ゆびしゅごお? あへへえ?」

二人揃ってその場に倒れ伏し、ビクビクと身体を痙攣させる。

一号ちゃんは白目を剥いて気絶していたし、二号ちゃんもアへ顔のまま快樂を味わっていた。

「ふう、取り敢えず無力化成功……かな?」

八尋の思惑通り、エッチによってこの場を穩便に収めることができたな。まあ、代償として当人と眷属も気絶しちやっってるんだが。

コラテラル・ダメージってやつだな。しようがなかったってやつだ、うん。

「これは……どういう事だ」

「ん?」

満足感に浸りながらメス豚オナホ共を見下ろしていると、玉座の方から声がした。

ついさつき聞いた、新しいオナホ候補の声だ。

「やあ、ずいぶんと遅い登場ですね——クトウルフさん」

玉座の隣に立っていたのは、身体にバスタオルを巻いたクトウルフさんだった。

お風呂にでも入っていたのか、その身体からはホカホカと湯気が立ち昇っている。

「お、お前……何故ここに……!」

「先輩と後輩を、返してもらいに来ました」

一步、玉座の方へ踏み出す。

それだけで、クトウルフさんは一步後ろに下がった。

「や、やめろ……来るな……!」

「それは無理な相談ですね」

お風呂上がりの美少女に欲情するな、という方が無理な話だ。

今度こそ気絶するまでブチ犯してやる。

「極上の人外おまんこを耕しまくったのに、射精できなかつたんですよ。だから今ちよつと、ムラムラがヤバいんですよね」

「く、来るなど言ってるだろお……!」

天を突くように勃起したチンポを見せつけながら、ゆっくりとク









〜とある先輩のつぶやき、もといエログちゃんねる5  
)

1：無貌の神

やあやあ。唐突だけど、人間が触手に捕まった時の対処法とか知ってるやつ居ないかな？

2：名無しの邪神

お、久しぶりじゃん。

3：名無しの邪神

今まで何してたんだ？

4：無貌の神

訊いてるのはコツチなんだけど？

5：名無しの邪神

なんだなんだ、ずいぶん余裕ねえな。

6：名無しの邪神

もしかしてピンチ？めずらしいな。

7：みんなの母

どんなポカやらかしたのよ。ほらほら、お姉さんに言ってみなさい？

8：無貌の神

いや、ポカというか……クトウルフの責め方が予想以上だったというか……触手に捕まって身動き取れなくなったというか……

9：名無しの邪神  
草。

10：名無しの邪神  
それをポカって言うんだろーがよ。

11：名無しの邪神  
てかお前、お姉さんって……性別とかあったっけ？

12：みんなの母  
アトラちゃんに作ってもらったの。人間の作った……あいすく  
りーむ？つてやつ、とつても美味しいのね。

13：名無しの邪神  
満喫してて草。

14：名無しの邪神  
触手かー。クトウルフのやつはマジでケタ違いだからなー。頑  
張って耐えるしかないんじゃないやねー？

15：名無しの邪神  
クトウルフの触手は世界一イイイ!!!

16：名無しの邪神  
うるせえ！

17：無貌の神  
そつかあ……暇を持て余してるクズどもなら、何かいい案を思いつ  
くと思ったのになあ……

18：名無しの邪神

ああん？

19：名無しの邪神

喧嘩売ってんのかよコラ。

20：名無しの邪神

ハスターは？

21：無貌の神

一応呼んでるけど……ダメだね。やっぱり気絶中みたいだ。

22：名無しの邪神

そんじやクトウグア呼んで、丸ごと焼いてもらえよ。

23：名無しの邪神

草。

24：名無しの邪神

ナイスアイディアじゃん。

25：無貌の神

いやあ……一人ならそれでも良かったんだけどねえ。今は人間の後輩ちゃんが目の前にいるから……

26：名無しの邪神

なんだよ、お前の他にも捕まってるやつ居んのかよ。

27：名無しの邪神

人間がクトウグアの炎まともに食らったら、魂まで燃え尽きるからなあ……

28：名無しの邪神

なんかそういう証拠とかあるんですか？

29：名無しの邪神

ひろゆき、いたね？

30：名無しの邪神

声まで真似すんなよ。ムカつくから。

31：名無しの邪神

それってあなたの感想ですよ？

32：名無しの邪神

レスバの邪神、降☆臨。

33：名無しの邪神

つかムカつくとか、人間みたいなこと言ってんじやねーよ。

34：名無しの邪神

コノキモチ……コレガ、ココロ……？

35：名無しの邪神

まあ、神様ってだいたい心を理解して模倣できるし……

36：無貌の神

おーい、駄弁ってないで解決策をだねー

37：名無しの邪神

分かっどるっての。

38：名無しの邪神

どういふ状況なのか教えてみ？

39：無貌の神

えつとね、両手両足を壁に埋め込まれて、全身をめちやくちやに弄られてる感じだね。おっぱいも、おまんこも、ぜんぶぐちやくちやのドロドロでひどい有り様さ。

40：名無しの邪神

それはまた……分割思考が無かったら、こうしてまとも話せてなかつただろうな。

41：名無しの邪神

便利だよなあ、分割思考。で、映像は？

42：無貌の神

わたし自身のは送れないけど……凜花ちゃんのだつたらイケるかな。

43：名無しの邪神

おお、これはまた……

44：みんなの母

んっ……？ちよつと。今は人間の身体なんだから、そんな刺激の強い映像見せないでもらえる？

45：名無しの邪神

見なけりやいい定期。

46：名無しの邪神

やっぱムツツリなんすねえ。



47：名無しの邪神

でもただのムツツリじゃねえぞ。

48：名無しの邪神

ド級のムツツリ、ドムツツリだ！

49：名無しの邪神

性欲が強えムツツリなのか……？

50：名無しの邪神

ムツツリはみんな性欲強いだろ。

51：無貌の神

で、何か解決策とか思いついたかい？

52：名無しの邪神

ふむふむ……まあ何個かは思いついたが。

53：無貌の神

k w s k。

54：名無しの邪神

まず1つ目、腕と脚を切り落として脱出するって方法だが。

55：無貌の神

却下だね。目の前に凜花ちゃんがいるし、なにより——リアルなダ  
ルマプレイをやるんだったら、後輩くんとセックスするときじゃない  
と。

56：名無しの邪神

後輩くんトラウマになりそうで草。

57：名無しの邪神

ダルマになったら、正真正銘のオナホになりそうだな。

58：名無しの邪神

とても都合のいいオナホ先輩……つてコト!?

59：名無しの邪神

こんなどうでもいい所でタイトル回収してんじゃねえよ。

60：ユゴスよりのもの

最近3巻が発売されたんですつてよ、イスさん。

61：偉大なる種族

週間ランキングで1位を取ったらしいですわねえ、ミッゴさん。

62：名無しの邪神

メメタア!

63：名無しの邪神

黙ってるカス共……そんで2つ目の策だが、唯一自由な口でその触手を噛み千切る、つてのがある。

64：無貌の神

却下だね。わたしの口は、後輩くんのチンポを啜えるためにあるんだ。噛み千切るなんてもつてのほかさ。

65：名無しの邪神

……めんどくせえなコイツ……

66：名無しの邪神

邪神って、大抵めんどくさいものでは？

67：名無しの邪神

はい、マジレスマンはあっち行ってようね

68：名無しの邪神

となると、最後の手段か……おい、その目の前にいる人間、ヨグ父さんの血が混じってるだろ。

69：無貌の神

えく？ははは、なに言ってるんだい？凜花ちゃんは正真正銘ふつうの人間で……え、マジ？

70：全知の父

今さら気づいたのか。

71：名無しの邪神

まあかろうじて混じってるってレベルだし、気づかなくても仕方ない。オレも血縁じゃなかったら気づかなかったレベルだ。

72：名無しの邪神

お父さま、人間と交尾してたの……？

73：全知の父

昔の話だ。

74：名無しの邪神

オスとして交尾したの!?メスとして交尾したの!?

75：名無しの邪神

どっちでもいいだろそんなこと……とりあえず、その人間の潜在能

力を引き出してやれ。そうすればクトウルフの触手なんて、簡単に処理できるだろ。

76：名無しの邪神

潜在能力解放！アツい！

77：無貌の神

アルティメット凜花ちゃんになっちゃうわけか……

78：名無しの邪神

めっちゃ強そうで草。

79：無貌の神

しかし、力を引き出しても凜花ちゃん自身は平気なのかい？魂に悪影響があつたりしない？

80：名無しの邪神

そこは心配しなくていい。元々あるものを活性化させるだけだから、魂への影響は皆無だろうよ。

81：無貌の神

それもそうか……なら、やってみる価値はあるかな。

82：名無しの邪神

おう、せいぜい頑張れ。

83：無貌の神

ふふ？潜在能力が解放された凜花ちゃんのおまんこは、どんな名器になるのかなあ？

84：名無しの邪神

気にするのソコかよ……相変わらずの色狂いだな。

85：全知の父

懐かしいな……私もそんな時期があったものだ……

86：名無しの邪神

子作りの先駆者おるつて！

87：名無しの邪神

ニヤルもヨグに師事してれば、もうちよつと早く妊娠できてたんじゃ……？

88：無貌の神

自力で妊娠しなくちゃ面白くないだろう……つと。これでどうかな？

89：名無しの邪神

お、目に見えてヨグ父さんの気配が増したな。

90：無貌の神

わあ……髪だけじゃなくて、目の色も銀色に……それに肌の色は灰色かあ、神秘的だねえ。

91：名無しの邪神

そんじゃ後は頑張れ。オレは寝る。

92：全知の父

ふむ、私の子孫は既に孕んでいたのか……面白いな。

93：名無しの邪神

お父さまが興味を持ち始めている……!!!

94：名無しの邪神  
全力で止めろお!!!

95：無貌の神  
そつちもそつちで大変そうだねえ……あ、触手が全部消し飛ばされた。

96：全知の父  
いずれ、伺うとしよう。

97：無貌の神  
来なくていいよ、じゃあねく

98：名無しの邪神  
行かないでください!!行かないでくださいお父さま!!!

99：名無しの邪神  
絶対に行かないでくださいね!?

100：名無しの邪神  
フリじゃないですからね  
!?!?!?

無貌の神が退出しました。

## 人気ユーチューバー編

ワーカーホリックな冥界蜘蛛と怠惰なもふもふひきがえる

北部シベリア山の地下にあるとされている、地底世界クン・ヤン。その最下層である暗黒世界ンIIカイの一角に、だらりと寝そべっている神様がいた。

『ふぁ……』

頭部はヒキガエルを思わせ、身体はナマケモノとコウモリを足したような姿。クトウルフ神話にて、比較的温厚な邪神として記されている邪神・ツアトウグア。

大きなあくびをした彼——彼女？——は、気だるげな身体をのそりと起こした。

『暇だ……』

つい先日、貢ぎ物——大量のよくわからない肉——を食らって、腹は満たされたばかり。

となれば、次は別の欲求が出てくるというものだ。神様でも暇は天敵らしい。

『なんか面白いこと起きないかな……』

かといって自分から動く程、ツアトウグアは活動的なタイプではない。怠惰を貪る邪神から、アクティブな言動など出てくる筈が無いのだ。

『一步も動かずに信仰を得られて、なおかつ面白いこと無いかな……』人間が口にしたら「世の中舐め腐ってんのか」とバチボコに怒られること間違いなしの独り言を呟き、ツアトウグアはまたあくびをした。

そんな彼の背後に、一匹の蜘蛛が忍び寄る。

『フッフ……お困りのようですね』

『ん……う？ あれ、アトラ……久しぶりだね』

緩慢な動きで振り返ると、そこに居たのは同じく暗黒世界ンIIカイ

に幽閉された神格、アトラック・ナチャだった。

いつもは蜘蛛の糸で深淵の谷間に巣を作っている彼女が、どうしてこんな所に居るのだろうか。

『どうしたの、こんな場所まで来て。巣作りは?』

『ああ、コレは私の分身ですよ。本体は今も作業中です』

相変わらずのワーカーホリックだな……と内心で呆れるツアトウグア。

同じく土星からやってきた同郷として、彼女とは長い付き合いだ。少しくらい休めばいいのに、とは常々思っている。

『今日は暇してるであろうツアトウグアさんに、良いものを持ってきました』

『なにになに?』

「ごそごそと懐を探り、アトラック・ナチャは見慣れぬ板状の機械を取り出した。

ツアトウグアは見たことすらない機械。しかし人類の間ではかなり広まっている、その機械の名前は。

『テツテレ〜♪スマートフォン〜♪』

『なにそれ?』

気の抜ける声と音楽を伴って、アトラック・ナチャはスマートフォンを差し出す。

それを受け取ったツアトウグアは、しげしげと興味深そうにスマートフォンを見つめていた。

『かたい』

そして、おもむろに口に入れた。

『食べ物じゃないですよ!?!』

慌ててアトラック・ナチャが回収するも、最新型のスマートフォンは邪神の唾液でベツタバタに汚れてしまっていた。

歯は立てていなかったため、液晶は割れていないようだ。不幸中の幸いと言ったところか。

『美味しくないね、それ』

『だから食べ物じゃないって言ってるでしょうが』



この神格は昔からそうだ。食べることにしか興味がない、面倒くさ  
がりのもふもふひきがえる。

とはいえ、その性格こそが今回の計画にピッタリなわけだが。

『食べ物じゃないなら、何するやつなの、それ』

『フッフ……上手くいけば、あの頃と変わらない信仰を得られるかも  
しませんよ』

怪しい笑みを浮かべながら、アトラック・ナチャは八本の足で器用  
にスマホを操作する。

それどうやってんの？とツッコむものは、この場には存在しない。

『よし、これで設定はOK……次は衣装ですね』

『んあ？』

『この中から、気に入った人間を選んでください』

懐から、バサリと大量の紙束を取り出すアトラック・ナチャ。

それどっから取り出したの？とツッコむものは、この場には存在し  
ない。

『食べたい人間ってこと？』

『まあ、そんな所です』

実際は違うのだが……詳しく話しても意味が無いだろうと言うこ  
とで、アトラック・ナチャは話を濁した。

『んー……どれも痩せてて美味しそうじゃないなあ』

ペラペラと紙束を捲りながら、ツアトウグアは呟く。紙に描かれて  
いるのは、いわゆるモデル体型と呼ばれるスレンダーな美人たちの  
絵。

人間社会では絶世の美女と呼ばれる女性たちであろうと、食べる部  
分が少なければ好みからは外れてしまう。

『おっ？…これ！…この人間いいかもー』

紙束を捲っていた手を止め、一枚のイラストをアトラック・ナチャ  
に差し出す。

そこに描かれていたのは、おっぱいがめちやくちや大きい女性――  
いわゆる、爆乳メス豚の姿であった。

『フッフ……お目が高いですね』

『うん！ おつきくって食いでがありそう！』

『そうですかそうですか』

怪しい笑みを浮かべ、アトラック・ナチャはイラストの上から紙に魔術刻印を描いていく。

『そおい！』

『あびやっ!?!』

そうして魔術刻印の描かれたイラストを、ツアトゥグアの顔面に貼り付けた。

その瞬間、眩い光がン㍑カイの暗黒を一瞬だけ照らし、即座に消えた。

「んもー、何するのアトラー」

そして光が収まったその場所には、一匹のOカップ爆乳メス豚が全裸のまま立ち尽くしていた。

オレンジ色の短髪に、同じくオレンジ色の瞳。一糸纏わぬその裸体は、肉感的でエロスに満ち溢れている。

「んお？ 何この声……何この手足」

巨大だった自身の身体が、いきなり人間サイズまで小さくなってしまった。まあ、一部は充分に大きいままなのだが。

「おー、これ人間の身体？ さつき選んだ人間かな」

急激な変化に、しかしツアトゥグアは慌てることなく思考を回す。

右手でたつぷりと肉の乗ったデカケツを揉み、左手でたつぷりと脂肪の乗ったOカップ爆乳を持ち上げる。

「あはは、おもしろーい。全身ポヨンポヨンだ」

もしも、この場に人間のオスが居たならば、恥も外聞も投げ捨てて思いっきりシコリ始めただろう。

目の前の光景は、それ程までにエロく、素晴らしいものだった。

「うんうん、いい感じの姿ですね。人間の情欲を極限まで煽る、素晴らしい姿ですわ」

そんな光景を作り出している自覚のないまま、美少女と化したツアトゥグアはアトラック・ナチャが居た場所に目を向ける。

そこには、セーラー服を纏った黒髪の古風な美少女が立っていた。

「あれ、アトラも人間になってる?」

「フフフ……この方が話しやすいかと思いましたが」

蜘蛛形態の時と同じく、怪しい笑みを浮かべるアトラック・ナチャ。

しかし、美少女がするだけで不気味さよりも美しさが勝るのは、どういう原理か。

「いきなり人間の身体にするなんて、何するつもりなの?」

「なに、簡単な事ですよ」

手に持ったスマートフォンを操作し、アトラック・ナチャは告げる。

「これからあなたには——大食い系ユーチューバーになって配信をしてもらいます」

「ユーチューバー?」

リアルで人間の肉体を得た邪神が、ユーチューバーとなつて人間社会に進出する——V バーチャル ユーチューバーならぬ、R リアル ユーチューバーとして。

いや、それ普通のユーチューバーやん……とツツコむものは、この場には存在しない。

「大食いってことは、食べ物いっぱい食べてもいいってこと?!」

「フフフ……ええ、もちろん。人間よりも美味しい食べ物を、お腹いっぱい食べさせてあげますよ」

「やったー!」

子供のようにはしゃぎ、ブルンブルン?と爆乳を揺らしまくるツアトウグア。

彼女はまだ知らない。この先の未来にて、一人のオスに抱き潰されて、無様なメス豚お嫁さんオナホにされてしまうという事を。

「さて、ではさっそく地上に行きましょうか」

「おー!」

美少女の肉体を得た二人の神格は、意気揚々と地上へ侵攻を開始する。

それがどのような結果をもたらすか、知る者はまだ誰も存在し得ないのだった。

## 最近流行りのY o u T u b e r

「げっ」

とある日の朝。大人しくテーブルに着いていたミント先輩が、顔を顰めて声を上げた。その手には、横向きになったスマートフォン。何か動画でも見ていたんだろうか。それにしても酷いしかめっ面だが。

「どうしたんですか、先輩」

二人分の料理を手に、キッチンからリビングへ移動する。本日の朝食は、半熟の目玉焼きにベーコン。そして、新鮮なサラダとカリカリに焼いたトーストだ。

いつもと違い、珍しく洋食風にしてみた。たまになら、こういった朝食もアリだろう。

「どうしたも何も……」

眉をひそめて、先輩がスマホの画面を突き出す。

「ほらコレ！ 見てごらんよー！」

そこには、オレンジ色の髪をした美少女が映っていた。画面の中、美少女は凄まじい速さで、目の前に広げられた中華料理を平らげている。

『あー、んっ？もぐもぐ？パクパク？ごつくん？ふわあ？おいしい？??？』

小籠包、麻婆豆腐、春巻、エビチリ、餃子、炒飯、肉まん、酢豚、担々麵——おまけにデザートとして胡麻団子と杏仁豆腐まで。

左上のテロップから察するに、制限時間でどれだけ料理を食べられるかって企画らしい。大食い企画ってやつなんだろうか。

「この子が、どうかしたんですか？」

タイトルやチャンネル名から察するに、この子の名前はしのみやかほ四宮果穂と  
いうらしい。

タレ目がチャームポイントになってる可愛い子だと思うが、それだけだ。先輩が嫌そうな顔をする理由が、まったく分からない。

「こいつ、わたし達と同じ神様だよ」

「えっ」

思わず、声が裏返った。

「まったく、ツアトウグアのやつ……いつの間に人気YouTube  
rなんかになったんだか」

「この子、人気なんですか」

「チャンネル登録者10万人を突破してるよ。三日前から投稿始めた  
ばかりなのにね」

「み、三日で10万人って……」

凄まじい伸びだな。うわ、しかも現在進行系で増えてるし。画面を  
確認したら、ちょうど12万人を越えたところだった。

(神様パワー……って感じはしないな)

いくら神様でも、電子機器をどうこうはできないだろう。

いや、時間や空間を自由自在に操る方が凄いのは、言うまでもない  
けど。

「ハンッ！ 人気の理由はハッキリしているともー！」

苦々しい顔をして、先輩は声を荒げた。

確かに、この子が人気な理由は僕でも分かる。

「このおっばいですね」

「このおっばいだよ！」

画面の半分を占領する、先輩に匹敵する超爆乳。目測だが、Oカッ  
プはあるだろう。

強引に包んでいるオレンジ色のTシャツが、ミチミチと悲鳴を上げ  
ているようにも見える。

「服の上からでも分かる規格外の爆乳ですからね。そりゃ人気も出ま  
すよ」

「しかも小賢しい事に、動画の内容は健全なものばかりだしねえ」

この子のチャンネルに上がっている動画は、大食い動画やグルメ動  
画といった健全なものばかり。自慢のおっばいを強調したものは、一  
つとして上がっていない。

まあ、美味しい料理を食べた瞬間、無意識に飛び跳ねておっばいを  
揺らすシーンはあったけども。

「上手いものだよ。人間の三大欲求である食欲・性欲・睡眠欲のうち、二つを掌握してるんだ。そりゃ人気も出るってものさ」

先輩の言う通りだ。美味しそうな料理に、美味しそうに食べるOカップ爆乳美少女。この組み合わせでバズらない方がおかしい。

「それに、このサムネも上手だ。ツアトウグアの魅力がとても良く伝わってくる……腹立たしい事にね」

先輩に言われて過去の動画のサムネイルを見てみると、確かに料理と爆乳がうまく調和しているのが見て取れる。

どちらも突出しないようにして、両方の客層を取り込んでいるのだろう。あ、登録者が13万人になった。

「あのぐーたらもふもふヒキガエルがこんな器用な真似できる筈がない……おそらく、アトラも一枚噛んでるだろうね」

「アトラ?」

「わたしの知り合しさ。重度のワーカーホリックなんだけど……いったい、どういう風の吹き回しやら」

神様でもワーカーホリックになったりするんだな、知らなかった。

いや、北欧でも鍛冶の神様とか居るし、仕事を司る神様なら不思議でもないのかも。

「ん?」

と、色々と研究、もとい考察をしていたら、先輩が何かを発見したようだ。

動画を何度も巻き戻し、同じ映像をジッと見つめている。

「なるほどねえ」

先程のイライラした顔から一転、上機嫌になつて笑顔を浮かべる先輩。

なんか……怒った顔より笑顔の方が怖いと感じるのは、気のせいだろうか。

「後輩くん、スマホを貸しておくれ」

「別に良いですけど」

ポケットからスマホを取り出し、そのまま手渡す。すると先輩はカメラを起動し、先輩のスマホに映った動画を撮り始めた。

スマホのカメラで、スマホの画面を撮影してる感じだな。なんでそんな事してるのかは、全くわからないけども。

「やっぱり、そうだと思ったんだよねえ？こんなドスケベな身体、活用しない手は無いからねえ？」

数秒後、僕のスマホがQRコードを認識した。どうやら、動画の中に一瞬だけ映り込むように設定されていたようだ。

そのコードによって、スマホの画面に、とある動画が映し出される。『えーっと、これでいいのかな？』

動画には、先程と同じく四宮果穂が映し出されていた。

しかし部屋は薄暗く、周囲に料理もない。

「なんですか、この動画」

「ふふ？すぐに分かるさ？」

先輩からスマホを受け取り、その動画に目を向ける。

『それじゃあ……これから、初めてのおなにー配信？　っていうのをやりまーす』

そして、画面に映る四宮果穂が発した言葉に、思わず面食らってしまった。

こんな可愛らしい純朴無知っ子から、オナニー配信なんて単語が飛び出てくるとは。

「おそらく、動画内に隠されたQRコードに気づいた者だけが辿り着ける、裏チャンネルと言ったところかな？」

「そんなの、よく見つけられましたね」

「いやあ？アトラの事だから、こういう隠し要素は入れてくるだろうと思っただけの事だよ？見事的中したけどねえ？」

先輩は、楽しそうに笑っている。そして画面の中の四宮果穂は、おもむろに服を脱ぎ始めた。

『んしょっ』

オレンジ色のTシャツに押し込まれていたOカップ爆乳が、どたぶんと解放される。

もちろんブラジャーなんて無粋なものは着けている筈もなく、綺麗な薄ピンク色の乳首が丸見えになっていた。

『えーつと、まずは乳首を弄っていきまーす』

明らかに言わされてるセリフと共に、四宮果穂は両手を乳首に添える。今まで一度も触られて来なかったことが分かる、小さくて形のいい乳首。

先輩のようないやらしくぽってり膨らんだ乳首や、八尋のソーセイジ乳首とは比べ物にならない可憐さだ。

『んしょ、んしょ』

人差し指を乳首の先端に当て、ゆつくりと擦っていく。

おっぱいが大きすぎるから、乳首を弄るだけでも大変そうだ。

『うーん、こんなので本当に気持ちよくなるのかなあ』

懐疑的な声を上げながらも、その両手は乳首をいじり回していく。

ゆつくりと、小さな快感を積み重ねるように。

『お腹すいたなー』

すりすり? しゅりしゅり? ぷくつ? コリコリツ?

『んっ?』

乳首を弄り続けること、数十分。

僅かに、四宮果穂の吐息に熱が籠もる。

『えっ? えっ? なにつ? これっ?』

外部からの刺激によって、乳首はどんどん固くなっていく。それと同時に感度も上がっていき、無知な身体は初めての快楽を味わう事になる。

無知無知っ子が性に目覚めていく瞬間って、どうしてこうソソるのだろうか。

『ふうっ? なんかつ? ちくびムズムズするっ?』

小さな乳首が精一杯に勃起し、充分に感度が高まっても、当の本人は乳首弄りをやめない。

初めての味を知ってしまった食いしん坊が、中途半端なところで止められるわけが無い。

『やっ? あっ? ひうっ?』

実りきった身体が昂っていく。

無知な精神が困惑する。



『ひあっ??はっああ??おっぱいあついっ??』

それらすべてを呑み込んで、初めての快楽は極上のメス肉をアクメに導く。

乳首がビクビク?と跳ねる度に、メス肉はどんどん淫らに熱を帯びていく。

『なにかっ?なにかくるっ?おっぱいのおくっ?はじけちゃ  
うううっ?』

メスの本能からか、四宮果穂は自らの乳首を思いつき捻り上げた。

小さな乳首から、大きな快楽が流れ込んでくる。

『ひゃわああああああああああっ??』

背筋を仰げ反らせ、両乳首を引つ張りながら、四宮果穂はアクメした。伸び切った乳房が、実に無様に強調されている。

画面から見切れていて分からないが、きつとおまんこはグチャグチャのドロドロになっているだろう。

「ふふ?新しいオナホが見つかったようで良かったよ?」

ニヤニヤと笑いながら、股間に目を向けてくる先輩。そこには、ズボンの上からも分かるほどに立派なテントが張られていた。

こういうところ目ざといんだから、ホントに。

「さあ、善は急げだよ?早速ツアトウグアの所に行くとしようか?」

「行くって...どこに居るか知ってるんですか?」

「もちろんだとも?神様パワーを舐めないでおくれ?」

そうして、先輩に手を引かれて外へ飛び出した。朝ごはんをそのままに、先輩は裸白衣のままです。

って、ちょっと待てえい!

「いや、服は着てくださいって!」

結局、本格的な出発は朝ごはんを食べ終え、先輩の服を着せてからになるのだった。

なんとも締まらない話である。

後輩くんの性欲を試そうとして陥落寸前まで堕ちちやう大和撫子セーラー服オナホ美少女

家を出て、電車を乗り継ぐこと三十分。先輩の案内によって、郊外にある古めの木造一軒家に辿り着いた。

ここに、人気急上昇中のYouTuber・四宮果穂——もとい、先輩と同じ神様が居るんだろうか。ごく普通の家にしか見えないが。

「ここで間違いないよ。神様オーラをビンビンに感じるからね！」  
神様オーラとは。

「お邪魔するよー！」

内心で困惑してたら、先輩は玄関の引き戸を開けて中に入っ  
てしまった。

相変わらずのフリーダムさだな、この先輩は。

「なかなか雰囲気あると思わないかい、後輩くん！」

「あー……この壁とか、あの裏配信で映ってたものと似てますね」

中は普通の木造建築って感じだった。新しくもなく、古くもなく、  
生活感を感じる家屋だ。

というか、廊下の奥から人の気配を感じる。

「お待ちしておりました——千の顔を持つ無貌の神、ニヤルラトホテ  
プ様」

薄暗い廊下の奥から、一人の少女が顔を出す。黒いセーラー服を身  
に纏った、黒髪の美少女だった。

前髪と後ろ髪が綺麗に切り揃えられているので、どこか日本人形め  
いた印象を受ける。

「やあやあアトラ、久し振りだねえ」

「八尋寧々の……もとい、ハスター様の人間体を作る際に採寸をさせ  
て頂いて以来ですね」

「あの時は、なんでそんな事するのかって思ってたけどねえ」

「フフフ……お陰様で、素晴らしい身体が作れましたよ」

怪しい笑顔を浮かべたまま、二人は会話に花を咲かせている。

先輩の知り合いっぽいし、やっぱりこの人も神様なんだろうか。

「それで、そちらの方が……」

チラリ、と視線がこっちに向けられる。獲物を見定めるような、捕食者の目。

(いや……どこ見てんだ?)

随分と、視線が下に向いているような。

「フッフ……流石はニャルラトホテプ様の伴侶です。随分と立派なものをお持ちなようで」

「ちよつ?! マジでどこ見てんですか!?!」

思わず、両手で股間を覆い隠す。服の上からだつてのに、大きさを正確に推し量られた。まるで、武術の達人が鍛え上げられた相手の筋肉に気づくように。

一瞥されただけで、チンポの大きさや、精力の強さを推し量られた……ような気がする。

「ふふ? 凄いだろう? 今まで数多くのおまんこを食い散らかしてきた、最強のおちんぼ様なのさ?」

それで、先輩は怒るところか自慢してるし。

「後輩くんも、なんで隠す必要なんかあるんだい?? 見られたからって減るものでもないだろう??」

「女性側がそれを言うの、初めて見ましたよ……」

普通そういうのは、偶然おっぱいとかを見てしまった男性側が使う言葉なんだけだな。

「フッフ……? いい機会です? あの子に合う前に、少しだけ味見させてもらっても??」

薄ピンク色の舌が、唇の隙間からチラリと覗く。

舌なめずりなんかしちやって、本気で襲い掛かってきそうな雰囲気なんだが。

「先輩……」

思わず、先輩の方を見る。

すると、先輩はイイ笑顔でにっこりと笑った。

「見せつけてやるといい、後輩くん??」

この先輩、絶対後でブチ犯す。  
そう、心に誓ったのであった。

「では、失礼します」  
「うおっ!？」

いつの間にか股間の前にしゃがみ込んでいたアトラさんに、凄まじい速さでズボンとパンツをずり下ろされていた。

全く気づかなかった。流星は神様だな。

「おお……?生で見ると、これまたご立派な……?」

「そ、そんなマジマジと見ないでください」

勃起していないチンポに、精液を溜め込んだキンタマに、鋭い視線が突き刺さる。

なんとというかコレは……想像以上に恥ずかしいな。

「何を恥ずかしがっているんだい、後輩くん?いつも嬉々として見せつけてくるだろうに?」

「知らない人に見られるのは……なんかこう、違うじゃないですか……」

既に何回もセックスして、見知った仲になっている相手に勃起チンポを見せつける。

会ったことの無い初対面の相手に、勃起していないチンポを見られる。

前者と後者では、まったく感覚が違うだろうに。

「フフフ……匂いも最上級ですね?大丈夫ですよ?私のフェラチオで、すぐにその気にして差し上げます?」

「んぐっ!？」

言うが早いか、パクリ?と亀頭が啜え込まれる。ちょうどよく生温い体温が、ゆったりとした刺激をチンポに与え始めた。

「ベロベロ?じゅりゅりゅりゅっ?ぐぼっぐぼっ?ちゅううううううっ?ポンッ??」

手慣れた動きで舌を動かし、亀頭とカリ首を舐め回すアトラさん。

徐々に大きくなっていくチンポを吸い上げ、僅かに溜まっていたチンカスを残らずこそぎ取っていく。

「フッフ……？オスとメスの匂いが凝縮されていますね……？？」

口を開け、チンカスの乗った舌を突き出して見せるアトラさん。ちやんと洗ってはいるんだけど、先輩とセックスしていると自然と溜まってきちやうんだよなあ。

「あむ？ぐぢゅ？もぎゅ？ぐぢゅ？ごつくん？フッフ……あー？」

オスとメスの匂いが凝縮されたチンカスを、たつぷりと噛み締めてから飲み込む。おまけに、ちやんと飲み込みましたというアピールも忘れていない。

なんというか……アトラさん、見た目によらずスケベ過ぎるな。

「あらあら？随分と元気になりましたね？」

そりゃあ、あんなスケベ姿見せつけられたら、こうもなるだろう。

むしろ、あれで興奮しない方がおかしい。

「では、本番といきましょうか？」

「くうっ……！」

大きく口を開け、一息にチンポを呑み込んでしまうアトラさん。

先程の勃起させるためのフェラとは違い、今度は精液をねだるような貪欲なフェラに切り替えてきている。

「ぐっぼぐっぼ……んじゅるるるる……ぐっぼぐっぼ……べろべろべろ……ごぼぼぼ……ぶじゅるるるるるるうっ??」

前後に動き、舐めしゃぶり、締めつけ、吸い尽くす。凄まじいテクニクが随所に仕込まれている、極上のフェラチオだった。

人間には絶対真似できないな、コレは。

「ぶじゅぼっ？いつでもっ？んぶっ？お好きなタイミングでっ？レロレロ？射精してくださいませ？」

チンポをしゃぶりながら、アトラさんは射精を促してきた。

だんだんと、キンタマから精液がせり上がってくるのを感じる。

「むぶっ??」

だから、アトラさんの頭を鷲掴みにした。

「おぶぎゅっぼおっ?!?!」

思いつきり腰を突き出し、アトラさんの口内を蹂躪する。頭をがっしりと掴んでるから、逃げることもできない。



出来立てほやほやのメス汁溜まりが存在していた。

「ここは、さつきまでアトラさんがしやがみ込んでいた場所だ。」

「あんな澄ました顔して、めちやくちや興奮してたみたいだねえ?」

よく見れば、廊下にも点々とメス汁が垂れ落ちているのが分かる。

そうか、上辺を取り繕っていただけか。

「ふふ?これはオナホ候補がもう一人増えちゃったかも——」

と、その瞬間。

「ゲエエエツプ!?!?!」

廊下の奥から、大きなゲツプの音が聞こえてきた。姿は見えなくなっているが、十中八九アトラさんのザーメンゲツプだろう。

下品な音を大音量で響かせやがって、神様ってのはどんだけチンポをイライラさせたら気が済むんだ。

「わあ?後輩くんのチンポも、アトラをオナホに認定したみたいだねえ?!」

ズボンとパンツをその場に脱ぎ捨て、そのまま家の奥へ進んでいく。

バキバキに勃起したチンポが、獲物を求めて脈動していた。

「早く行きましょう、先輩」

「そうこなくっちゃね?」

全員まとめて犯し尽くしてやるからな——このドスケベ淫乱オナホ共が。

面倒くさがりなダウンナー系Oカップ爆乳ムツツリ無知無知オナホユーチューバ

「こちらでございませう？」

長い廊下を進んでいくと、とある部屋の前に到着した。襖で閉じられた部屋の前に、アトラさんが立っている。

澄ました顔してるけど、足下に小さなメス汁溜まりが出来てるんだよな。やっぱムツツリスケベだわ、この人。

「この中に、貴方の望むものがある筈です？」

ゆつくりと、お辞儀をするアトラさん。まるでご主人様に仕えるメイドのような仕草だ。

「どうぞ、心ゆくまでご賞味——ほっ??？」

そういう『自分は傍観者です』みたいな態度が、一番カンに障るんだよな。

オスの前に立ってるメスは、全員漏れなくオナホになる運命だつてのに。

「お、っ……??お、お戯れを……??」

スカートの中に手を突っ込み、そのまま下着の中に手を滑り込ませる。

ぐちゃぐちゃになったメスマんこに指を二本ほど突っ込めば、アトラさんは全身を歓喜に震わせた。

「ごっちとしては、今ここでブチ犯しても良いんですけど」

「お、お待ち下さい……? 私には、まだやる事が……? んほっ??? あ、ありますので……? 今ここで堕ちる訳には……? ふぎっ??」

人差し指と中指をグリグリと動かしてやれば、アトラさんはあつという間に潮を噴いた。

ムツツリな上にイキやすいとか、いよいよもって救いようがないな。

「やる事って何ですか? セックスよりも大事なことなんですか?」

「そ、そうでございませう……? だから、指を抜いて……ほっぎゅ???、



「くださいませんか……?」

廊下をメス汁で汚しまくっても、アトラさんは頑なに姿勢を崩さない。い。

いや、そんなに腰をカクカクさせながら言っても、まったく説得力がないんだが。

「まあまあ後輩くん、その辺にしといたらどうだい」

押し切れそうな空気が流れる中で、先輩の言葉が雰囲気を一変させる。

思わず、指の動きを止めてしまった。

「先輩」

「言いたいことは分かるよ後輩くん？先程のフェラであんなに昂らせておいて、セックスお預けとは何事か——ってね？」

「だったら……」

「しかしだ、後輩くん？メインディッシュの後に食べるデザートというのも、また格別なものだよ？」

芝居がかった口調で、先輩は言葉を紡いでいった。それはまるで、矮小な人間に神託を与える神様が如く。

デザート、か……先輩に言われると、ちよつとその気になっちゃうのが凄いやな。

「わかりました」

「んあぐつ??」

Gスポット!に指を引っ掛け、そのまま勢いよく引き抜く。その瞬間、アトラさんは潮を吹いてメスイキした。

指を突っ込んだだけでも分かる、相当具合の良さそうなおまんこだった。確かに、デザートには丁度いいかもしれないな。

「フフフ……?寛大なお心遣い、感謝いたします……?」

「勘違いしないでくださいね。全部終わったら、グチャグチャにハメ潰しますから」

「フフフ……?」

理解しているのか、いないのか。意味深な笑みを浮かべるだけのアトラさんだった。

おまんこほじられて尚ミスティアスな雰囲気崩さないの、普通に  
凄いなと思う。今までのオナホなら、即座にアへって陥落してたのに。  
「さあ？気を取り直して……？どうぞ、逞しきオス様？」

アトラさんが、襦の片側に手を掛ける。すると、反対側の襦にも手  
が掛かる。見れば、そこには黒く染まった影のような——まさしく影  
法師のような、アトラさんの姿があった。

これが、アトラさんの神様パワーか。自分の分身を作り出すとか、  
結構便利そうな能力だな。

「行こうか、後輩くん」

「……はい」

襦が開かれた瞬間、さつきまで漂っていた淫臭を押し流す程のいい  
匂いが漂ってきた。ぶつちやけて言うのと、めちやくちや美味しそうな  
料理の匂いがする。

そのせいで、アトラさんの痴態で漲っていたチンポが、僅かに小さ  
くなってしまった。

(これは……色んな意味で強敵かもな)

一步、部屋に踏み入る。

すると、そこに居たのは。

「あむっ？はむっ？ふーっ、ふーっ？ぱくっ？もぐもぐ？んん？おっ  
いしいん？」

大きめな部屋の中央で、テーブルに乗った山盛りの料理を食る、O  
カップ爆乳美少女であった。

「うわあ……」

「女子力のカケラも無いね！」

「先輩がそれ言いますか」

濃厚なデミグラスソースの匂い。食欲が刺激されると同時、性欲が  
少し減衰する。

オムライス、ハンバーグ、おまけにビーフシチューまで。デミグラ  
ソースを使った多種多様な料理が、瞬く間に少女のお腹に消えてい  
く。

「ふうん？まんぷくまんぷく？??？」

部屋に入った時は大量に積まれていた料理が、皿を残してすべて消えた。

なんとという大食い。そして早食い。気持ちの良い食べっぷり、という言葉がピツタリだ。

「久しぶりだね、ツアトウグア」

「ん〜??あれ〜、ニヤルじゃ〜ん?久しぶり〜?」

最後の一口を食べ終わると同時に、花の咲いたような笑顔がこちらを向いた。

なんとも眩しい笑顔だ。この笑顔が、ユーチューブにおける人気急上昇の秘訣なのだろうか。

「何しに来たの〜??」

「単刀直入に言おう——後輩くんのオナホになってくれたまえ」

おいおい、流石に単刀直入すぎるだろ。

「いいよ〜?」

「いいんかーい!」

思わずツツコんでしまった。いやまさか、そんな簡単にオナホ化宣言するとは思わなかったからさ。

「んで、オナホってなーに??」

「しかも知らなかったんかーい!」

またまたツツコんでしまった。まさか、そこまで無知だったとは思わなかったからさ。

「いま満腹で機嫌がいいからさ〜?大抵のお願いなら聞いてあげるよ〜?」

ニコニコ笑顔で、四宮果穂——もとい、ツアトウグアちゃんは言葉を発する。

確かに見た感じでは、めちやくちや機嫌が良さそうだ。

「ふむ……これはチャンスだよ後輩くん。いつもはダウナー気味のアイツが、ここまで機嫌がいいんだからね」

「普段は違うんですか?」

「ああ。普段はもつとこう『めんどくさ〜』って感じで、だらけまくってる子なのさ」

なるほど……今は食後でゴキゲン状態、と。それなら、簡単にオナホにできるかもしれないな。

「分かりました……と、言いたいところなんです」

「何か問題でもあるのかい？」

「この部屋、めっちゃくちゃご飯の匂いするじゃないですか」

「ああ、なるほど」

言いたいことが伝わったのか、先輩は深く頷いた。

ハッキリ言って、この匂いの中でセックスできる気がしない。出来たとしても、確実に中途半端になってしまう。

「やるなら徹底的に、だね？」

おもむろに、先輩は着ていた服をブラごと捲り上げる。すると当然、どたぶん？と立派なNカップ爆乳が飛び出してきた。

いつ見てもド迫力すぎるおっぱいだ。成人男性が両手でも掴みきれないとか、大きいにも程がある。

「さてツアトウグア、デザートが食べたくないかい??」

「デザートお??食べたい食べた??い?」

生意気に揺れる右乳を掴み、乳首の照準をツアトウグアちゃんに合わせる。

もちろん、先輩が一人でクソデカおっぱいを持てる筈もないので、抱えるのは僕の役目だ。

「では、存分に味わってくれたま——ふごおっ??」

そのまま指で乳首を押し潰してやれば、まるで水鉄砲のように白いミルクが発射された。

妊娠して以来、どんどん濃厚になっていく先輩の母乳だ。

「わわっ?」

少し驚いたようなツアトウグアちゃんだったが、次の瞬間には母乳鉄砲を正面から受け止めていた。

初撃は命中だ。さて、どうなるかな。

「ぐくっぐくっ……うっふはあっ?なにこれ、濃厚であまうい?」

「ふ、ふふ……?それはそうだろう?なんと云ったって、このわたしの母乳だからねえ——ふぎよっ!???!」



「ええ〜……??あ〜、ホントだ〜?なんかお腹がぽかぽかしてきた〜?」

先輩のドスケベミルクによって、部屋の環境とツアトウグアちゃん  
のナカを淫らに変化させた。

敵にはデバフを、自身にはバフを——これこそ、戦いの常套手段だ。

「というわけで、こっからが本番だ」

「あは?」

序盤における食欲と性欲の殴り合いは、性欲が制した。

このまま一気に畳み掛けて、ゲームセットといこう。

とんでもない秘密を無自覚に隠していたドスケベO  
カップ爆乳ダウン―食いしん坊オナホ系ユーチュー  
バー

濃厚なミルクの香りを肺いっぱい吸い込めば、たちまちチンポが  
固くなる。

デバフも解除された事だし、思いつきやるとしよう。

「あは〜?なにをするの〜??」

「とつても気持ちいいことだよ」

「気持ちいいこと〜??」

「その前に、そのベッド使っていていいかな?」

「あは〜?いいよ〜?」

気絶した先輩を抱っこして、部屋の隅に置いてあつたベッドに寝か  
せる。

なんで日本家屋なのにベッドなんだろうな。まあ、デザインが和風  
だから、景観は保たれてるけど。

「さてと……まず攻めるなら、その特大おっぱいからだな」

ゆっくりと歩いて、テーブルに座ったままのツアトウグアちゃんに  
近づいていく。特に妨害などしてくる様子は無く、上機嫌な様子で身  
体をゆらゆらと揺らしていた。

ちよつとした身体の揺れだけで、Oカップ爆乳が柔らかかそうに揺れ  
るのマジでエロい。やっぱり、あの特大おっぱい反則だって。

「お〜??」

問題なく目の前まで移動して、服の上からおっぱいを鷲掴みにす  
る。広げた片手をゆうに越えるサイズのOカップ爆乳が、ずぶずぶ?  
と右手を呑み込んでいった。

「やわらけえ……」

触った感想は、その一言に尽きる。

「あははっ?〜くすぐりたいよ〜?」

柔らかさだけなら、八尋のおっぱいが一番だった。しかし、こつち

はこつちで凄まじい。まるで捕食されるみたいに、手がおっぱいの中に沈みこんでいく。

過去に見た中で一番の爆乳だからこそ、でき得る芸当なのだろう。手の甲まで爆乳に埋めれるとか、文字通り未知の体験なんだが。

「……ブラジャーは？」

「ぶらじゃー??なにそれー??」

Tシャツ一枚を隔てて感じられる、ダイレクトな柔らかさ。揉めばダイナミックに形を変える、脅威のOカップ爆乳。

やはりというか、ブラジャーは着用してなかったみたいだ。配信の時も着けてなかったし、常にノーブラなのかツアトウグアちゃん。

「知らないのか、神様なのに」

「むっ。神様だからって、何でも知ってると思ったら大間違いだよ」  
眉をひそめて、頬を膨らますツアトウグアちゃん。

ネットで大人気の美少女なだけあって、怒った表情も可愛らしい。

「わたしはいっっぱいのご飯と、たっつくさんの信仰があれば、それで十分なの?他には何もいらなくない?」

「ほう……?」

気の抜けるようなドヤ顔——いや、えっへん顔とでも言えばいいか——をしながら、ツアトウグアちゃんは胸を張る。

そんなちよつとした動作でも、規格外のOカップ爆乳はだぶん?と跳ね上がる。

「じゃあ、裏アカで配信オナニーしてたのはどう説明するんだ? アレは食事とも信仰とも関係ない事だと思っただが?」

かろうじて信仰に繋がるか、くらいだな。いや、これだけの爆乳だし、意外と信仰するやつも出てくるかもしれないけど。

「裏アカ? オナニー? なにそれー?」

「……んん?」

ここに来るキツカケになった裏アカ配信について詰問すると、ツアトウグアちゃんはポカンと間抜けな表情を浮かべた。

すつとぼけてる……って訳でも無さそうだな。この子、嘘つけるほど器用じゃなさそうだし。



(フッフ……困惑していらつしやいますね?)

そんな感じで不思議に思っていたら、唐突に頭の中へ声が響いてきた。

思考の合間に割り込んでくる、艶っぽい声——アトラさんの声だ。(あの動画を撮影したのち、彼女の記憶だけを消去いたしました?)

消去?

(ええ?身体は開発されているのに、心は無垢なまま?そういったシチュエーション、とてもお好きでしょう??)

大好きですが。

というか、仮にも神様なんだよな? そんな簡単に記憶の消去とか出来たりするのか?

(フッフ?心配には及びませんか?なにせこの身体は私が作成したモノですから?アタマの中を弄くり回すなど、お茶の子さいさいです?)

こわっ、神様こわっ。

なんか今、ピースサインを決めるアトラさんの姿が見えたんだが。

(身体はメス豚、頭脳は子供?そんなアンバランスな特上の媚肉、ぜひご賞味ください?)

その言葉を最後に、念話はプツツリと途切れてしまった。頭の中でいくら念じても、アトラさんの声が聞こえてくることは無い。

散々好き勝手言いまくって一方的に切りやがったよ、あのマゾオナホ候補が。何だったんだいったい。

(あ、言い忘れておりましたが——)

うおい! 急に話し出すんじゃないやねえよ! ビックリするだろうが!

(彼女の乳首は特別製ですので、是非お楽しみくださいね?)

その言葉を最後に、今度こそ本当にアトラさんからの念話は切れた。

あの人、一見するとミステリアスでクールな美人だけど、本当は結構愉快的な性格してるのかもしれない。お茶目って言葉がしっくりくる感じ。

「特別製、ね……」

「きゃあうんっ??」

小さくも立派に勃起した乳首を、Tシャツの上からつねり上げてやる。

触ってみた感じ、触感は特別って感じでは無いけど。

「は、はへっ??な、なに今の??背中ビリつてした??」

コリコリ?カリカリ?クリクリ?コシユコシユ?

「おひゅあっ??」

首をかしげながら、ツアトウグアちゃんの勃起乳首を弄り倒している。

次の瞬間、ばちやつ?という粘ついた水音と共に、濃厚なメス臭が漂い始めた。

「はれっ??へっ??へっ??」

半ば確信と共に視線を向ければ、ツアトウグアちゃんの足元にはホカホカの愛液溜まりが出来上がっていた。

流石は特上の媚肉。本人の意志とは無関係に、クソザコアクメをキメたか。

「うーん……でも特に変わった所は……お?」

指先で乳首の先端を弄っていると、Tシャツの布越しに指が吸い付くような感覚があった。

ほんの一瞬、気のせいかと思うほどの刹那。

「……確かめてみるか」

真実を確認するために、Tシャツの裾を掴んで一気に捲り上げる。

たつぷりと実ったスイカ爆乳が二つ、どたぶん?と大迫力のまま飛び出してきた。

「あ……うおっばい、出されちゃ……??」

健康的な肌色の中に、燦然と輝くピンク色のエロ突起。その威容に感嘆しながら、乳首に指を添える——すると。

「うおっ!」

「ひぐうっ??」

つぷり?!と、乳首の中に指先が吸い込まれてしまった。まるで赤ん坊に甘噛みされているかのように、心地よい温かさが指先を包み込

む。

完全なる未知の体験。陥没乳首に指を突っ込んだことはあったが、乳首の中に指を突っ込んだのは初めてだ。

「おお……どうなってんだ、これ」

「ゆ、ゆびいつ??おっぱいの中にい??ゆび入ってるよお??」

おっぱいの中で指を動かしてみれば、おまんこみtainなヒダヒダで埋め尽くされていた。

母乳を出すためには絶対に必要のない、快楽を感じるためだけの器官。これが、アトラさんの言つてた特別製つてやつか。

(おっぱい内部の乳腺が、全部おまんこみたいに变化してるのか……いや、それチンポ入れたら最高に気持ちいいやつじゃん)

通常、乳腺というものは、乳首からブドウの房のように繋がって形作られている。その房に当たる部分で母乳が生成され、管を通して乳首や乳輪から噴き出すという訳だな。

そして、この身体の乳腺は、すべてがおまんこを模した極上のヒダヒダを搭載している——これが意味するところは、一つだ。

「乳首にチンポぶつ刺すとか、初めての経験なんだが」

その事実を認識した瞬間、ものすごい勢いでチンポが勃起していた。

先程までとは比べ物にならないくらい、身体の奥底から興奮が湧き上がってくる。

「えっ?..えっ、えっ??」

エロ漫画でしか見たことのなかった、アブノーマル非常識なプレイ——ニプルファック。

それを実現できる女体が、今、目の前に存在している。

「あー、マジでムラムラしてきた……このクソデカおっぱいブチ犯すけど、いいよね?」

「あ……??」

答えは聞いてない。



(腰を押し付ければ押し付けるだけ沈んでいく……！　なんて包容力なんだ……！)

まったく締め付けは感じられず、ただただ柔らかさが無限に広がっていく。

入れてみた感じ、どうやらツアトウグアちゃんの乳腺は一本化している。つまり、おっぱいの中が特大のオナホになってるといふ事だ。

「このクソデカおっぱいが全部オナホとか、エロすぎんだろっ……！」  
「ぐうううううううう………!!???ぎうううううううううう………!!???»

チンポを突っ込んだまま感慨に耽っていると、ツアトウグアちゃんは何かに耐えるようにうめき声を上げ始めた。

快楽に染まった顔が無様に歪んで、とつてもブツサイクなイキ顔を晒している。

「ヤッバ……この表情だけで十回は又けそう」

どうしてこう、美少女の無様な姿というのは股間にくるのだろうか。

僕の脳内フォルダに、極上のオカズが無限に貯まっていくなのだが。

「うぐぐぐ………?メっ?でるっ??なんかでちやあああああ  
ああああああつ?!?!?」

どぶっ?ごぶっ?!?!?ぶびゅぼっ?

「あゝくくく???あたまっ?まつしろになるうううううううううううううううううううう!!?!?!?」

大きな声を上げて絶頂すると共に、おっぱいの奥から真っ白な母乳が溢れ出してくる。

いや、母乳にしてはやけにヌルヌルして粘度も高い。まるで白いローションのようだ。

「なるほど……特別製つてそういう」

チンポを奥まで突っ込むための、クソデカOカップ爆乳。赤ちゃんが飲んだら確実に窒息死してしまうレベルの、ネバネバ母乳ローション。

完全におっぱいでセックス——パイハメを目的に作られた身体。





奮するなんて、まったく」

いやあ、返す言葉も無い——つて、だからナチュラルに心を読むのはやめろつて言ったでしょうが。

「まあ、それこそ今更か……後輩くんの鬼畜さは、今に始まったことじゃないからねえ」

「先輩の乳首つてパイハメできます?」

「ううん……これは相当に頭が茹で上がってるようだねえ……」

いやいや、僕は至つて普通だ。いつだって冷静だし、どうやったら先輩のふわとろおっぱいをブチ犯せるかを考えていただけだし。

うん、どこもおかしい所は無いな。

「やれやれ……結論から言つておくが、わたしのおっぱいを犯すのはまだ無理だ」

「そんな……」

先輩のふわとろおっぱいを犯せないなんて、これから僕はどうやって生きていけばいいんだ。

「悲しそうな顔をするには早いよ、後輩くん」

不敵に笑つて、先輩は地面に倒れ伏すツアトウグアちゃんを指差す。

具体的には、まだ手つかずの左乳を。

「そこにもう一個、新品のおっぱいオナホが転がっているだろう??」

「おへえ……??」

そうか、やっぱり先輩は天才だな。

「んひいっ!?!?!」

ガツシリと、両手で左乳をホールドする。

もう、どこにも逃げられないように。

「や、もう……う……これいじょうは、こわれちゃ——あ……」

さあ、第二ラウンドの始まりだ。

!?!?!?!?!?!?!?!